東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－ 平成22年度 －

２０１１．３

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月にオープンした市立埋蔵文化財センターでは、児童や生徒、多くの市民に広く利用されています。

本書では、平成22年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、馬場川遺跡・植附遺跡・瓜生堂遺跡・上六万寺遺跡の調査、整理概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。また、史跡整備に向けた調査として、史跡河内寺廃寺跡の調査概要を掲載しました。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成23年３月

東大阪市教育委員会

目　　次

はしがき
目次・例言
第１章 平成22年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要 …… 1
第２章 馬場川遺跡第20次発掘調査(遺物・総括編) …… 9
第３章 史跡河内寺廃寺跡・河内寺跡の調査 ……77
第４章 植附遺跡第20次発掘調査……105
第５章 瓜生堂遺跡第56次発掘調査……125
第６章 上六万寺遺跡第11次発掘調査……129

例　　言

1　本書は、国庫補助50%・市負担50%で実施した、個人及び零細事業主施行による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。

2　上記のほか、史跡整備に向けての内容確認に伴う河内寺廃寺跡の調査概要を掲載した。

3　本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

4　現地の土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に準拠し、記号表示も同書に従った。

5　本書の執筆は次のとおりである。
第１章の出土遺物、第２章１)～６)・８)、第３章５)・６)②、第４章４)、第５章３)、第６章３)は奈良拓弥、第４章１)～３)・５)は若松博恵、第２章７)は安部みき子(大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学講座)、その他の章項は菅原章太が行った。編集は菅原が担当し、奈良が補助した。
安部みき子氏から、馬場川遺跡の人骨について玉稿を賜わった。厚くお礼申し上げます。

6　考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。

7　現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

第１章　平成21年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成22年度の文化財保護法第93条・94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成23年2月28日現在で届出400件、通知45件で合計445件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる(0件の工事名は省く)。

個人住宅	94件	分譲住宅	177件	共同住宅	6件
兼用住宅	2件	工場	2件	店舗	9件
その他建物	24件	道路	3件	学校	4件
宅地造成	15件	公園造成	3件	ガス	45件
電気	1件	水道	14件	下水道	41件
電話通信	1件	その他の開発	4件		

445件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査57件、工事立会119件、慎重工事269件であった。

平成18年度では届出(通知)が585件、19年度が583件、20年度が427件、21年度が441件であったことと比較すると、昨年度とほぼ同様の件数で、工事内容別の件数も多少の増減があるものの、大きな傾向をうかがうことはできない。ただ、店舗のうち大規模小売店舗および大型遊技場建設に伴う調査を本年度4件実施したことが特筆される。大型の店舗や遊技場については、その建設面積は広大であるが、基礎の形状や規模は大阪府の基準に合致するものであった。いずれも確認調査の結果、杭基礎の工事掘削深度までについては、遺物包含層や遺構は認められなかった。

東大阪市教育委員会では、個人専用住宅建設に伴う確認調査と発掘調査、個人による福祉施設建設に伴う確認調査、小規模事業主による分譲住宅建設に伴う確認調査、国史跡内容確認の発掘調査について平成22年度国庫補助事業として実施した。昨年度の報告書の補遺とともに次ページ以下に掲げた。その内容は個人専用住宅建設に伴う確認調査が10件、個人による福祉施設建設に伴う確認調査が1件、小規模事業主による分譲住宅建設に伴う確認調査が1件、個人専用住宅建設に伴う発掘調査が3件、国史跡の内容確認に伴う発掘調査が1件、埋蔵文化財有無確認に伴う発掘調査が1件、ＮＰＯ法人事務所建設に伴う発掘調査が1件で合計18件である(平成23年2月28日現在)。これも昨年度が30件であったことと比べると、大幅に減少した。調査件数減少の原因のひとつは、昨年度と比較して、賃貸共同住宅建設に伴う確認調査や発掘調査の件数が0件であったことに拠る。景気の動向が反映されていることが考えられる。

平成22年度の国庫補助事業では、例年と同じく、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が優位を占める。これらは基礎工事に地盤改良や柱状改良、杭打設を伴うことによるもので、国庫補助事業として確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要なデータを得ているところである。

史跡河内寺廃寺跡の発掘調査については、平成21年度に河内寺廃寺跡整備委員会を組織し、その助言と指導をもとに第19・20次調査を実施した。史跡整備に向けて必要なデータを得る目的で調査を行ったものである。本書ではその調査成果の概要を掲載した。発掘調査の状況や出土遺物の詳細については、別途作成の報告書に記載する予定である。

次に、平成23年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。

別表№14で個人専用住宅建設に伴い確認調査を実施した。その結果、ＧＬ－0.6mで2層にわたり奈良～平安時代の遺物包含層を検出した。上下の包含層のうち、上層の方が遺物の出土が顕著であった。包含層下面のベースとなる砂礫層の上面で遺構は確認できなかった。調査地は、次に述べる瓜生堂遺跡の調査地の近隣であり、従前より同期の包含層や遺構がしばしば見つかっている一帯にあたる。

その後、届出者側では基礎の杭工事の設計を変更され、大阪府基準に合致したため、立会調査を経て工事実施となったが、瓜生堂遺跡の奈良～平安期集落の広がりに新たな知見を得たところである。

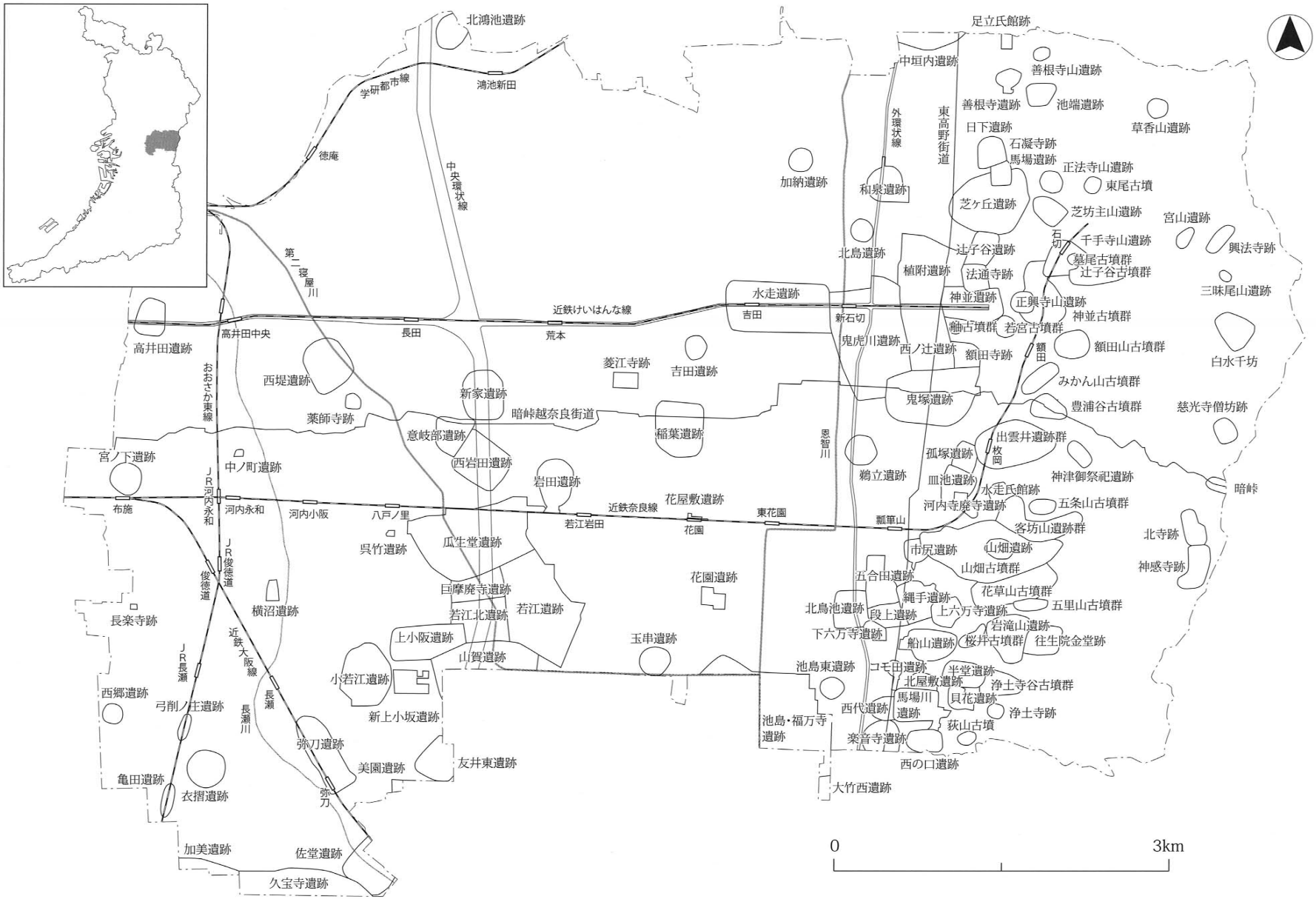
平成21年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況（補遺）

	調査事業名及び用途	実　施　場　所	担当	調　査　期　間	調査面積	調　査　結　果
1	岩滝山遺跡確認調査（個人専用住宅）	六万寺町1丁目795-4番地	菅原	平成22年3月17日	2.3㎡	GL-1.1mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	国史跡河内寺廃寺跡第19次発掘調査（史跡内容確認）	河内町441番地	菅原	平成22年3月11日～3月23日	42.9㎡	本書第3章。 平成22年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

平成22年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実　施　場　所	担当	調　査　期　間	調査面積	調　査　結　果
1	鬼塚遺跡確認調査（個人専用住宅）	箱殿町514-5、515-5、516-5番地の各一部	若松	平成22年5月14日	4.0㎡	GL-1.35m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	皿池遺跡確認調査（個人その他建物）	河内町368番地の一部	菅原	平成22年6月21日	4.0㎡	GL-1.5m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
3	河内寺廃寺跡第20次発掘調査（史跡内容確認、史跡整備）	河内町441、442、443-1番地	菅原	平成22年5月10日～6月18日	153.4㎡	本書第3章。
4	瓜生堂遺跡確認調査（個人専用住宅）	下小阪４丁目33-5の一部、33-9番地	菅原	平成22年7月9日	2.3㎡	GL-1.6m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
5	植附遺跡第20次発掘調査（ＮＰＯ法人事務所）	西石切町3丁目79番地	若松	平成22年7月27日～8月11日	80㎡	本書第4章。
6	瓜生堂遺跡第56次発掘調査（個人専用住宅）	瓜生堂1丁目166-1の一部、170、168甲の一部　番地	菅原	平成22年9月2日・9月3日	7.3㎡	本書第5章。
7	鬼塚遺跡確認調査（個人専用住宅）	豊浦町728-2番地	菅原	平成22年9月6日	2.4㎡	GL-1.5m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
8	岩田遺跡確認調査（個人専用住宅）	岩田町5丁目886-1番地の一部	菅原	平成22年9月15日	1.4㎡	GL-1.5m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
9	半堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	六万寺町1丁目 344-3、344-4番地	菅原	平成22年10月4日	1.4㎡	GL-1.3m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
10	市尻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	四条町556-8番地の一部	菅原	平成22年10月19日	2.3㎡	GL-1.1m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
11	西堤遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西堤学園町2丁目 18-4番地	菅原	平成22年11月5日	2.3㎡	GL-1.5m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
12	上六万寺遺跡第11次発掘調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目 1387-8番地	菅原	平成22年11月8日・11月10日	7.1㎡	本書第6章。
13	花草山古墳群第3次発掘調査 (埋蔵文化財有無確認) 〔零細事業主〕	上四条町1422番地	菅原	平成22年10月25日～11月16日	約92㎡	古墳を確認。詳細は来年度報告予定。
14	瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	下小阪４丁目25-1番地	菅原	平成22年11月26日	2.3㎡	GL-1.1m まで確認。奈良～平安時代の遺物包含層を検出したが、大阪府の基準により、立会調査を経て工事実施。
15	皿池遺跡確認調査 (分譲住宅建設) 〔零細事業主〕	河内町336-11番地	菅原	平成22年12月14日	2.3㎡	GL-1.3m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
16	植附遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町2丁目 604-1、604-4番地	菅原	平成22年12月24日	2.3㎡	GL-1.2m まで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
17	河内寺跡確認調査 (個人専用住宅)	河内町449-30番地	菅原	平成23年1月21日	1.4㎡	GL-0.47m まで確認。土師器を含む二次堆積層を検出。立会調査実施について協議中。
18	新上小阪遺跡第2次発掘調査 (個人専用住宅)	新上小阪185-18番地	菅原	平成23年1月24日～1月27日	17.5㎡	奈良～平安時代の遺物包含層を検出。詳細は次年度報告予定。

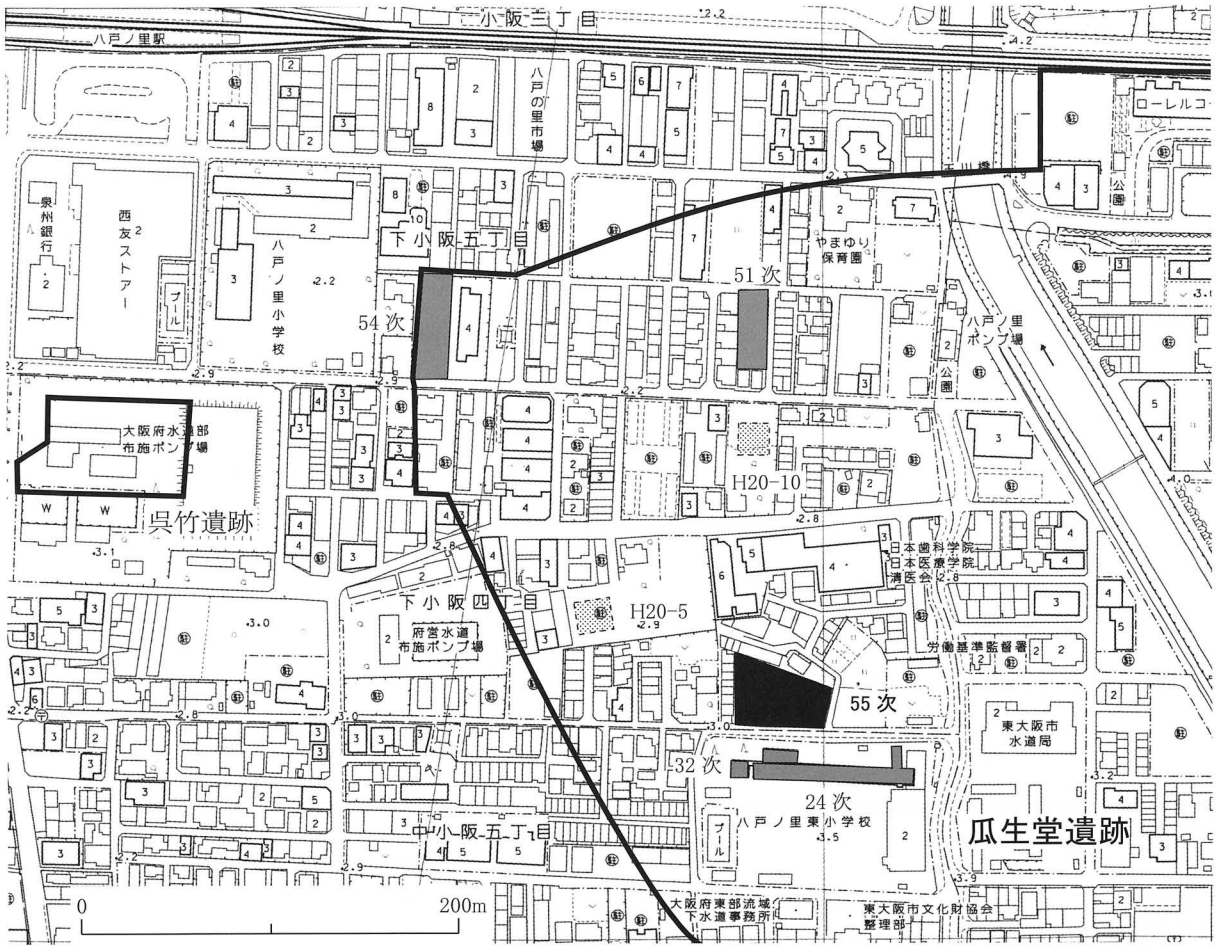


第１図　東大阪市内の遺跡分布図

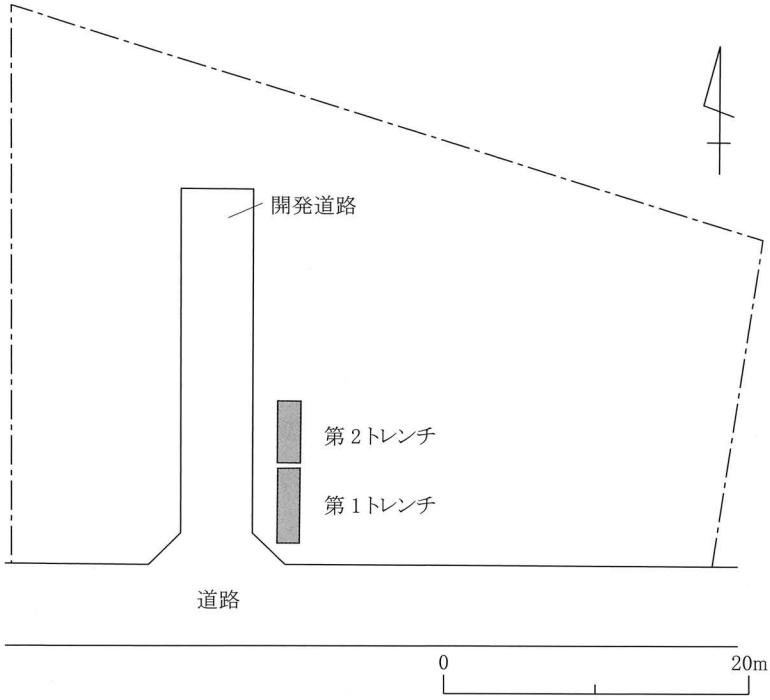
さて、平成21年度後半期に注目される調査があった。ここでその成果について紹介しておきたい。

平成21年10月、東大阪市下小阪４丁目284-15番地において、分譲住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設の基礎工事には柱状改良工事を含むものであったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。平成21年10月22日に５箇所の試掘坑を設けて確認調査を実施したところ、５箇所とも奈良～平安時代の遺物包含層が確認されたほか、１箇所で遺物包含層の下面に平安時代のピットを検出した。この調査結果に基づき届出者と協議を行い、基礎工事の設計については大阪府の基準に従い、鋼管杭の施工となり、立会調査を経て工事が実施された。

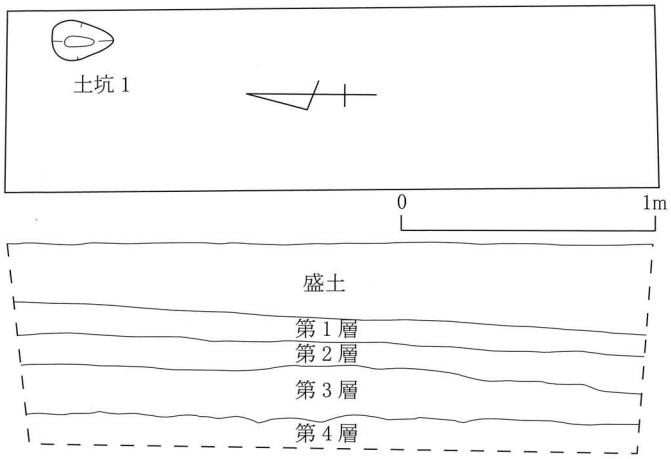
ところが、確認調査の実施時点で、宅地側へ進入する開発道路の施工は完了していたことが判明した。開発道路下の排水管埋設工事により、確認調査時に検出した遺物包含層等についての取扱いが問題となった。確認調査で検出された遺物包含層上面のレベルは、工事予定地内で八戸ノ里東小学校に近い試掘坑が最も高く、北側及び東側に行くに従い低くなる。このため、とくに小学校に近い側での影響が考えられた。この結果を受けて、開発道路に近接した箇所に調査トレンチ２本を設定して確認調査を行うことになった。南側を第１トレンチ（5.2m×1.4m）、北側を第２トレンチ（4.2m×1.4m）と呼称して調査を進めた。調査は平成21年11月12日、11月13日の２日間実施した。調査面積は13.2㎡である。調査に必要な重機、作業員等は届出者側で用意負担した。今回の調査で、遺構・遺物の検出があったため、瓜生堂遺跡第55次調査としている。



第２図　瓜生堂遺跡第55次調査地点と周辺の調査箇所



第３図　第１・２トレンチ配置図



第４図　第１トレンチ平面図・断面図

第５図　瓜生堂遺跡第55次調査風景

・調査の概要（第２～８図）

第１トレンチ

表土下約50cmを機械掘削により除去し、その後手掘りにより掘り下げを行った。層序は以下のとおりである（第４図）。

盛土（真土）。厚さ30～50cm。

第１層　旧表土（耕作土）厚さ約10cm。

第２層　明黄褐色（2.5Y7/6）シルト質細砂、厚さ約10cm。

第３層　褐色（7.5YR4/1）シルト質中砂炭混じり、厚さ20～30cm。古墳時代から平安時代の土器を含む。

第４層　灰褐色（7.5YR6/2）。平安時代の遺構ベース面・厚さ30cm以上。

第３層からは、形象埴輪（蓋形埴輪）、円筒埴輪とともに須恵器甕、土師器甕・杯など、奈良時代から平安時代の土器が多量に出土している（バスケット２杯分）。包含層は、かなり強く固められており、厚さも地点により20～30cmの幅があることから、平安時代頃の整地層と考えられる。第４層上面で精査を行った結果、上面での凹凸は認められるものの、明確な遺構は検出できなかった。ただトレンチ南端で土坑１（30×40cm）を確認したが、性格は不明である（第６図）。

第２トレンチ

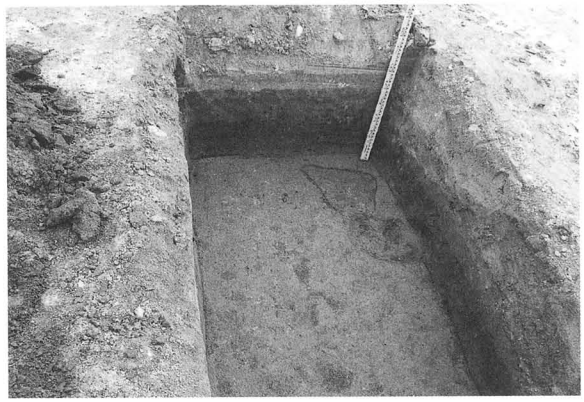
層序は、第１トレンチと同様である。第３層の遺物包含層の厚さが20cmから10cmと北端に行くにしたがって薄くなり、出土量も第１トレンチより少なくなる（バスケット１杯分）。第４層上面で精査を行った結果、第１トレンチと同様、上面で凹凸は認められるものの、明確な遺構は検出できなかった。トレンチ北端で土坑２（南北30cm）を検出したが、性格は不明

である(第８図)。

・出土遺物（第９～11図）

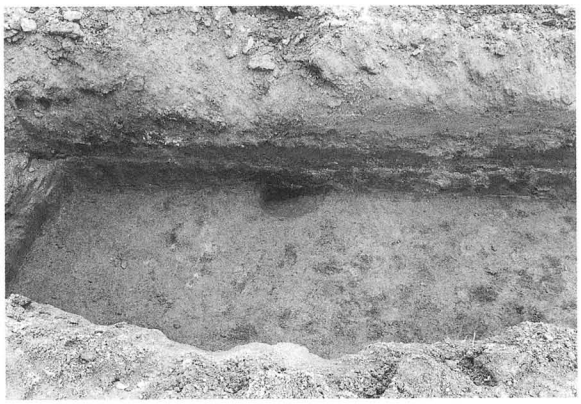
今回の調査で出土した遺物は、コンテナ１箱分であった。既往の調査において、埴輪が大量に出土した地点に近く、今回は埴輪を中心に報告する。出土箇所は、第１トレンチ第３層である。

出土したのは、普通円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪である。



第６図　第１トレンチ土坑１検出状況（北から）

第７図　第１トレンチ蓋形埴輪出土状況



第８図　第２トレンチ土坑１検出状況（西から）

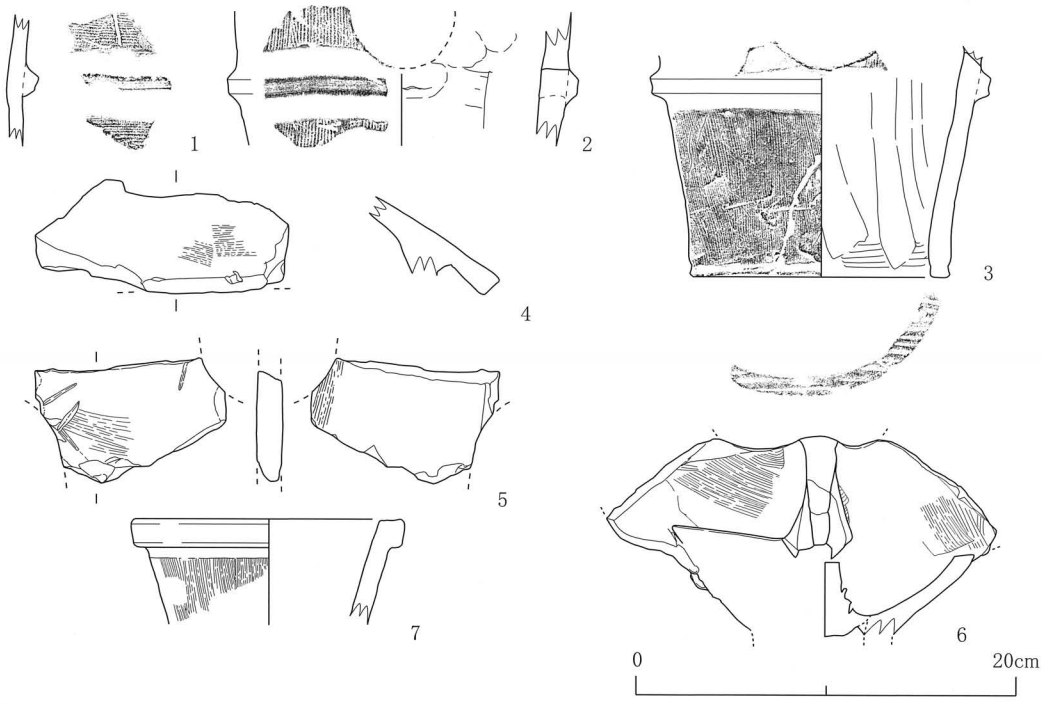
１～３は普通円筒埴輪である。１・２は、いずれも破片で、２は円形透孔が残る。１は、一次調整タテハケの後、二次調整Ｂ種ヨコハケを施す。また、縦線のヘラ記号が認められる。８本／cmとやや細いハケメである。２・３に比べ軟質の焼成で、色調も浅黄橙色を呈する。２は、一次調整タテハケのみで、突帯は台形を呈し、突出度が少ない。６条／cmとやや粗いハケメである。３は、底部から第１段突帯までの破片で、円形透孔の下辺が残る。一次調整はタテハケで、９～12条／cmと細かいハケメである。突帯は、断面　Ｍ字形を呈する。内面は、下から上へとナデが施される。底部高は10.3cmである。底面には、作業台の痕跡が残り、平行する凹凸が数条刻まれた台を想定できる。いずれの普通円筒埴輪も無黒斑であることから、窖窯焼成と考えられる。

４は家形埴輪で、屋根と壁に取り付く庇部分である。部分的にハケメが残る。

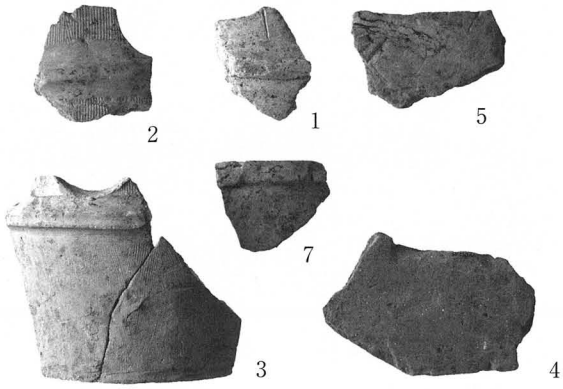
５～７は蓋形埴輪で、立ち飾り（５・６）と軸受部（７）が出土した。５は、ハケメを施し線刻と思われる沈線が認められる。６は、ハケメが施され、飾り板受け部の内面には、飾り板と接合するためのヘラによる無数の線刻が認められた。この線刻は、飾り板接合部分だけではなく、内側全面に施されている。７は、口縁部に突帯が巡り、タテハケを施す。12条／cmと細かいハケメである。普通円筒埴輪の特徴から、これらの埴輪は川西編年Ⅳ期と考えられる。

・確認調査のまとめ

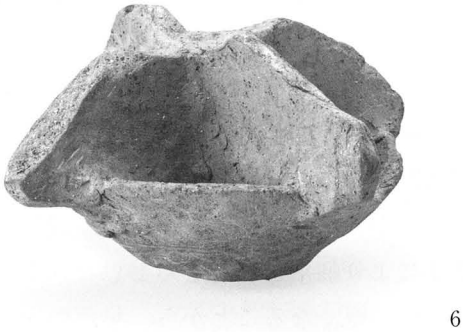
今回の調査の結果、遺物包含層（第３層）は、第１・２トレンチとも現在の表土から50～80cm下から検出された。遺物包含層からは、古墳時代から平安時代頃までの遺物が多量に検出されており、平安時代頃に集落が形成されたことがわかる。古墳時代の埴輪が検出されたことから、周辺に古墳があったものと考えられ、平安時代に集落を造成する際の整地により削平されたものと思われる。平安時代の明確な遺構は、検出されなかったが、包含層が北から南へ厚くなることから、集落の中心は八戸ノ里東小学校付近であると考えられる。



第９図　出土遺物実測図



第10図　出土遺物写真（１）



第11図　出土遺物写真（２）

八戸ノ里東小学校新設工事に伴う調査が第24次調査地である（第２図、東大阪市教育委員会1979）。第24次調査では奈良時代末～平安時代初期の整地層上面で、平安時代前期と推定される掘立柱建物５棟や井戸２基が検出された。これらの遺構から構成される集落は、同地に存在した古墳を破壊して形成されたようで、多量の円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が出土した。形象埴輪には、家形・盾形・靫形・短甲形などがみられた。

今回の調査で出土した円筒埴輪は、第24次調査と同じく川西編年のⅣ期に属することから、破壊された古墳ないし古墳群の区域が北に広がることが確実となった。また、さまざまな部材がみられる蓋形埴輪は、横小路町所在の大賀世古墳群に次ぐ出土例であり、今後、周辺地域の調査進展が望まれるところである。

【参考文献】

川西宏幸1979「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』64-2）
東大阪市教育委員会1979『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』

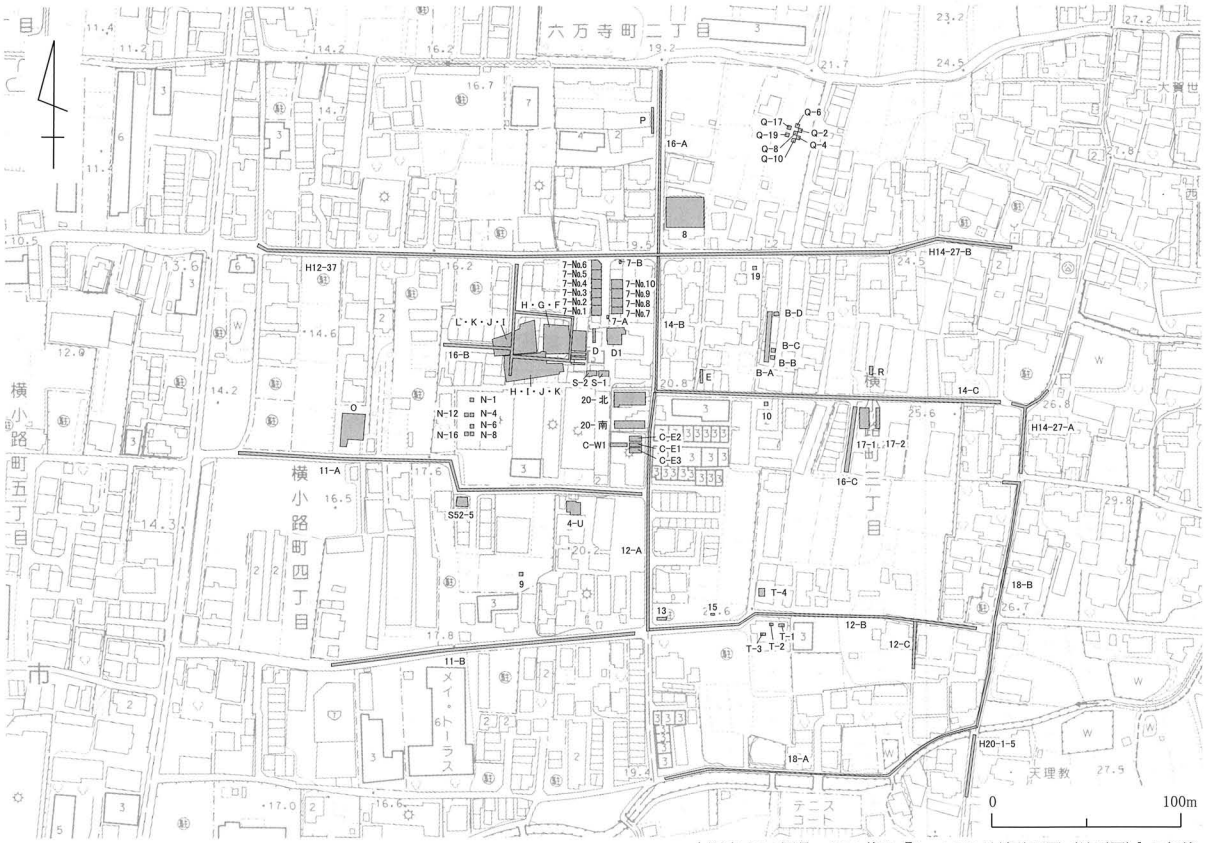
第２章　馬場川遺跡第20次発掘調査（遺物・総括編）

１）はじめに

東大阪市横小路３丁目から４丁目に所在する馬場川遺跡は、縄文時代晩期前葉の集落遺跡、そして大阪府下で最も土偶・土製品が出土する遺跡として常に注目を浴びている。これまでに土偶・土製品・石刀・石棒などの遺物は、精力的な研究によって公表されているが、出土状況や共伴遺物などの具体的な様相が判明しておらず、これらの遺物をいかに把握すればよいのか評価しにくい状況が長く続いている。

このような現状にあって平成21年９月17日～10月31日までの間、過去に最も濃密に遺構・遺物が出土した第１・２次調査地の南東側に位置する地点で第20次発掘調査を行った。この調査の内容に関しては、（東大阪市教育委員会2010：以下、本章では東大教と略称）、（菅原・奈良2010）においてその一部を報告した。今年度は第20次調査で出土した包含層出土遺物を報告するとともに、第20次調査の総括を述べる。（菅原・奈良2010）の内容を訂正するとともに、本書を最終見解とする。

また、土偶や石製品といった縄文時代の精神文化を探るための「第二の道具」が今回の調査でも出土した。これまでの調査で出土した土製品・石製品に関してすでに（藤城ほか1999）・（松田1986）において報告されている。しかし、これ以外にも土偶・土製品・石製品が出土しており、第20次調査出土遺物を評価するために過去の調査分についても報告する。

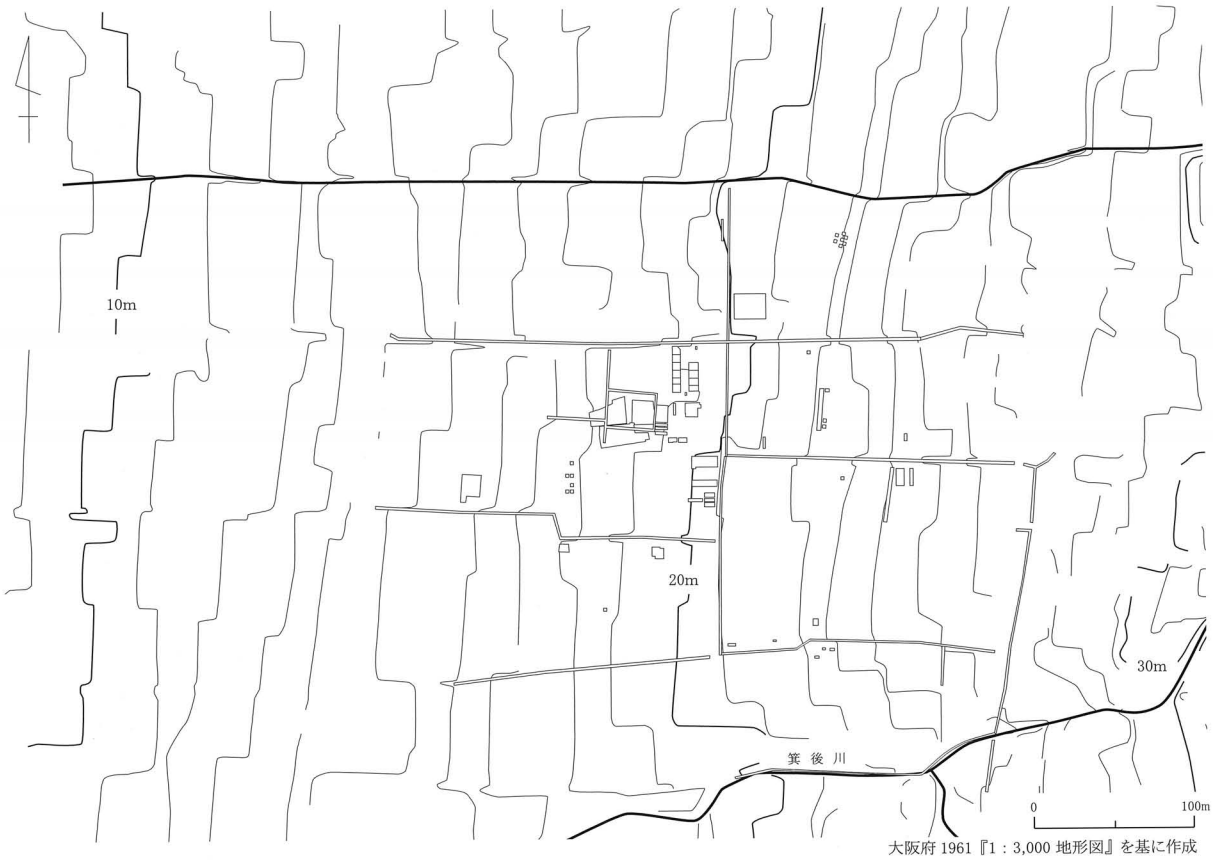


大阪府 1984 測量・2001 修正『1：2,500 地域計画図（地形図）』に加筆

第１図　調査地位置図

第１表　既掘の調査概要

調査地	次数	調査期間	調査面積（㎡）	概要
C・D・E・F・G・H・I・J・K・L	1	S.44.7.10 ～ 9.18	1,000	竪穴建物（滋賀里Ⅲa～篠原式）・埋設土器（滋賀里Ⅲa式）・土坑・炉跡（滋賀里Ⅲa式）・ピット・溝・流路・縄文土器・土偶・土製品・石鏃・石棒・石刀・石斧・敲石・石皿
N・O・P・Q・R・S	2	S45.7.18 ～ 8.28	1,000	竪穴建物（滋賀里Ⅰ～Ⅱ式）・土壙墓（滋賀里Ⅲa～篠原式）・土坑・ピット・縄文土器・土偶・土製品・石鏃・管玉・臼玉・敲石・石皿
D1・U	3	S49.8.5 ～ 8.27	120	縄文土器（宮滝式・滋賀里Ⅰ式・篠原式・滋賀里Ⅳ式）・土偶・土製品・石鏃・石斧・石錘・スクレイパー
Uの拡張	4	S50.2.14 ～ 2.17	33	土製品
Oの拡張・T	5	S50.8.2 ～ S51.3.31	205	縄文土器（北白川C式・中津式）・土製品・石鏃・石錘
G・H・I・J・K	6	S55.10.23 ～ 11.5	500	竪穴建物・土坑・ピット・縄文土器（滋賀里Ⅰ～篠原式）・土偶・土製品・石鏃・石斧・石棒・石刀・敲石・石皿・スクレイパー
7-A・B	7	H5.2.22 ～ 2.26	10	土坑・縄文土器（滋賀里Ⅰ～篠原式）・石鏃・石棒・石刀・磨石・石皿
8	8	H5.10.18 ～ 11.29	327	縄文土器（滋賀里Ⅰ～篠原式）・土偶・土製品・石鏃・石刀・磨石・石皿
9	9	H5.5.9 ～ 5.13	15.73	縄文土器
10	10	H7.12.4 ～ 12.7	13.5	縄文土器（晩期中葉）
11-A・B	11	H11.8.23 ～H12.2.22	371	縄文土器（北白川C式・中津式・宮滝式・滋賀里Ⅱ式）・石刀・石錘・スクレイパー
12-A・B・C	12	H13.5.1 ～ 10.12	279	縄文土器（後期・滋賀里Ⅰ～Ⅳ式）・石斧・敲石
13	13	H14.11.6 ～ 11.27	30	土壙墓（篠原式）・溝（篠原式）・縄文土器（滋賀里Ⅱ式・篠原式）・石鏃・石錐・石刀・臼玉・磨石
14-A・B	14	H14.5.22 ～ 11.14	341	縄文土器（篠原式）
15	15	H15.3.26	2	縄文土器（滋賀里Ⅲa式・篠原式）・石斧
16-A・B・C	16	H16.5.6 ～ 7.26	298	縄文土器
17-1・2	17	H17.9.12 ～ 9.22	77	土製品・石鏃・磨石
18-A・B	18	H17.5.9 ～ 8.31	274	縄文土器（篠原式）
19	19	H18.6.13	1.4	縄文土器（滋賀里Ⅱ～Ⅳ式）・石鏃・石棒・磨石
20-北・南	20	H21.9.17 ～ 10.31	184.7	土壙墓（篠原式）・土坑（篠原式）・埋設土器（篠原式）・炉跡・溝・流路・ピット・縄文土器（穂谷式・北白川下層Ⅲ式・元住吉山Ⅰ～滋賀里Ⅳ式）・土偶・土製品・石鏃・石錐・石棒・石刀・石剣・石斧・台石・磨石・敲石・スクレイパー
A			表採	縄文土器（宮滝～篠原式）・石鏃・石錐・石棒・石斧・磨石・石皿・スクレイパー
B		S43.5		縄文土器（宮滝～滋賀里Ⅳ式）・土製品
S52-5		S52.5		縄文土器（北白川C式・宮滝式・滋賀里Ⅰ式）
7-No.1 ～ 10		H4.11.18・26 H4.12.8 ～ 14	22	縄文土器・土偶・石鏃
H12-37		H12.6.4 ～ 7.25	287	なし
H14-27		H15.6.9 ～ 10.2	410	なし
H20-1-5		H21.12.18 ～ 2.26	29.5	なし



第２図　遺跡周辺の地形図

２）発掘調査の経緯と経過（第１図・第１表）

これまで馬場川遺跡では大小合わせて27回分の調査が報告されている。第20次調査発掘調査の経緯と経過に関しては、（東大教2010）において述べた。また、各調査の詳細な経緯に関しては、章末に記した参考文献で述べておりここでは省く。かわりに既掘調査の地点と縄文時代に関する概要を第１表として表しておく。

３）地理的環境

遺跡の範囲は、東西約400m、南北約300mに広がると推測されている。馬場川遺跡は、生駒山地を水源とする箕後川の堆積によってできた沖積扇状地中位面に立地する（財団法人東大阪市文化財協会2001）。第20次調査における基盤層はいずれも砂礫を多く含み、河川運搬によって形成された基盤である。基盤を構成する砂礫には、石英・角閃石・雲母を含みいずれも生駒山地の岩石に起源を持つものである。

今回、広範囲にわたる調査区の関連を把握するため微地形の復元を行った。第２図は、大阪府1961『１：3,000地形図』に基づいて制作したものである。

この図を基に考察すると、現行の河川に沿って東西に伸びる微高地を南北に認めることができ、遺跡の範囲はこの微高地に挟まれた窪地または緩い斜面地に立地していることがわかる。微高地はいずれも自然堤防であり、箕後川の分流路によって形成されたと推測される。ただし、第１次調査・第12次調査・第20次調査の最下層において自然流路を検出していることから、窪地や斜面地の中でも河川が埋没してできた微高地上に居住域が営まれていた可能性がある。

4）出土遺物（第３～14図　図版１～17）

第20次調査において出土した遺物を土器・土製品・石器に分類して報告する。

土器

北トレンチ土一（第９層上面）

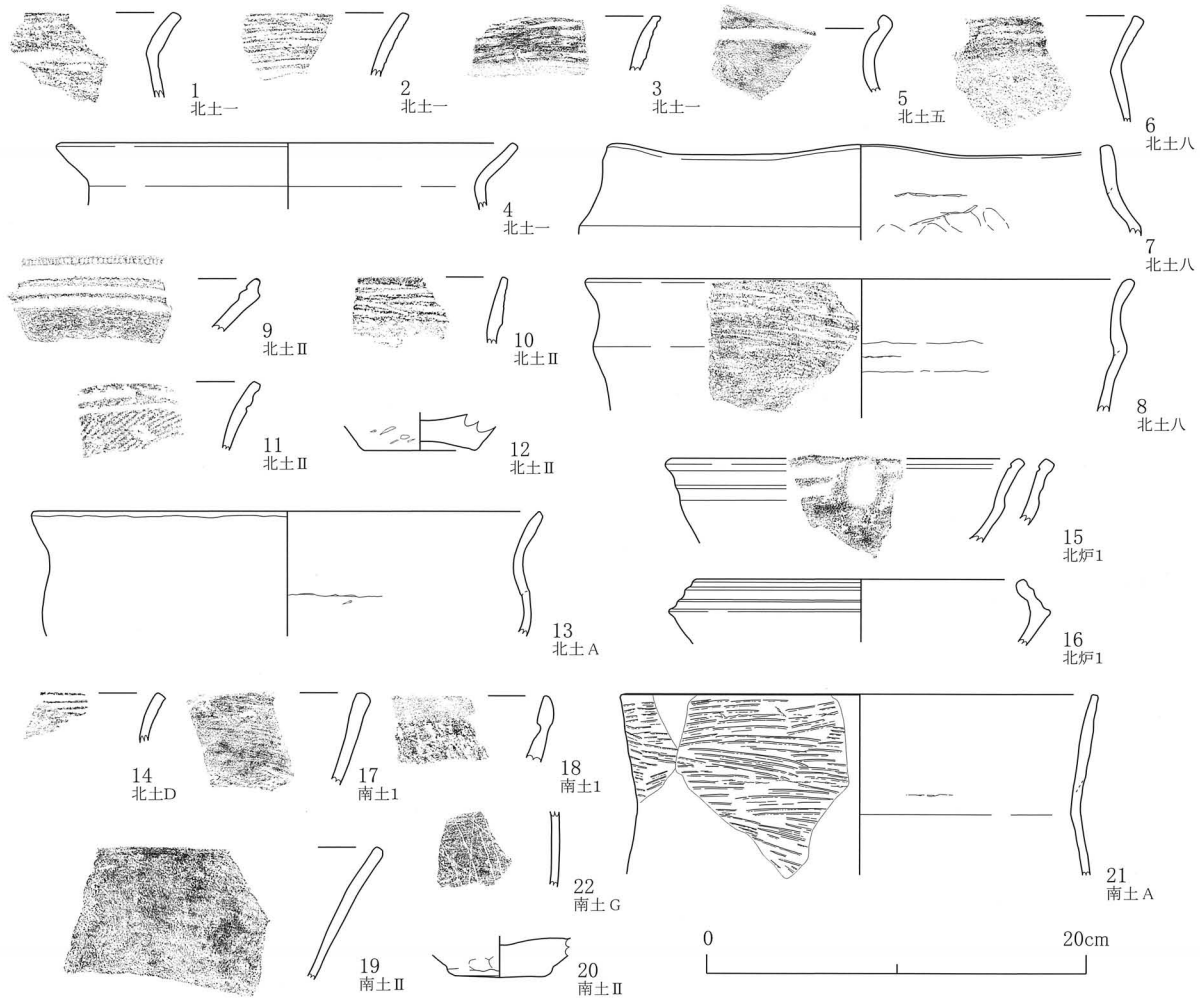
１は、深鉢である。口縁部と体部の境を「く」の字に屈曲し、内面に稜が認められる。頸部に強い１条のナデがめぐる。外面はケズリ調整、内面はナデ調整である。２は、緩やかに外反する口縁部を持つ深鉢である。外面は二枚貝条痕、内面はナデ調整である。３は、深鉢の口縁部である。口縁部は短く、緩やかな外反をもつ。頸部には１条のナデがめぐり、二枚貝条痕が施される。４は、深鉢である。口縁部と体部の境を「く」の字に屈曲し、内面に稜が認められる。外面には二枚貝条痕が一部に認められるが、ナデによって消されており判然としない。いずれも滋賀里Ⅲａ式である。

北トレンチ土五（第９層上面）

５は、三角形になる突起をもつ浅鉢である。口縁部は、大きく外反させた後、端部を折り曲げ玉縁状に肥厚させる。篠原式。

北トレンチ土八（第９層上面）

６は、深鉢である。口縁部を「く」の字に屈曲させ、内面に稜を持つ。外面に二枚貝条痕が認められ、頸部はケズリ調整が施される。滋賀里Ⅲａ式。７は、緩やかな波状の口縁を持つ深鉢である。口縁部と体部の境は内屈し、口縁部は外反させる。頸部内面には指頭圧痕が残る。篠原式。８は、無文



第３図　北・南トレンチ遺構出土土器実測図

深鉢である。頸部内面を強くナデ、頸部全体ではやや内湾気味となる。口縁部は緩やかな外反を呈し、口縁部外面に条痕が残るが、ナデによって消されているため巻貝か二枚貝か判断できない。滋賀里Ⅰ式か。

北トレンチ土Ⅱ（第10層上面）

9は、黒色磨研浅鉢である。口縁端部に刻み目を持ち、内面に凸帯がめぐる。篠原式。10は、深鉢である。外面には二枚貝による条痕と頸部に強いナデが1条めぐる。滋賀里Ⅲａ式。11は、深鉢の口縁部である。口縁部は緩やかな外反で、沈線が2条めぐり縄文を充填する。上段沈線には、斜線の線刻が施されるが非常に粗雑である。横線化した文様帯と判断し、大洞C1式と考える。12は、深鉢の底部である。浅い凹底面はナデ調整を施し、体部外面はケズリ調整である。滋賀里Ⅲａ式か篠原式であろう。

北トレンチ土A（第11層上面）

13は、無文深鉢である。外反する口縁部を持ち、内外面ともにナデ調整を行う。宮滝式か。

北トレンチ土D（第11層上面）

14は、深鉢である。外反する口縁部を持ち、上半は二枚貝条痕を施し、頸部はケズリを施す。滋賀里Ⅲａ式。

北トレンチ炉1（第11層上面）

15は、浅鉢である。外面に2条の凹線、内面に1条の凹線がめぐる。外面の凹線は幅が広く、浅い。口縁部直下に粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。宮滝2式。16は、浅鉢である。口縁部と体部の屈曲は強く稜を持つ。口縁部はやや内湾気味である。口縁部外面に3条の幅の広い凹線がめぐる。外面はナデ調整である。宮滝式。

南トレンチ土1

17は、広口深鉢の口縁部である。外面は二枚貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式か。18は、内湾気味の口縁部である。口縁端部を折り返すことによって内面に段差を形成する。外面はケズリ調整である。篠原式か。

南トレンチ土Ⅱ

19は、深鉢である。直線的に外方へとのびる口縁部で、内外面ともにナデ調整である。篠原式新段階。20は、深鉢の底部である。底面はほぼ平坦で、ナデ調整を行う。体部外面はケズリ調整である。篠原式。

南トレンチ土A

21は、深鉢である。口縁部と体部の屈曲は緩やかで、外面に二枚貝条痕を施す。内面はナデ調整である。篠原式。

南トレンチ土G

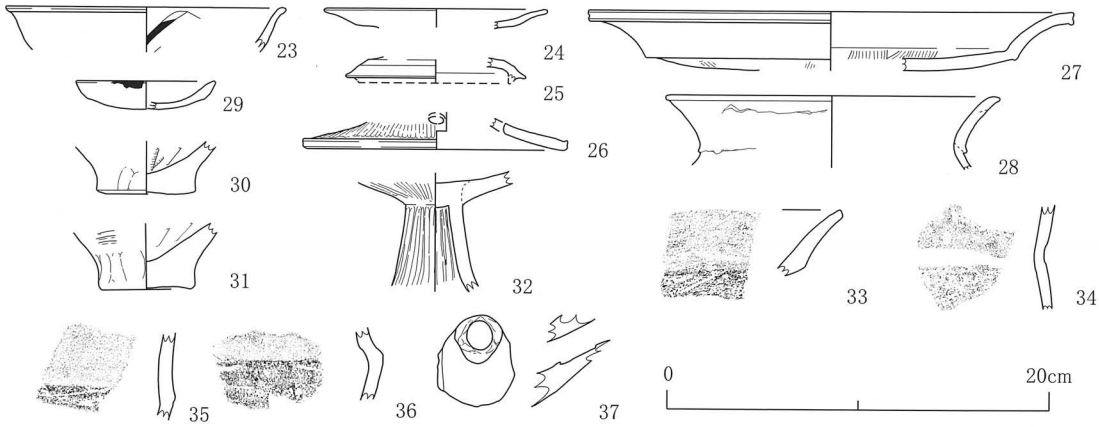
22は、体部の破片である。部位は不明であるが、ミガキ調整ののち、線刻が施される。線刻は細く、鋭い工具で描かれている。滋賀里Ⅳ式か。

北トレンチ第3層

23は、肥前磁器染付端反碗である。内面には草花文が施される。19世紀半ば。

北トレンチ第3～4層

24は、須恵器の皿である。9世紀であろう。25は、須恵器の杯蓋である。端部が欠損しているため、時期を決しがたいが第Ⅲ型式第1段階または、第2段階と考える。26は、高杯の脚部である。外面調整は縦方向のミガキである。一部に透孔が残る。27は、有稜高杯である。杯体部は直線的で、口縁部は大きく外反する。体部高よりもやや口縁高が大きい。内外面ともにミガキ調整である。28は、壺の



第４図　北トレンチ第３～６層出土土器実測図

口縁部である。口縁部は外反し、端部をやや鋭くおさめる。内外面ともにナデ調整である。26～28は、いずれも弥生時代後期後葉。

北トレンチ第４層

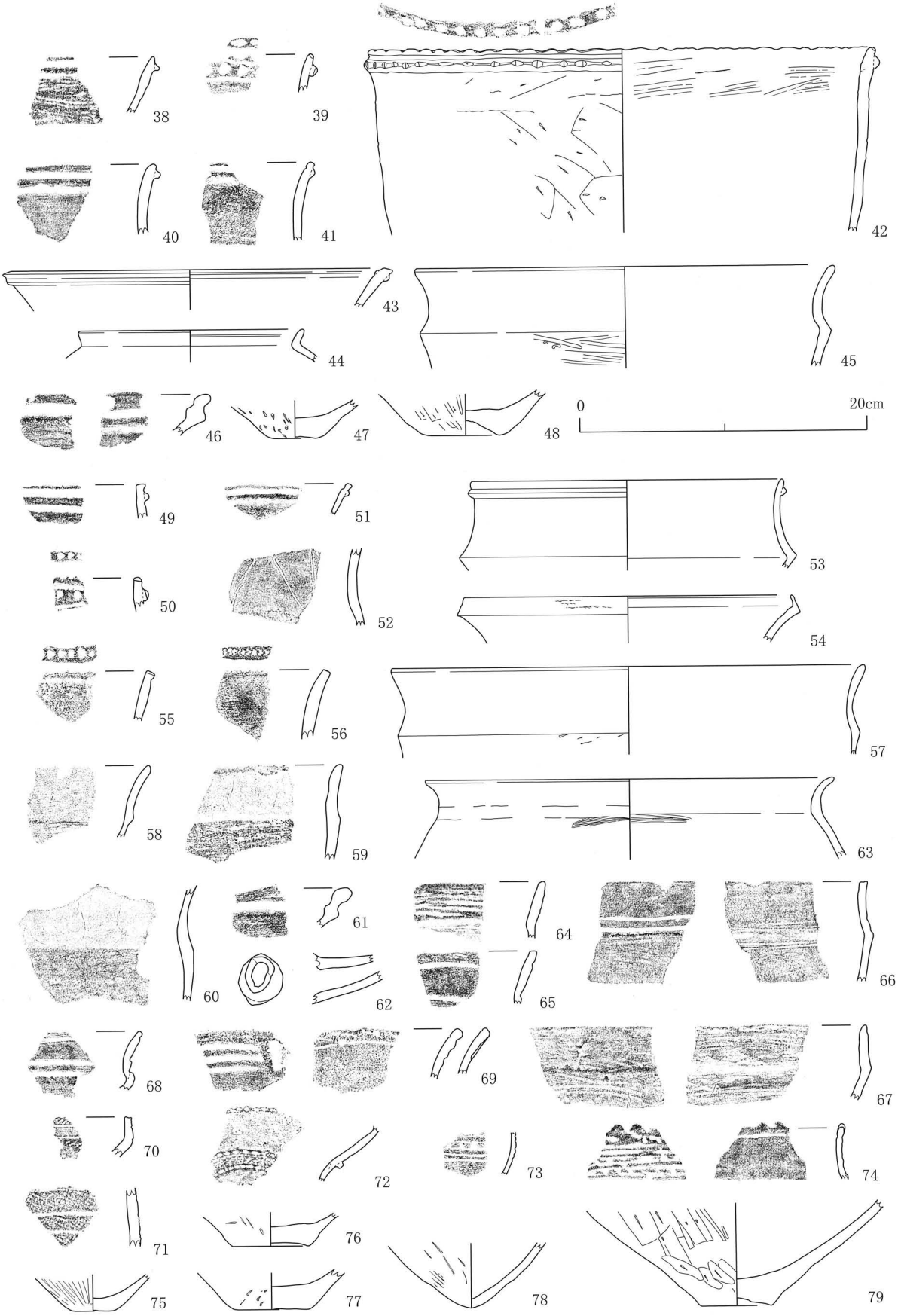
29は、土師皿である。内外面ともにナデ調整が施され、口縁端部にススが付着する。30・31は、甕の底部である。底部の中央がわずかに窪む。内面はハケ調整である。31の外面は、タタキ調整が認められる。弥生時代後期後葉。32は、高杯の脚部である。脚部は緩やかに外反し、外面にミガキ調整を施す。弥生時代後期後葉。33は、浅鉢である。口縁部の体部の境にある稜は鈍く、口縁部は緩やかに外反する。体部外面はケズリ調整を行い、その他はナデ調整である。篠原式。34は、深鉢頸部の破片である。外面はケズリを施した後、頸部に強い１条のナデを施す。滋賀里Ⅲａ式。

北トレンチ第６層

35は、深鉢の破片である。口縁部と体部の境は明瞭で、口縁部は外反する。口縁部はナデ調整であるが、体部外面はケズリ調整である。篠原式。36は、深鉢の破片である。口縁部と体部の境を屈曲させる。体部外面はケズリ調整の後、ナデを施す。篠原式。37は、注口土器の注口部である。磨滅が激しく調整は不明である。篠原式か。

北トレンチ第７層

38は、内湾気味に立ち上がり、直線的に外方へと広がる口縁部を持つ鉢である。断面が三角形を呈する刻みのない凸帯を有する。外面はケズリ調整の後、ナデを施す。内面はナデ調整である。滋賀里Ⅳ式。39は、深鉢である。口縁部端部と口縁部直下の外面に刻み目凸帯を持つ。滋賀里Ⅳ式。40は、深鉢である。外反する口縁部に、刻目のない凸帯を貼り付ける。口縁端部、凸帯の断面形がともに丸い。内外面ともに丁寧なナデ調整である。滋賀里Ⅳ式。41は、深鉢である。緩やかに外反する口縁部に、刻みのない凸帯がめぐる。内面には１条の沈線を配する。滋賀里Ⅳ式。42は、砲弾形の深鉢である。口縁端部に刻みを施し、外面に刻み目凸帯を貼り付ける。外面はケズリ調整である。滋賀里Ⅳ式。43は、浅鉢である。直線的にのびる口縁部は、端部で外方へと肥厚し厚みを持つ。内外面に刻みのない凸帯がめぐる。調整は内外面ともにナデである。滋賀里Ⅳ式。44は、浅鉢である。外屈する口縁部は短く、内面に１条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅳ式。45は、深鉢である。頸部に屈曲を持ち、口縁部は外反させる。体部外面はケズリ調整の後、ミガキを施す。篠原式。46は、浅鉢である。口縁部と体部の境を屈曲させ、鍵形を呈する。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。篠原式。47は、深鉢の底部である。底面は若干の窪みを有する。外面はケズリ調整で、内面はナデ調整である。篠原式か。48は、深鉢の底部である。外面はケズリ調整で、凹底の底部は中央部分を除いた部分で平滑な面が認め

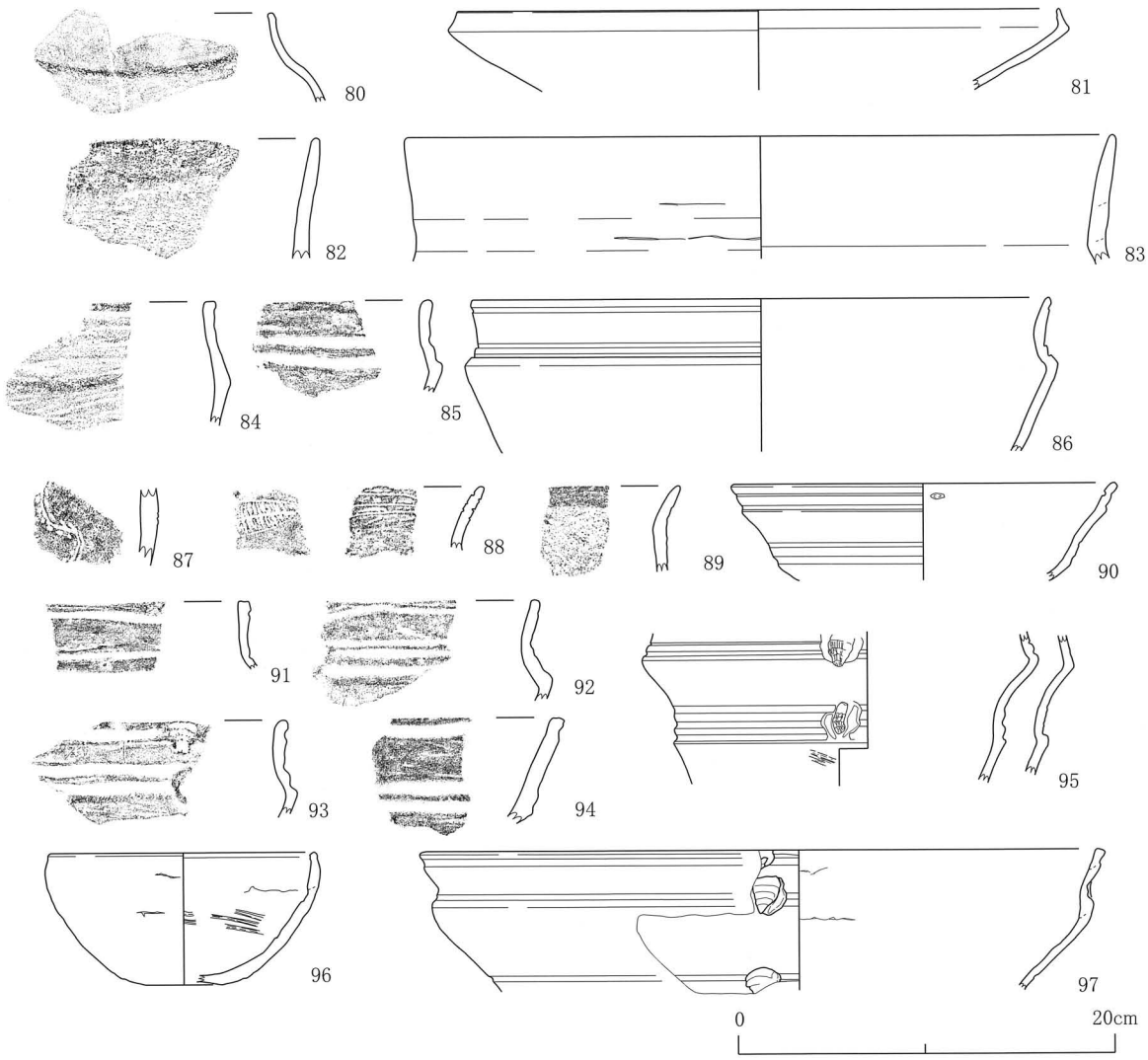


第５図　北トレンチ第７・８層出土土器実測図

られる。底面と側面の境に明確な稜を持たない。篠原式。

北トレンチ第８層

49は、深鉢である。直線的な口縁部で、口縁端部に面を持つ。口縁部の直下に刻みの無い凸帯を貼り付ける。また、凸帯上部に赤色顔料が施されている。滋賀里Ⅳ式。50は、深鉢である。口縁端部に刻みを持ち、刻み目凸帯を貼り付ける。滋賀里Ⅳ式。51は、深鉢の口縁部である。口縁部の直下に刻み目の無い凸帯を貼り付ける。内面に１条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅳ式。52は、深鉢の肩部から口縁部にかけての破片と考えられる。口縁部外面には、ヘラ状工具によって鋸歯状の沈線が施される。体部外面はケズリ調整である。滋賀里Ⅳ式。53は、黒色磨研の浅鉢である。口縁部と体部の境を「く」字に屈曲させ、口縁部は外反する。刻みの無い凸帯を貼り付ける。内外面ともにミガキ調整を行う。滋賀里Ⅳ式。54は、浅鉢である。大きく外反させた体部に、内傾させて短く立ち上がる口縁部を持つ。滋賀里Ⅳ式。55は、広口深鉢である。直線的な口縁部を持ち、端部を外方へとやや肥厚させ刻み目を施す。内外面ともにナデ調整である。滋賀里Ⅳ式。56は、深鉢の口縁部である。緩やかに外反する口縁部を持ち、端部に刻み目を配する。内外面ともにナデ調整である。篠原式か。57は、深鉢である。口縁部と体部の境が明瞭で、口縁部は外反する。体部外面はケズリを施した後、ナデ調整を行う。篠原式か滋賀里Ⅳ式であろう。58は、深鉢である。口縁部と体部の境は明瞭で、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにナデ調整である。篠原式。59は、深鉢である。口縁部と頸部の境は明瞭で、稜を形成する。口縁部は緩やかに外反させる。体部外面はケズリ調整で、その他は、ナデ調整を施す。篠原式。60は、深鉢である。口縁部と体部の境に三角形の突起を持ち、明瞭な稜を形成する。体部はケズリの後、ミガキ調整を行う。篠原式新段階。61は、浅鉢である。鍵形の屈曲を持ち、口縁部は外反させる。端部は突起を貼りつける。篠原式。62は、注口土器の注口部である。摩滅が激しく調整は不明。滋賀里Ⅰ～篠原式のいずれかと考えられる。63は、深鉢である。内外面ともにケズリを施した後、ミガキ調整を行う。頸部外面に１条のナデを施すが、あまり明瞭ではない。滋賀里Ⅲａ式。64は、深鉢である。端部に面を持つ。外面は二枚貝による条痕が施され、頸部に１条のナデを施す。滋賀里Ⅲａ式。65は、深鉢の口縁部である。直線的に外方へと伸びる口縁部に、外面には２条の沈線を配する。滋賀里Ⅰ式。66は、深鉢である。口縁部と体部の境に屈曲を持ち明瞭な稜を形成する。体部は巻貝条痕を施し、口縁部はナデ調整を行う。口縁部に下半に２条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅰ式。67は、深鉢である。頸部で屈曲を持ち、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面ともに巻貝条痕を施す。滋賀里ⅠかⅡ式であろう。68は、深鉢の口縁部である。口縁部と体部の境に「く」の字状の屈曲を持ち、口縁部を外反させる。外面に３条の凹線を配する。宮滝式。69は、広口深鉢である。緩やかに外反する口縁部で、外面に３条の凹線と扇状圧痕文が配される。内面は、口縁端部に斜めの刻みと１条の凹線が施され、凹線上に巻貝頂部による刺突が認められる。宮滝２式。70は、深鉢である。外面には、２条の沈線とＬＲ縄文が施される。元住吉山Ⅰ式。71は、深鉢の体部と考えられる。下半はやや内湾気味で、上半は外方へと直線的に伸びる。外面は３条の沈線と擬縄文による文様帯が横走する。元住吉山Ⅰ式。72は、頸部と思われる。凸帯がめぐり、風化が激しく明瞭ではないが凸帯に縄文が施される。突帯を挟んで上下に刺突がめぐり、下半にも刺突がめぐる。刺突はいずれも器壁に対して右斜め上から施される。内面には指頭圧痕が残る。北白川下層Ⅲ式。73は、深鉢の体部である。２条の沈線と、２条の刻み目文様帯を配する。大洞Ｃ１式。74は、浅鉢である。外面は、平行線の間に刻みを施した文様帯を配し、口縁端部に２つの突起を持つ。内面は、口縁部付近に１条の沈線が施される。大洞Ｃ１式。75は、深鉢の底部である。外面はミガキを施す。篠原式。76は、深鉢の底部である。外面はケズリ調整で、浅い凹底の底面もケズリ調整である。篠原式。77は、深鉢の底部である。外面はケズリ調整で、平底



第６図　北トレンチ第９層出土土器実測図

の底面にはナデ調整が行われる。底面と側面の境に明確な稜を持たない。篠原式。78は、深鉢の底部である。尖底で外面調整はケズリ、内面はナデ調整である。篠原式新段階。79は、深鉢の底部である。外面はケズリ調整で、凹底の底部は中央部分を除いた部分で平滑な面が認められる。底面と側面の境は明瞭である。篠原式。

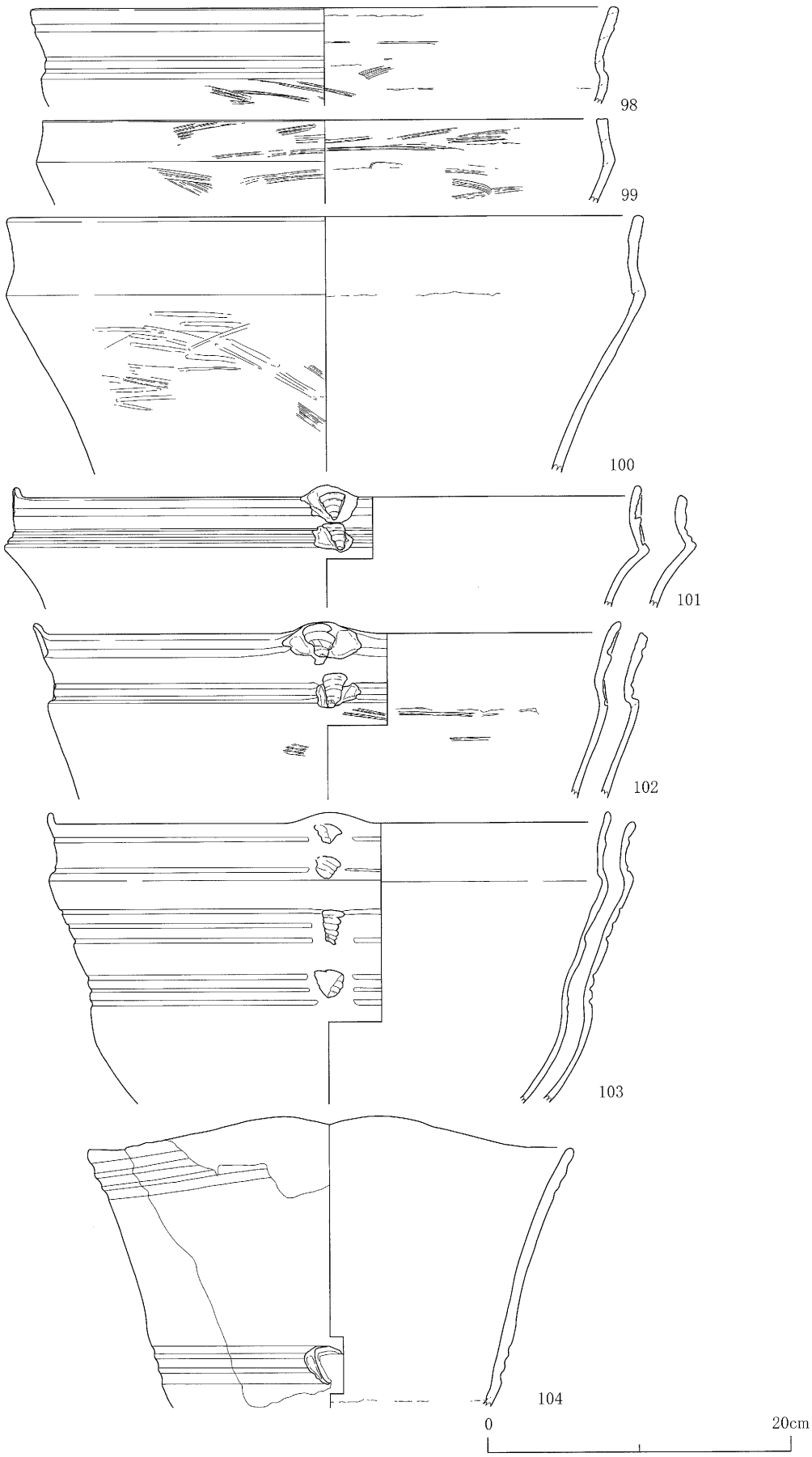
北トレンチ第９層

80は、深鉢である。口縁部を内屈させ、端部に向かって外反する。体部外面はケヅリ調整を施したのち、ミガキ調整を行う。篠原式。81は、浅鉢である。直線的に伸びる体部に、垂直気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は鋭くおさめ、内外面ともにミガキ調整を行う。滋賀里Ⅳ式。82は、広口深鉢である。頸部にはやや幅広いナデが施される。外面はケズリを行い、内面はナデ調整である。滋賀里Ⅲａ式。83は、深鉢である。内面に屈曲した稜が認められ、外方へと直線的にのびる口縁部を持つ。頸部に幅が広く、あまり明瞭でない１条のナデが施される。滋賀里Ⅲａ式。84は、波状口縁深鉢である。口縁端部で外方へと肥厚させ、上端に面を持つ。外面は、巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。滋賀里Ⅰ式か。85は、波状口縁の深鉢である。外面には浅く不明瞭な凹線または沈線が２条配される。宮滝式または滋賀里Ⅰ式と考えられる。86は、深鉢である。口縁部と体部の境に屈曲を持ち明瞭な稜を形成し、口縁部は外反する。内外面ともに巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。口縁

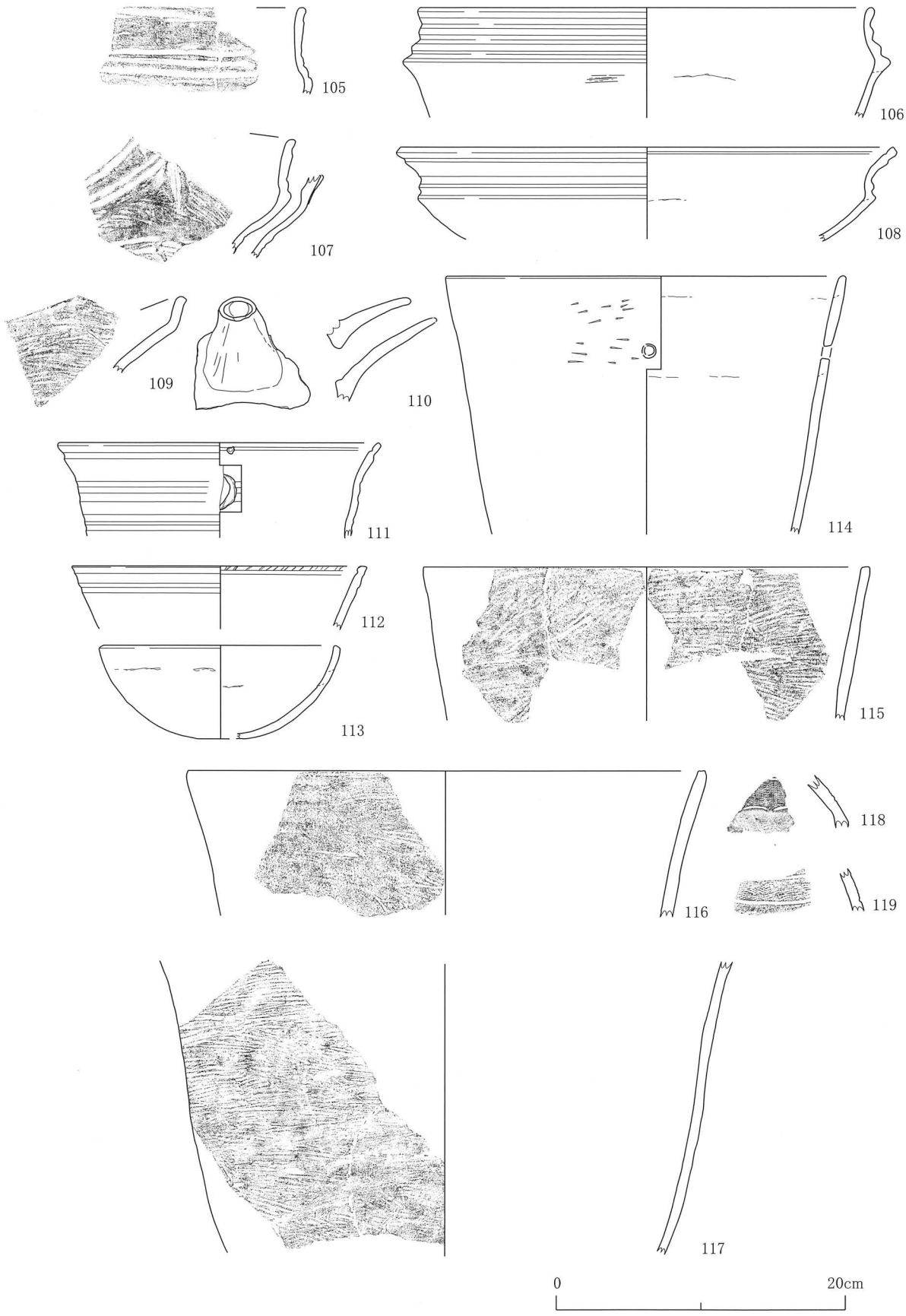
部上半に１条、下半に２条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅰ式。87は、体部片である。外面に、Ｓ字状の沈線を施し、その両脇に刺突文が配される。縄文時代晩期中葉であろう。88は、深鉢の口縁部と考えられるが判然としない。外面には木葉形にヘラ描き沈線文が施され、内部を爪形文によって充填する。内面には３条のヘラ描き沈線文を配する。縄文時代晩期中葉であろう。89は、深鉢の口縁部である。「く」の字に屈曲する頸部を持ち、端部は丸くおさめる。口縁端部から内面にかけてはナデ調整を行い、頸部にはケズリ調整を施す。滋賀里Ⅲａ式。90は、深鉢である。体部に２箇所の屈曲を持ち、口縁部は緩やかに外反する。口縁部と体部に２条の沈線を配するが、いずれも粗雑である。内面に刺突を施す。内外面ともに非常に丁寧なナデ調整である。滋賀里Ⅰ式か。91は、深鉢である。直線的に伸びる口縁部を有し、口縁端部に面を持つ。外面は２条の沈線が施され、内面は巻貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式。92は、深鉢である。口縁部と体部の境に屈曲を持ち、口縁部は緩やかに外反する。口縁部の下半に３条の凹線と、上半に粗雑な１条の凹線を配する。また、頸部に扇状圧痕文を配する。内外面とも摩滅が激しく、調整は不明である。宮滝２式。93は、口縁部と体部の屈曲が強く、口縁部外面の上半に１条、下半に２条の凹線が配される。凹線内にはスジ状の圧痕が残る。上下の凹線上にそれぞれ粘土を貼り付け、扇状圧痕文を施す。体部外面は巻貝条痕が残る。内面はナデ調整である。宮滝２式。94は、浅鉢である。直線的に外方へと伸びる口縁部を有し、口縁端部に面を持つ。外面は、３条の凹線が施されるが、いずれも幅が広く、断面が「Ｕ」字を呈する。宮滝式であろう。95は、深鉢の体部である。２箇所の屈曲を持ち、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。中央部の文様構成から、３条を１つの単位とした凹線がめぐっていたと考えられる。外面は巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行い、内面はナデ調整のみである。宮滝２式。96は、鉢である。内湾する口縁部を持ち、底は凹底となる。外面は丁寧なナデ調整のため前段階の調整が不明である。内面は、巻貝条痕を施す。宮滝式か。97は、深鉢である。口縁部の外反も顕著ではない。口縁部の上下と体部に各々１条の浅い凹線を配し、それぞれの凹線上に直接押圧した扇状圧痕文を配する。風化が激しく、調整は不明である。宮滝１式。

北トレンチ第10層

98は、深鉢である。口縁部と体部の屈曲はあまり明瞭でなく、口縁部は緩やかな外反を呈する。口縁部の上半に１条、下半に２条の沈線がめぐる。外面は巻貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式。99は、無文深鉢である。口縁部は内屈し、端部に面を持つ。内外面ともに巻貝条痕である。宮滝式か滋賀里Ⅰ式である。100は、無文の深鉢である。口縁部の外反、頸部の屈曲はともに緩い。内外面ともに巻貝条痕を施した後、ミガキを施す。宮滝式か滋賀里Ⅰ式である。101は、深鉢である。体部と口縁部の境は「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外反する。口縁端部に１条、下半に３条の凹線がめぐり、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。内外面とも巻貝条痕の後、ナデ調整を施す。宮滝２式。102は、深鉢である。口縁部は緩やかに外反する。口縁部上半に１条、下半に２条の凹線がめぐり、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。外面調整は、巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。宮滝２式。103は、深鉢である。緩やかに外反する口縁部を持つ。口縁部には２条、体部には３条を単位とした凹線がめぐる。凹線は浅く断面が「Ｖ」字を呈し、粗雑である。凹線上に直接扇状圧痕文を施す。風化のため調整は不明である。宮滝１式。104は、波状口縁の広口深鉢である。体部から口縁部にかけて直線的にのびる形状である。外面は巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。口縁部と体部に３条を単位とした凹線がめぐる。凹線は、幅が広く断面形は「Ｕ」字を呈する。下段の凹線上に扇状圧痕文が残る。宮滝式。105は、深鉢である。緩やかに外反する口縁部に４条の凹線がめぐる。頸部の凹線上に粘土貼り付けによる扇状圧痕文が配される。内外面ともに巻貝条痕の後、ナデ調整を行う。宮滝２式。106は、深鉢である。口縁部と体部の境は明瞭で、「く」の字に内屈する。口縁部は緩やかに外反する。口縁部に配される



第７図　北トレンチ第10層出土土器実測図

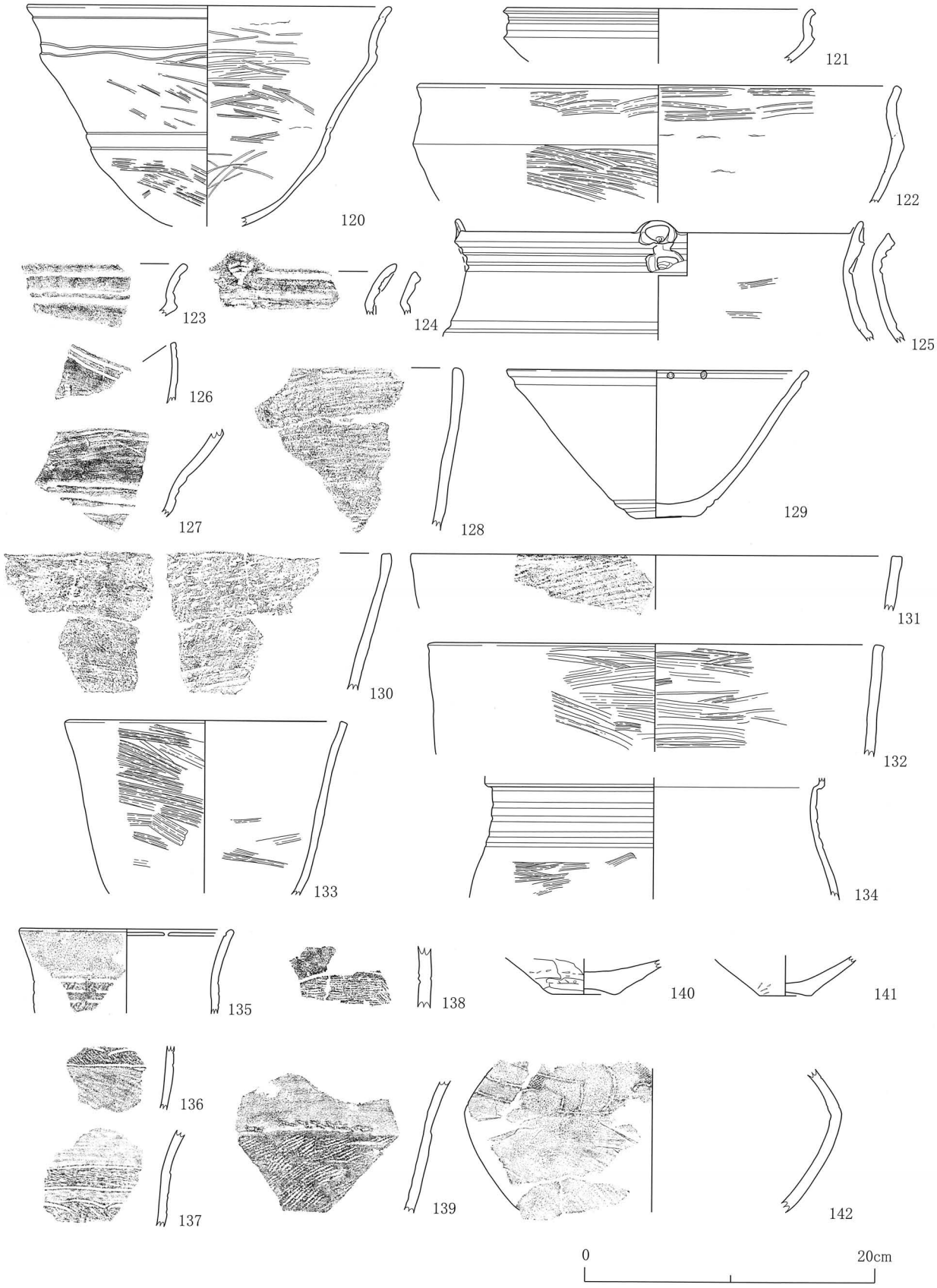


第８図　北トレンチ第10層出土土器実測図

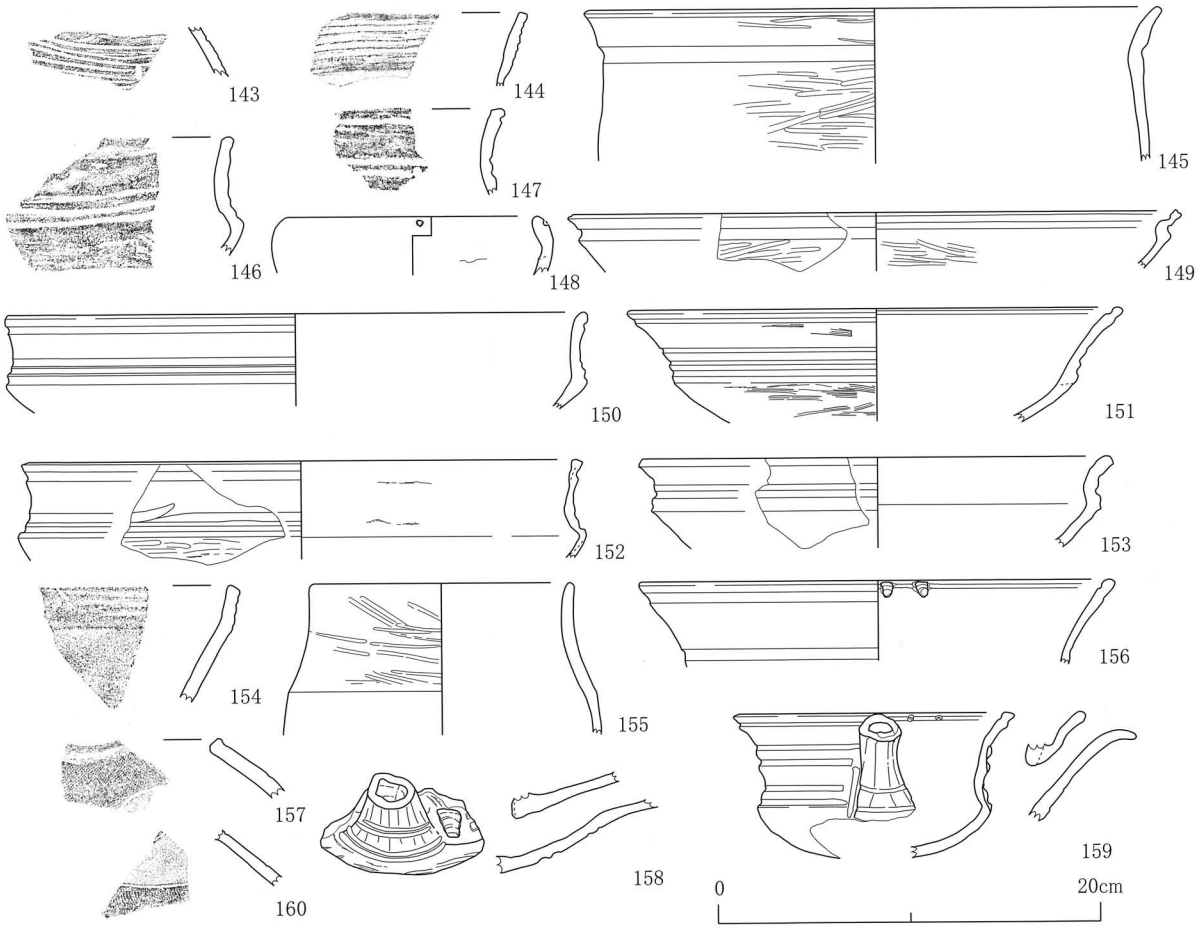
３条の凹線は、幅が広く、断面は「U」字を呈する。外面は巻貝条痕を施し、内面はナデ調整である。宮滝１式。107は、波状口縁深鉢である。口縁部は外反気味で、上半に１条、下半に２条の凹線がめぐる。波状部の頂部直下にあたる屈曲部分で巻貝頂部による縦方向の圧痕文を施す。体部は２条の凹線がめぐり、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。内外面ともに、巻貝条痕を施した後、ナデを行う。宮滝２式。108は、浅鉢である。口縁部と体部の境は明瞭で、口縁部は垂直気味に立ち上がり外反する。口縁部上半に１条、下半に２条の凹線を配する。凹線内部にはスジ条の圧痕が認められる。内面にも１条の凹線がめぐる。巻貝条痕の後、ナデ調整を行う。宮滝２式。109は、波状口縁の深鉢である。大きく屈曲させた口縁部は短く直線的で、端部に面を持つ。下端に屈曲が認められることから、２箇所の屈曲を持つ深鉢である。内外面ともに巻貝条痕を施し、口縁部外面と内面はさらにナデ調整を行い、条痕を消す。元住吉山Ⅰ式か。110は、注口土器の注口部である。内外面ともにナデ調整である。宮滝式か。111は、深鉢である。体部は直線的で、口縁端部に向かって外方へと広がる。口縁端部付近では１条の凹線がめぐり、体部では２条を１つの単位とした凹線が２段めぐる。いずれの凹線も浅く、粗雑である。中央の凹線上に、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を配する。口縁端部内面にも１条の凹線がめぐり、巻貝頂部による刺突を施す。宮滝式。112は、広口深鉢である。内面は１条の凹線がめぐり、凹線と端部の間を斜行する刻みが充填する。外面は幅が広く浅い２条の凹線がめぐる。内外面ともにミガキ調整である。宮滝１式。113は、鉢である。外面は粗雑なナデ調整で、内面は丁寧なナデ調整である。内面には、赤色顔料が付着する。宮滝２式。114は、広口深鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外方へとのび、丸くおさめる。体部上半に穿孔を施す。外面はケズリ調整、内面はナデ調整である。宮滝式か。115は、広口深鉢である。外方へと開きながら口縁部へと達し、端部にわずかな面を持つ。内外面ともに巻貝条痕である。宮滝式か。116は、広口深鉢である。外方へと開きながら口縁部へと達し、端部にわずかな面を持つ。外面は巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。宮滝式か。117は、無文深鉢である。砲弾形の器形で、外面に巻貝条痕を施す。内面はナデ調整である。宮滝式。118は、注口土器の体部である。下半に認められる屈曲から、算盤玉状の器形になると考えられる。外面には下弦の連弧文が配され、内部を擬縄文で充填する。元住吉山Ⅰ式。119は、器形ははっきりとしないが、注口土器の肩部と考えられる。外面は沈線によって区画された箇所に擬縄文を充填する。元住吉山Ⅰ式。

北トレンチ第11層

120は、深鉢である。体部中央と口縁部との境に屈曲を持ち、口縁部は緩やかに外反する。口縁部に３条、体部に２条の沈線がめぐる。内外面ともに巻貝条痕を施し、内面の一部ではミガキを行う。滋賀里Ⅰ式。121は、浅鉢である。口縁部は短く、緩やかに外反し開く。口縁部と体部の境の稜は明瞭で、口縁部外面に３条の沈線がめぐる。いずれの沈線も浅く不明瞭である。内外面ともにナデ調整である。滋賀里Ⅰ式。122は、深鉢である。体部と口縁部の屈曲は明瞭ではなく、緩やかに外反する口縁部を持つ。内外面とも巻貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式。123は、浅鉢である。外面に３条の沈線を配するが、あまり明瞭ではない。風化のため内外面ともに調整は不明である。宮滝式か滋賀里Ⅰ式である。124は、深鉢であろう。短く外反する口縁部で、外面に２条の凹線と、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を２段配する。宮滝２式。125は、深鉢である。外反する口縁部を有し、端部は断面三角形を呈する。外面の上部に３条、下半に１条の凹線がめぐる。口縁端部に粘土貼り付けによる扇状圧痕文を２段配す。内面は巻貝条痕を施す。宮滝式。126は、波状口縁の浅鉢である。内湾気味の口縁部で、外面には２条の凹線がめぐり、巻貝の側面圧痕を配する。滋賀里Ⅰ式。127は、深鉢の体部である。２段の屈曲があり、口縁部直下の個体と判断できる。外面には３条の凹線と扇状圧痕文の端が認



第９図　北トレンチ第11層出土土器実測図



第10図　北トレンチ第８～11層出土土器実測図

められる。宮滝２式。128は、広口深鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外方へと開く器形で、外面は巻貝条痕を施す。宮滝式。129は、鉢である。底面は平坦で、体部から口縁部にかけて直線的に外方へと開く器形である。外面の底部付近で２条、内外面の口縁部付近でそれぞれ１条の凹線がめぐる。口縁部付近の凹線は、いずれもスジ状の圧痕が認められる。また、内面の凹線上に２つの巻貝頂部による刺突を配する。外面調整は巻貝条痕の後、ナデを行い、内面は丁寧なナデ調整である。宮滝式か。130は、広口深鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外方へと開き、端部に面を持つ。外面はケズリを施した後、ナデを行う。宮滝式か。131は、広口深鉢である。直線的に外方へと開く口縁部を有し、端部に面を持つ。内外面ともに巻貝条痕を施す。宮滝式か。132は、広口深鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外方へと開き、端部に面を持つ。内外面ともに巻貝条痕である。宮滝式か。133は、広口深鉢である。砲弾形の器形で口縁部に向かって直線的に開く。内外面ともに巻貝条痕を施す。宮滝式。134は、深鉢の口縁部である。口縁部と体部の屈曲は強く、逆「Ｌ」字状を呈する。外面には５条の沈線がめぐる。外面の下半には、巻貝条痕が施される。縄文後期末であろう。135は、浅鉢である。体部と口縁部の境に屈曲を持ち、外方へと開く口縁部を有する。外面に平行する沈線とその間に縄文が施される。口縁端部の内面に粗雑な沈線が１条めぐる。元住吉山Ⅰ式。136は、器種は不明である。外面に連弧文と平行する沈線を配する。元住吉山Ⅰ式。137は、深鉢の体部である。平行する沈線と下弦の連弧文がめぐり、その間を擬縄文で充填する。内面は、巻貝条痕である。元住吉山Ⅰ式。138は、深鉢の体部であろう。外面には下弦の連弧文と擬縄文が施される。元住吉山Ⅰ式。139は、深鉢の口縁部～体部である。体部はやや内湾気味で、口縁部は外反する。外面には、ＲＬ？

縄文を施す。元住吉山Ⅰ式であろうか。140は、深鉢の底部である。凹底の底面に丁寧なナデを行う。体部外面はケズリ調整である。底部と体部の境はあまり明瞭ではない。内面はナデ調整である。宮滝式または滋賀里Ⅰ式。141は、浅鉢の底部である。浅い凹底の底面を丁寧にナデ調整する。体部外面の下半にだけケズリが施される。上半は条痕と考えられるが風化のため判然としない。宮滝式または滋賀里Ⅰ式。142は、算盤玉形となる注口土器の体部である。左半分では、屈曲部直上に1条の沈線をめぐらせ、沈線と連弧文を組み合わせたクランク状の文様帯を構成する。クランク状の文様帯内に擬縄文を配する。右半分では、摩滅のため下弦の連弧文と擬縄文がわずかに認められるのみである。屈曲よりも下半に巻貝条痕が認められる。また、内面に赤色顔料の付着がある。元住吉山Ⅰ式。

北トレンチ第8～10層

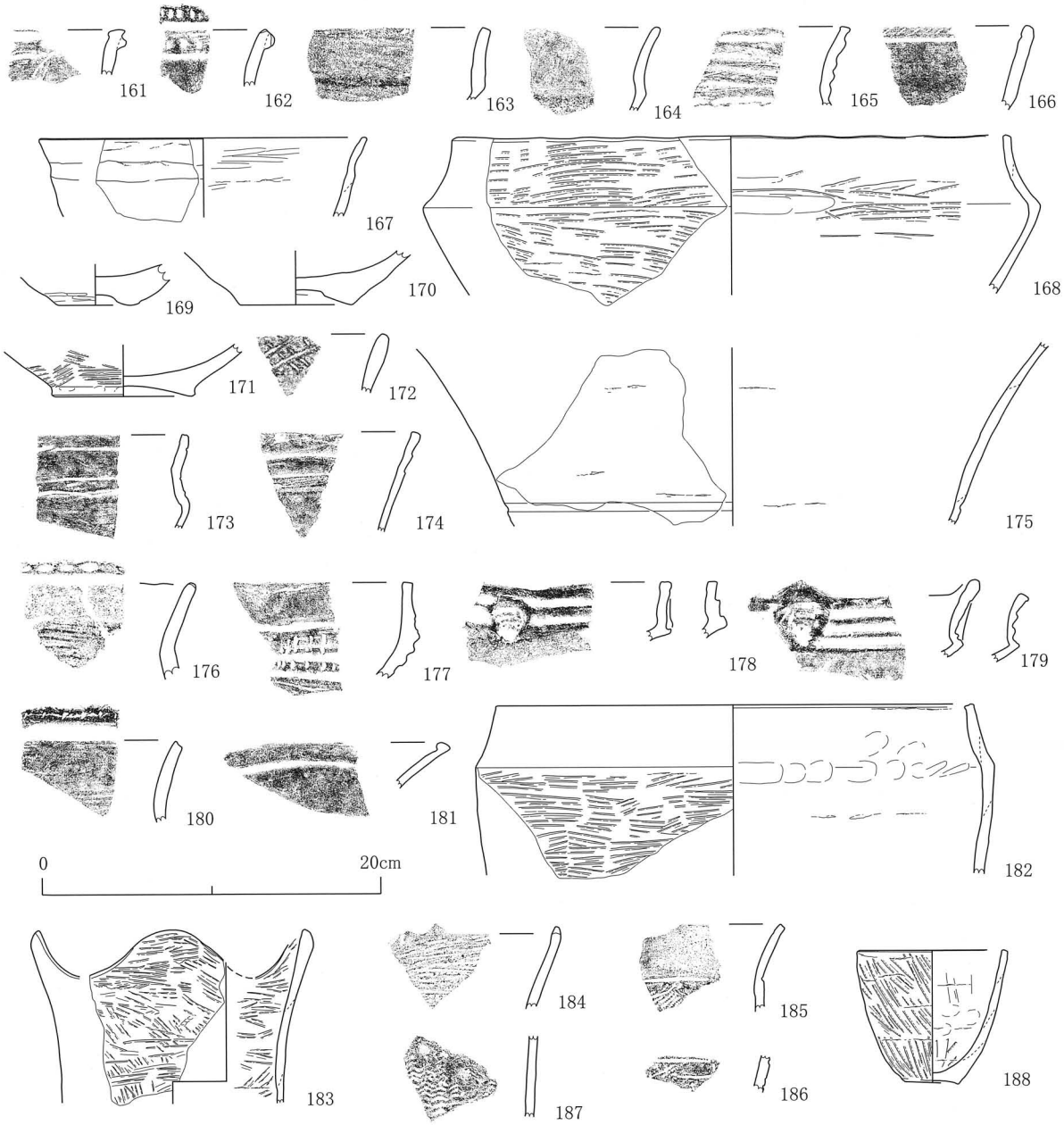
143は、浅鉢の体部である。外面には横に7条の沈線が配され、縦位に短い沈線が配される。内面はナデ調整である。橿原式文様橿原段階。144は、深鉢の口縁部である。頸部に強い1条のナデを施し、外面調整は二枚貝条痕である。滋賀里Ⅲa式。145は、深鉢である。短く外反する口縁部を有し、頸部に強い1条のナデを施す。外面は、ミガキ調整である。滋賀里Ⅲa式。146は、深鉢である。体部と口縁部の境が内屈気味で、緩やかに外反する口縁部を持つ。外面上半に1条、下半に3条の沈線がめぐる。外面は、巻貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式。147は、深鉢の口縁部である。緩やかに外反し、端部には面を持つ。外面上半に1条の沈線、下半に2条の沈線を配し、刺突文が施される。滋賀里Ⅰ式。148は、鉢である。口縁部を内屈させ、端部を丸くおさめる。外面には直径2mm程度の刺突が施される。内外面ともにナデ調整である。時期不明。149は、黒色磨研浅鉢の口縁部である。口縁部と体部の屈曲は鍵形を呈し、口縁部は内湾気味である。口縁端部は内側へと肥厚する。滋賀里Ⅳ式。

北トレンチ第8～11層

150は、浅鉢である。体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部は緩やかに外反する。外面上半に1条、下半に3条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅰ式。151は、浅鉢である。体部と口縁部の境は明瞭で、口縁部は大きく外方へと広がる。口縁部外面の上半に1条、下半に3条、内面に1条の凹線がめぐる。外面調整は、巻貝条痕である。宮滝式。

北トレンチ第9～11層

152は、深鉢の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、大きく外反させる。外面の上半に1条、下半に2条の沈線を施す。また、内面にも1条の沈線を施す。いすれの沈線も粗雑である。滋賀里Ⅰ式。153は、浅鉢である。口縁部と体部の境は、「く」の字を呈し、口縁部を外反させる。外面には2条の凹線がめぐる。宮滝式。154は、広口深鉢の口縁部である。口縁部と体部の境に屈曲をもたせ、直線的な口縁部を有する。口縁部外面には、粗雑な凹線が3条めぐる。宮滝2式。155は、注口土器の口縁部であろうか。体部から口縁部にかけては内屈し、口縁部では緩やかに外反する。体部と口縁部の境は明瞭である。外面はミガキを施す。宮滝式か。156は、浅鉢か。外方へと直線的に広がる口縁部である。外面に2条、内面に1条の凹線がめぐる。内面の凹線上に巻貝頂部による刺突が2つ配する。宮滝1式。157は、注口土器の口縁部である。口縁端部は、上部へとやや拡張させ、面を持つ。外面には擬縄文を施し、円弧を描く沈線が配される。元住吉山Ⅰ式。158は、注口土器の注口部である。接合部分においては直線的にのび、端部は緩やかに屈曲させる。注口部の下面に4条の凹線を配し、体部には扇状圧痕文と凹線を施す。宮滝式。159は、注口土器である。体部と口縁部の境は明瞭で、大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部に1条、中央部と下半に2条を単位とした凹線がめぐる。注口部との接合部分では縦方向の凹線を配し、注口部下面にも2条の凹線を配する。口縁部内面の凹線上には2つの巻貝頂部による刺突を施す。内外面ともにナデ調整である。宮滝式。



第11図　南トレンチ第７～10層出土土器実測図

北トレンチ第９・10層

160は、注口土器の肩部である。上半に円弧となる沈線が配され、下半は沈線に区画され内部を擬縄文によって充填する。元住吉山Ⅰ式。

南トレンチ第７層

161は、深鉢の口縁部である。直線的に外方へと広がる口縁部を持ち、端部は外方に拡張させる。外面は、刻み目の無い凸帯を貼りつけ、内面は１条の沈線がめぐる。滋賀里Ⅳ式。162は、深鉢である。口縁端部直下に刻み目凸帯を貼り付け、端部にも刻み目を施す。滋賀里Ⅳ式。163は、深鉢である。頸部の屈曲は緩く、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにナデ調整である。篠原式。164は、深鉢である。口縁部と体部の境は明瞭で、口縁部は外反する。篠原式。165は、深鉢の口縁部である。緩やかに外反する口縁部には、４条の凹線が配される。凹線は、幅が広くあまり明瞭ではない。内面

は巻貝条痕を施した後、ナデ調整である。宮滝式か。166は、広口深鉢である。内面に１条の凹線と、端部には斜行する刻みを施す。外面調整は巻貝条痕である。宮滝式。167は、深鉢である。頸部にあまり明瞭ではないが、１条のナデを施す。内面は、二枚貝条痕を施したのち、ナデ調整を行う。滋賀里Ⅲａ式。168は、深鉢の口縁部である。口縁部と体部の屈曲に明瞭は稜を持つ。外面は巻貝条痕を施す。宮滝式か滋賀里Ⅰ式である。169は、深鉢の底部である。凹底の底面はケズリ調整を行い、体部外面はナデ調整を施す。篠原式。170は、深鉢の底部である。凹底で中央部をさらに１段窪めている。体部外面はケズリ調整である。篠原式。

南トレンチ第７・８層

171は、深鉢の底部である。底面をナデ調整した凹底である。体部外面は二枚貝条痕を施す。縄文時代後期末か晩期中葉のいずれかであろう。172は、器形は不明である。直線的な口縁部で、外面には交差する条線文を配する。北白川上層２期または３期。173は、深鉢の口縁部である。口縁部と体部の境はあまり明瞭ではなく、緩やかに外反する口縁部を持つ。外面上半に１条、下半に２条の粗雑な沈線がめぐる。滋賀里Ⅰ式。174は、広口深鉢である。直線的に外方へとのびる口縁部に、２条の凹線を配す。外面調整は巻貝条痕である。宮滝１式。175は、体部である。緩やかに外反する長い体部に１条の凹線がめぐる。外面は、二枚貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整である。宮滝式。

南トレンチ第９層

176は、深鉢の口縁部である。頸部で「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に外方へとのびる。口縁端部は、Ｏの字形の刻みを施す。外面は二枚貝条痕と思われる痕跡を留めるが、磨滅が激しく判然としない。篠原式か。

南トレンチ第10層

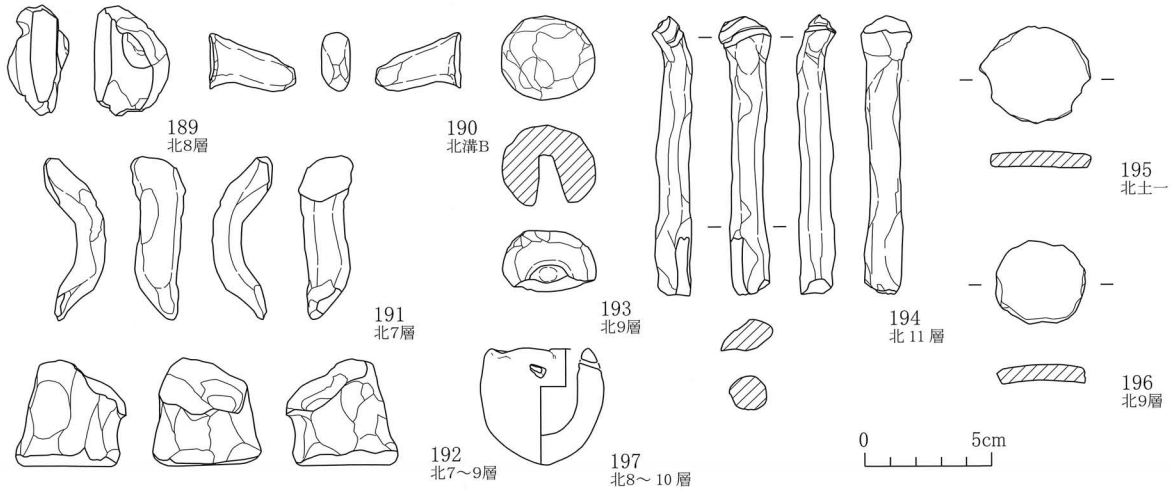
177は、浅鉢か。体部は内湾気味に形成し、口縁部はやや直線的にのびる。口縁端部に面を持つ。外面には３条の凹線と刻み目を持つ。縄文時代中期後葉と考えられる。178は、浅鉢の口縁部である。外面には２条の凹線を配し、直接扇状圧痕文を施す。宮滝１式。179は、口縁部である。口縁部と体部の境は、大きく「く」の字に屈曲する。外面に３条の凹線を配し、粘土貼り付けによる扇状圧痕文を施す。破片であるため器形は不明である。宮滝２式。

南トレンチ第９・10層

180は、広口深鉢である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部には刻み目が施される。外面調整は、二枚貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。滋賀里Ⅲａか篠原式である。181は、黒色磨研浅鉢である。直線的に外方へと広がる口縁部を持ち、口縁端部は内側へと肥厚させ面を持つ。外面に赤色顔料の付着が認められる。篠原式。182は、深鉢である。口縁部と体部の境は明瞭で稜をなす。口縁部は内屈させた後、やや外反気味に立ち上がる。体部外面に二枚貝条痕を施す。滋賀里Ⅰ式か。

南トレンチ第11層

183は、波状口縁深鉢である。内湾気味の口縁部を持ち、内外面ともに二枚貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。元住吉山Ⅰ式。184は、広口深鉢の口縁部である。端部に２つの突起を持ち、外面は二枚貝条痕を密に施す。篠原式。185は、浅鉢の口縁部である。頸部で外方へと屈曲させ、緩やかに外反する口縁部を持つ。頸部に１条の沈線と弧状沈線、ＬＲ縄文を配する。元住吉山Ⅰ式。186は、体部の破片である。外面には「コ」の字状に沈線を配し、内部に縄文を配する。下半には、２つの刺突が認められる。元住吉山Ⅰ式。187は、深鉢の体部片である。外面に山形文を施文する。山形文は横位となるように復元したが、縦位となる可能性もある。穂谷式。



第12図　土製品実測図

南トレンチ第12層

188は、小型の深鉢である。凹底を持ち、砲弾形を呈する。外面は巻貝条痕を施し、内面はナデ調整である。縄文時代後期末であろう。

土製品

土偶

189は、胸部である。中央部には乳房が認められる。胸と脇の境に明瞭な稜線を形成し、それぞれ平滑に仕上げる。クビレのない板状胴部になると思われる。190は、直線的に広がる腕部である。端部に向かって細く、断面は方形を呈する。前面の先端部に若干の粘土の隆帯が認められる、手を表現したものか。191は、腕部である。肩部から端部にかけて大きく円弧を描く器形で、断面は楕円形である。手の平に相当する部分で欠損が認められることから、胴部と連接していた可能性がある。192は、脚部である。断面形状は円形で脚の長さは短い。底面は平坦である。脚の付け根にあたる破断面では、凹面が形成されており、胴部を差し込むように接合したと考えられる。

球状土製品

193は、外面はあまり丁寧に仕上げられておらず、凸凹が目立つ。中央には、断面「ハ」の字状を呈する円形の刺突が認められる。

棒状土製品

194は、棒状土製品である。上部、下部ともに欠損している。中央部から下部にかけては円柱状を呈するが、上部では屈曲を持ち平面形も扇形に開き、断面形も扁平となる。上部正面に２条の沈線が認められる。

土錘

195は、土器を転用した土錘である。対となる部分を大きく打ち欠くことにより、抉りを持つ。

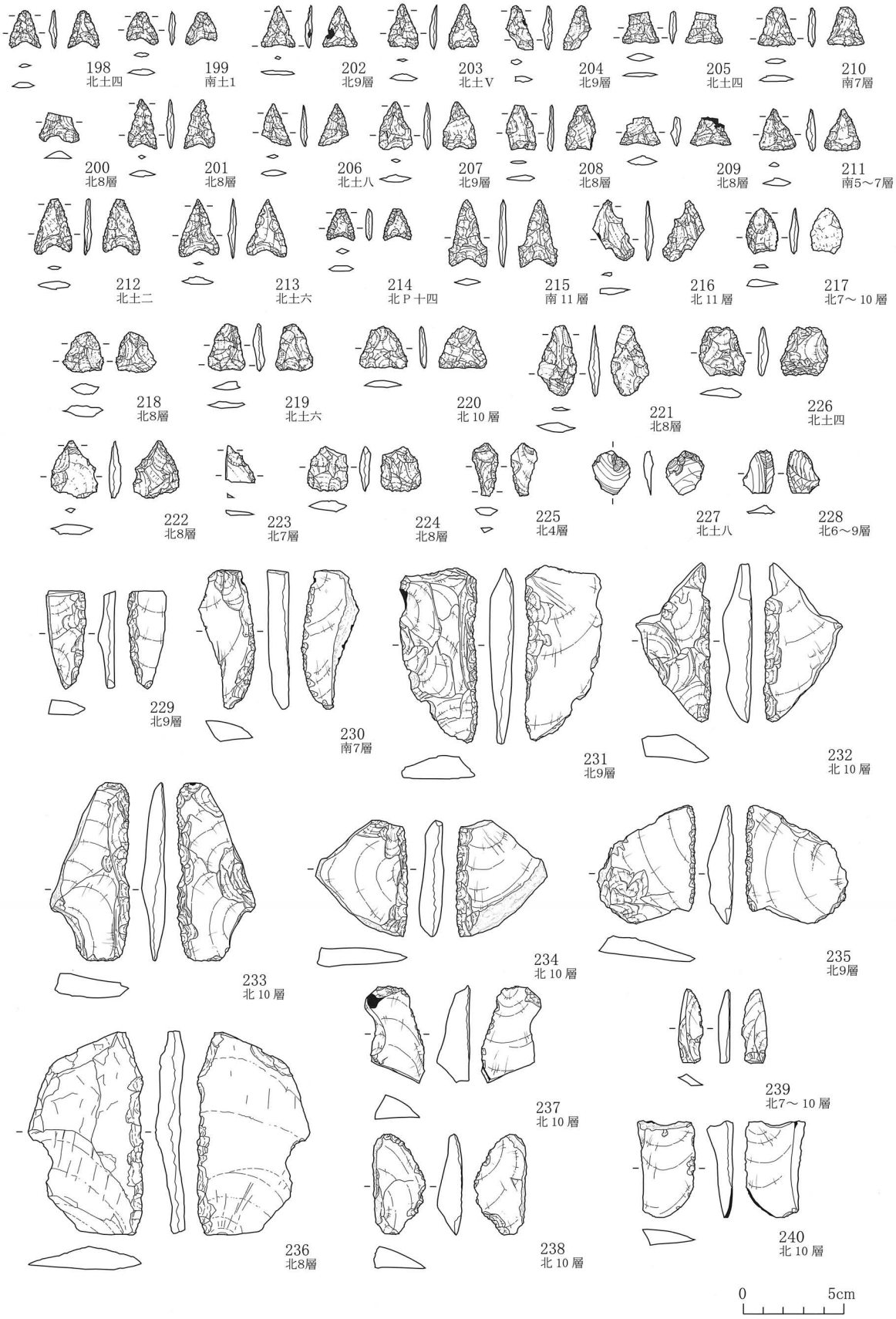
土製円盤

196は、土製円盤である。内外面ともにナデ調整を行う。

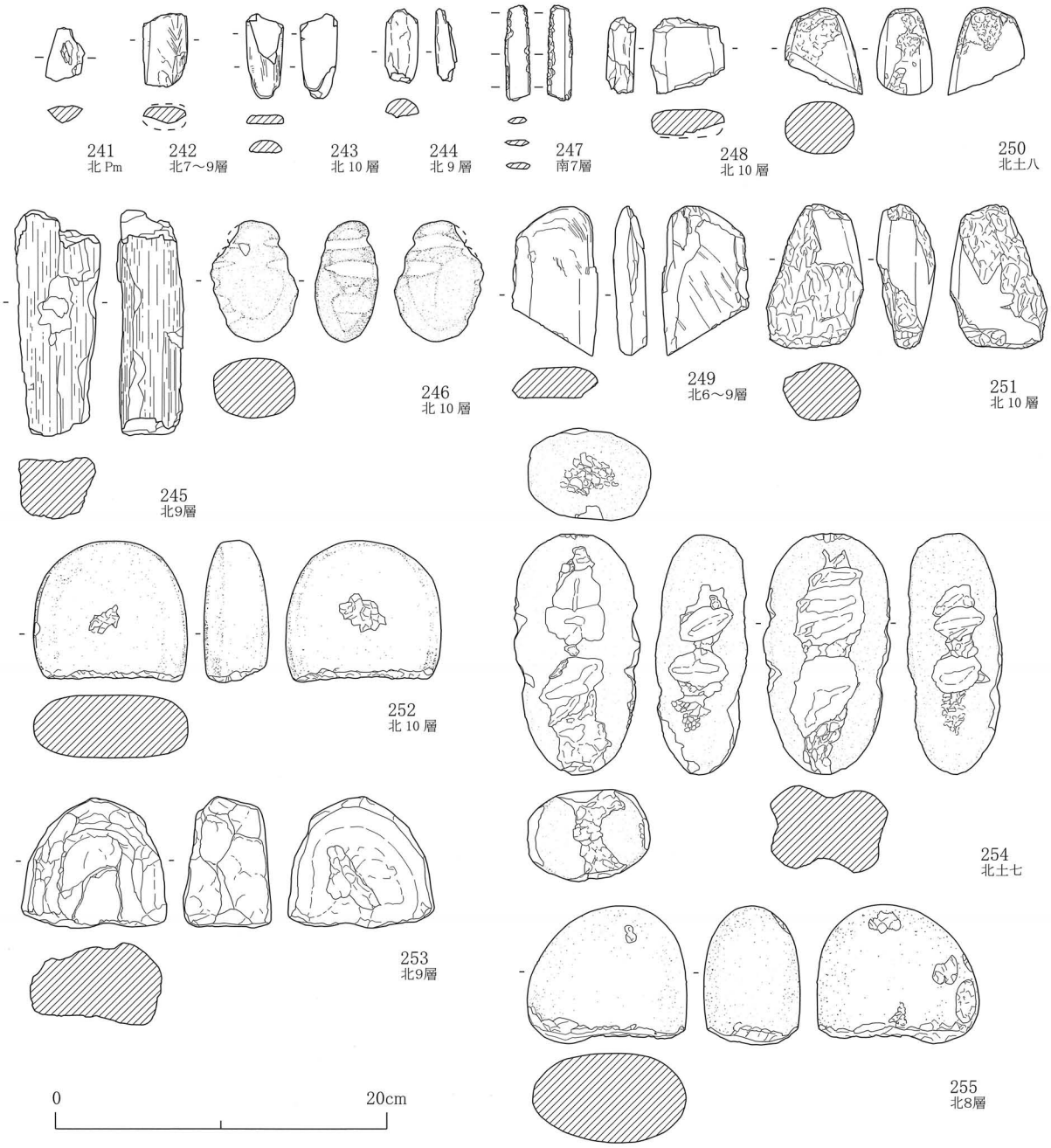
ミニチュア土製品

197は、ミニチュア土製品である。器壁は厚く、深鉢を模したものであろうか。口縁部付近の対角になる２箇所に穿孔が施される。穿孔は矩形を呈する。

いずれも包含層または遺構の混入として出土しており、時期を狭く限定することができない。ただ


198 北土四
199 南土1
202 北9層
203 北土V
204 北9層
205 北土四
210 南7層
200 北8層
201 北8層
206 北土八
207 北9層
208 北8層
209 北8層
211 南5～7層
212 北土二
213 北土六
214 北P十四
215 南11層
216 北11層
217 北7～10層
218 北8層
219 北土六
220 北10層
221 北8層
226 北土四
222 北8層
223 北7層
224 北8層
225 北4層
227 北土八
228 北6～9層
229 北9層
230 南7層
231 北9層
232 北10層
233 北10層
234 北10層
235 北9層
236 北8層
237 北10層
238 北10層
239 北7～10層
240 北10層
0
5cm

第13図　石器実測図1



第14図　石器実測図２

し、出土層位の時期からいずれの土製品も縄文時代晩期前～中葉の所産であると考えられる。

石器

石器は、形態的特徴から分類して報告する。また、石材については肉眼観察における二上山北麓産サヌカイト以外について適宜記述する。

石鏃（AH）

側縁が直線的で、平面形態がほぼ正三角形を呈するもの。基部の抉りは全長の約1/4と比較的深いもの（198～201）、僅かな調整によって１mm程度の凹むもの（202～209）、平基のもの（210・211）がある。

側縁が凸状に膨らみ、基部の抉り込みが全長の約1/4程度で、脚部が丸く仕上げられているもの（212・

213)。

側縁が細かな鋸歯状に作り出され、凸状に膨らむもの（214)。

側縁が直線的で、平面形態が二等辺三角形を呈するもの（215)。基部の抉りが2mm程度凹み、脚部が翼状に張り出す。

側縁が直線的で、平面形態がほぼ三角形を呈するもの。基部の抉りが全長の約1/3で、脚部が丸く仕上げられているもの（216)。217は、半裁されており正確な形態は不明である。

208・212・216は金山産サヌカイトである。

石鏃未成品

平面形態が三角形を呈し、各側面に二次加工のある剥片を石鏃未完製品として抽出した（218～224)。223は、石鏃を志向したものと考えるがあまり明確ではない。これらの石器は、第2・3表には石鏃として分類している。

石錐（Dr)

いずれの石錐も刃部以外にも両面調整を施すものである（225)。全面に調整が施され元の形状を残さない。図化していないが、剥片を素材として任意の二側縁の交点に刃部調整を施されるものも存在する。第2・3表に記した石錐にもこの製品を含めている。

楔形石器（PS)

226は、楔形石器である。密集する階段状の剥離痕や敲打痕が認められ両極打法による痕跡と思われる資料をすべて楔形石器とした。

チャート製剥片

227と228は、チャート製の剥片である。227は、二次加工が認められる。チャート製の製品が未発見のため、何を志向したものであるのか判断できない。

スクレイパー（Sc)

いずれも自然面を持った剥片の両面に二次加工が施され、両面調整の刃部を持つものである（229～238)。236は、流紋岩。

微細剥離痕のある剥片（MF)

剥片の縁辺部に、細かな剥離痕が連続で認められるものである（239・240)。剥片の素材として鋭い縁辺を持つことから、そのまま使用され、刃こぼれをおこしたものと考えられる。

石刀

241は、断面形状を楕円形に復元できることから石刀と判断した。242は、刃部と背部の一部が残る破片である。背部に擦痕が残る。243は、半裁された破片である。二次利用するためか裏面を丁寧に磨き平滑にしている。いずれも粘板岩製である。

石棒

244は、断面形状が円形になることから石棒と判断した。風化が激しく、調整などは判然としない。粘板岩製。245は、大型石棒と考えられる。結晶片岩製で平坦面に敲打痕が残る。上下両端が欠損しており全形は不明である。

246は、砂岩製の石棒である。頂部に敲打痕が1箇所認められるが、その他は自然面である。左側面に4箇所、右側面に2箇所の抉りを持つ。最上段にある加工は全周せず、表面で途切れる。

石剣

247は、両側縁に刃部を持つことから石剣とした。側縁には剥離痕と擦痕を認めるが、前後関係は不明である。紅簾石片岩製。

第２表　遺構・包含層出土石器組成

層位 / 遺構	AH	Dr	Sc	RF	MF	PS	Co	Fl・Ch	原石	熱破砕片	石刀	石棒	石剣	石斧	敲石	台石	敲＋台	磨石
北トレンチ第4層		1						2										
第5層	2			1		4		8			1							
第6層	3	2	1	4	2	14	3	55		1								
第7層	3	1	2	10		26	2	75		8								
第8層	10	3	4	6	2	29	7	146	3	6	1				2	1	1	
第9層	4	2	3	7		19	12	149	2	10		1		1		1		
第 10 層	1	4	9	23	5	16	29	247	1	4	1	1		3	1		1	1
第 11 層	1		1	1	1	8	2	48		1								
第3・4層			1	1		1		5										
第4・5層				1				4										
第6・7層								1										
第6～9層	1							9		1				1	1			
第7～9層				2		2		9			1				1			
第7～ 10 層	1				1	4	2	19										
第8～ 10 層			3	1		2		20		1								
第8～ 11 層			1	3	1	2	9	11		2								
第9・10 層			2	2		4	4	21	2									
第9～ 11 層		1																
第 10・11 層								6										
第5層上面　土1				4	1	5		37		1				1				
土2						1		1										
土3								1										
土4								1										
土6				1				1										
溝1								1										
溝2						1												
第9層上面　土一				1			1	3										
土二	1					1		95										
土三								4										
土四	2				2	1		12							1			
土五				1				5		1								
土六	2	1	3				1	10		1								
土七			1					2									2	
土八	1			3		2		6						1				
P三								1										
P十四	1							3										
P十八								1										
第 10 層上面　土Ⅱ				2		3		9										
土Ⅲ								1										
土Ⅳ				2				34										
土Ⅴ	2		1	1			1	152										
土Ⅵ								6										
Pa				1				1										
Pi								1										
Pn								1										
Pm											1							
Po			1					1										
Ps								2										
Pv								1										
Pz								1										
Pb’								1										
第 11 層上面　土A								1										
土B						1	1	13										
土C			1					2										
土D								34										
土H							1											
炉1				1				3										

第３表　遺構・包含層出土石器組成

層位 / 遺構	AH	Dr	Sc	RF	MF	PS	Co	Fl・Ch	原石	熱破砕片	石刀	石棒	石剣	石斧	敲石	台石	敲＋台	磨石
北トレンチ PB								1										
PC				1														
PD								1										
PI								3										
PJ								1										
PL								1										
PM				1			1	2										
PT								1										
PV								1		1								
南トレンチ第7層			1	5		5	5	41			1		1					
第8層							1	78										
第9層				1			1	18										
第10層	1		1	1		2	2	19										
第11層	2					1		6										
第2～6層				1		2		6										
第5・6層				1		5		11										
第5～7層	2	1		1	1	3		12		1								
第7・8層				6		3	4	49										
第9・10層			1			2	1	2		1								
第9～11層				1			1	2										
第9層上面　土1	1							2										
土3								30		1								
土4								4										
第10層上面 土Ⅰ								2										
土Ⅱ			1					4										
土Ⅱ内ピット								3										
大溝							2	2										
第11層上面 P三							1	2										
P五							2	2										
P六					1		1	1										
土G								2										
土H							2	8										
第12層上面 PA								1										
試掘・撹乱・表採・不明		1	1	2		6	5	27		1								

石斧

248・249は、基部から刃部にかけてほぼ同じ幅を有する、いわゆる短冊形の磨製石斧である。いずれも、断面は長楕円形を呈する。いずれも粘板岩製。250・251は、基部から刃部にかけて「ハ」の字状に大きく開く、いわゆる撥形の磨製石斧である。250は基部と側面に無数の敲打痕が残る。安山岩製。251は、蛇紋岩製。

台石・磨石・敲石

252は、台石と磨石である。両面は研磨によって非常に平滑になっており、さらに両面の対応する箇所に凹みが残る。閃緑岩製。253は、台石である。側面や裏面は欠損によって全形が不明であるが、表面の中央部に凹みを持つ。表面が被熱している。砂岩製。254は、台石と敲石である。長楕円の円礫を選択し、上下の端部に敲打痕が残る。また、長側縁の四面に凹みがあり、それぞれ２箇所以上の凹みが認められる。砂岩製。255は敲石である。厚みのある自然礫で、下端の平坦面に敲打痕が一部で認められる。下端の平坦面が被熱している。砂岩製。

今回の調査では図化した以外にも多量の石器が出土した。出土した石器の組成と数量を第２・３表に示す。表には（東大教2010）で掲載した石器も含めている。また、北トレンチ土２・土Ⅴにおいて Fl・Ch が多いのは、１mm メッシュのフルイによって遺物を採取したためである。

5）既掘調査の概要

前年度の報告において、第20次発掘調査における成果を位置づけるには至らなかった。包含層出土遺物を把握できなかったことも理由の１つであるが、最大の理由は、これまでに行われた過去の調査との関係を明らかにしなければ、第20次調査の成果を正確に把握することができないと考えたからである。そこで、この節では、これまでに行われた調査の概要について確認する。

以下で報告する内容は、既刊の報告書だけでなく調査記録も参照した。Ｂ地点・第１次調査・第２次調査・第６次調査の内容は、調査日誌などの調査時における所見を記した記録が発見できず、平面図・断面図・記録写真・既刊の概報の記載から報告者が判断したものである。そのため発掘担当者の見解を示すものではないことを断っておく。

Ａ地点

昭和42年（1967)、東大阪市横小路４丁目に所在する鉄工所の新築に伴い土器と石器が採集され、(藤井・都出1967)・(原田ほか1968）で報告されたことにより、この地に縄文時代晩期の遺跡が存在することが周知のところとなった。報告された遺物は、滋賀里Ⅱ～Ⅲａ式の深鉢・橿原式文様を持つ鉢・石鏃・石錐・スクレイパー・石棒・石斧・磨石・石皿である。他に、報告文中に宮滝式の土器が採取されたことも記載されている。遺物を表採した鉄工所全体をＡ地点とする。

Ｂ地点

昭和43年（1968)、横小路３丁目において個人住宅の建設に伴い土器片が出土し、包含層の深さ、状態、遺構の有無を確認するための小規模な調査が行われた。

４箇所のトレンチ（B-A・B-B・B-C・B-D）を設定し調査を行った。

B-Aでは、第６層上面において溝10条・ピット１基を検出した。溝２は、西壁断面観察の結果、第４層上面からの切り込みであることがわかった。深さは約20cmで、埋土から土師器・須恵器が出土した。溝１は、断面観察から切り込み面を捉える事ができなかったが、溝２と同じく土師器・須恵器が出土したことから同時期の遺構と考えられる。溝２は、B-Dにおいてその東側延長部分を検出した。溝３は、深さ約50cmを測り他の溝よりも深く掘られている。B-B・B-Cにおいて南東側の延伸部分を検出した。埋土からの出土遺物は無いが、溝４～10と同様の砂層によって埋め尽くされていた。溝４～10は、いずれも深さ10cm前後で遺物は含まれていなかった。第４層上面の溝１や溝２において、土師器・須恵器が出土したことから、第６層上面の遺構は古墳時代以前と考えられる。B-Aにおいて下層確認のため深掘りを行った。下層からは、宮滝～滋賀里Ⅳ式の縄文土器と土製品など縄文時代の遺物が多量に出土した。

第15図　B-A地点北半全景（南から）

第16図　B-A地点南半全景（南から）

第１次調査

昭和44年（1969）に遺跡の範囲と現状を把握し、以降の保存対策を立てる資料を得るためにＣ・Ｄ・Ｅ地点の発掘調査を行った。また、調査開始後Ａ地点に隣接する区域において工場が建築されることが判明し、Ｆ～Ｌ地点として発掘調査を行った。

Ｃ地点

４箇所のトレンチ（C-E1・C-E2・C-E3・C-W1）を設定し調査を行った。今回、北壁と東壁の堆積層の対応関係を把握することができなかった。そのため、以下では東壁を基準として記述する。

遺構は、C-E3の上層でピット１基を検出し、全体では第８層上面において土坑９基・ピット１基（P1）・溝１条を検出した。

上層で検出したピットからは、弥生時代後期の土器が出土している。

Ｐ１は、幅60cm で縄文時代晩期の土器が出土している。

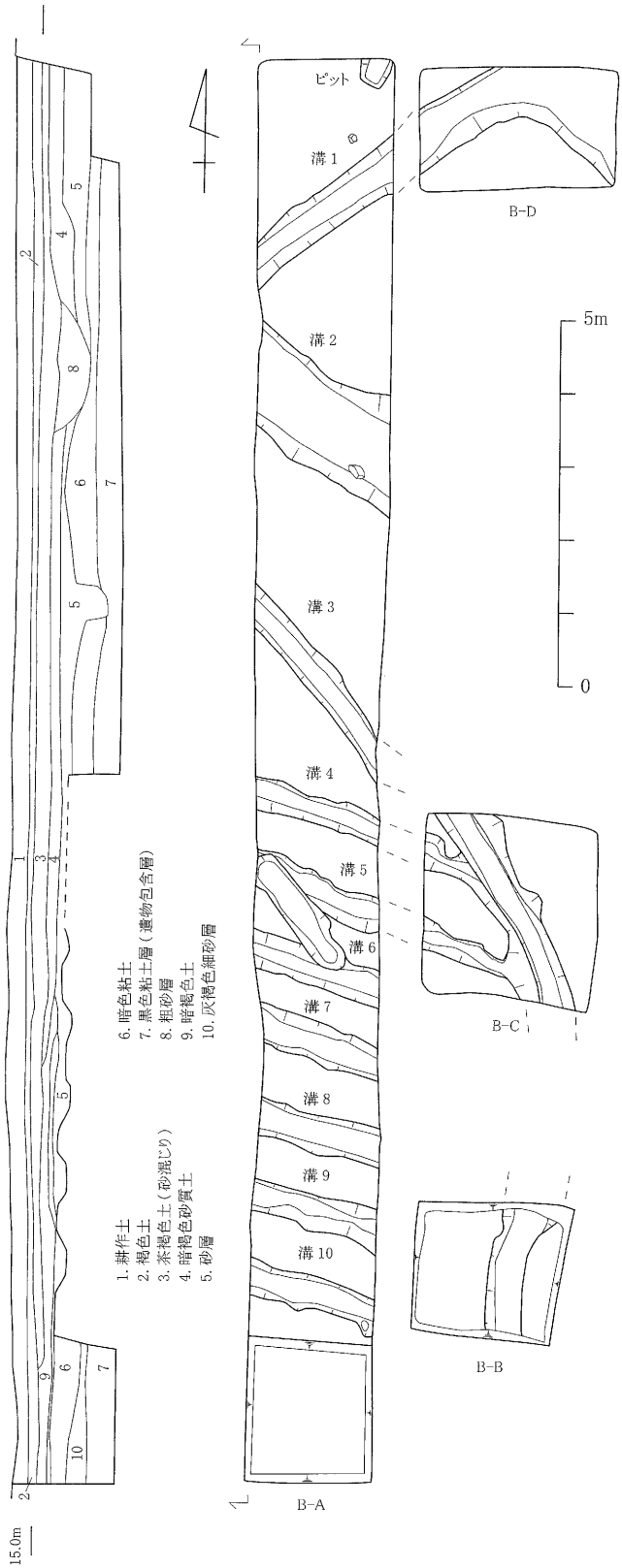
溝に接する土坑は、深さが48cm。中央部分で東西に並ぶ土坑は、深さが30cm 前後。最も西側に位置し南北に並ぶ２つの土坑は、深さが15cm 前後である。

C-W1で検出した３基の土坑は、北壁断面から判断する限り上層からの掘り込みである。C-E3で検出した弥生時代後期のピットと同時期の可能性が高い。

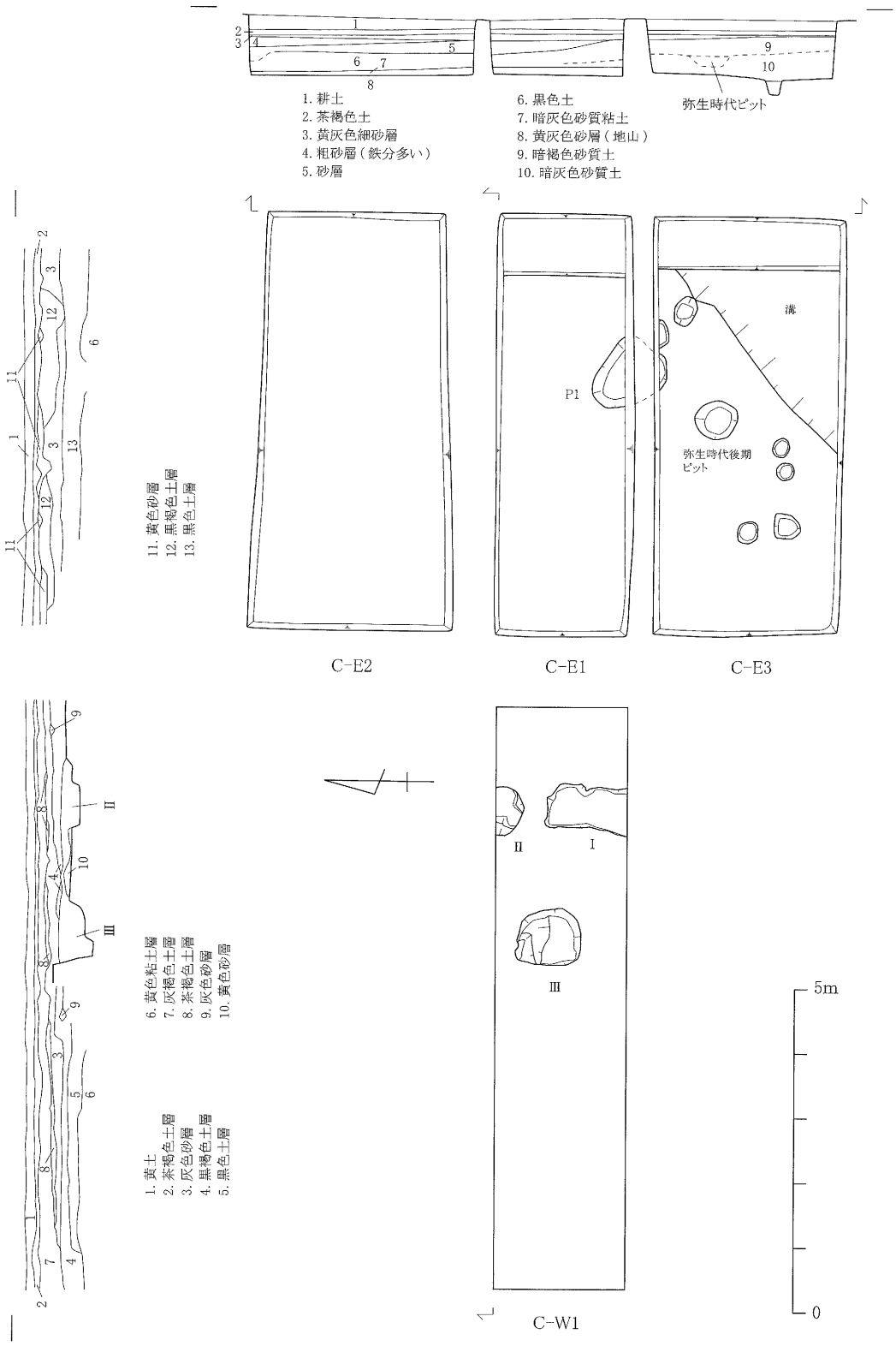
この地点からは、北白川上層式２期の深鉢・堀ノ内Ⅱ式系の深鉢・宮滝式の浅鉢・滋賀里ⅠまたはⅡ式の深鉢・滋賀里Ⅳ式の深鉢などが出土した。

Ｄ地点

2.0×6.0mのトレンチを設定し調査を行った。調査に関する図面が少なく、検出した遺構・堆積状況の詳細は不明である。第１図と第23図でＤ地点を図示しているが、正確な位置を示せていない。残された記録としては、出土状況の一部を示した図面と第21図の層序に関する記述のみである。調査記録によれば、黒色粘土層部分で弥生時代後期の土器が出土し、黒色砂質土層上面の北半で集中して縄文土器が出土した。また、灰褐色土層を床面とする竪穴建物の一



第17図　Ｂ地点第６層上面平面・西壁断面図

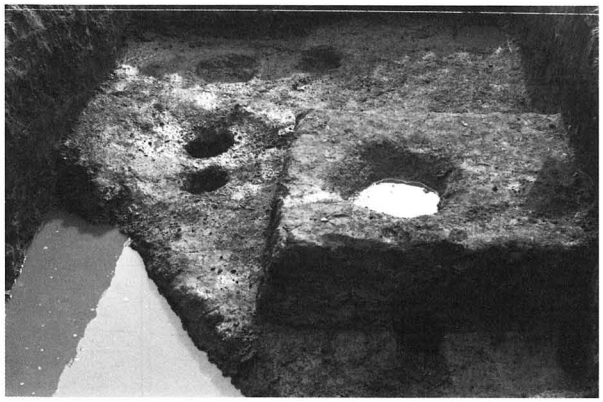


第18図　C地点黄色粘土層上面平面・断面図

角が認められた。隣接するF1で竪穴建物を検出しており、この一部と考えられている。D地点での出土遺物は、縄文土器・土偶・土製品がある。

E地点

2.0×8.0mのトレンチを設定し調査を行った。この地点では7層の堆積層が認められた。第4層に



第19図　C-E3地点（東から）

第20図　C-W1地点（東から）

滋賀里式の土器を若干包含していたが、それほど遺物は出土しなかった。第７層からは、宮滝式の土器が出土した。遺構は、西壁付近で第６層中に掘り方を持つ埋設土器１基を検出した。図面は残されているが、方位・出土位置は不明である。第22図より、頸部に強いナデが認められることから滋賀里Ⅲａ式と考えられる。

耕　土　層
茶褐色土層
黒色粘土層
黒色砂質土層
灰褐色土層
砂　　層
青灰色粘土層

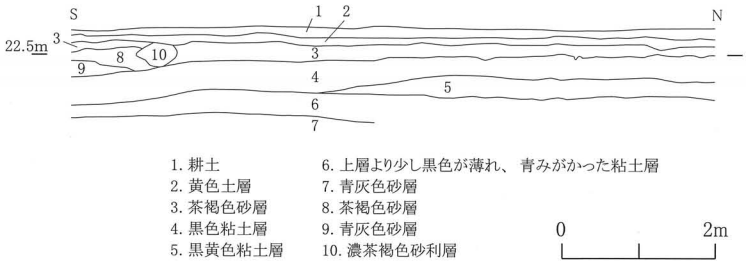
第21図　Ｄ地点土層順序

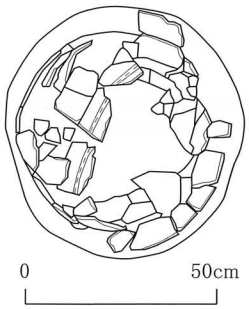
Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ地点

調査範囲となる北東隅を基準に8.0m四方のグリッドを設定し調査を行った。ただし、作業の工程から一度に広範囲を調査したのではなく、Ｆ地点・Ｇ・Ｈ地点・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ地点に分割して行った。

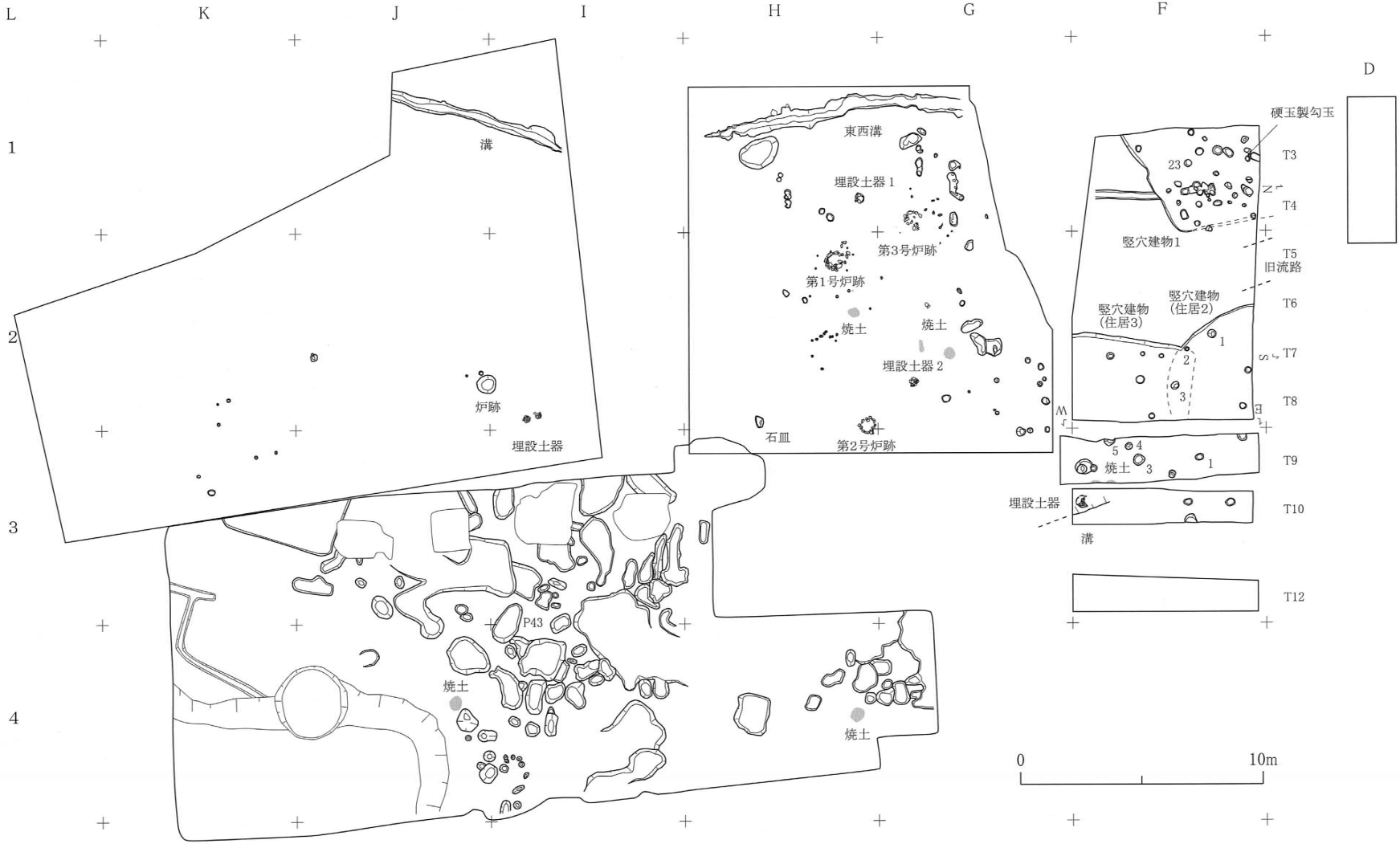
Ｆ地点では各グリッドをさらに南北幅2.0mの間隔で12分割し、Ｔ３～10・T12を調査した。この調査区では概ね７層の堆積層を確認している。遺構の大半は第５層上面での検出である。また、Ｆ１・Ｆ２において下層確認のため東壁際に幅50cmの掘り下げを行ったところ、断面観察によって自然流路を確認し下層からは宮滝式の土器が出土した。

F1-T3・4では、第５層上面において隅丸方形になる竪穴建物１を検出した。埋土を掘削した結果、下部においてピット28基を検出した。しかし、どのピットが竪穴住居１に伴う柱穴となるのか不明確である。ピットの数が多いことから下層遺構を検出している可能性がある。23ピットでは、ドングリが出土したことから貯蔵穴であったと考えられる。また、床面付近から硬玉製勾玉（東大教1970；P11第19図）が１点出土している。前述のようにＤ地点でもその一部を検出したとされるが、もし同一の遺構なら一辺の長さが約８ｍの建物となる。竪穴建物１の遺物が不明であるため時期を直接決することができない。しかし、第４層と第５層からは、滋賀里Ⅲａ式と篠原式の土器が出土しており、

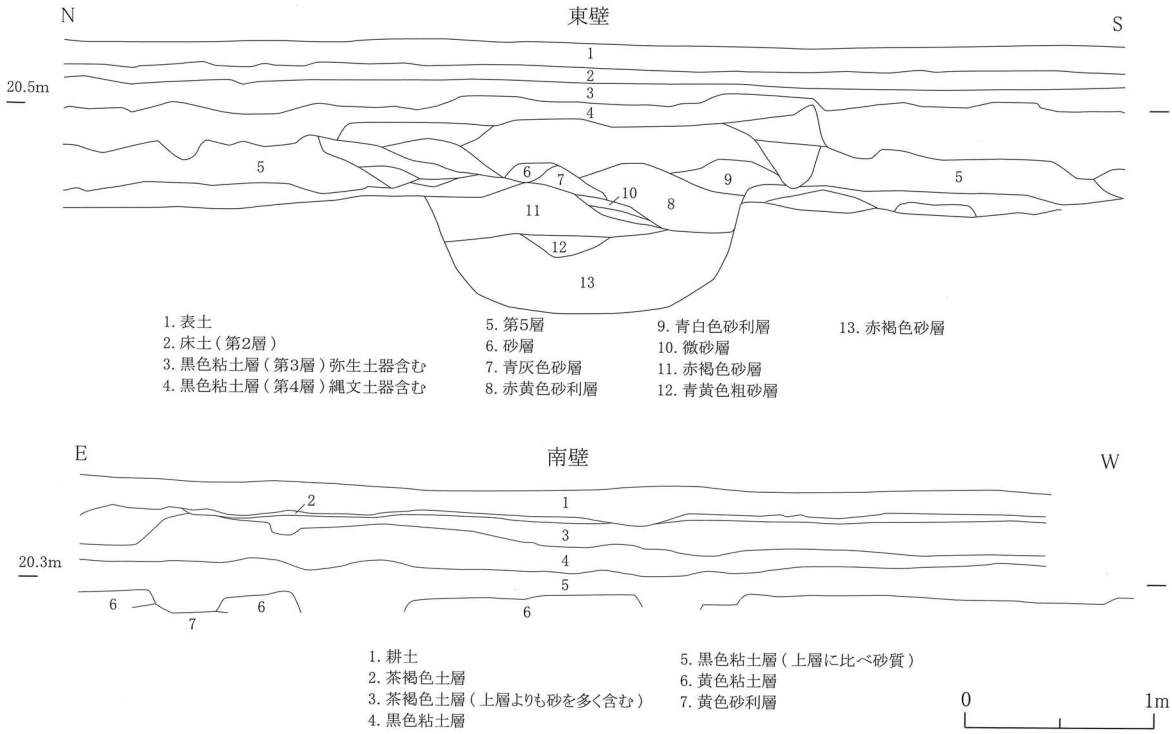




第22図　Ｅ地点西壁断面図・埋設土器平面図



第23図　D・F～L地点平面図



第24図　F1・F2地点断面図

第25図　F地点全景（東から）

第26図　F-T3・4地点竪穴建物1（東から）

第27図　F-T5～8地点竪穴建物2（西から）

第28図　F-T10地点埋設土器（西から）

縄文時代晩期前～中葉と考える。

F2-T5～8の部分で、円形竪穴建物（住居２）と方形竪穴建物（住居３）を検出した。円形と方形の竪穴建物が接合していたため切り合い関係の把握に努めたが明確にできなかった。それぞれの埋土を掘削すると下部において土坑と柱穴を検出した。ただし、いずれの柱穴が竪穴建物に関係する遺構であるのか判然としない。(住居２）からは、滋賀里Ⅲａ式と篠原式の深鉢・浅鉢と土偶・土製品が出土した。（住居３）からは、滋賀里Ⅲａ式と篠原式の深鉢・浅鉢と土偶・土製品が出土した。いずれの竪穴建物も時期は、縄文時代晩期前～中葉と考えられる。

F3-T9・10では、F2地点において検出した竪穴建物の平面形の検出に努めたが判然としなかった。T9の第４層上面において半円形に焼土塊が検出できた。さらに下層へと掘り進めると、Ｆ２地点の柱穴に続くと思われるピットを10基検出することができた。ピットとの関係は不明であるが、T10西端第５層上面において東壁中央部へと延びる溝を検出した。また、この溝を埋めた砂層中において埋設土器１基を検出した。埋設土器は、斜位単構造で滋賀里Ⅲａ式の深鉢である。T9・10の第４・５層から滋賀里Ⅲａ式と篠原式の深鉢･浅鉢が出土しており、第４・５層の時期的な差を出土遺物からは見出すことができなかった。他にＴ９第４層から土偶・棒状土製品・土製勾玉、第５層から棒状土製品、T10第４層から土偶・半球状土製品が出土した。

第29図　G・H地点全景（北から）

第30図　G1地点第３号炉跡（東から）

第31図　H1地点埋設土器１（東から）

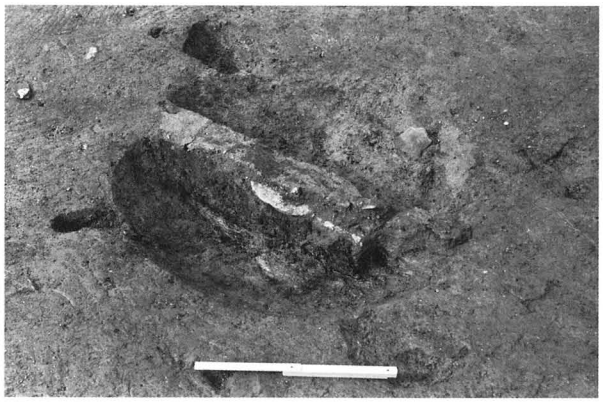
F3-T12では図面が残されておらず、トレンチの範囲など詳細な内容は不明である。このトレンチから出土した遺物は、縄文土器・土偶・棒状土製品がある。

Ｇ・Ｈ地点ではアゼを残さず全面調査を行った。黒色砂混じり粘土層を掘削した直下において、炉跡３基・埋設土器２基・土坑・ピット・溝１条を検出した。

溝は、東西幅10.7m、南北幅約0.4mにわたって検出した。深さは約20cmである。溝の中からは縄文時代の土偶なども出土したが､弥生時代後期の土器が多量に出土した。弥生時代後期の遺構である。

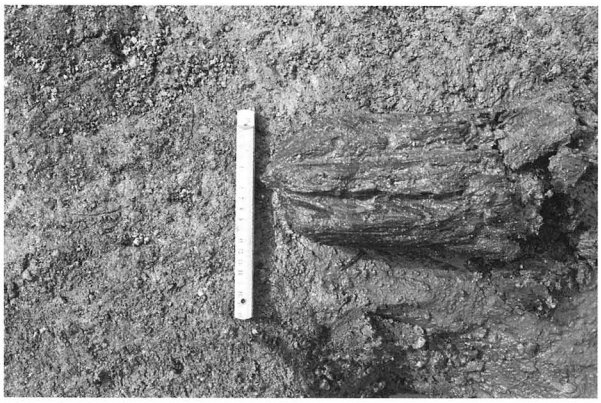
埋設土器１は、埋位などは不明であるが頸部に強い１条のナデを施していることから滋賀里Ⅲａ式の深鉢である。埋設土器２（東大教1970ａ；Ｐ８第７図）は、頸部に強い１条のナデを施していることから滋賀里Ⅲａ式の深鉢である。

第32図　I2・J2地点全景（南から）

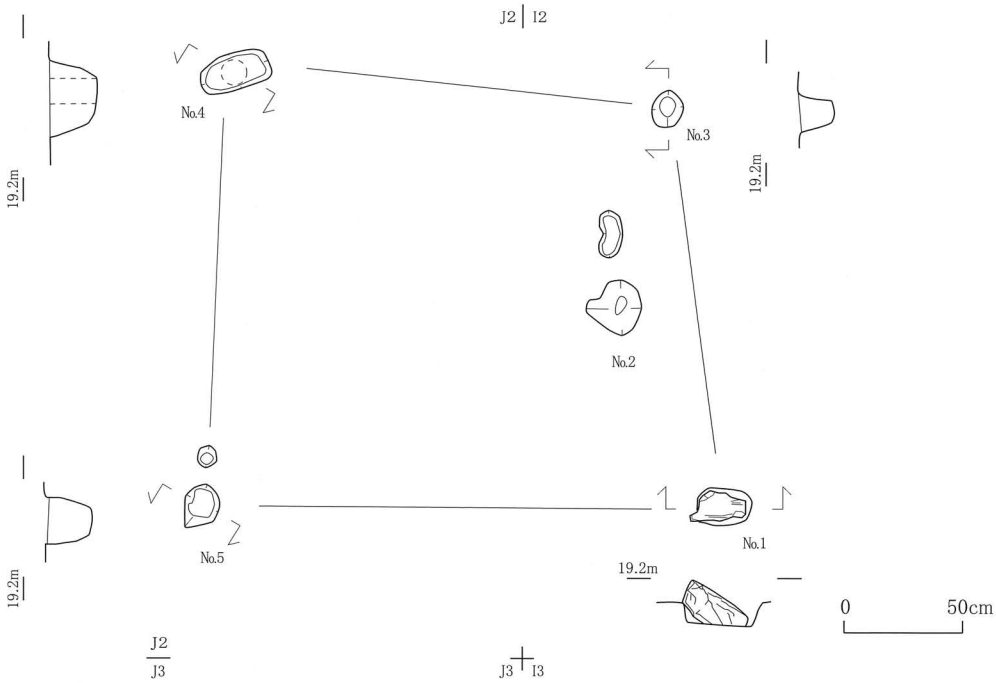


第33図　J2地点炉跡（南から）

第34図　I2・J2地点竪穴建物（南から）

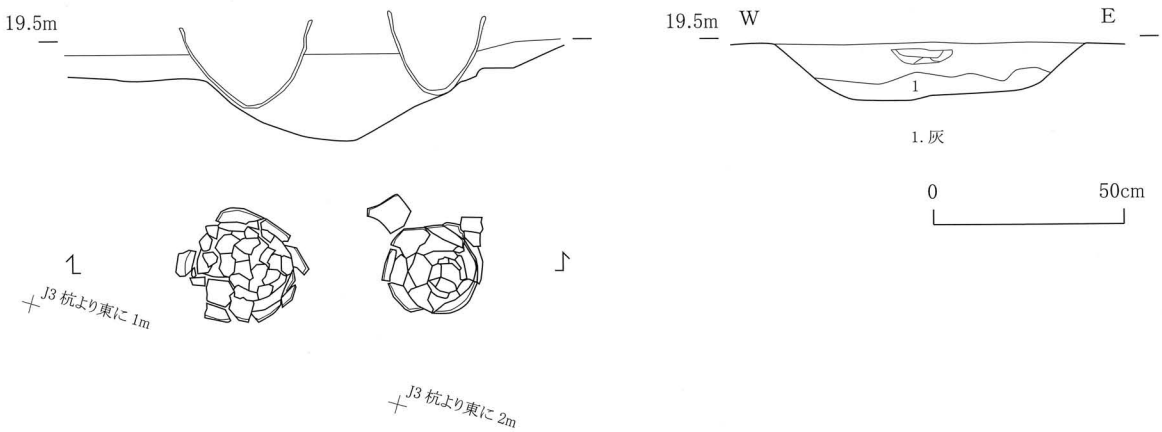


第35図　I2地点No.1（北から）



第36図　J２・Ｉ2地点竪穴建物平面・断面図

炉跡は３基検出することができた。いずれも石囲いで河原石を使用している。石は熱を受けており、埋土も焼土が充填する。時期を特定する手がかりは少ないが、第２号炉跡（東大教1970ａ；Ｐ８第８図)、第３号炉跡から出土したとされる土器は、滋賀里Ⅲａ式が主体である。



第37図　Ｉ3地点埋設土器平面・断面図・Ｊ2地点炉跡断面図

Ｇ２地点で性格は不明であるが環状に焼土の塊を検出した。また、調査区の南西端において一部欠損しているが、かなり使い込まれた石皿が出土している（東大教1970ａ；P10第16図）。その他にも土坑・ピットを検出したが、時期を含めてその性格は不明である。出土遺物の特徴としては、（田中・中西1999）・（松田1986）が指摘するように、Ｆ地点では土偶が集中し、Ｇ２・Ｈ２地点では石刀と石棒の未成品・破損品が集中して出土する。

Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ地点は全面調査を行った。第５層上面で炉跡・埋設土器２基・土坑・ピット・溝を検出し、第７層上面で柱穴４基とピット１基を検出した。

調査区の北側に位置する溝は、南東から北西へと延び弥生時代後期の土器を包含していた。Ｇ・Ｈ地点において検出した東西溝の延伸部分であろう。

埋設土器（東大教1970ａ；Ｐ８第９図；Ｐ９第11図）は並列して２基あり、いずれも正位である。１つの土坑に２つの深鉢を埋設していたようで、掘り方の平面形は東西に長軸を持つ楕円形を呈する。いずれの埋設土器も滋賀里Ⅲａ式である。

炉跡は、直径0.8m、深さ0.15mを測る。平面形態は円形を呈し、埋土には灰が堆積していた。出土遺物が不明であるため時期を明らかにすることができない。

Ｉ３地点において下層の調査を行ったところピット７基を検出した。№１・３・４・５ピットは、方形に配することから竪穴建物の柱穴と考えられる。芯々間の距離で約2.2mを測る。調査記録によると、建物の平面形態は方形と推測されている。№１ピットには柱が残されており、端部では斧による加工痕を認めることができる。滋賀里式と考えられる破片が出土したと概報に記述があるが、詳細は不明である。

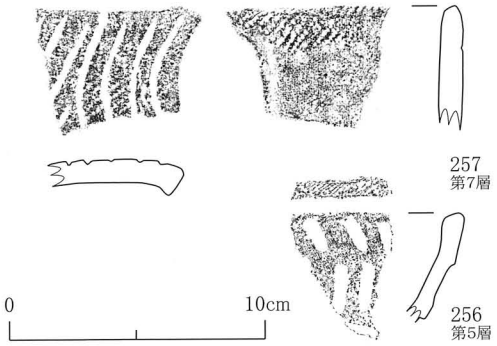
他にも土坑やピットを検出したが、その性格は不明である。また、Ｋ・Ｌ地点では若干の遺物を包含していたが遺構は認められなかった。

第２次調査

Ｎ地点

３m四方のグリッドを東西に２列・南北に８列の計16グリッドを設定し、その中のN-1・N-4・N-6・N-8・N-12・N-16を調査した。

N-1では、７層の堆積層を確認することができた。第４層から弥生時代後期の土器が出土したが、いずれ



第38図　N-16出土土器実測図

の層でも遺構は認められなかった。

N-4では、７層の堆積層を確認することができ、第６層下面において土坑２基を検出した。西側の土坑は、直径75cm、深さ約10cmである。東側の土坑は、不定形で深さは７cm前後と浅く、遺構ではなく落ち込みの可能性がある。

N-6では、７層の堆積層を確認することができた。第７層上面において土坑１基・ピット４基を検出した。

N-8では、第５層上面において土器が多量に出土した（東大教1971；P11第14図）。時期や土器の種類は現在不明である。他に第６層上面においてピット５基を検出した。

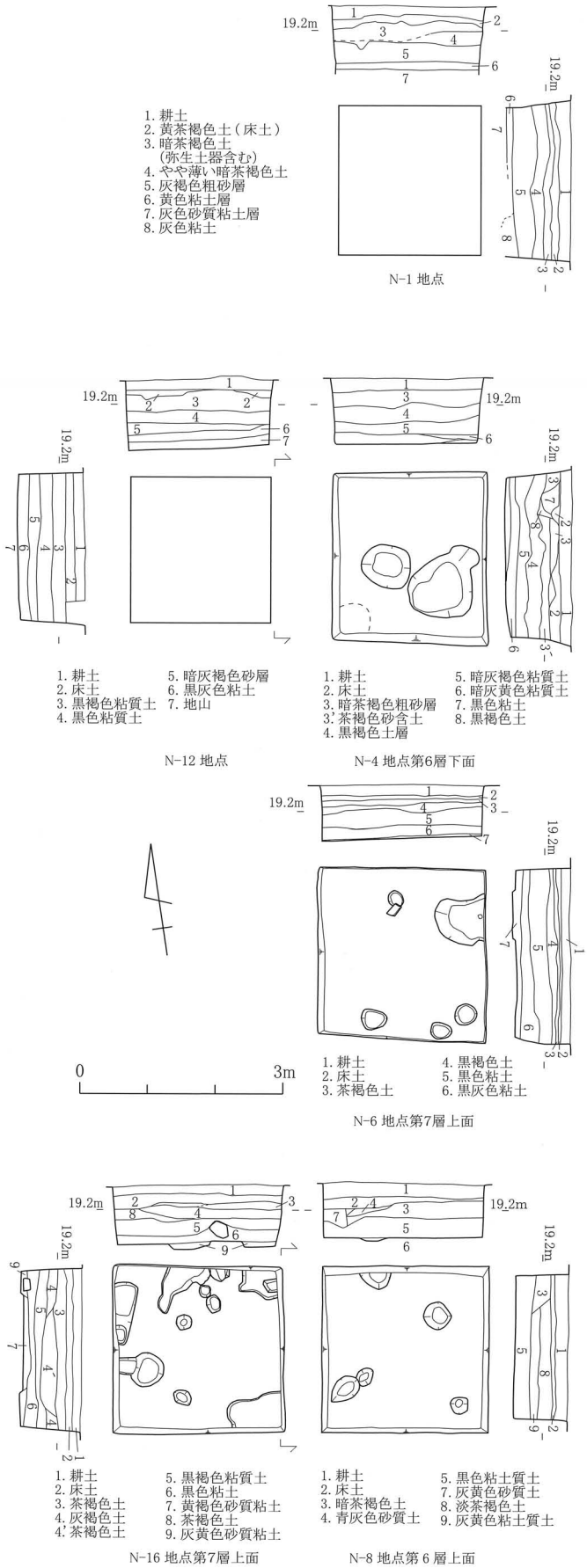
N-12では、遺構は認められなかった。

N-16では、第７層上面において土坑５基・ピット４基を検出した。N-6・8・16において検出したピットは、竪穴建物の柱穴となる可能性がある。

出土遺物の詳細は捉えきれていないが、滋賀里Ⅲａ～篠原式の他にN-4･N-6･N-8・N-12・N-16では、北白川Ｃ式・中津式といった中期末～後期初頭の土器の割合が増える。また、N-16第５層と第７層より北白川Ｃ式の深鉢（256・257：東大教1970ａ；P18第４図－７を再実測）が出土した。

Ｏ地点

長さ2.0m、幅4.0mのトレンチを２箇所設定して調査を行った。調査の結果、滋賀里式の土器に加えて磨消縄文の土器が出土し、これまで行われた調査において出土した遺物よりも明らかに古い時期の土器が集中して出土した。第２次調査時における調査内容は判然としないが、昭和50（1975）年に行われた第５次調査において第２次調査地を含めた範囲でトレンチ調査を行った。そのため詳細な内容は第５次調査に譲る。



第39図　Ｎ地点平面・断面図

P地点

現在では北屋敷遺跡にあたる部分である。幅約2.0m、長さ約20.0mのトレンチを設定して調査を行った。第5層から瓦器椀・奈良時代の須恵器・土師器が出土した。第13層において弥生時代後期の土器片を検出したが、遺構は判然としなかった。この地点から縄文時代の遺物は出土しなかった。

Q地点

現在では北屋敷遺跡にあたる部分である。東西に4列・南北に5列の計20箇所のグリットを設定し、Q-2・Q-4・Q-6・Q-8・Q-10・Q-17・Q-19を調査した。いずれの地点においても湧水が激しく断面観察に重点を置いて調査を行った。縄文時代の遺物は出土せず、古代の須恵器・土師器が出土した。

R地点

2.0×4.0mのトレンチを設定して調査を行った。上層部分における撹乱が激しいため現地表から1.6mにわたって遺物は含まれていなかった。

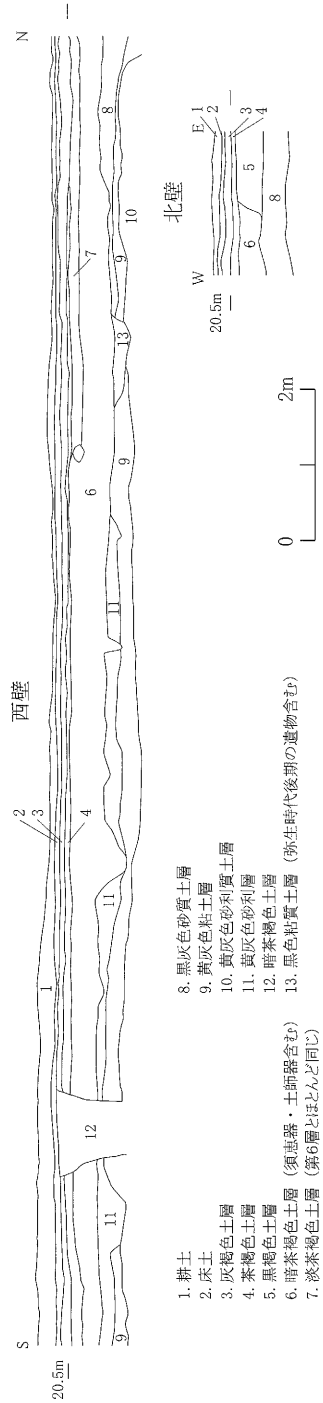
S地点

S-1・S-2の2か所のトレンチを設定し調査を行った。

S-1では、大きく8層の堆積層を確認した。第3層上面において南北方向に軸を持つ畦畔を検出した。第7層上面においてピットを検出したが、性格と内容は不明である。第5・6層中に弥生時代後期後葉の土器を包含していた。

S-2でも、S-1と同じく8層の堆積層を確認した。第3層上面においては、S-1と同じく、南北方向に軸を持つ畦畔を検出した。第6層からは篠原～滋賀里Ⅳ式、第7層からは滋賀里Ⅰ～Ⅲa式、第8層からは滋賀里Ⅰ～Ⅱ式の土器が出土した。

第7層上面において竪穴建物・土壙墓1基・ピット8基を検出した。竪穴建物は、掘り方の一部を平面で検出し、北壁断面でも切り込みを確認することができた。平面形は方形と考えられ、深さは約15cmであった。床面では直径約60cmの範囲で焼土が広がり、柱穴と考えられるピットを検出した。ピットの深さは27cmである。

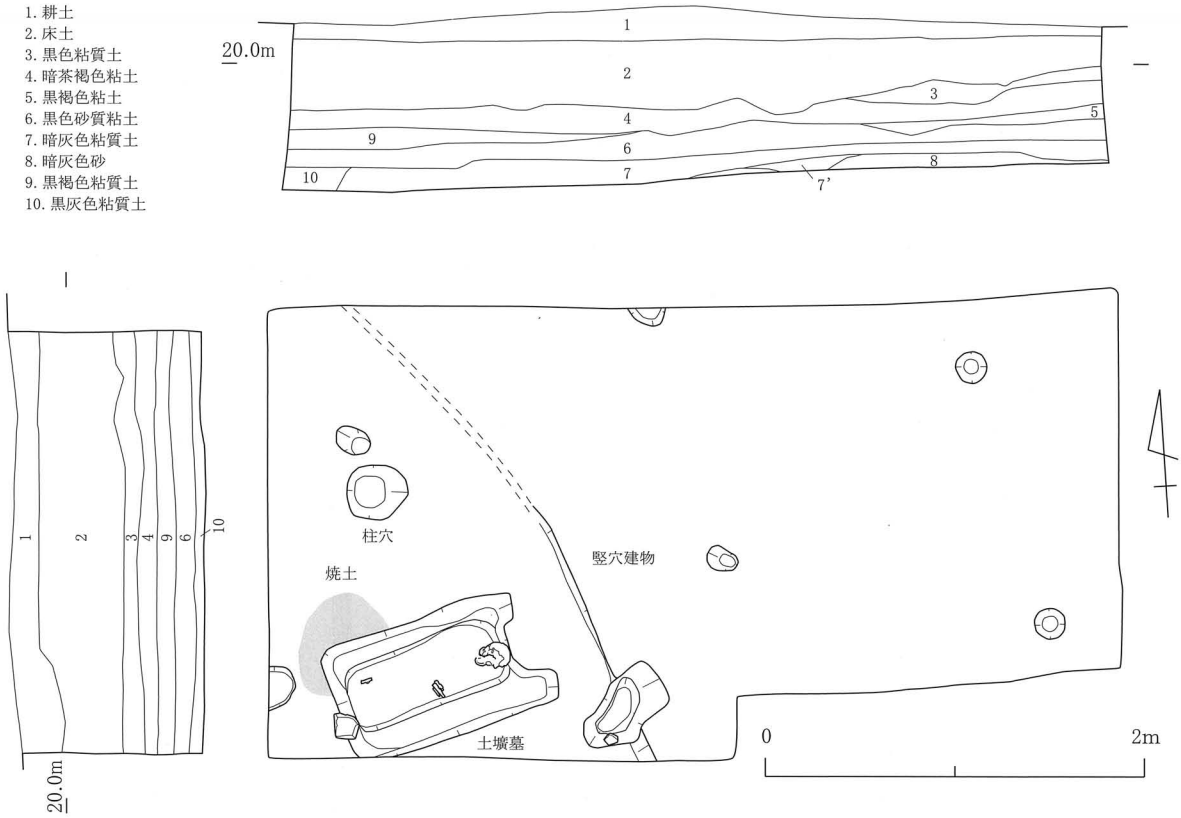


第40図　P地点北・西壁断面図

床面からはヒスイを加工した玉類の細片が散乱しており、いずれもが未成品・破損品の状態であった。また、埋土から管玉状石製品・臼玉・滋賀里Ⅲa～篠原式の土器が出土した。

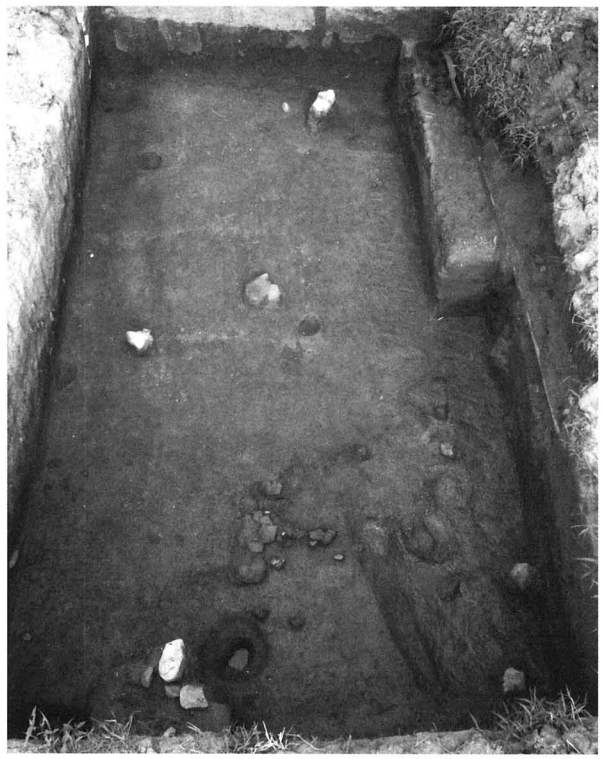
この竪穴建物を切る形で土壙墓が1基営まれている。坑内には頭蓋骨と一部の骨が残存していた。掘り方の大きさは、長さ1.4m、幅0.83mを測る。いわゆる二段墓坑で、底面は平坦である。平面形状の特徴として頭部に当たる部分を枕状に掘り残している。埋土内には、外面ケズリ調整を行った体部片があることから滋賀里Ⅲa～篠原式の土器と考えられる。

その他の7基のピットについては、性格・時期ともに不明である。



第41図　S-2地点第７層上面・断面図

第 42 図　S-1 地点第７層上面（東から）



第 43 図　S-2 地点第７層上面（西から）

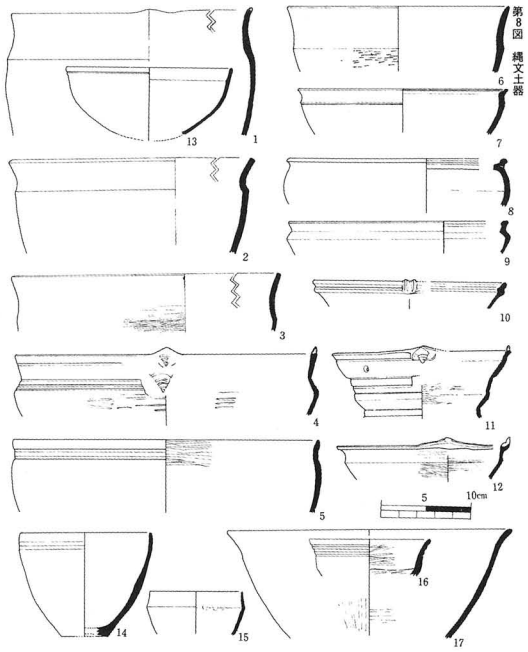
第３次調査

Ｄ１地点（個人住宅建設予定地第１トレンチ）では、11層の堆積層を確認している。各層の上面において精査を行ったが、上層部分で弥生時代後期の井戸１基を検出したのみで縄文時代の遺構を検出することはできなかった。ただし、第７層直上ではトレンチ北端の位置でサヌカイトのフレーク群が検出された。

第４・５層からは弥生時代後期後葉・第６層からは滋賀里Ⅲａ～篠原式・第７層からは滋賀里Ⅰ式と篠原式・第８層からは宮滝～篠原式・第10層からは宮滝～滋賀里Ⅲａ式の土器が出土した。

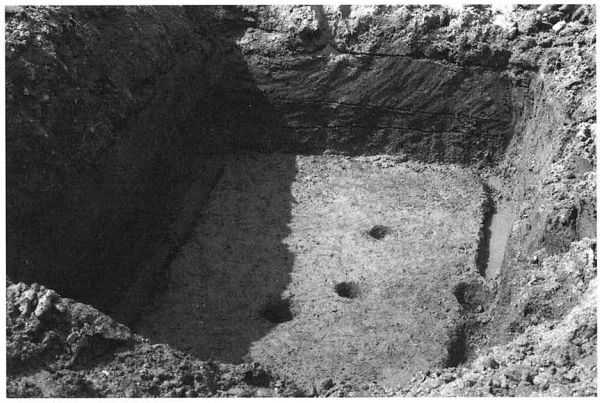
東大教1975；P11第８図の出土層位は、１・14・17（第５層）、６・10（第６層）、９・13・15（第７層直上）、２・５・７・８・12・16（第８層）、３・４・11（第10層）。P13第10図５・９～11・29・33・52（表採）、24・41（第５層）、２・４・32・40・50・53（第６層）、１・３・６・８・12・15～17・19・21・22・25～28・30・31・36・37・39・42・43・46・48・51・54（第７層直上）、７・13・14・18・20・34・35・38・44・45・47（第７層フレーク群）、23・49（第８層）。P14第11図７（表採）、６（第４層）、１（第５層）、２・４・５（第７層直上）、３（第８層）である。

この調査区では、土偶５点・イノシシ形土製品・イヌ形土製品・冠形土製品・半球状土製品３点・土製玉類４点・半輪状土製品といった土製品が多く出土している。



第44図　第８図縄文土器

第45図　S52-5E トレンチ（青灰色粘土層上面）



第46図　S52-5W トレンチ（弥生時代後期面）

第４次調査

Ｕ地点は、（東大教1975）において第２トレンチとして報告した箇所を一部含む調査である。この地点では、井戸２基を検出した。井戸から出土した遺物は、庄内式期でも古相の一括性の高い遺物として知られる。土製勾玉として報告されている土製品があるが、形状から縄文時代の半輪状土製品と考えられる。

第５次調査

第５次調査では、第２次調査において調査したＯ地点を含む調査区と、遺跡範囲の南端に位置するＴ地点を調査した。

O地点では７層の堆積層を確認することができた。遺構を検出することはできなかったが、第６層内より縄文土器が多量に出土した。第２次調査の際にも指摘しているように、ここからは北白川Ｃ式・中津式といった縄文時代中期末～後期初頭の土器が集中して出土した。

Ｔ地点では、４箇所のトレンチを設定して調査を行った。遺構は認められなかったがT-1・T-3の第５・６層より布留１式の土器が出土した。他にもT-3では、第７層中より滋賀里式と考えられる縄文土器・半球状土製品が出土した。

第６次調査

第１次調査Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ地点の南側に位置することから第１次調査の際に使用した基準を基に調査地区（H3・H4・I3・I4・J3・J4・K3・K4）を設定した。

第３層上面で弥生時代後期の土坑を１基検出したが、その他の遺構は第６層上面での検出である。

第６層上面では、竪穴建物・ピット・井戸・溝を検出した。井戸と溝からは、弥生時代後期の土器が出土し、上層からの切込みであることが判明した。このことから第６層上面は、複数時期の遺構を同一遺構面として検出していることがわかる。

J3・K3に位置する竪穴建物は、一辺が4.6mの隅丸方形を呈する。深さは５～10cmを測る。床面で柱穴は検出できなかった。埋土からは、滋賀里Ⅲａ式の深鉢・浅鉢が出土した。

この調査地点では、滋賀里Ⅱ～Ⅲａ式の土器が多く出土したようである。

S52-5

調査範囲内に２箇所のトレンチ（Ｅトレンチ・Ｗトレンチ）を設定したが、規模や正確な調査地点は不明である。４層の堆積層を認めることができ、第２層からは弥生時代後期の土器片、第３層からは宮滝式の深鉢・注口土器・滋賀里Ｉ式の深鉢・浅鉢が出土した。第４層からは北白川Ｃ式の深鉢が出土した。Ｗトレンチでは、弥生時代後期のピットを検出したが性格は不明である。Ｅトレンチでは、第３層上面で溝または自然流路を検出した。埋土からは完形品の浅鉢（芋本隆裕1978；P10-１）が出土した。

7-№１～10

平成４年11月18日～12月14日にかけて、分譲住宅建設に伴う7-№１～10の箇所で試掘調査を行った。試掘調査のため調査範囲は1.0×2.0mであり、図示した箇所全面を調査したのではない。いずれの地点も掘削深度は、現地表から1.2～1.4mである。

遺構は№10の断面においてピットを１基検出したのみである。その他の地点では遺構は認められなかった。各地点の包含層から弥生土器・縄文土器・石器が多く出土した。他に7-№５・10では、シカの骨が出土した。この調査で出土した石鏃と動物遺体は、（財団法人東大阪市文化財協会2000）において報告しているものになる。他に№４・７で土偶が出土している。

第７次調査

第７次調査は、7-A（=7-№11）・7-B（=7-№12）地点で調査を行った。２箇所とも浄化槽部分の調査のためトレンチは1.0×2.0mの範囲である。7-Aでは、第３層で滋賀里Ⅱ～篠原式の土器が出土し、第４層と第５層で滋賀里Ｉ～篠原式の土器が出土した。遺構は、第４層上面において土坑１を検出した。土坑１は、直径約40cm、深さ約10cmを測る。埋土から遺物は出土しなかったが、第４層を切り込んでいることから縄文時代晩期の遺構と考えられている。

7-Bでは、第３～６層にかけて宮滝～篠原式の土器が出土した。第７層上面において土坑２基を検出した。遺物は出土しなかったが、第６層に包含されている遺物より縄文時代後期後葉～晩期前半の所産と考えられる。

第８次調査

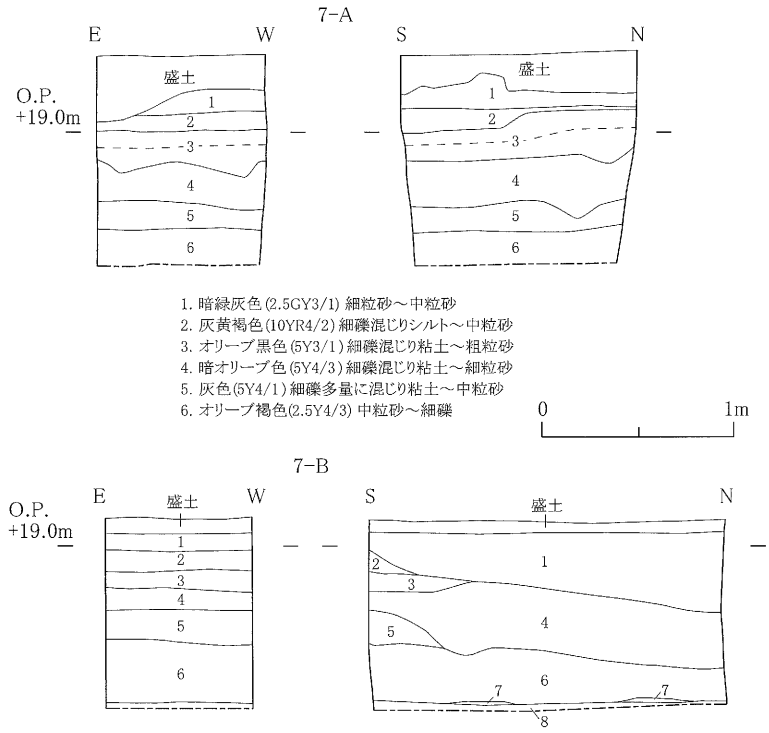
北半が北屋敷遺跡、南半が馬場川遺跡にあたる。遺構面は、14層下面で検出した古墳時代後期と中世が並存する第１面、24層下面で検出した縄文時代後期後葉～晩期前半の第２面がある。

第１面では鍬溝･溝を検出した。溝からは、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。第２面ではピット11基を検出したが、いずれも上層からの切り込みであると考えられている。縄文時代と考えられる遺構は認められなかった。

16～18層中では中期の船元式も認められたが、滋賀里Ⅱ～Ⅲａ式の土器が大半を占め篠原式の土器が出土した。土偶が２点出土している。

第９次調査

調査範囲は1.2×2.0m、掘削深度は現地表から1.0mである。４層に分層することができ、第３層で弥生土器、第４層で縄文土器を包含していた。遺物の詳細は不明である。



第47図　7-A・7-B 地点断面図
(＊土色、土色記号は原図記載のままとした)

第10次調査

浄化槽部分を対象としたため調査面積は13.5㎡である。７層の堆積層を認めることができ、第６層から弥生時代後期後葉の土器がほぼ完形の形で出土した。第７層の灰色粗粒砂層中には縄文土器が含まれていた。破片ではあるがケズリ調整と二枚貝条痕を施した深鉢の体部２点と、黒色磨研浅鉢１点が認められる。滋賀里Ⅲａ～篠原式の土器と考えられる。

第11次調査

下水道工事に伴う立会調査である。調査の方法は、遺物の確認と断面観察のみである。また、立会は図示した全地点で行ったわけではない。以下で報告する下水道工事に伴う調査に関してはすべて上記の方法で行っている。

11-A においては、北白川Ｃ式・中津式・宮滝式・滋賀里Ⅱ式・滋賀里Ⅳ式・弥生時代後期の土器・石刀・石錘が出土した。報告者によれば、11-A の東半で縄文土器が出土しなかったことから西と東で様相が変わるのではないかと推測している。

11-B では、主に弥生時代後期後葉～庄内式期の土器が出土した。西半の一部において縄文時代晩期の包含層を確認している。最西端部分で人骨片が出土した。隣接する第13次調査において縄文時代晩期の土壙墓を検出しており、同時期の所産と考えられる。

第12次調査

12-A-1で、溝または自然流路となる遺構の掘り込みを検出した。出土遺物はないが隣接する第20次調査南トレンチにおいて、大溝または自然流路を検出しており、ここにつながる遺構と考えられる。12-B-14において断面観察の結果ではあるが時期不明の自然流路を検出している。この調査では縄文時代後期・滋賀里Ⅱ～Ⅳ式・弥生時代後期後葉・庄内式土器・土師器・須恵器・瓦が出土した。縄文土器は、12-A-18 ～ 12-B-14の包含層から出土した。主体は滋賀里Ⅲａ式である。

H12-37

調査区のほとんどが既設管によって撹乱を受けていた。一部で堆積層を確認できる地点も存在したが、遺物や遺構は認められなかった。

第13次調査

遺構面は、第３Ｕ層を基盤とする古墳時代の遺構面Ⅰと第４層を基盤とする縄文時代晩期の遺構面Ⅱである。第３層から庄内式期の土器・滋賀里Ⅰ～篠原式の土器が出土し、第４層から篠原式の土器が出土した。

遺構面Ⅰでは、溝１条と小土坑１基を検出した。溝からは、庄内式甕が出土した。遺構面Ⅱでは、溝１条・土坑１基・土壙墓２基・ピット２基・落ち込みを検出した。

ＳＤ２は、幅は32 ～ 34cm、深さ９～ 17cm を測る。埋土には、縄文時代晩期の土器細片を含んでいた。土壙墓Ⅰでは、仰臥屈位で25歳前後の男性と思われる人骨が出土した。埋土から篠原式の土器が出土した。土壙墓Ⅱでは、横臥屈位で30歳前後の女性と思われる人骨が出土した。埋土から篠原式の土器が出土した。

第14次調査

14-B は、掘削深度が1.2mと浅く縄文時代の包含層まで達していないと考えられる。14- Cは、撹乱を受けており遺物・遺構を確認することはできなかった。14-B の上層部分において滋賀里Ⅲａ～篠原式の土器が出土した。

H14-27

H14-27-A と H14-27-B の立会を行ったが、遺構・遺物は発見できなかった。

第15次調査

調査範囲は1.0×2.0m、掘削深度は1.5mである。掘削深度が浅いため、隣接して調査した第13次調査の遺構面まで達していないと考えられる。第５層から布留式の土器･滋賀里Ⅲａ式と篠原式の土器･石斧が出土した。

第16次調査

16-B では、第１次調査地点と重なる部分を一部調査したが、いずれも掘削深度が浅く遺構面まで達していないと考えられる。縄文時代晩期と考えられる土器がB-3・B-5から出土している。

第17次調査

17-1と17-2で調査を行った。遺構面は、近世前半の第１遺構面・中世の第２遺構面・平安時代整地層の第３遺構面・平安時代後期整地層の第４遺構面を検出した。出土遺物は、平安～江戸時代の遺物が主体であった。縄文時代と考えられる土製品・石鏃・磨石が出土したが、整地をする際の客土中に混入していたものと考えられる。

第18次調査

18-B-9を中心とした区域で少量ではあるが縄文土器が出土した。型式が判明するものはあまりないが、黒色磨研土器と深鉢が出土している。時期は縄文時代晩期中葉であろう。

第19次調査

1.2×1.2mの範囲で立会調査を行った。掘削深度は1.5mである。８層の堆積層を確認し、第６層からは弥生時代後期の土器が出土した。また、第７層からは橿原式文様を持つ鉢・滋賀里Ⅲａ～Ⅳ式の縄文土器・石棒・石鏃・磨石が出土した。

H20-1-5

第18次調査の際に遺跡外地区として立会調査を行った部分と一部重複する地点である。第18次調査時には1.6mより下層で土器片が採取されたが、この調査は掘削深度が浅く遺物は出土しなかった。

第20次調査

北トレンチと南トレンチの２箇所を設定して調査を行った。

第１～５面の遺構面を検出した。第１遺構面では、弥生時代後期後葉の竪穴建物１棟・土坑・溝を検出した。第２遺構面では、篠原式の埋設土器３基・土坑・ピットを検出した。北トレンチ土二では、焼けた人骨が埋土中に含まれており火葬と考えられている。性別は男性である。第３遺構面では、篠原式の埋設土器３基・土坑・ピット・溝を検出した。また、第３遺構面を形成する第10層中の南トレンチ西端において人骨が数点出土した。下層である第４遺構面で土壙墓が営まれていることから、第３遺構面を形成する際に付近の土壙墓を掘削した結果、混入したと考えられる。第４遺構面では、土壙墓４基・土坑・ピット・炉跡を検出した。土壙墓はいずれも人骨が残存していたが、残りは悪く性別や体格を推定することはできなかった。第５遺構面では、炉跡・自然流路を検出した。

６）既掘調査で出土した土製品・石製品（第48図　図版18）

土偶

258は、頭部である。左目部分を欠損しているが、平面形態は逆三角形を呈する。眉と鼻を一連の隆起によって表現しＹの字状になる。目は、ナデによって浅い窪みを持たせることにより表現している。目頭から頬、顎の下に線刻が施される。裏面には、耳を表現したと思われる窪みが認められる。頸は顔より垂直に伸びることから、顔を前方へと突き出した形で胴部と接合すると考えられる。259は、肩から手にかけて緩やかに屈曲する腕部である。断面は矩形を呈する。260は、腕部である。断面は蒲鉾形を呈し、手と思われる部分を平坦に仕上げる。端部では、下方へと粘土を拡張させる。脚部の可能性もある。261は、胸部である。丸みを持った乳房で、先端部分に刺突が施される。262は、左半身の背部である。腕と腰の幅が長く直線的である。臀部は一部のみではあるが残存しており、円形にくぼむ。破断面から二本の粘土棒を接合して製作したものと推測できる。263は、腰部である。左半身の部分で、腹を三日月状の隆帯によって表現し、臀部は円形に窪みを持たせる。264は、脚部である。底面は平坦である。脚にめぐる沈線は、ヘラ状工具を回転させながら何度も押し当てて施文しており、沈線の深い部分や浅い部分がある。股の部分に線刻が施される。側面にも施文のような沈線が認められるが、意図的なものであるかは不明である。265は、脚の付け根にあたる。ヘラ状工具による圧痕が残るが、線刻といった意図的なものであるのかは判然としない。266も脚の付け根部分と思われる。

冠形土製品

267は、冠形土製品である。平面形は、片方に段差を持ち左右が非対称となる。左方に両側面を貫く穿孔が施され、右側面中央に刺突を付す。両側面に線刻を施し、左側面で３条、右側面で３条が認められる。風化によって判然としないが両側面とも４条の線刻であった可能性もある。断面形状は、概ね三角形を呈するが基部上方に幅５mmの突帯を左右に作り出す。基部は破損しており、全形を知ることはできない。

第48図　既掘調査の土製品・石製品

動物形土製品

268は、イノシシ形土製品である。円柱状の粘土塊の上方を摘まみ出すことにより、たてがみを表現する。胴部は丸いが、底面は少し平坦面を持つ。頭部は尖らせるように作り出し、両目は浅い窪みで表現する。底面にも浅い窪みが認められ口を表現したと思われる。底面には、楕円形を呈する４つの刺突が方形に配される。粘土が付着した痕跡はなく枝などを差し込み脚としたのであろうか。右側面上方にも垂直方向の刺突が認められる。鼻部と尾部にわずかながら欠損が認められる。

半輪状土製品

269は、半輪状土製品である。断面形状は楕円形を呈し、両側面の対となる位置に直径５mmの刺突が施される。

不明土製品

270・271は、不明土製品である。底面は平坦で、上部は粘土塊を摘み出すように成形する。底面に対して垂直に穿孔が施される。271は、底面にわずかな窪みを持させる。（藤城ほか1999）で冠形とした土製品と形状は似る。

棒状土製品

272は、下端に複数のわずかな面を持ち、やや先細りとなる。断面はほぼ円形である。273は、下端に面を持ち、断面はやや楕円形を呈する。線刻のような浅い溝が側面に認められるが、意図したものであるのか不明である。土偶の脚である可能性もある。274は、先細りとなる粘土塊で、断面形は円形となる。成形時のナデにより、緩やかな屈曲を持つ。275は、円柱に近い形状で、端部を丸くおさめる。他の棒状土製品とは、異なる器形である。

ミニチュア土製品

276は、ミニチュア土製品である。浅鉢を模しており、頸部のナデによって口縁部と体部の境に明瞭な段を形成する。口縁部に傾きを持っていることから波状口縁になると考えられる。

半球状土製品

277・278は半球状土製品である。277は、上部に横線がめぐり、その横線から下端へと縦線を施す。278は、半円状の線刻が２条配される。いずれも内外面調整はナデであるが、内面のナデ調整が丁寧である。

不明土製品

279は、両端に「ハ」の字状に開く端部を持つ糸巻き状の粘土塊である。中央やや下半に穿孔が施され、穿孔を境として左右に扇状の線刻が認められる。280は、平面は三角形を呈し、上下面の中央に緩やかな窪みを持つ。男性器を表したものであろうか。281は、餃子のような形をした粘土塊で、底面に僅かながら面を持つ。風化が激しく調整は不明である。造形物ではなく焼成粘土塊の可能性もある。282は、椀形に成形した粘土塊に斜め方向へと伸びる棒状の突起が付く形状である。突起部分の先端は欠損している。内外面ともに丁寧なナデ調整である。匙形土製品であろうか。283は、外面にヘラ状工具によって、円弧と直線を組み合わせた線刻を施す。内面はナデとスジ状の圧痕が認められる。中空になる土製品と考えられるが形状は判然としない。

石刀

284は、石刀である。断面楕円形を呈し、各面に擦痕が残る。先端部は丸く仕上げられている。285は、石刀の基部である。斜格子文と弧線文を有するいわゆる「橿原型石刀」である。いずれも粘板岩製。

7）馬場川遺跡第20次調査出土人骨について

安部　みき子
（大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学講座）

東大阪市に位置する馬場川遺跡の縄文時代後晩期の遺構から人骨が出土した。人骨はいずれも土坑内から出土しているが、埋葬様式は土葬と火葬の２様式あった。土葬人骨の保存状態は非常に悪く、骨格の輪郭が分かる程度の遺存状態であり、火葬人骨は白色を呈し小片の塊状で出土した。

北トレンチ
第11層上面
土B

埋葬様式は土葬で、頭位は東南東である。頭骨は輪郭のみで、頭骨に近い位置で上肢と思われる骨が２か所に見られる。向かって左の塊の中で約10cm の長骨が遺存しており、鎖骨と推測される。上肢の尾側には肋骨と思われる長骨片が十数点みられる。肋骨の尾側には下肢と思われる骨があるが、部位の同定はできなかった。また、埋葬時の姿勢は判断できなかった。

土C

埋葬様式は土葬で、頭位は北東である。遺存している骨は頭骨の輪郭と、四肢骨の長骨と思われる骨の輪郭であり、部位は同定できなかった。埋葬時の姿勢は判断できなかった。

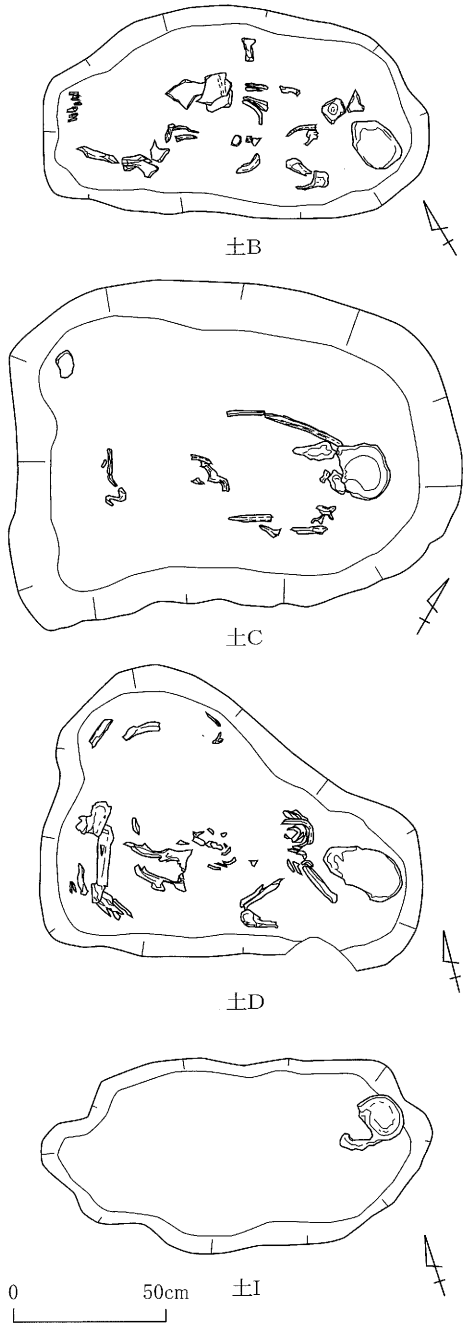
土D

埋葬様式は土葬で、頭位はほぼ東である。遺存している骨は頭骨が輪郭で、頭骨に近い位置で肋骨と思われる長骨が数点重複してみられる。上肢と思われる長骨の骨幹部もわずかに遺存している。また、頭部の対極には長さ約27cm の長骨がみられ、左右は不明であるが、その形状から大腿骨の骨幹と思われる。この骨の両端の下層にも骨が見られるが、部位の同定はできなかった。

骨の出土状態が悪かったため正確な埋葬時の姿勢は判断できないが、大腿骨の位置と土坑の大きさから推測して、下肢を屈曲していたと推測される。

土I

埋葬様式は土葬で、頭位はほぼ東である。遺存している骨は頭骨の輪郭のみであった。



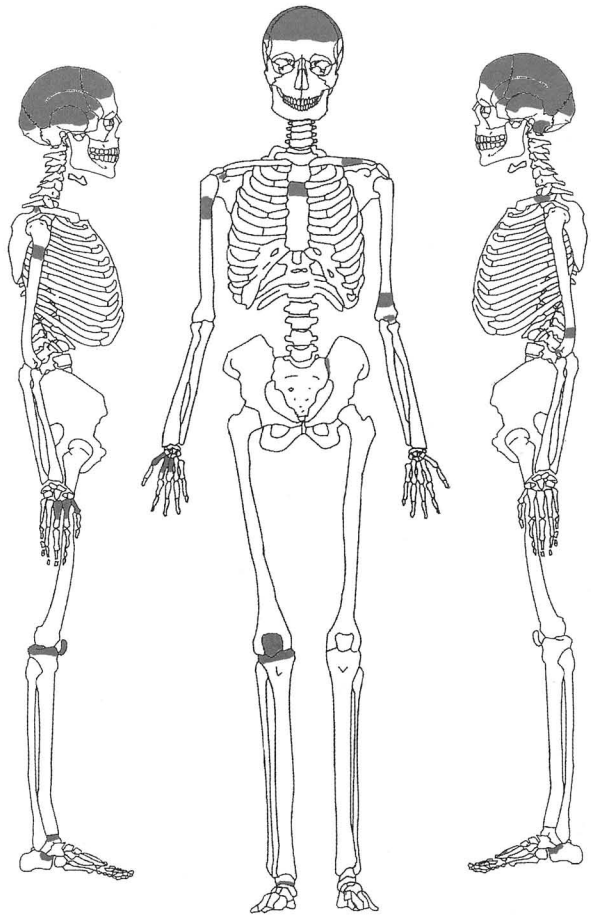
第49図　北トレンチ土坑墓平面図

第９層上面

土二

埋葬様式は火葬である。出土骨は白色を呈し、クラックや歪も大きく、小片となっており、火葬温度が高かったと推定される。

出土部位はほぼ全身におよぶが、同定できた部位は少なかった。頭骨は頭蓋冠を構成する骨の破片が多数みられた。特に、前頭骨の冠状縫合の正中に近い破片は厚く、左側頭骨の乳様突起は大きかった。胸骨の体の上部が出土している。上肢の右側では、肩甲骨の肩甲棘基部、上腕骨の結節間溝周辺約５cm、第１中手骨が遺存し、第２中手骨と第３中手骨の遠位端は破損していた。第１中手骨の近位関節面の周囲には骨関節症と思われる骨増殖が見られた（第51図）。第50図には記載していないが近位部破損の中手骨１点と両骨端が破損していたため左右不明の中手骨１点、指の骨が６点出土している。左側では、鎖骨の外側1/3周辺、上腕骨骨幹遠位部約２cm と上腕骨滑車がみられた。下肢の右側は、前面都内側部が破損している膝蓋骨、脛骨の近位端が脛骨祖面に上部まで遺存し、足根骨では距骨が滑車のみ、踵骨が中・後距骨関節面周辺のみ遺存していた。左側は腸骨の仙骨盤面の一部と、踵骨の中・後距骨関節面周辺、第１中足骨の頭部のみ遺存していた。また、左右不明の大腿骨の骨幹後面約９cm が見られたが、第50図には記載していない。



第50図　北トレンチ土二出土火葬人骨の確認部位（トーン部分）

性および年齢

性の判定は、火葬時の骨の収縮を考慮しても、乳様突起の大きさや前頭骨の厚みから、男性と推測される。年齢は、頭部の縫合が閉鎖しており、右第１中手骨の近位関節面の骨増殖から老齢と推測される。右第１中手骨の骨増殖は母指手根中手関節症である可能性が高い。

第51図　右手第１中手骨

南トレンチ

第10層

第10層からも人骨と思われる骨格が遺存しているが、何れも輪郭のみで、骨の部位の同定はできなかった。

8）まとめ

第20次発掘調査を通して、馬場川遺跡の基礎的な内容を少しではあるが明らかにすることができた。ここでは、今回の調査で得た成果を列記してまとめとしたい。

北トレンチ第３～６層

第３層からは、江戸時代後期の磁器が出土した。第４層からは、土師Ⅲ、弥生土器、縄文土器が出土した。形成されたのは江戸時代である。第５層から遺物は出土しなかったが、上面において弥生時代後期後葉の竪穴住居を検出しており、これ以前に形成されたものである。第６層からは、篠原式の縄文土器が出土した。縄文時代の遺物を含むが、下層である第７層が弥生時代前期以前であることから、少なくとも弥生時代前期以降に形成された層である。

北トレンチ第７層

第７層からは、宮滝式・滋賀里Ⅰ式・篠原～滋賀里Ⅳ式の土器が出土した。

北トレンチ第８層

第８層からは、北白川下層Ⅲ式・元住吉山Ⅰ式・宮滝～滋賀里Ⅳ式の土器が出土した。

北トレンチ第９層

第９層からは、宮滝～滋賀里Ⅳ式の土器が出土した。

北トレンチ第10層

第10層からは、元住吉山Ⅰ式～滋賀里Ⅰ式の土器を図化した。この他に図化していないが、ケズリを施した体部片が出土しており、滋賀里Ⅲａ～篠原式の時期と思われる。

北トレンチ第11層

第11層からは、元住吉山Ⅰ式～滋賀里Ⅰ式の土器を図化した。この他に図化していないが、ケズリを施した体部片が出土しており、滋賀里Ⅲａ～篠原式の時期と思われる。

南トレンチ第７層

第７層からは、宮滝～滋賀里Ⅳ式の土器が出土した。

南トレンチ第９層

第９層からは、篠原式の土器を図化した。この他に図化していないが、宮滝式、篠原式の土器が出土している。

南トレンチ第10層

第10層からは、元住吉山Ⅰ式・宮滝式の土器を図化した。図化していないが、ケズリを施した体部片が出土しており、滋賀里Ⅲａ～篠原式の時期と思われる。

南トレンチ第11層

第11層からは、穂谷式・元住吉山Ⅰ式・篠原式の土器を図化した。図化していないが、ケズリを施した体部片、平底があり、篠原式と思われる。

南トレンチ第12層

第12層からは、縄文時代後期末と考えられる深鉢が１点のみ出土した。

石器について

石核・剥片が多く認められ、敲石や台石も出土していることから、石器の製作が行われていたことは確実である。しかし、第２・３表のように石器製作遺構や石器集中部については判然とせず、その実態については不明確である。石器の検討を行った結果、剥離を行っていない原石が運び込まれていることが判明した。当遺跡へは10cm 以下の円礫である原石が運び込まれ、それを素材として石鏃や石錐といった製品を製作していたのである。また、ポット・リッド状の破砕面を持つ破片を42点確認

することができた。熱破砕による破片については不明な点が多く詳細は不明であるが、量は多い印象を受けた。

理化学的な分析を行っておらず肉眼観察の結果ではあるが、二上山北麓産サヌカイト：金山産サヌカイト＝2050：122で、金山産サヌカイトの割合は５％である。

最後に、現段階における馬場川遺跡の概要について述べておきたい。

まず、集落の開始時期であるが、早期前半・前期中葉～後葉・中期の土器が数点出土している。ただいずれも包含層や遺構の混入であり小破片であった。５）で記した以外にも、第１次調査G・H・I・Jにおいて表採された北白川下層Ⅱｂ式（284）の土器がある。当該時期の遺構や遺物は、周辺の遺跡でも発見されておらず、当遺跡内で営まれた生活の結果であると判断したい。現時点において出土する場所は、第１次C-E1・第20次といった遺跡範囲の中央部に限られる。以上のことから、早期前半・前期中葉～後葉・中期に断続的ながら中央部において土地が利用されていたと判断できる。

中期末～後期初頭の土器は、第５次Ｏを中心とした西側から出土する。遺物の出土量も多く、集落域が西側に広がっていたと考えられる。

後期前半の土器は、第１次C-E1・第20次で出土した。出土量は少ないが、破片は大きくローリングを受けている様子は認められない。中央部での土地利用が考えられる。

後期後半には、遺跡中央部である第１次Ｆ・Ｇ・Ｈ・第20次で土器の出土をみる。遺構は検出されていないが、遺物の量も多く中央部に集落域があったと考えられる。

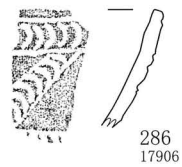
後期末から晩期中葉にかけては遺物の量がさらに増え、当遺跡で最も盛行していた時期となる。地点によって出土する遺物に時期差があり、時期によって生活域の中心が異なるようである。

後期後葉から末は、第１次Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・第20次を中心とした中央部での出土が多い。明確な遺構はいまのところなく、第１次Ｉ３の下層で検出した竪穴建物がこの時期となる可能性がある。晩期前葉は、第１次Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・第６次の遺跡中央部から第８次の遺跡北側にかけて多く土器が出土する。第１次Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・第６次で検出した多くの遺構は、晩期前葉から中葉である可能性が高く、中央部と北側に居住域が広がっていたと考える。第20次では、土壙墓と土器棺墓という違いはあるが、一貫して墓域として機能していた。S-2では、竪穴建物の後に土壙墓が営まれており、居住域と墓域の境界がこの辺りとなるようである。

晩期中葉は、中央部である第３次調査Ｄ１・第20次調査、そして、遺跡南側の第13次で土器が集中して出土する。第13次で検出された土壙墓と第20次の調査地点は約100ｍの距離があり、一連の墓域として捉えられるのか判断できない。また、最も東側に位置する第18次でも少量であるがこの時期の遺物の出土をみた。それぞれの関係がいかなるものとなるか調査の進展を待って結論を出したい。

以上をまとめると、晩期前葉には第１次Ｆを中心とした地点に居住域が広がり、第20次地点には墓域が広がっていた。そして、S-2で重複する空間を有するが基本的には居住域と墓域は分離していたと考えられる。また、晩期前葉には散在的であった埋設土器は、晩期中葉には一箇所に集中するようである。

晩期後葉は、第１次Ｃ・第11次Ａ・第20次の中央部と遺跡北側の第19次で遺物が出土する。しかし、後期後葉～晩期中葉の遺物量に比べかなり少量であり、当該時期の遺構は検出できていない。人は居住しているが、晩期中葉のころにいた大半の人々は、約2.7km 北に位置する鬼塚遺跡へと移っていったと考える。



第52図　第１次調査表採遺物
(1/3)

縄文時代晩期末から弥生時代後期中葉までの土器が出土していない

ことから、人の居住はなかったと考えられる。次に人の生活痕跡がみられるのは、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前半にかけてである。

弥生時代後期後葉では、中央部の第20次において竪穴建物を検出し、庄内期にはやや南側の第４次Ｕで井戸を検出している。古墳時代前期前半にはさらに南側の第３次Ｔで土器が出土した。

これ以降の遺物は第17次で出土するがほとんどなく、飛鳥時代以降は北側に立地する北屋敷遺跡へと中心は移っていったものと考えられる。

謝辞

本章を作成するにあたって、大野薫氏（大阪府教育委員会文化財保護課）、矢野健一氏（立命館大学）、河本純一氏（財団法人大阪府文化財センター）の各氏に助言をいただいた。また、石器の分類は、上峯篤史氏、面将道氏（同志社大学大学院）、吉村駿吾氏による成果である。記して感謝の意を表する。

【参考文献】

大阪府教育委員会2010『府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2010-5

大塚達郎1995「橿原式文様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第13号東京大学文学部考古学研究室

大野　薫2003「顔のない土偶」『立命館大学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会

岡田憲一2000「西日本縄文後期後葉土器編年序論－向出遺跡出土土器の研究－」『向出遺跡』㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書第55集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

岡田憲一2003「滋賀里式再考」『立命館大学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会

岡田憲一2008「近畿・中国・四国地方」『歴史のものさし』縄文時代の考古学２　同成社

角南聡一郎・佐藤亜聖編1998『秋篠・山稜遺跡』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第17集　奈良大学文学部考古学研究室

関西縄文文化研究会2004『縄文時代の石器Ⅲ』第６回関西縄文文化研究会

小林達雄編2008『総覧　縄文土器』株式会社アム・プロモーション

菅原章太・奈良拓弥2010「大阪府馬場川遺跡」『縄文時代の精神文化』第11回関西縄文文化研究会

高橋龍三郎2002「大洞諸型式の伝播と変容」『日本考古学協会2002年度橿原大会発表資料集』日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会

立岡和人2000「近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開」『関西の縄文墓地』第２回関西縄文文化研究会

田辺昭三・加藤修也1973『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会

田中万紀子・中西克宏1999「馬場川遺跡出土の土偶の新資料」『海が好きだ』藤城泰氏追悼文集刊行会

財団法人東大阪市文化財協会2001『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告書』

財団法人京都市文化財研究所2010『上里遺跡Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊

中村　浩1987「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ大阪府教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所2003『西坊城遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所報告第90冊

奈良県立橿原考古学研究所2004『鵜山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所報告第96冊

原田昌則2003「中南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』㈶八尾市文化財調査研究報告74　財団法人八尾市文化財調査研究会

藤城泰・三輪若葉・若松博恵1999「東大阪市内の土偶土製品」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会

兵庫県教育委員会1998『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊

松田純一郎1985「馬場川遺跡出土の「不定形石器」とその諸変異」『紀要Ⅰ』財団法人東大阪市文化財協会
松田順一郎1986ａ「サヌカイト製打製石器にみられる使用痕の諸例」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.1, No.2　財団法人東大阪市文化財協会
松田順一郎1986ｂ「馬場川遺跡の石刀・石棒」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2, No.2　財団法人東大阪市文化財協会
家根祥多1981「晩期の土器－近畿地方の土器」『縄文文化の研究第４巻』雄山閣出版
家根祥多1994「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」『縄文晩期前葉－広域編年』北海道大学文学部
山内清男1964『日本原始美術１』講談社

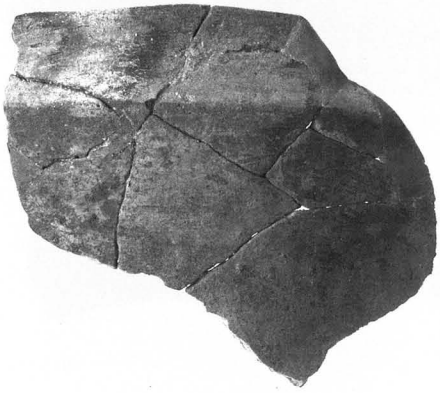
各調査地点参考文献（＊下記以外は各担当者からの聞き取りと遺物の実見などの所見による）

Ａ地点
藤井直正・都出比呂志1967『原始・古代の枚岡』第２部総説　東大阪考古学研究会
原田修・村上敏明1968「東大阪市馬場川遺跡」『河内考古学』第１号
Ｂ地点・第１次調査
東大阪市教育委員会・馬場川遺跡発掘調査団1969『馬場川遺跡調査概報』（調査記録）
東大阪市教育委員会1970ａ『馬場川遺跡Ⅰ』埋蔵文化財包蔵地調査概報４
第２次調査
東大阪市教育員会1970ｂ『馬場川遺跡調査概報Ⅱ』
東大阪市教育委員会1971『馬場川遺跡Ⅱ』埋蔵文化財包蔵地調査概報６
第３次調査
東大阪市教育委員会1975『馬場川遺跡Ⅲ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14
第４次調査
東大阪市教育委員会1977『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17
第５次調査
東大阪市教育委員会1976『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅳ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16
第６次調査
東大阪市教育委員会1981『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳発掘調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報22
第７・８次調査
財団法人東大阪市文化財協会2000『馬場川遺跡発掘調査報告書』
第11次調査
東大阪市教育委員会2000『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成11年度
東大阪市教育委員会2001『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成12年度
第12次調査
東大阪市教育委員会2002『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成13年度
第13次調査
東大阪市教育委員会2003『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』平成14年度
第14次調査
東大阪市教育委員会2003『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成14年度

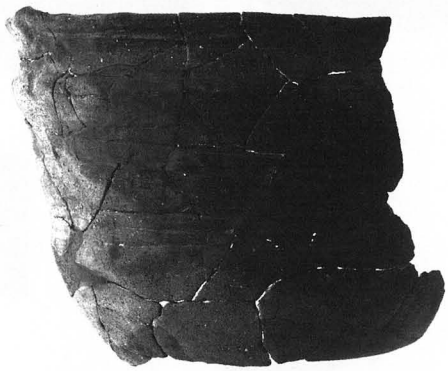
第15次調査
東大阪市教育委員会2004『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』平成15年度
第16次調査
東大阪市教育委員会2005『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成16年度
第17次調査
東大阪市教育委員会2006『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』平成17年度
第18次調査
東大阪市教育委員会2006『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成17年度
第19次調査
東大阪市教育委員会2007『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』平成18年度
第20次調査
東大阪市教育委員会2010『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』平成21年度
S52- 5
芋本隆裕1978「馬場川遺跡出土の縄文土器」『調査会ニュース』№10東大阪市遺跡保護調査会
H12-37
東大阪市教育委員会2002『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成13年度
H14-27
東大阪市教育委員会2004『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成15年度
H21-1-5
東大阪市教育委員会2010『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成21年度

96

113



100



103

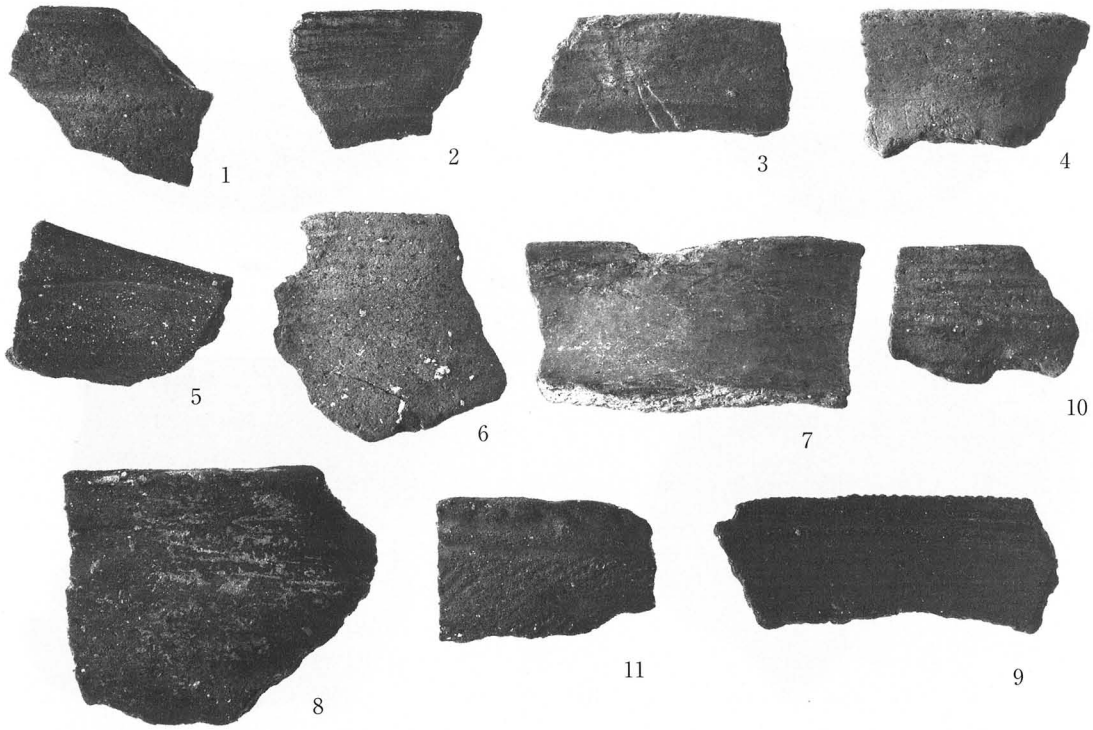
104

114

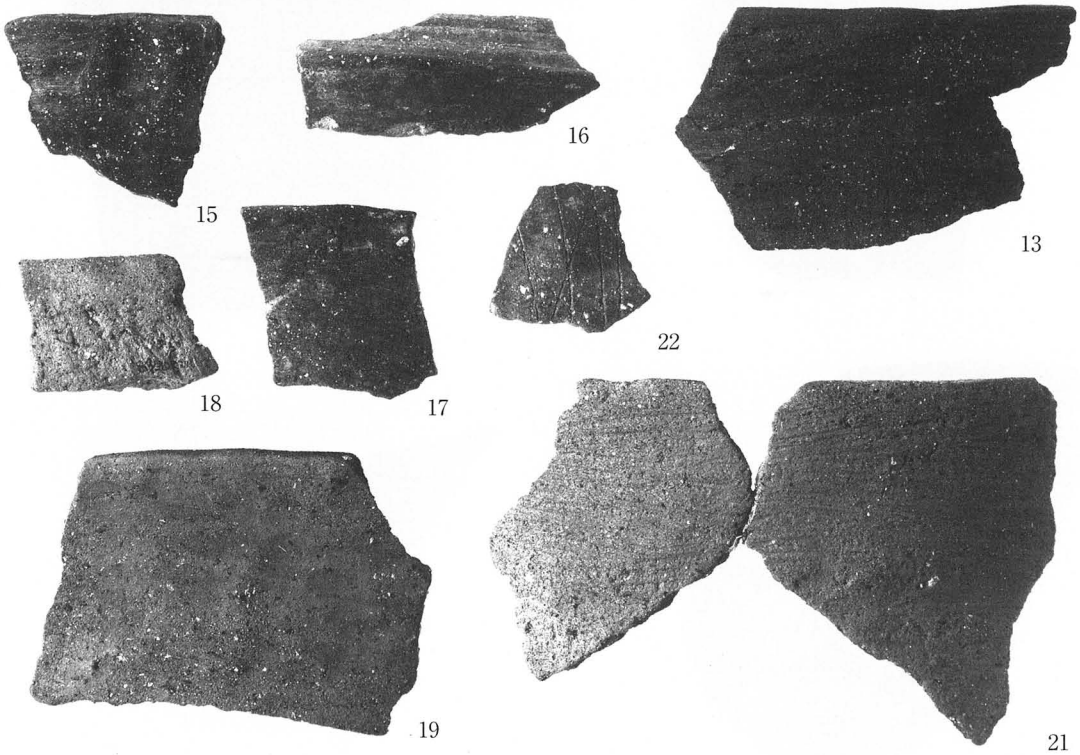
120

129

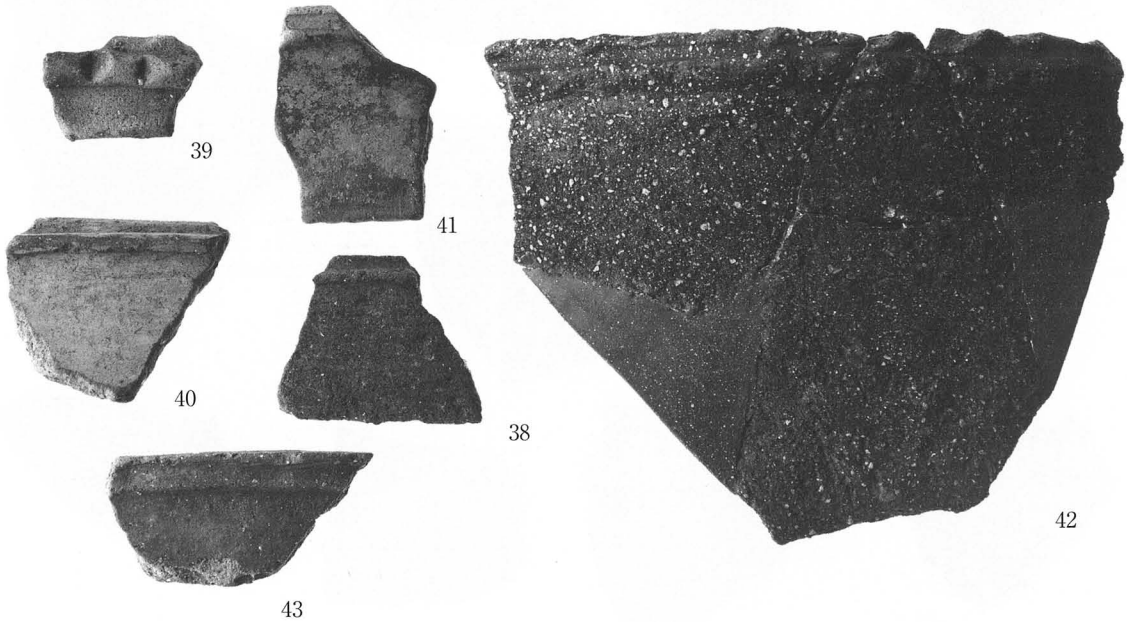
北トレンチ第9層・第10層・第11層出土縄文土器　深鉢・鉢



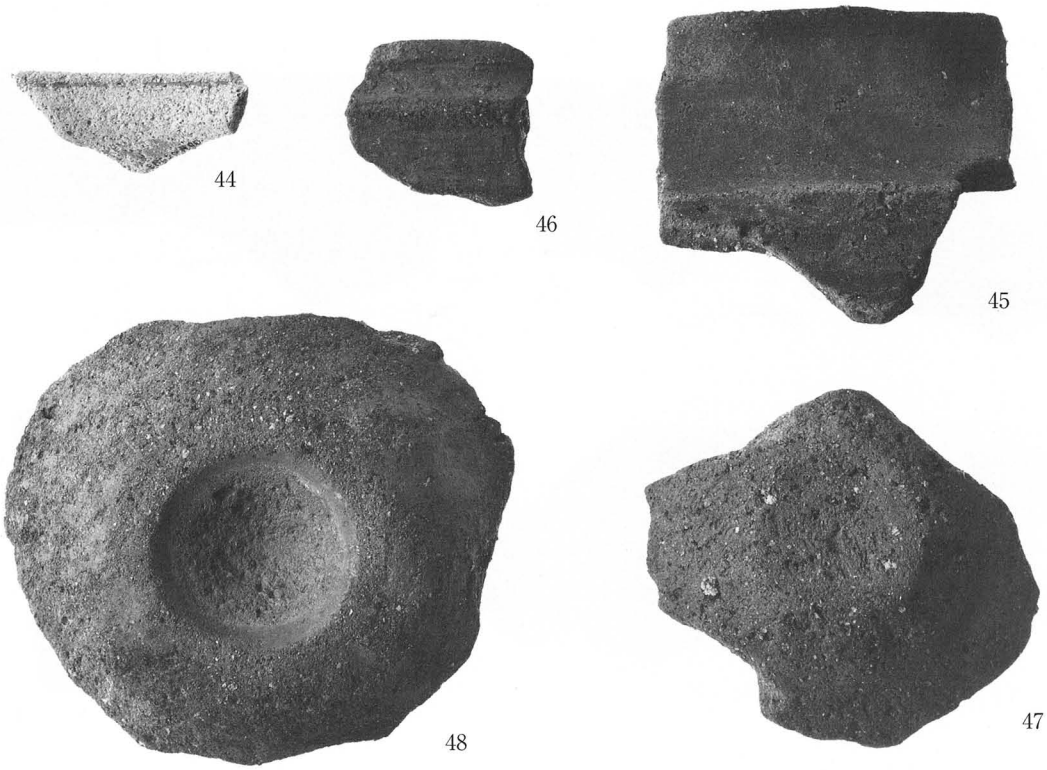
1．北トレンチ遺構出土縄文土器　深鉢・浅鉢



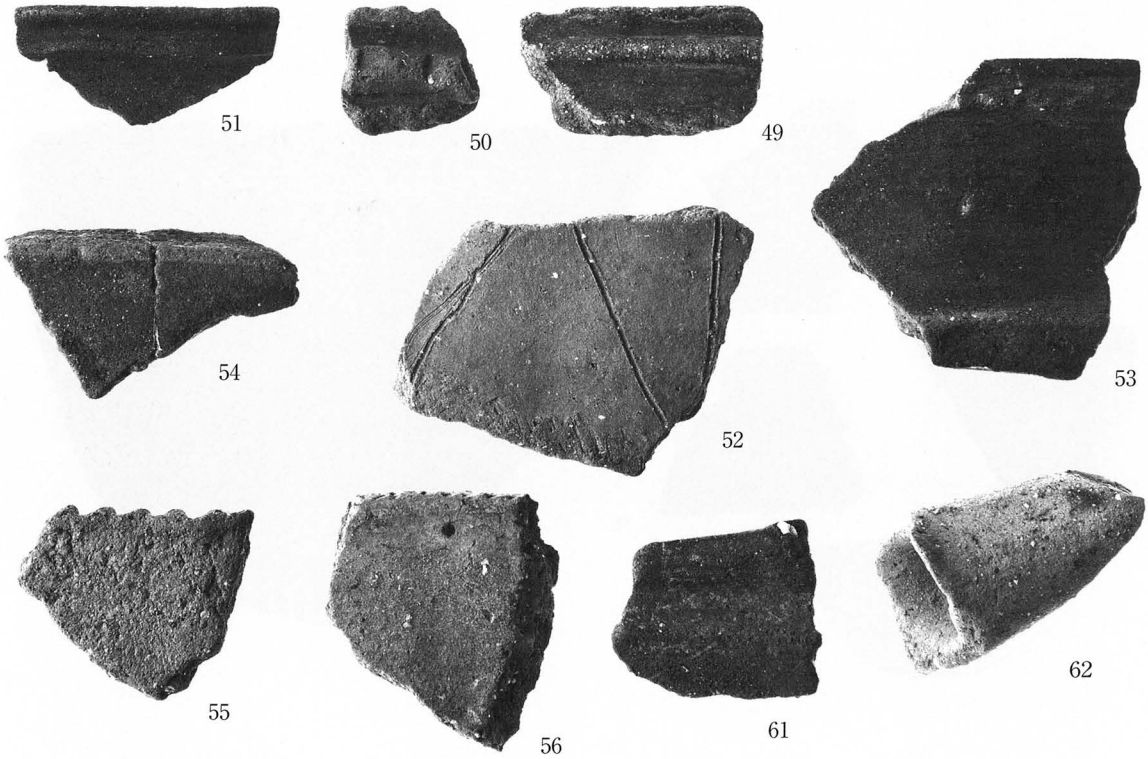
2．北・南トレンチ遺構出土縄文土器　深鉢・鉢



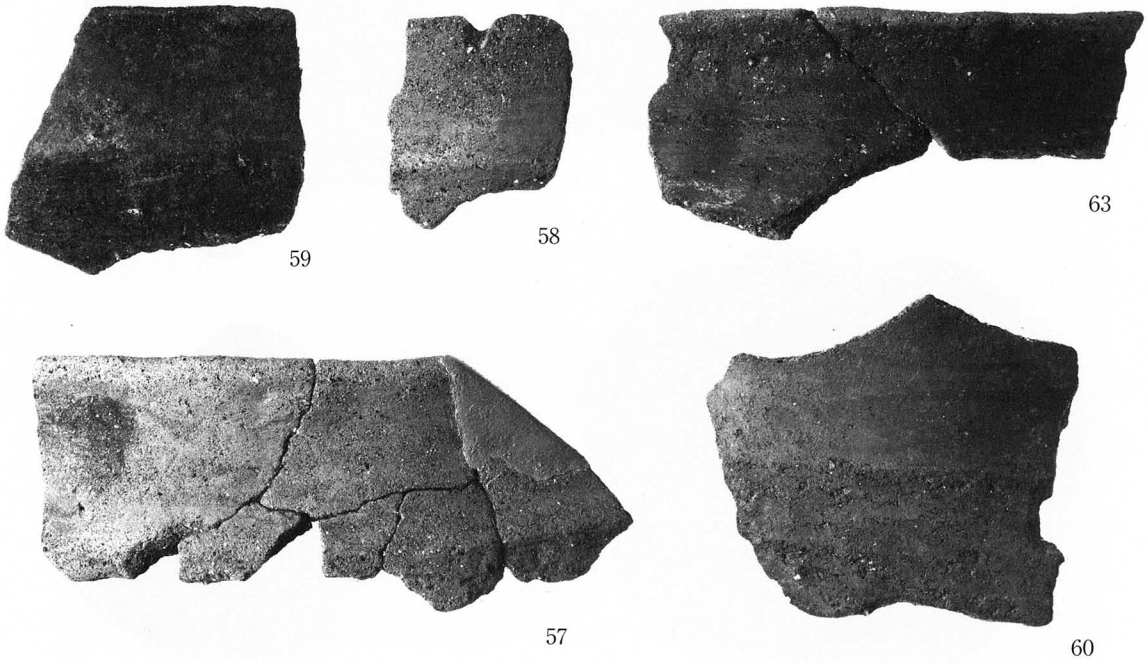
1．北トレンチ第７層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



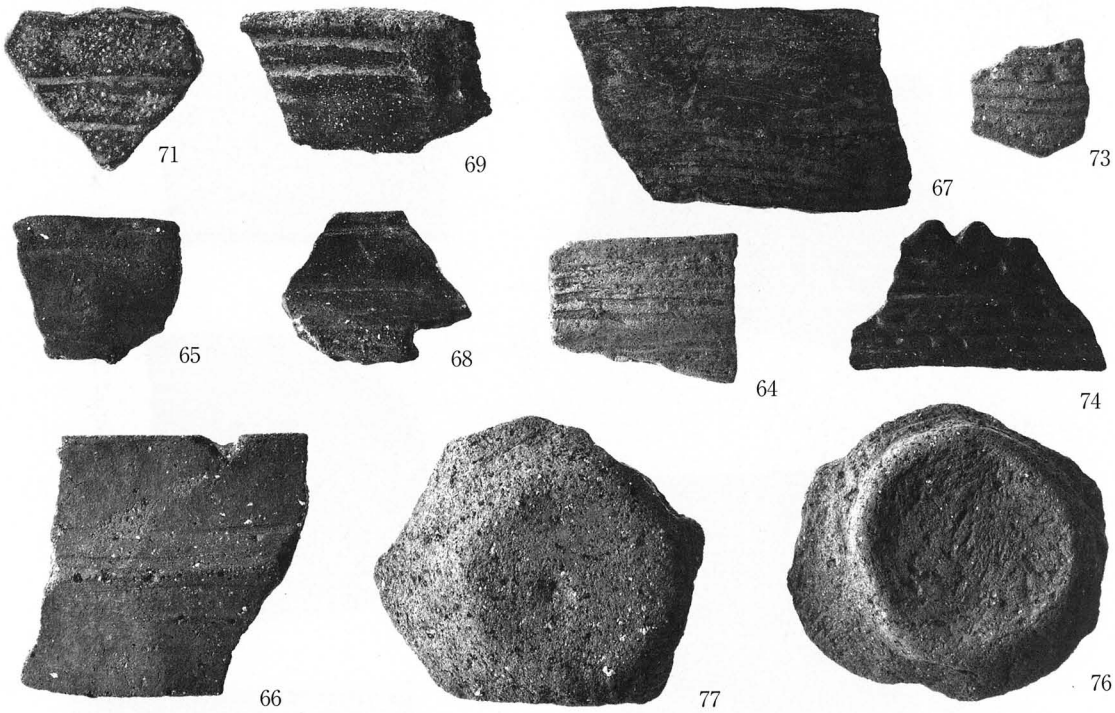
2．北トレンチ第７層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



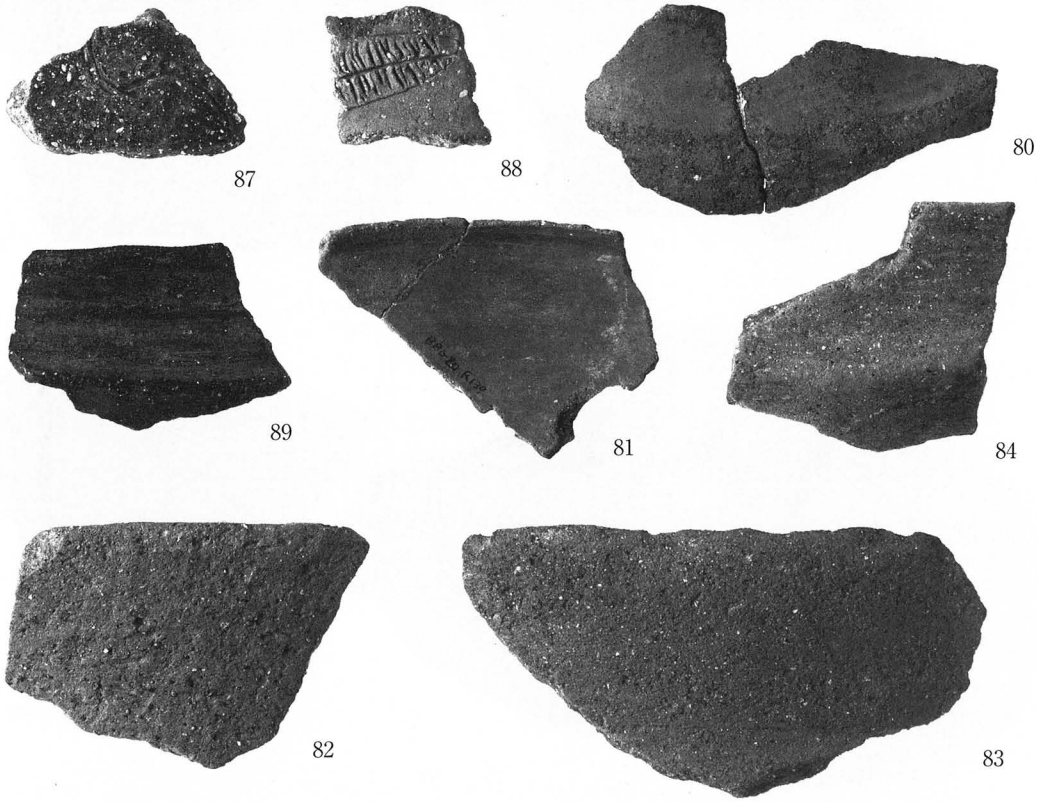
1．北トレンチ第８層出土縄文土器　深鉢・浅鉢・注口土器



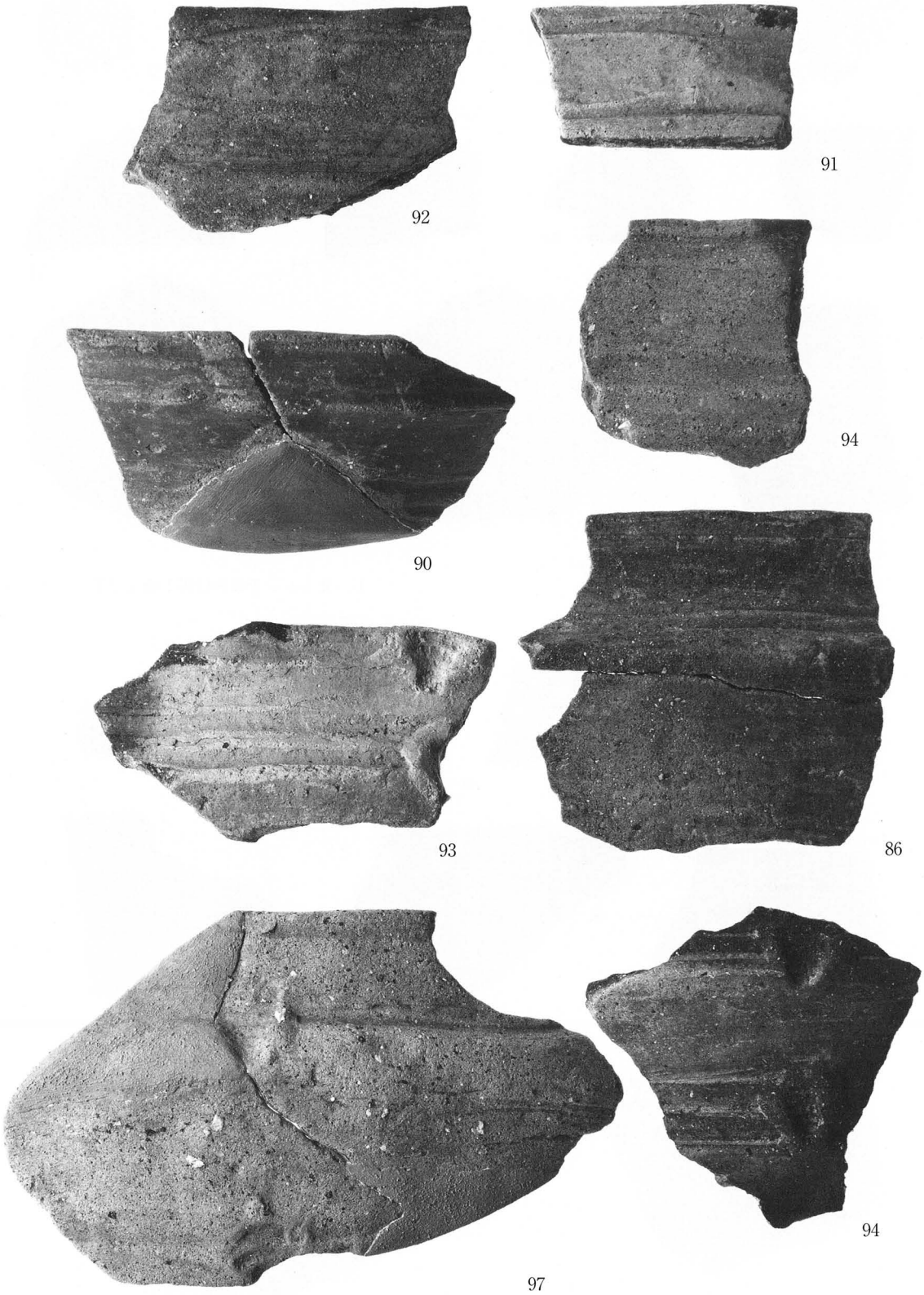
2．北トレンチ第８層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



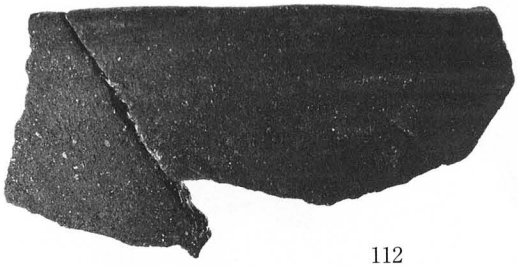
1．北トレンチ第８層出土縄文土器　深鉢・浅鉢

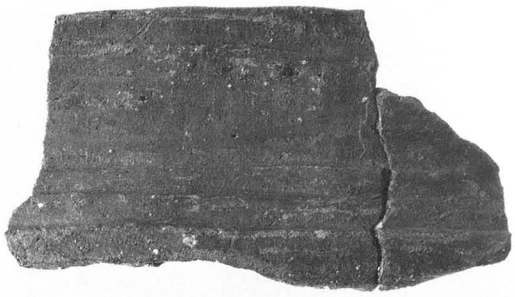


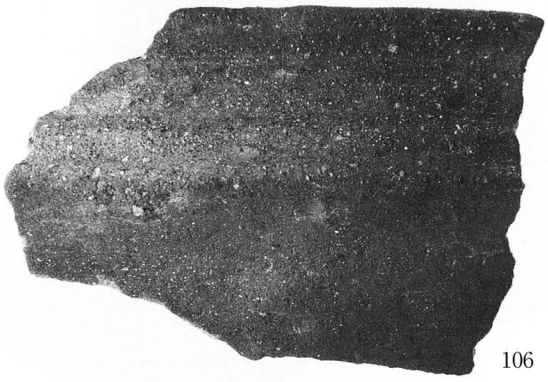
2．北トレンチ第９層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



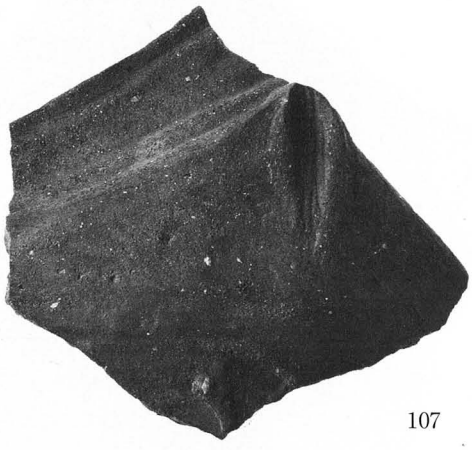
北トレンチ第９層出土縄文土器　深鉢・浅鉢

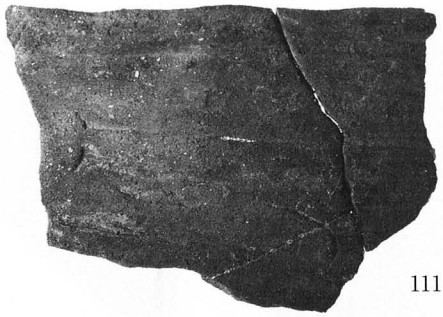

112

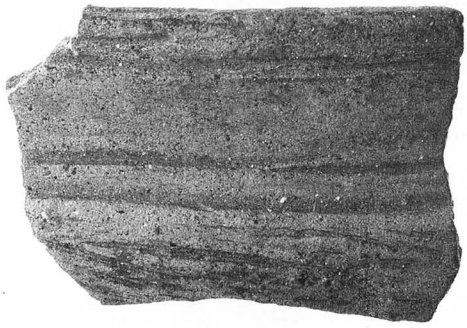

105

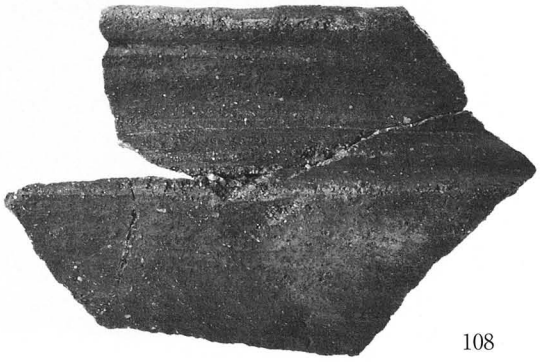

106

118

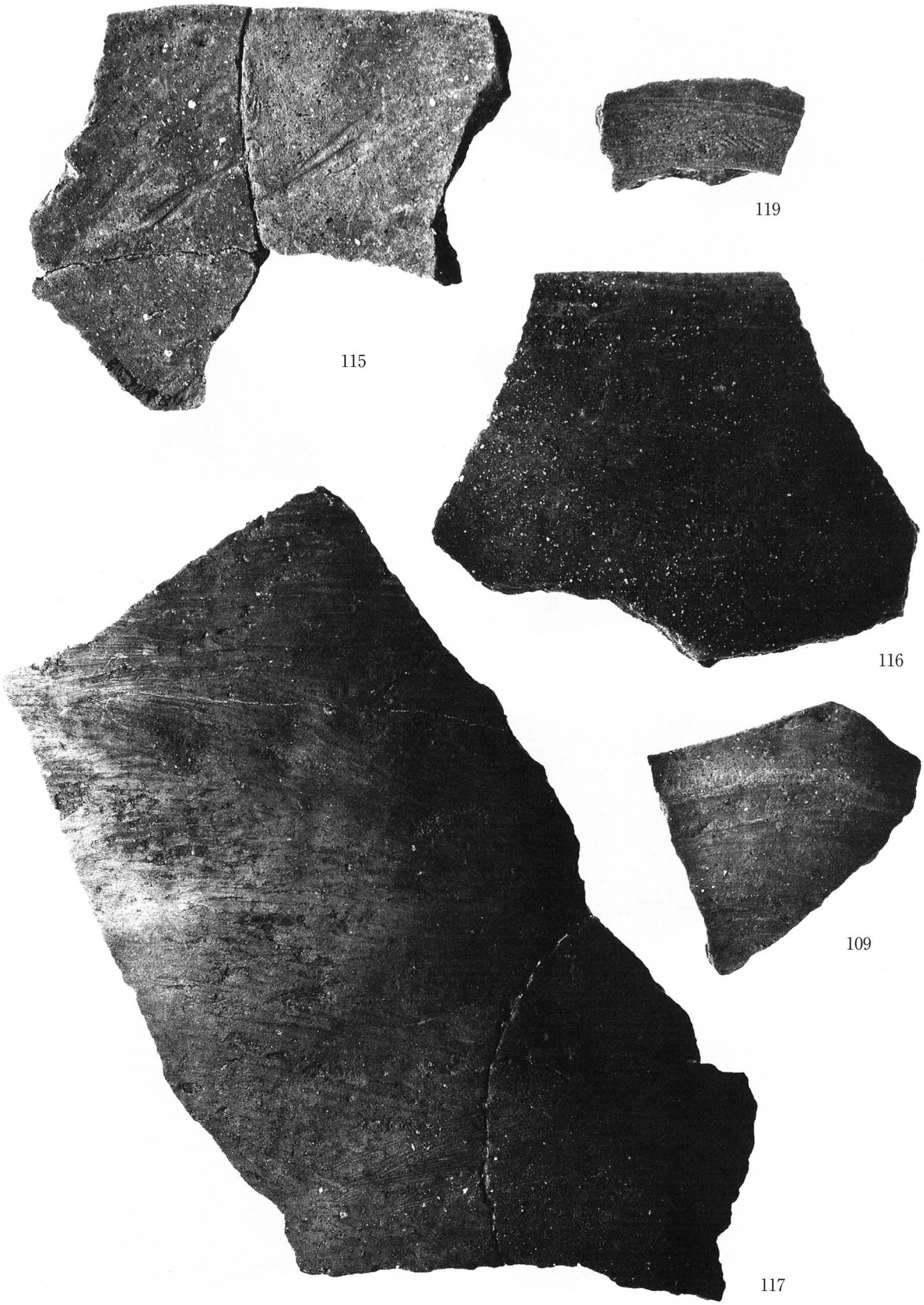

107


111

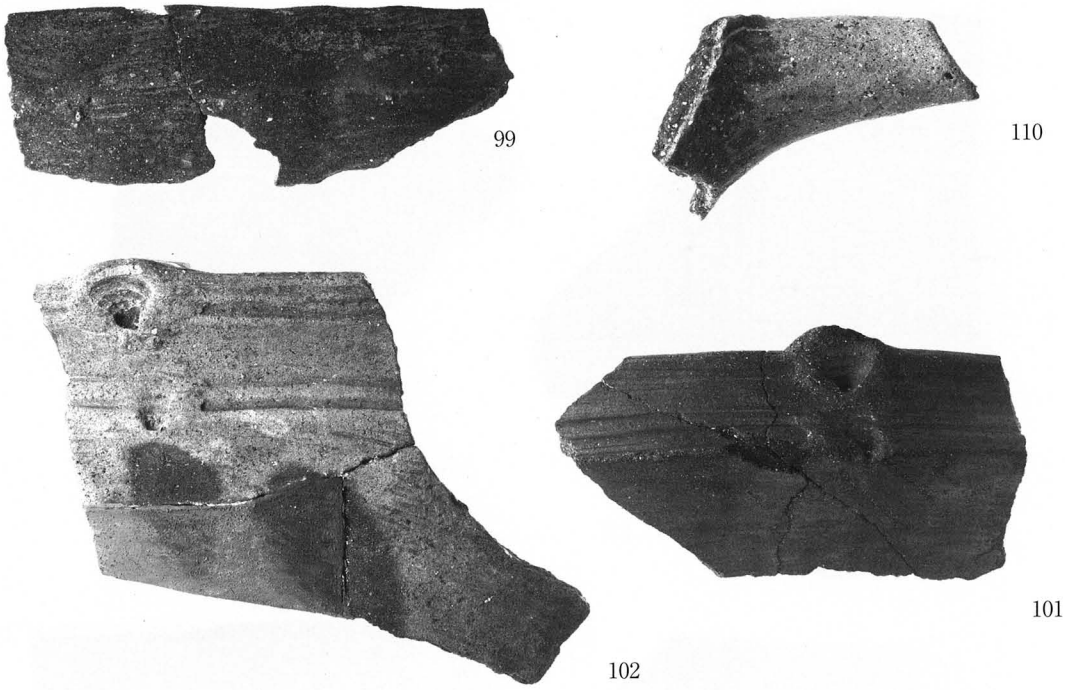

98


108

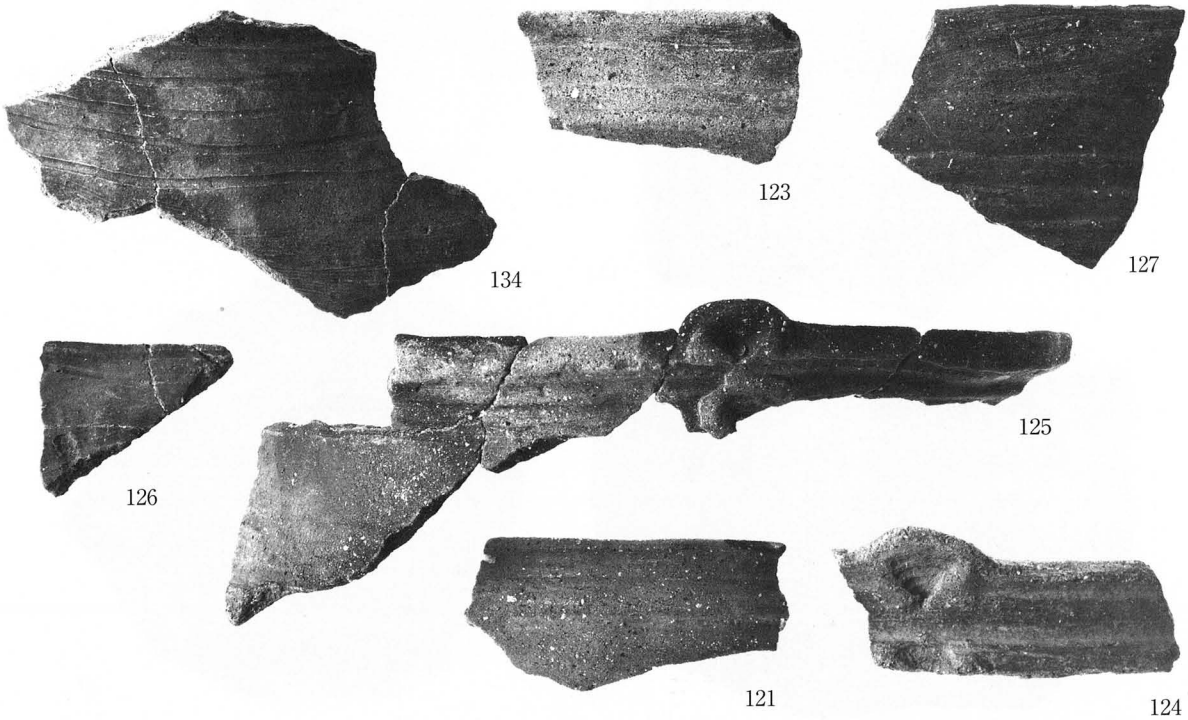
北トレンチ第10層出土縄文土器　深鉢・浅鉢・注口土器



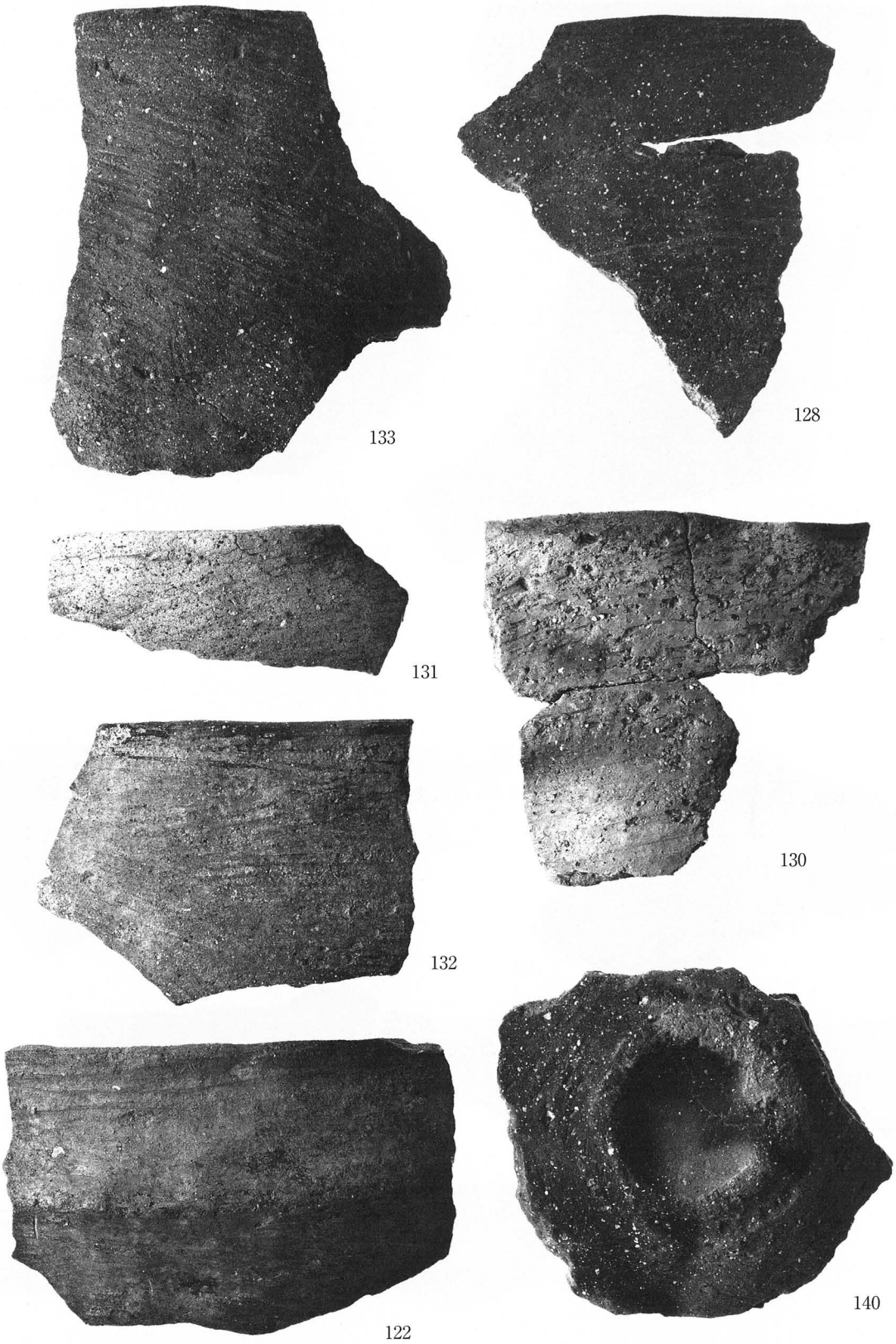
北トレンチ第10層出土縄文土器　深鉢・浅鉢・注口土器



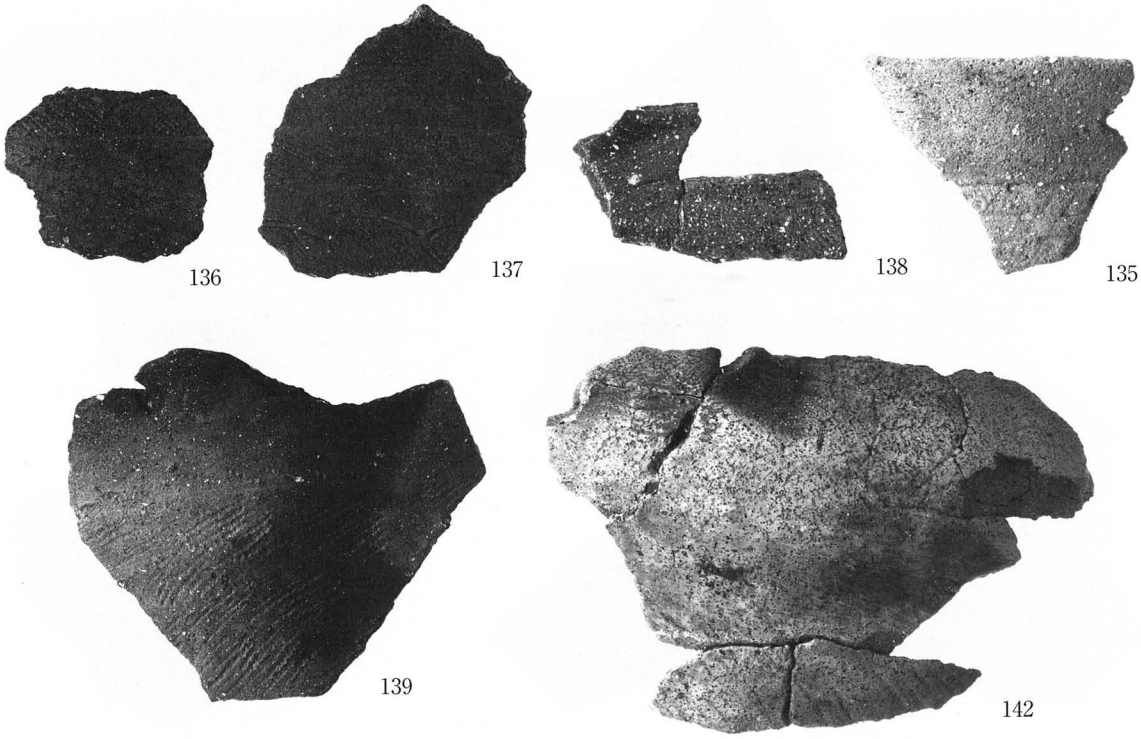
1．北トレンチ第10層出土縄文土器　深鉢・注口土器



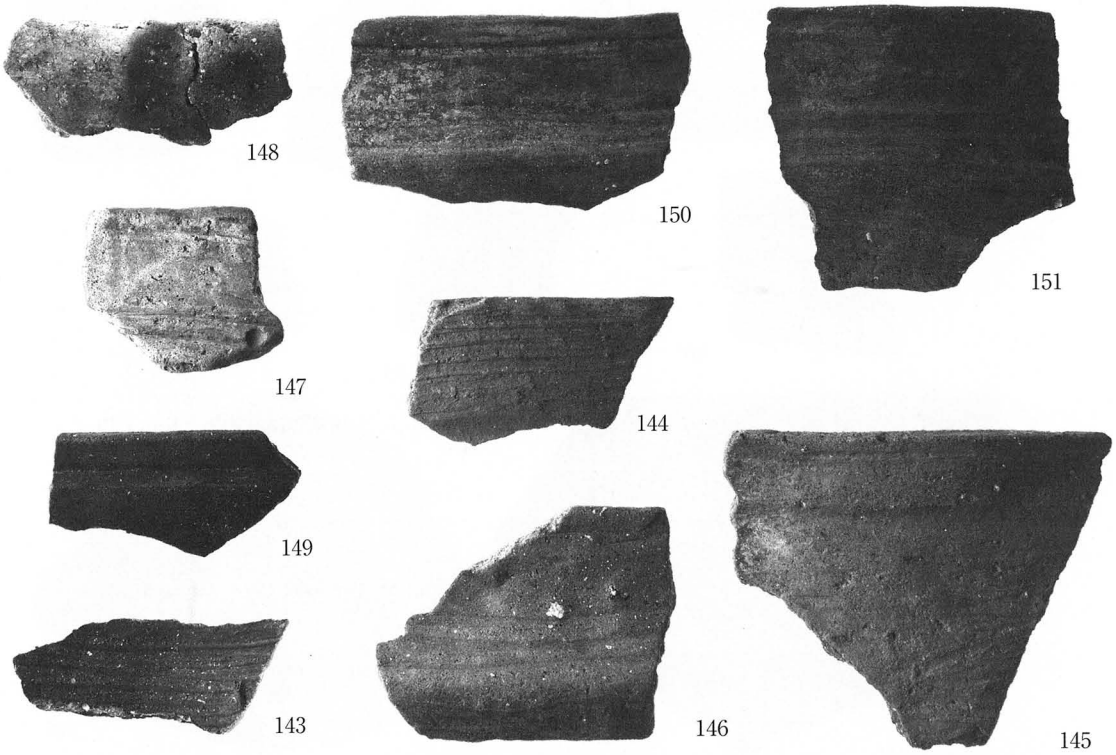
2．北トレンチ第11層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



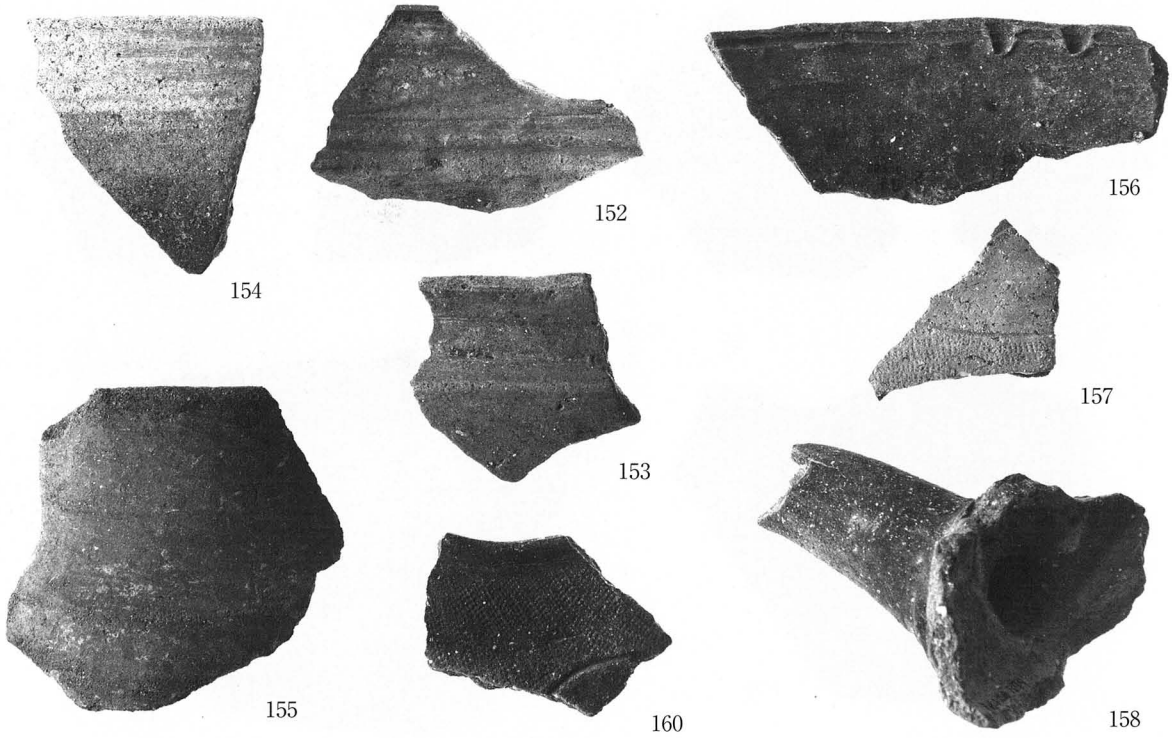
北トレンチ第11層出土縄文土器　深鉢



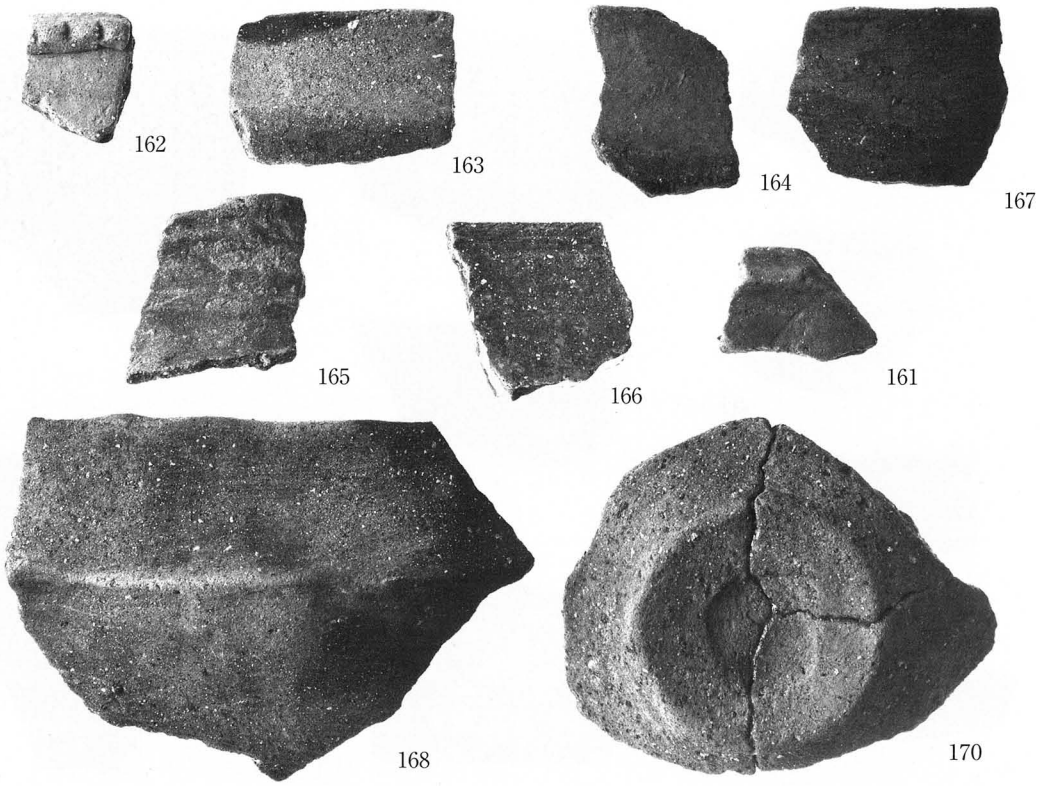
1．北トレンチ第11層出土縄文土器　深鉢・浅鉢・注口土器



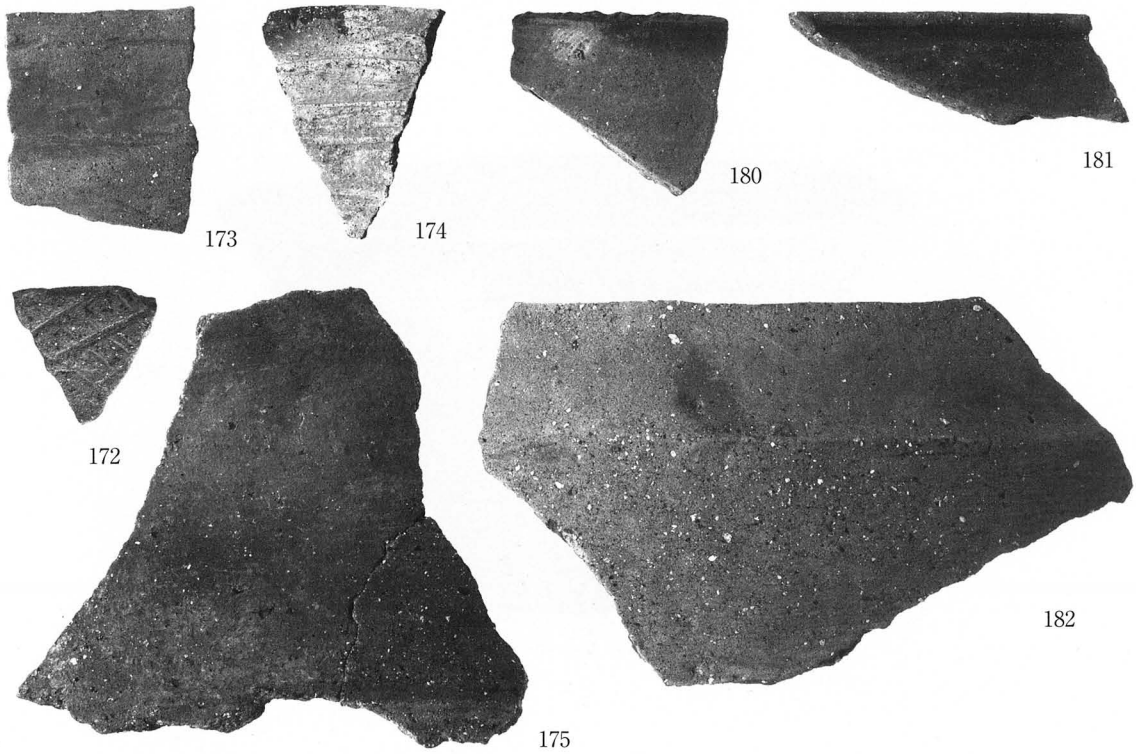
2．北トレンチ第8～10層・第8～11層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



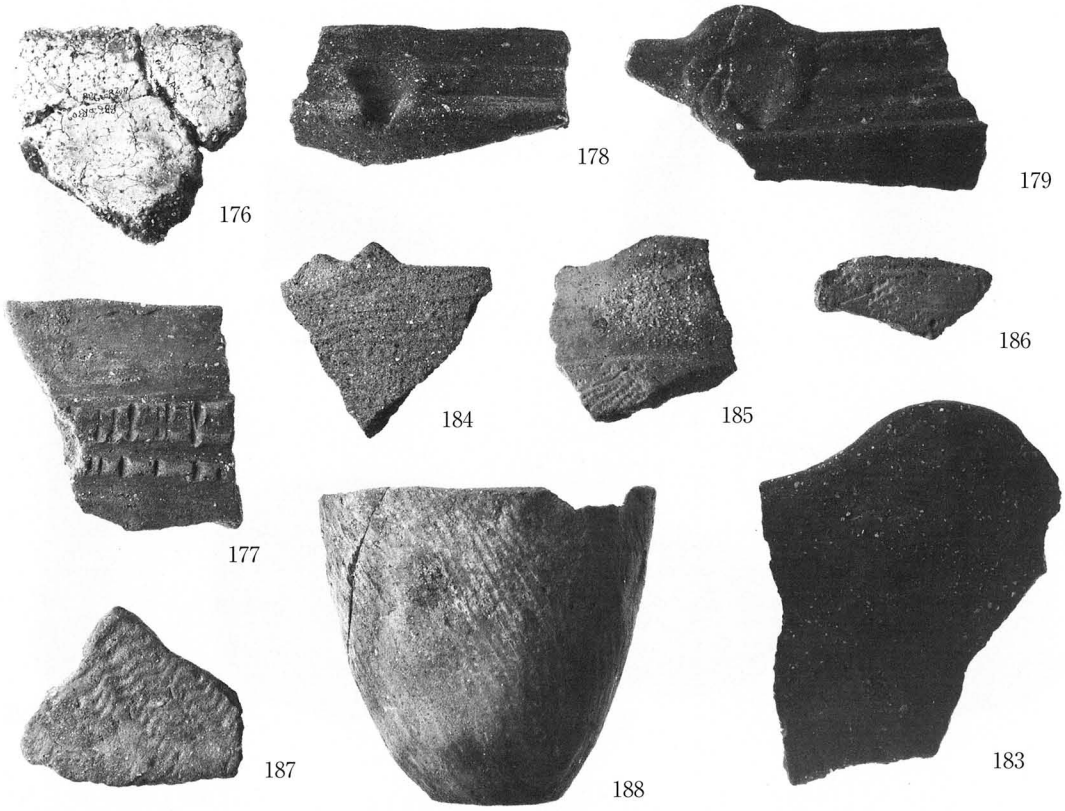
1．北トレンチ第９～11層出土縄文土器　深鉢・浅鉢・注口土器



2．南トレンチ第７層出土縄文土器　深鉢



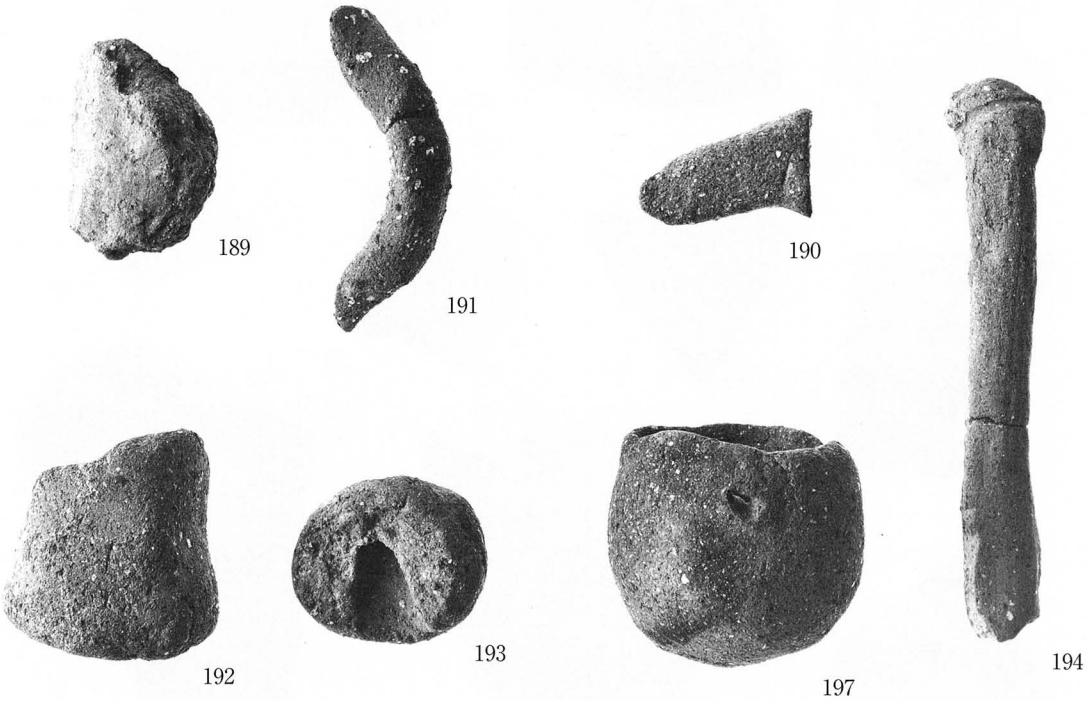
1．南トレンチ第７・８層・第９・10層出土縄文土器　深鉢・浅鉢



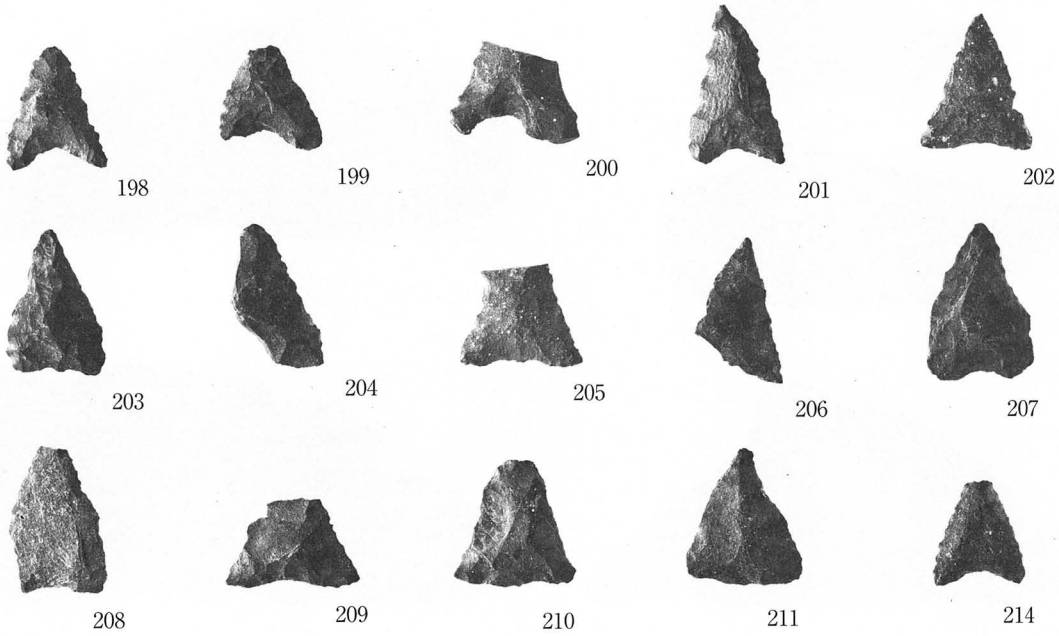
2．南トレンチ第９層・第10層・第11層出土縄文土器　深鉢・浅鉢

159

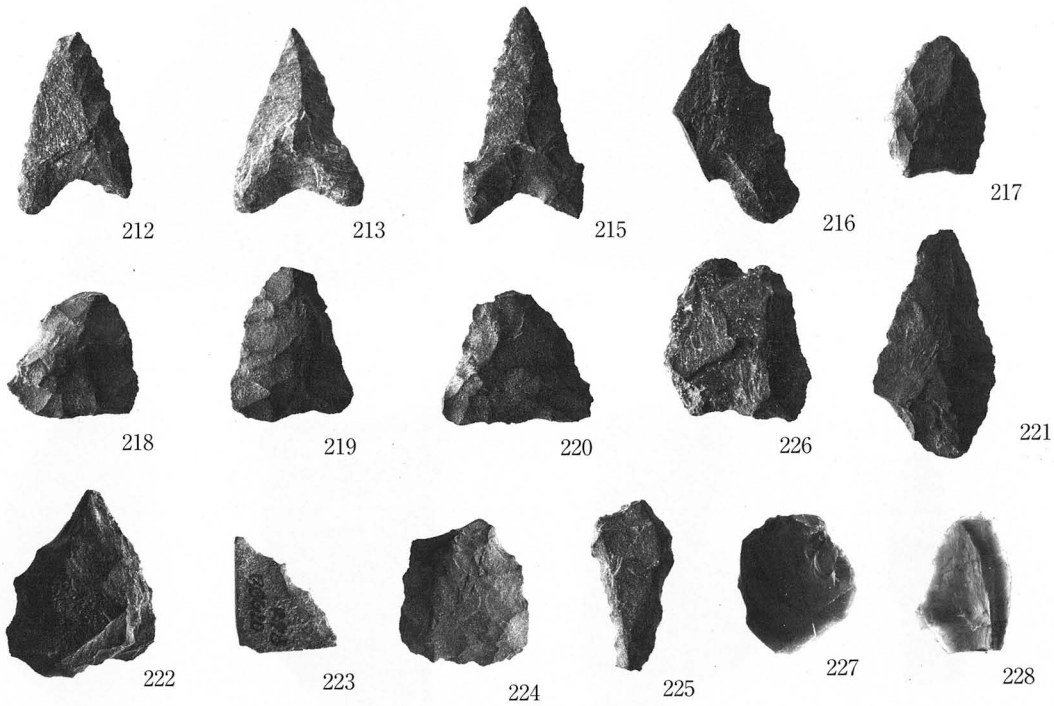
1．北トレンチ第9～11層出土縄文土器　注口土器



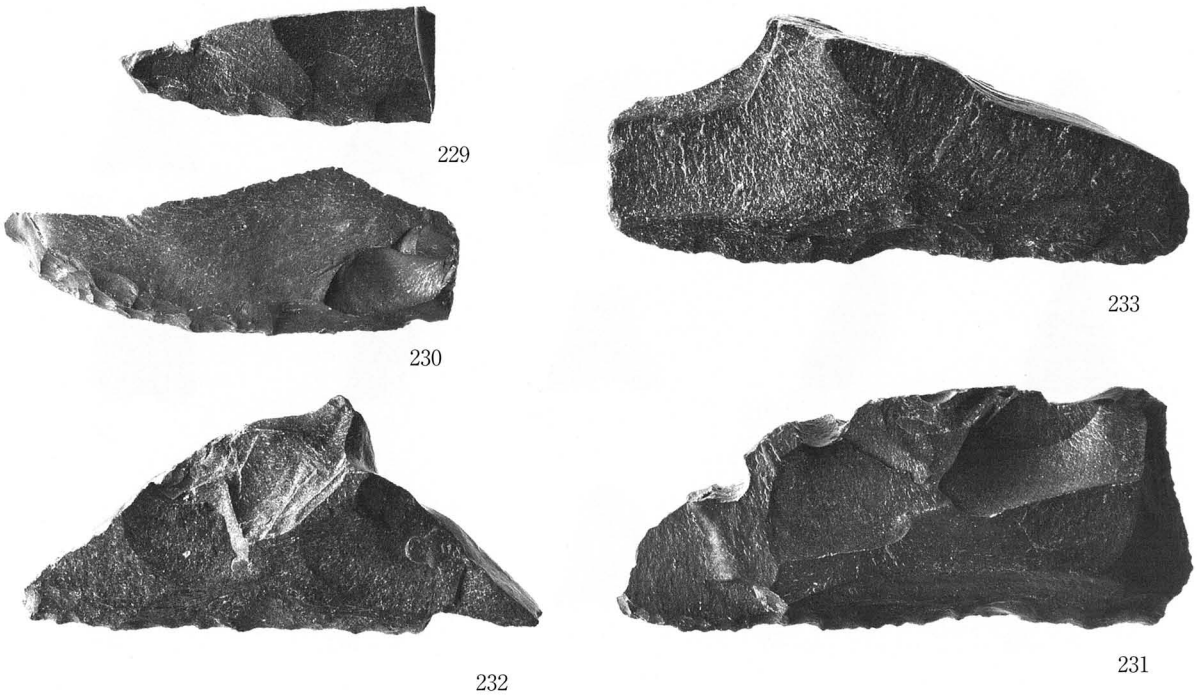
2．北トレンチ出土土製品　土偶・球状土製品・棒状土製品・ミニチュア土製品



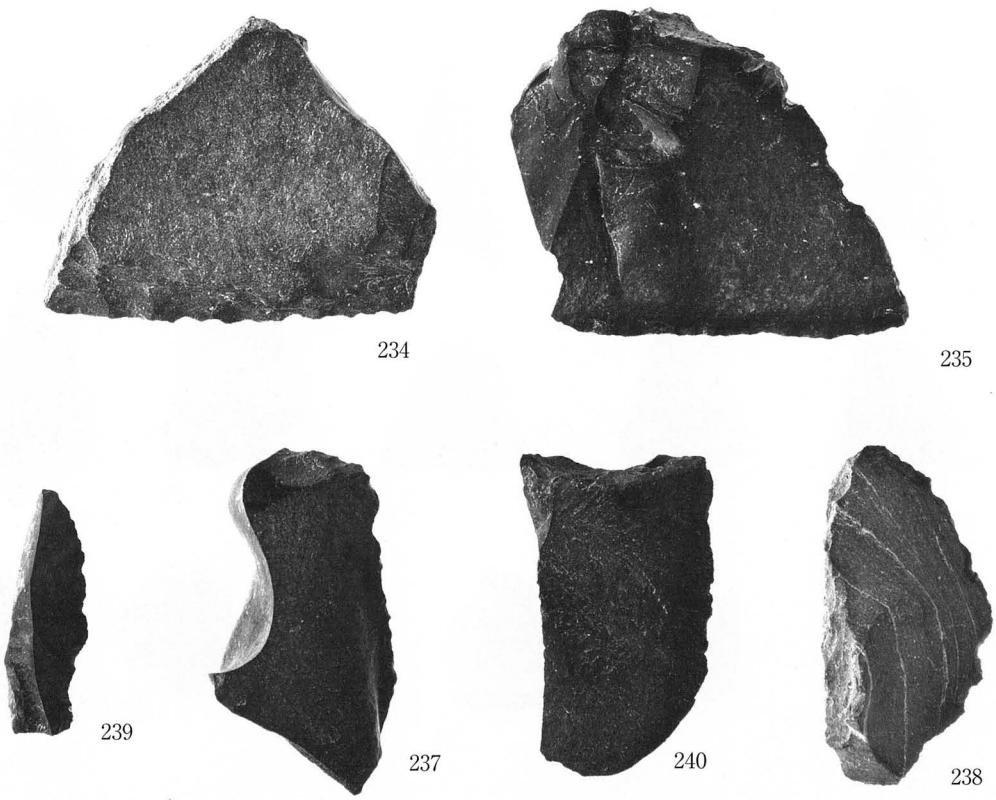
1．包含層・遺構出土石器　石鏃



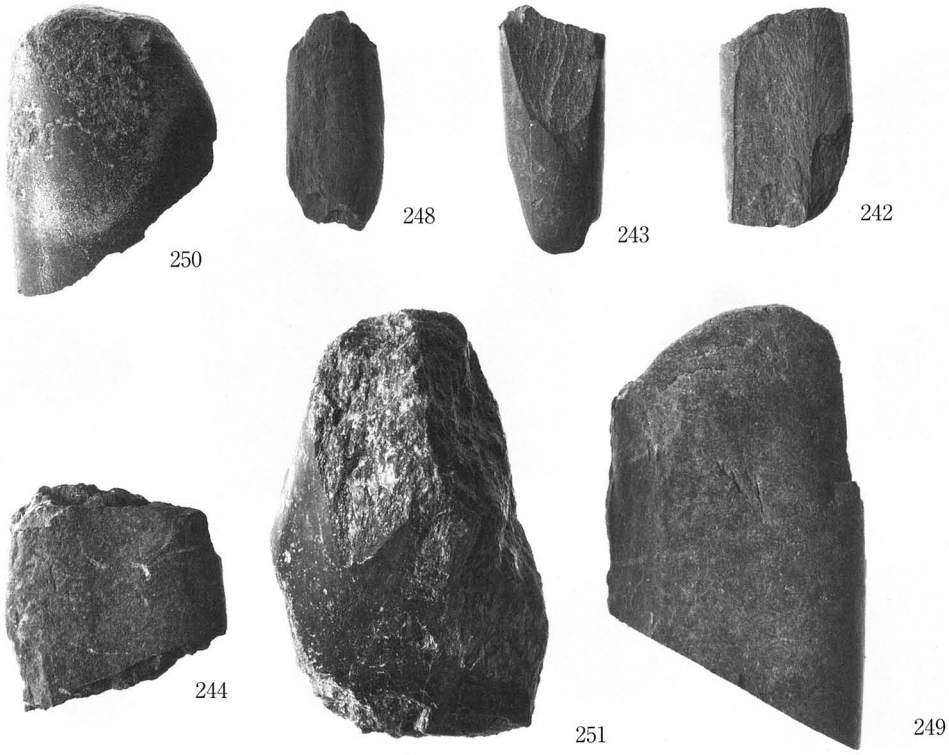
2．包含層・遺構出土石器　石鏃・石錐・石鏃未製品・楔形石器・二次加工ある剥片・剥片



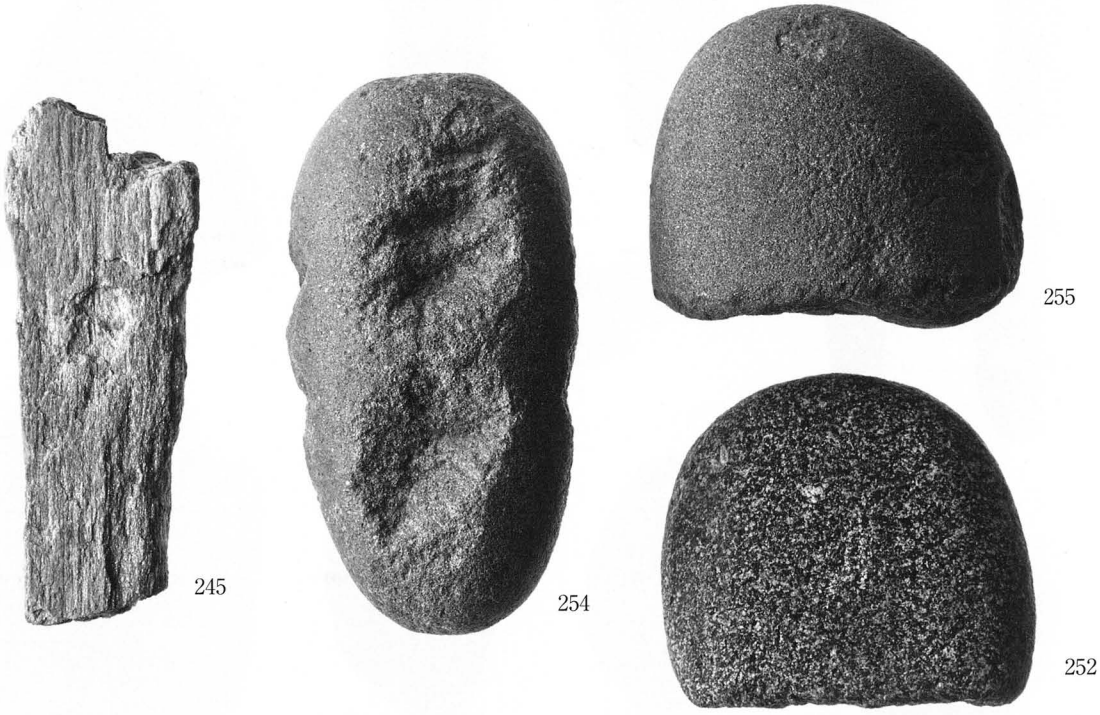
1．包含層・遺構出土石器　スクレイパー



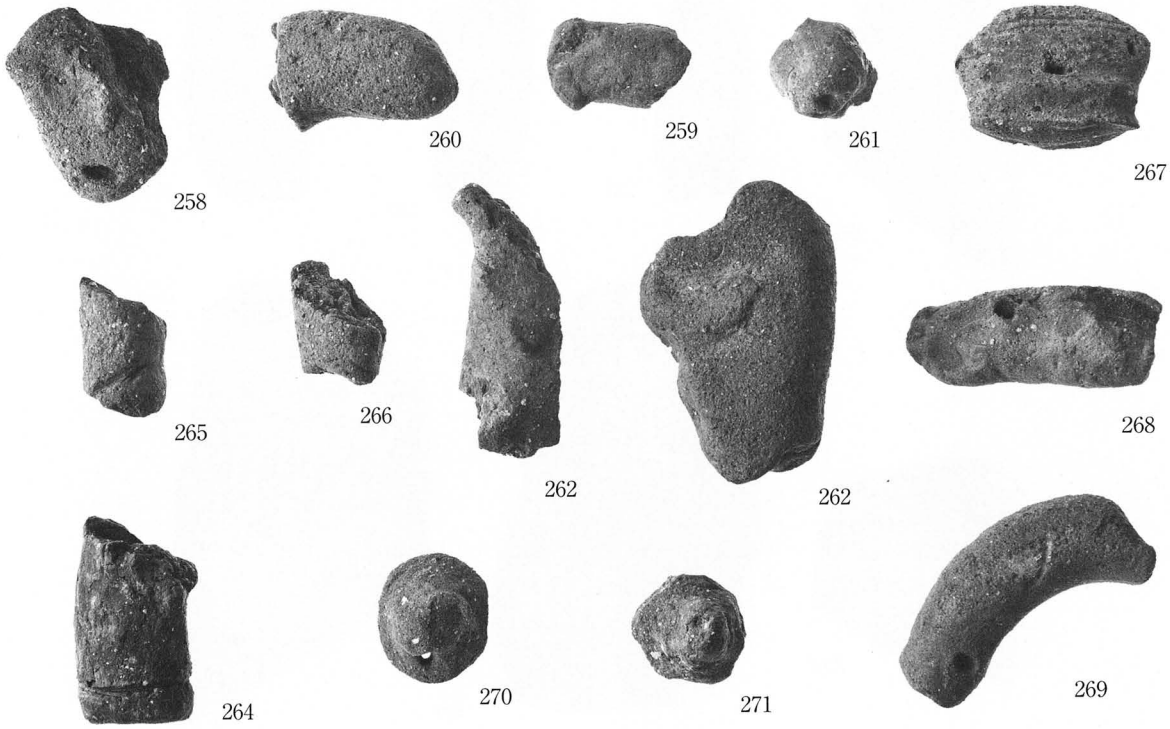
2．包含層・遺構出土石器　スクレイパー・微細剥離痕ある剥片



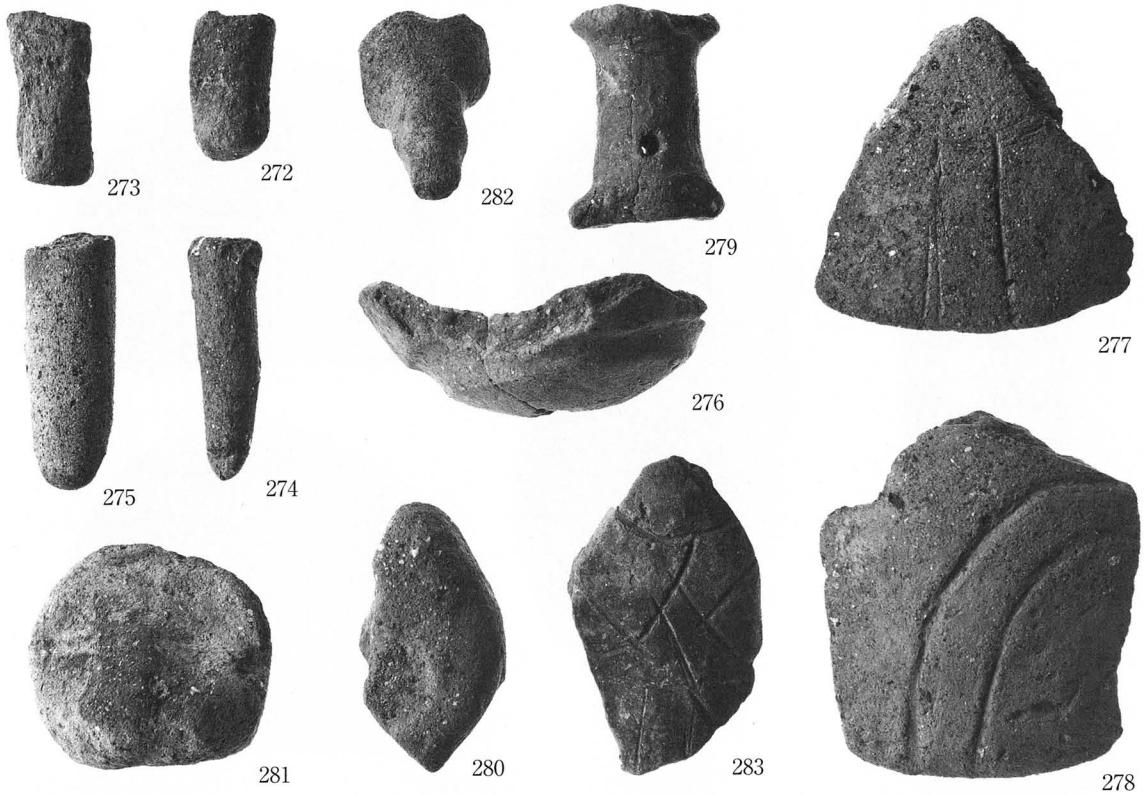
1．包含層・遺構出土石器　石棒・石刀・石斧



2．包含層・遺構出土石器　大型石棒・台石・磨石・敲石



1．既掘調査出土土製品　土偶・動物形土製品・冠形土製品・半輪状土製品・不明土製品



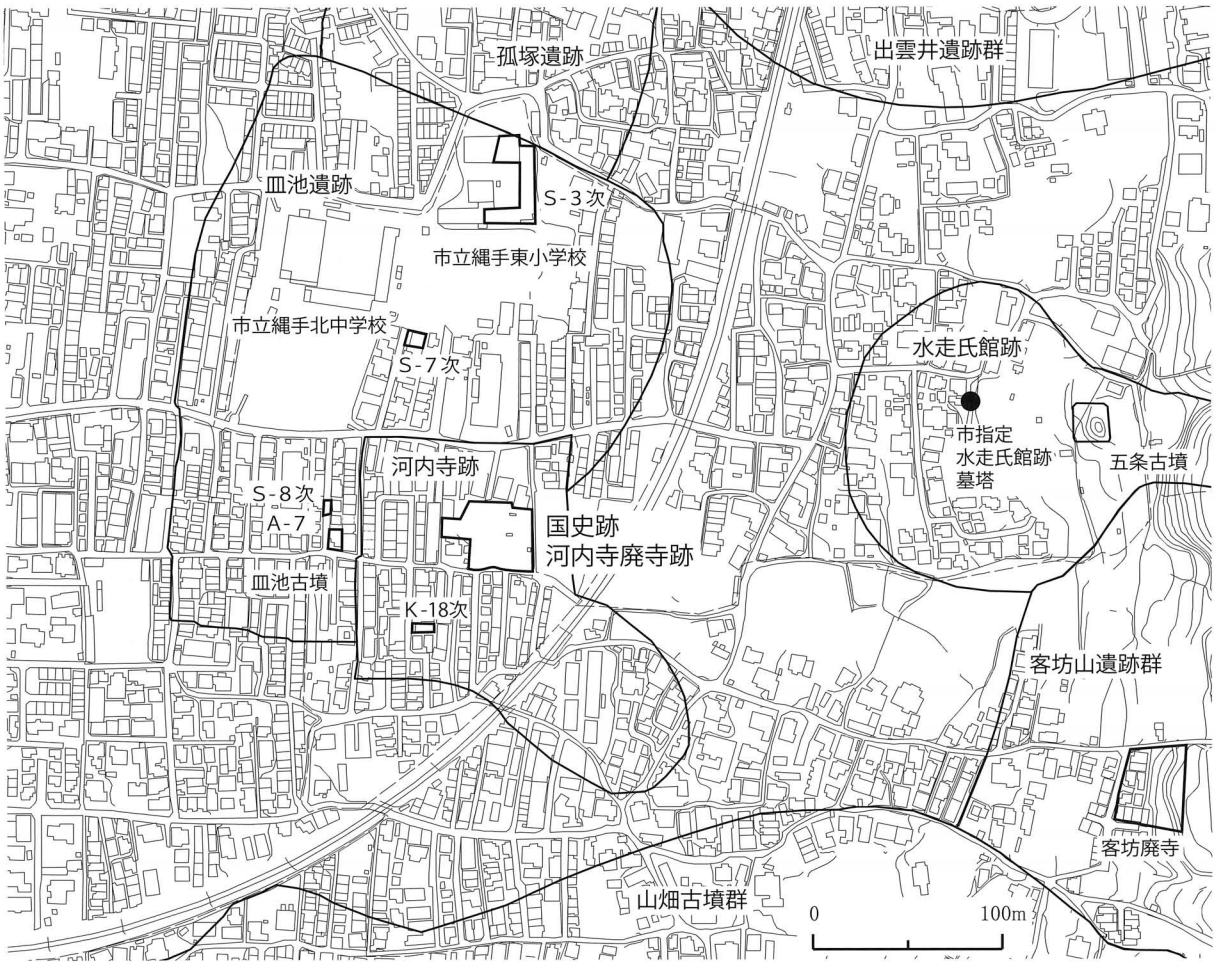
2．既掘調査出土土製品　棒状土製品・ミニチュア土製品・半球状土製品・不明土製品

第３章　国史跡河内寺廃寺跡・河内寺跡の調査

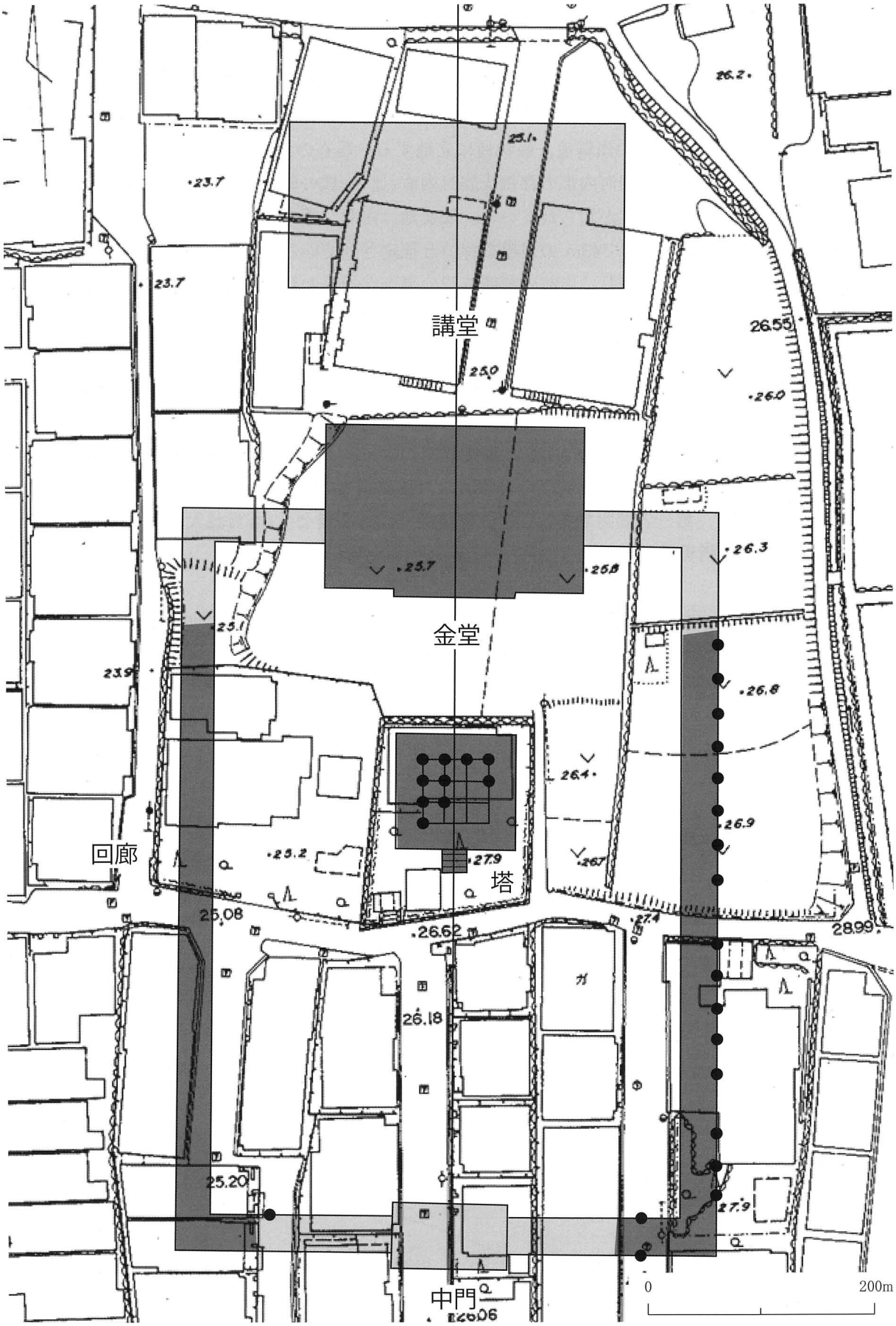
１）はじめに

国史跡河内寺廃寺跡は、東大阪市河内町に所在する飛鳥時代から鎌倉時代にかけて存続した寺院址である。寺跡は生駒山地西麓の傾斜地、扇状地に立地する。現在の地表面の標高は27m 前後を測る。これまでの調査の結果、河内国河内郡の郡領氏族河内直(連)一族の創建にかかり、四天王寺式の伽藍配置を持つ古代寺院であることが知られている。伽藍地は南北（推定講堂－推定中門の芯芯距離）で93m、東西（回廊の芯芯距離）で43m の規模を持つと推定されている。

昭和42年(1967)から49年(1974)に寺跡の範囲確認の調査が行なわれ、金堂基壇や回廊が検出された。その後、伽藍外で小規模な調査が行なわれたのみで、約40年が推移した。平成16年(2004)の調査で塔跡の基壇や礎石が発見された。これらの残存状態が良好であったことから、東大阪市教育委員会では寺跡の現状保存について、文化庁、大阪府教育委員会と協議を重ねた。協議の結果、公有化による現状保存の方針が決定され、まず東大阪市土地開発公社において、平成16年度から同18年度にかけて塔跡とその周囲の伽藍推定地を先行取得した。塔跡基壇の発見により、昭和40年代の調査で検出した金堂・回廊の再確認と、従前の伽藍配置案の再検討、再確認調査の成果にかかる評価などを行うため、先行取得と前後して、第三者機関である「河内寺跡調査指導委員会」(委員長大脇潔近畿大学文芸学部教授、以下、調査指導委員会とする)が平成17年11月に設置された。



第１図　国史跡河内寺廃寺跡とその周辺の遺跡



第２図　河内寺廃寺跡の伽藍配置推定図

東大阪市教育委員会では、調査指導委員会の指導・助言を得つつ、再確認した金堂・回廊の各基壇および塔基壇の規模を確定し、これまでの調査で出土した軒瓦ほかの遺物を再検討し、調査成果を総括した。成果の総括にあたっては、調査指導委員会委員から指導を仰いだ。その際、調査指導委員会から寺名を「河内寺廃寺跡」とする旨の助言があった。これらの成果を一書にまとめ、『河内寺廃寺跡発掘調査報告書』(以下、報告書とする)として発刊した。平成19年７月、文化庁へ報告書および国史跡指定申請書を提出、同年11月に文化庁文化審議会にて国史跡指定の答申があり、翌20年３月28日付けで、河内寺廃寺跡の伽藍地2092.82㎡が正式に国史跡の指定を受けた。

平成20年度には、文化庁との協議により、市土地開発公社取得用地を国庫補助事業で東大阪市へ買い戻すことが決定された。種々の手続きを経て、同年度で伽藍地全域が東大阪市の所有管理となり、現状保存と公有化が完了した。

２）「河内寺廃寺跡整備委員会」の設立と河内寺廃寺跡第19・20次発掘調査に至る経過

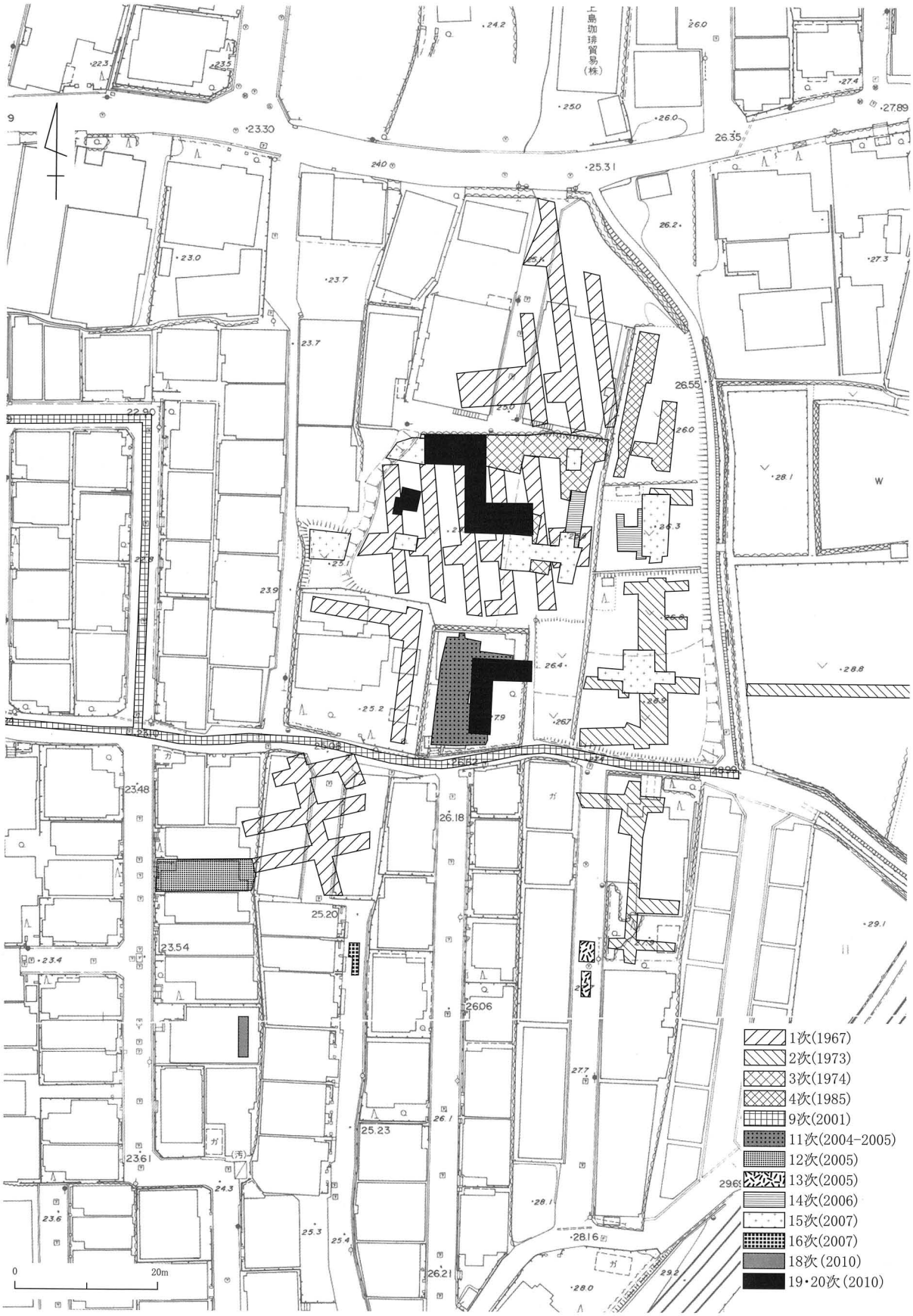
平成21年度には、今後の整備計画を策定し、整備事業を円滑に推進するため、第三者機関である「河内寺廃寺跡整備委員会」(以下、整備委員会とする)を同年12月29日付けで設置した。設置については、河内寺廃寺跡が地域住民にとって親しみやすいものにすること、市民が活用する史跡にすることがその目的とされた。整備委員会の委員は次のとおりである(敬称略)。

委員長　大脇　　潔(近畿大学文芸学部教授・東大阪市文化財保護審議会委員)
委員　　増渕　　徹(京都橘大学文学部教授)
委員　　菱田　哲郎(京都府立大学文学部教授)
委員　　箱崎　和久(独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室室長)
事務局　東大阪市教育委員会社会教育部文化財課

河内寺廃寺跡の整備計画については、まずその策定に必要なデータを収集するための発掘調査、確認調査の実施が急務となった。発掘調査、確認調査を平成21年度と同22年度の２ヵ年にわたって実施することになった。調査トレンチの箇所や位置については、事務局原案のもと整備委員会で検討して決定した。データを収集するための調査の課題については、以下の点が討議された。

(1) 金堂の建物規模の確定
(2) 金堂と回廊の取り付き箇所の確定
(3) 塔－金堂－回廊の旧地表面の確認
(4) 特に東西斜面地における伽藍造成の様相の確認
(5) 塔心礎の検出

これらの課題を検討するため、平成21年度では推定西面回廊と金堂との取り付き推定部(Ａ地区)を、平成22年度では金堂基壇(Ｂ地区)、塔基壇の東側部分(Ｃ地区)について調査することとなった。なお調査年度は２ヵ年になっているが、混乱を避けるため、上記Ａ地区、Ｂ地区、Ｃ地区の仮称をそのまま踏襲して、以下その調査成果の概要を記述する。なお、これまでの調査成果の一覧については前記報告書を参照されたい。整備委員会の検討と同意を得て、平成22年１月14日付けで文化庁に対し、発掘調査、確認調査の実施に伴う「史跡現状変更許可申請書」を提出した。文化庁は、平成22年２月19日付け21受庁財第４号の844をもって許可された。第19次調査(Ａ地区)は平成22年３月11日から３月23日までの８日間実施した。第20次調査(Ｂ地区・Ｃ地区)は平成22年５月10日から６月18日までの29日間実施した。調査面積は３地区合計で196.3㎡となった。



第３図　河内寺廃寺跡・河内寺跡の調査位置図

3）河内寺廃寺跡の立地と周辺の歴史的環境

本項については、先の報告書でも記述したが、今回の調査成果と密接に関連する箇所が少なくないため、その概要を再説しておきたい。

東大阪市の東部は生駒山地の西麓部にあたり、緩やかな傾斜面をなす東麓部と比べ、急峻な傾斜面が見られる。このため山あいを流下する小河川が発達している。生駒西麓部でやや南部に位置する客坊谷もその一つで、標高約70m の地点に扇状地の傾斜変換線が巡っている。扇状地斜面は標高110～65m の上位面、20m までの中位面、６m までの下位面に区分されている。この区分に拠れば、河内寺廃寺跡は扇状地の中位面に立地することになる。客坊谷の堆積地形は、山地斜面の風化物質に由来する崩積性堆積物と客坊谷及びその支谷からの土石流堆積物から構成される。土石流堆積物はその立地環境から幾度となく形成されたことが予想される。これは客坊山遺跡群の調査でも推定されている。河内寺跡第５次調査の成果から、13世紀後半から14世紀初頭の時期にも大きな堆積があったことが推測される。

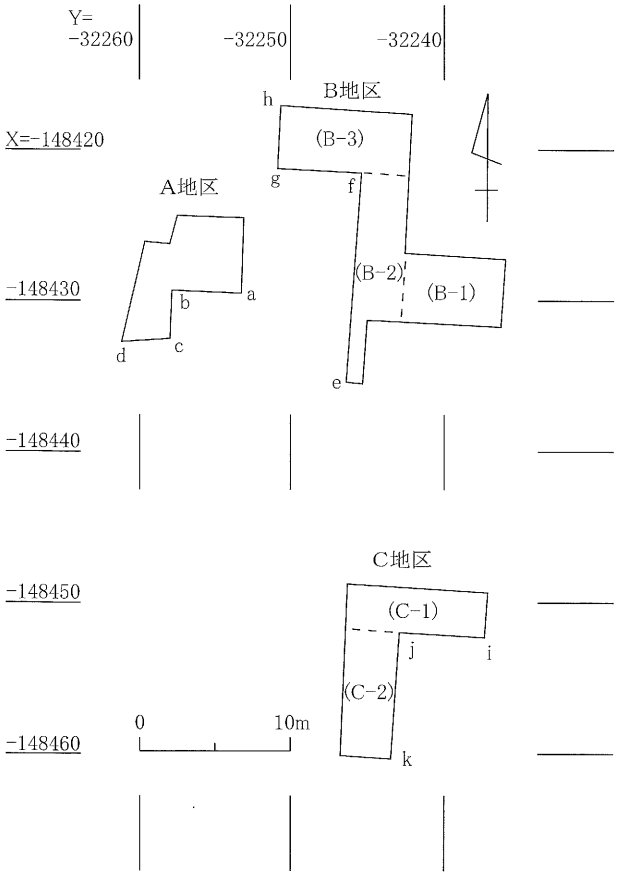
河内寺廃寺跡をはじめ各時期の遺跡が密集する東大阪市東部は、律令制下の河内国河内郡にあたる。ここでは、河内寺廃寺跡の周辺の遺跡について、寺院伽藍築成前夜となる古墳時代後期から、寺院活動の中心時期となる奈良～平安時代前期までの歴史的環境を見ることとする（第１図参照）。

皿池遺跡は以前から河内郡衙跡に推定されてきた。河内寺とともに河内郡大宅郷に推定されている。第３次調査（第１図Ｓ－３次）で飛鳥時代から平安時代にかけての遺物や小規模な掘立柱建物などが発見されている。平成17年度に実施された第７次調査（同Ｓ－７次）では古墳時代中期末の総柱建物が１棟検出された。総柱建物は河内寺に近接することから、築成前の在地豪族の居住域とも考えられる。河内町458番地ではでは皿池古墳が発見された。周溝の内部から船形埴輪が出土した。船形埴輪の存在から、被葬者は外洋の水運や軍事・外交に係わる豪族の一員が推定され、河内寺の建立者である河内直（連）との結びつきを強く示唆するものと考えられる。また下水道工事に伴う第８次調査（同Ｓ－８次）で渤海三彩とされる三彩陶が出土した。三彩陶は寺院・官衙・古墓からの出土例が多く、河内寺あるいは河内郡衙と直接関連する資料である。

河内寺廃寺跡の東方には、客坊廃寺が所在する。寺号は現在不詳であるが、付近を描いた山絵図には「法性寺」と字名が記されている。客坊廃寺は標高75～110m 前後に位置する山岳寺院である。これまでの調査で、斜面を雛壇状に造成し、石垣を積んで整地した各段が発見され、その上面で、瓦葺建物の基壇、礎石、掘立柱建物、小規模な園地、石組穴蔵などが検出されている。10世紀代の黒色土器台付壷を所用した蔵骨器と火葬墓が発見されている。時期的な検討から河内寺に関係した人物に伴うものかとする説もある。文献史料から南山城の浄瑠璃寺と関係する天台系寺院であったことが知られている。出土した瓦には平安時代後期から鎌倉時代のものが主体を占め、室町時代のものも認められる。寿永２年（1183）、和泉国大鳥郡の瓦大工が客坊廃寺所用瓦を製作したことが記された軒丸瓦がある。河内・和泉の瓦生産を知る上で重要な資料である。河内寺廃寺跡の単弁十三葉蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦Ⅱ類－白鳳時代）が客坊廃寺で、客坊廃寺の均整唐草文軒平瓦（軒平瓦Ⅸ類－平安時代後期）が河内寺廃寺跡で、それぞれ出土しており、平安時代以降、二寺は強い紐帯にあったことが窺える。

なお、ここで河内寺廃寺跡と河内寺跡の関係について付言しておきたい。前記の経過から、河内町に所在する古代寺院の寺名は史跡指定申請以来、「河内寺廃寺」とし、その寺跡を「河内寺廃寺跡」としている。現在、伽藍外の建物・施設が未検出であることから、「河内寺廃寺跡」の範囲は伽藍内部（史跡指定地）に限定している。いっぽう、伽藍外の埋蔵文化財包蔵地については、河内寺廃寺跡と区別し「河内寺跡」としている。このため、伽藍外の調査については「河内寺跡第●次調査」と表記した。

4）河内寺廃寺跡第19・20次調査の概要とその成果



第４図　河内寺廃寺跡第19・20次調査各トレンチの位置と座標値（a～kは第５図に対応）

① 調査の目的・方法と各地区の層位

前記したように、今回の調査にあたっては、今後の史跡整備計画の策定や整備工事の実施に向けて、基礎的なデータ収集を行うことが目的とされた。史跡指定時に作成した報告書では、塔・金堂・東回廊の各基壇の規模、塔・回廊の建物規模などを明らかにしえたが、前々項の整備委員会で指摘された事項については残課題となった。とくに、金堂建物の規模の確定や金堂・回廊の取り付きの問題については、喫緊の課題である。このため、３地区を設定して課題の解決を図ることとなった。まず、各地区の設定目的について記しておきたい。

Ａ地区　東面回廊は第２次調査の北端部まで礎石が確認されたことから、その地点まで連続することは自明である。また、第３次調査地では東面回廊が検出されず、その間隙で、屈曲して金堂に取り付くことが予想される。このため、第14・15次調査で東面回廊側にトレンチを設けて、回廊の屈曲部ないしその痕跡を確認しようとしたが、そのトレンチでは、調査前の地表面が東面回廊より低く、現代の耕作や造作の影響により。明確な痕跡を確認することができなかった。そこで、今回は金堂と北面回廊(西)との接続推定箇所にトレンチを設定して、取り付きの痕跡を確認しようとした。なお、旧の第15次調査Ｈ地区を拡大した箇所である。整備委員会の指導を受けて、Ａ地区トレンチの西側と南側を拡大して調査を進めた。

Ｂ地区　金堂については、その基壇上面のレベルが塔・回廊のそれより下位にあり、旧地形による傾斜面の影響も大きいため、既往の調査とその成果の検討で基壇規模について推定できたが、金堂建物の規模や回廊との取り付き箇所については、不明なまま課題が残される結果となった。基壇規模は、今回の調査では、金堂建物の規模を確認するため、伽藍中軸線の東側と西側にトレンチを各１本ずつ設定し、須弥壇及び基壇上面付近の土層堆積状況を確認かつ把握するため、上記２本のトレンチを南北に繋いだトレンチを設定した。

Ｃ地区　第11次調査で、塔基壇が乱石積であることを確認したが、調査トレンチの制約から、創建時基壇と拡張した基壇との関係について、合理的な解釈は課題となった。外周の階段については、南面階段を検出したが、他の外周に階段が付くかどうかは不明であり、その確認が必要となった。塔心礎については、前記の調査で排土置場との関係からそれ以下の掘削を断念した経過があり、その有無確認は整備計画事業の根幹をなすことから、その上面までを把握することを目的とした。このため、トレンチは塔心礎推定位置から逆Ｌ字形とした。

今回の調査にあたり、河内寺廃寺跡が国史跡であることから掘削作業は慎重かつ限定的に行った。

まずA地区・B地区の調査は、現在の地表面から、全て人力で掘削し遺構や遺物の検出を図った。C地区では、現代の石垣と巨礫を含んだ盛土層の除去作業に重機を使用したが、それ以下の掘削は全て人力で行った。各地区で土坑状の掘り込みを検出したが、整備委員会および大阪府教育委員会の指導を得て、遺構輪郭の検出と遺構内埋土の観察・記録のみを行い、遺構内部の掘り下げは行っていない。

次に各地区の層位について記す。なお基本層位は今後刊行予定の整備報告書に委ね、ここでは地区ごとに、その地層堆積状況をそのまま記述する。土壌の粒子区分の単位については適宜[]を挿入した。

A地区

第1層　緑黒色(10GY2/1)粗粒砂混じりシルト。根幹が多く遺存。耕土層。

第2層　暗オリーブ色(5Y4/3)粗粒砂混じり極細粒砂。床土層。本地区の西側と南側では第2層を切り込む地層を2層分確認した。これを2L層、2`層とした。また東側では第2層の下部で2”層を検出した。

第2L層　暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質シルトに暗オリーブ色(7.5Y4/3)シルトがブロック状に混入。過去の調査地点図のつきあわせにより、第1次調査の旧トレンチの埋戻し土である。

第2`層　緑黒色(10GY2/1)粗粒砂混じりシルト(第1層)を主体として、暗オリーブ色(5Y4/3)粗粒砂混じり極細粒砂(第2層)が混入する層である。第2L層が旧トレンチの埋戻し土であることから、昭和42年の調査以降に堆積した層である。

第2”層　緑黒色(10GY2/1)粗粒砂混じりシルト(第1層)と暗オリーブ色(5Y4/3)粗粒砂混じり極細粒砂(第2層)の混合土層である。

第3層　金堂基壇外の堆積層である。3層に区分できた。区分の基準は旧の第15次調査H地区のそれに準拠した。

第3A層　暗オリーブ色(5Y4/3)［中礫～細礫］混じり極細粒砂。トレンチ東側の一部ではこの層のブロック土があった。これを第3A´層とした。

第3A´層　暗オリーブ色(5Y4/3)［中礫～細礫］混じり極細粒砂(第3A層)を主体に第5層がブロック状に混入する層。

第3B層　暗オリーブ色(5Y4/3)シルト。細礫を少量含む。土師器、須恵器、瓦片を包含する。中世期の瓦が多数みられた。KWH8(均整忍冬唐草文軒平瓦、第8図9)が出土した。

第3C層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト。10cm前後の大礫を多量に含む。中世期の土器・陶磁器、瓦片を包含する。KWM6(巴文軒丸瓦、第8図3)、青磁椀(第9図13)、瓦質土器羽釜脚部(同14)が出土。14の年代観から堆積時期は15世紀以降と考えられる。

第4層　黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂混じりシルト。炭化物多量に含む。瓦器椀と須恵器杯蓋・杯身・無蓋高杯(第9図15～17)が出土。ただし瓦器椀は小片で所属時期が限定できない。

B地区

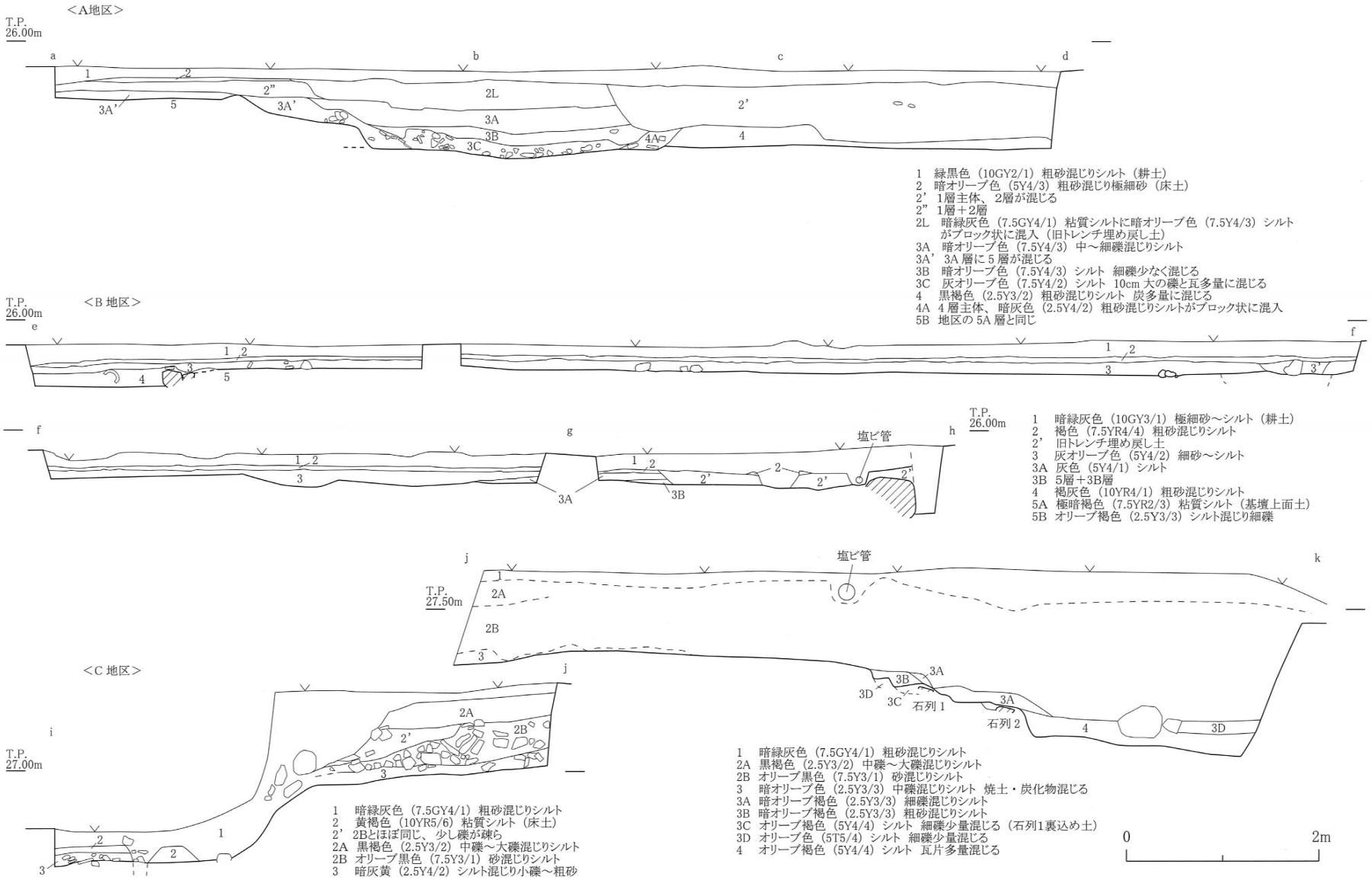
第1層　暗緑灰色(10GY3/1)極細粒砂～シルト。耕土層。

第2層　褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混じりシルト。床土層。近世期の染付け椀が出土。B地区北側(B－3区)では、旧の第3次調査第Iトレンチの埋戻し土が遺存していた。これを第2`層とした。

第3層　金堂基壇の上面を広く覆う層である。灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂～シルト。須恵器が出土したが小片で時期が判断できない。KWH16(唐草文軒平瓦、第8図12)が出土した。B－2区の北と3区で、第3層を切りこむ層(第3`層)と第3層の下部に堆積層2層(第3A層・第3B層)を検出した。

第3`層　灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂～シルト(第3層)を主体に、褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混じりシルト(第2層)が少量混入する層である。

第3A層　灰色(5Y4/1)シルト。



第５図　河内寺廃寺跡第19・20次調査　各トレンチ断面実測図

第３Ｂ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混じりシルト(第５層)に灰色(５Y4/1)シルト(第３Ａ層)が混入する層である。

第４層　金堂基壇外の堆積層である。褐灰色(10YR4/1)粗粒砂混じりシルト。土師器、須恵器を包含。土師器杯(第９図18)が出土。

第５層　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混じりシルト。金堂基壇面上面の土層である。Ｂ地区の南東側(Ｂ－１区)では第５層の土質が漸次的に変化し、２層に区分された。これを第５Ａ層、第５Ｂ層とした。

第５Ａ層　極暗褐色(7.5YR2/3)粘土質シルト。層厚が極めて薄く、5cmほどしか遺存していない。

第５Ｂ層　オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト混じり細礫。

Ｂ地区は、過去の第１次調査、第３次調査の既調査旧トレンチを含む箇所で、現代の耕作面が基壇上面近くまで及んでいることもあり、遺物の出土は稀少で、かつ限定的であった。

Ｃ地区

第１層　暗緑灰色(7.5GY4/1)粗粒砂混じりシルト。Ｃ－１区の東側では塔基壇から大きく離れて耕土層をなすが、塔基壇部では大礫や現代製品が多く混じり、盛土層となる。現代製品を含む層までを第１層とした。KWM2Ａ(単弁十三葉蓮華文軒丸瓦、第８図１)・同２Ｂ(単弁十三葉蓮華文軒丸瓦、同２)・KWH3(偏行唐草文軒平瓦、同７)などが出土した。

第２層　黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト。前記と同じくＣ－１区東部では床土層。塔基壇部では、基壇上面層を広く覆う堆積層である。壁断面ｉ－ｊ間では２層(第２Ａ層･第２Ｂ層)に区分できたが、ｊ－ｋ間では大礫の嵌入が著しくなり、分層が不能となった。

第２Ａ層　黒褐色(2.5Y3/2)[中礫～大礫] 混じりシルト。下部の第２Ｂ層に比べて礫の混入がやや疎らで、礫間の夾雑物がシルト～細粒砂層。飛鳥～奈良時代の瓦と、微量の近世期の陶磁器片を含む。江戸時代の盛土層である。

第２Ｂ層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂混じりシルト。礫混入は密で、夾雑物は粗粒砂ないし細礫層。飛鳥～奈良時代の瓦と、近世期陶磁器を含む。江戸時代の盛土層。

第２層各層から出土した近世期陶磁器については、第９図に一部を図示した(19～23)。Ｃ－１区の中央部では第２Ａ層と第２Ｂ層の間隙の傾斜面に堆積する層が見られた。これを第２`層とした。

第２`層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂混じりシルト。第２Ｂ層とほぼ同様の層であるが、礫の混入はやや疎らであった。KWH１(三重弧文軒平瓦、第８図５)などが出土した。

第３層　【Ｃ－１区東部】暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混じり [粗粒砂～細礫]。【Ｃ－１区塔基壇部】暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中礫混じりシルト。焼土、炭化物を含む。KWM7(巴文軒丸瓦、第８図４)、KWH4(山形文軒平瓦、同８)、KWH13(均整唐草文軒平瓦、同11)などが出土した。Ｃ－２区南側では第２層の下部と基壇外堆積土(第４層)との間隙を第３層とした。４層に区分できた。

第３Ａ層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細礫混じりシルト。

第３Ｂ層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂混じりシルト。

第３Ｃ層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト。細礫を少量含む。

第３Ｄ層　オリーブ色(５Y5/4)シルト。細礫少量含む。

この分層は石列の構築順序の説明の際に再度説明する。塔基壇部の第３層各層からは多量の瓦片とともに、古墳時代の須恵器、瓦器椀の小破片を包含。中世期以降の堆積層である。

第４層　塔基壇外の堆積層である。オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト。多量の瓦片を含む。須恵器、瓦器、陶磁器を包含する。

②塔跡・金堂跡の調査成果

この項では今回の調査で新たに明らかになった成果を示す。記述にあたり次の諸点を前提とする。塔、金堂で礎石据付穴、同抜取穴をそれぞれ確認したが、土坑の内部を掘削していないため、いずれに該当するかは不明である。そこでこれらを「礎石掘形(跡)」と仮称する。また北西隅を起点とし、東西方向にA、B、南北方向に1、2、の番号を柱通りに付けた。これは今後新たに礎石や礎石掘形が検出されることに対応するためである。例えば北西隅の礎石(掘形)はその交点でA1と呼称し、規模等の説明を行う。因みに塔、金堂ともその基壇中軸線は座標北に対して3.5°東へ振っている。

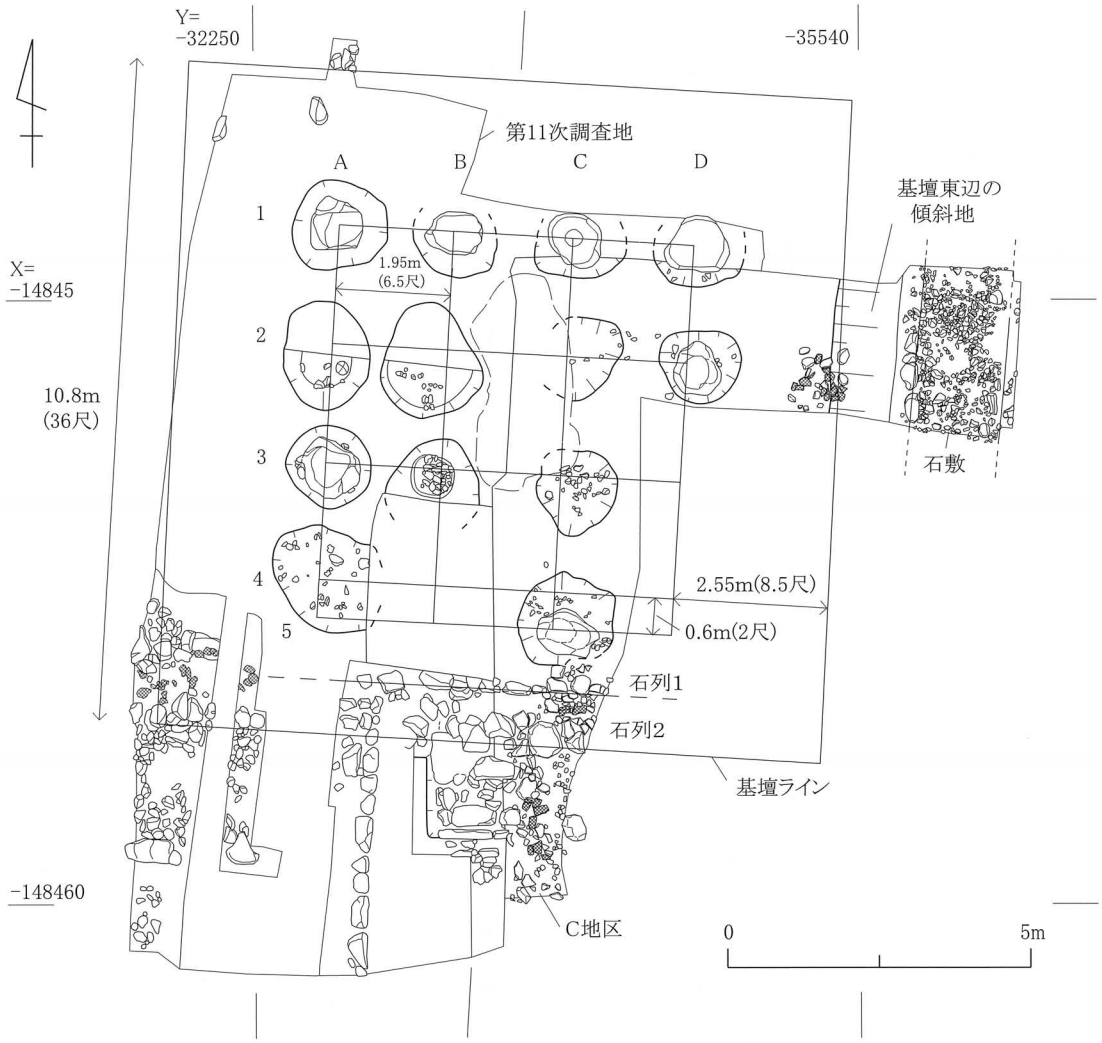
塔(第6図はC地区と第11次調査地の成果を合成したもの)

礎石(掘形)については、今回新たにC2、C3、C5、D2の4基を確認した。C2は楕円形を呈し、長径1.39m 短径0.88m 以上を測る。埋土は黒灰色(N3/0)細礫混じりシルトを主体にオリーブ黒色(5Y3/2)シルトがブロック状に混入する層である。C3は円形を呈し、長径1.40m 短径1.34m を測る。埋土はC2と同じ。土坑の中央から北側にかけて礫の集積がみられる。C5は礎石を伴い、円形を呈する。長径1.57m 短径1.55m を測る。埋土はオリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト混じり細礫である。C5礎石は石の西側頂部に平坦面をもち、長軸1.03m 短軸0.77m の規模である。この礎石は塔の柱間寸法に合わず南側に張り出す。礎石平坦面のレベルはD2等とほぼ同一である。D2も礎石を伴い、円形を呈する。長径1.35m 短径1.21m を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)細礫混じりシルトである。礎石側面の縁辺に拳大の礫を据付ける。D2礎石は中央やや南側に平坦面をもち、長軸0.87m 短軸0.78m の規模である。これら礎石掘形間の基壇上面は T.P.27.0m 前後である。

塔基壇の東辺ではその傾斜を確認した。傾斜の規模は基壇東辺から裾石まで1.2m を測る。基壇化粧の石材はその推定位置に現代の石垣が重なり確認できなかった。東側階段についても不明。ただその傾斜面で基壇の版築状況を確認することができた(図版3)。基壇の外面には幅1.5m の石敷の犬走りが遺存していた。石敷上面からの基壇高さは約1.0m を測る。南面階段については、第11次調査検出例の延長が期待されたが、その痕跡は不明瞭であった。塔基壇は新たに検出した東辺の傾斜面の位置から、10.95m(36.5尺)と推定できる。なお、推定の基壇ラインは第11次調査の北端拡張トレンチで確認した礫の集積に重なる。しかし、基壇南辺となる石列(石列2とする)の側面は直立しておらず基壇の崩れが大きい。石列2の北0.9m にやや小ぶりな礫を用いた石列1が検出された。概ね石列1の側面は直立を保っており、第11次調査検出例の延長部にあたることから、石列1が小基壇を構成することが考えられる。石列1と石列2の先後関係についてみてみると、まず土層では、第5図に明らかなように、石列1の外面に堆積した土層は第3A層にあたり、石列2の外面堆積土の第4層の上部であること、石列1の下面に瓦溜りがあり、その瓦溜りは石列2を覆って連続すること、などから石列2が乱石積の塔基壇の石材となり、石列1が後世のものと判断することができる。

塔の初重は3間で柱間は1.95m(6.5尺)の等間である。これは礎石C1の平坦面に柱のあたりが約0.3m にわたって遺存しているのを根拠として、礎石A1－B1－C1－D1の間隔を求め、それをもとに割り出したものである。軒の出は深く、基壇端部まで2.55m(8.5尺)を測る。

いっぽう、C5礎石は推定位置より南へ0.6m(2尺)張り出しており、塔初重の平面プランに合致しない。現在まで検出している礎石の位置関係をみると、四天柱の礎石は全て抜き取られており、側柱の礎石のみ遺存する。これらのことから塔の廃絶後に側柱礎石を再利用した中世仏堂の構築が考えられる。その場合、石列1を含む小基壇はこの中世仏堂に伴うものと推定される。石列1の時期は、第11次調査の第3層(基壇上面を覆う焼土を含んだ瓦溜り)で出土した土器のうち、瓦質土器羽釜(東大阪市教育委員会2005、P115、第12図39)の年代観から、15世紀代以降に推定される。



第６図　塔基壇実測図

金堂（第７図はＡ・Ｂ地区と第３次調査第Ｉトレンチほかを合成したもの）

金堂では、これまでその建物規模復元には至っていなかった。今回の調査で以下に掲げる礎石掘形を新たに検出した。礎石掘形の呼称は塔の場合に準じ、桁行をＥ、Ｆ、…、梁行を６、７、…とした。

Ｇ６は礎石を伴い、不定形な円形を呈する。長径1.34m 短径1.17m を測る。埋土は黒色(2.5Y2/1)粗粒砂混じりシルトに極暗褐色(7.5YR2/3)粘土質シルト(第５Ａ層)がブロック状に混入する層である。Ｇ６礎石は長軸0.94m 短軸0.66m の規模である。礎石上面は、その西側から東側へ５cm 低くなっており、平坦ではない。Ｈ６は円形を呈する。長径1.04m 短径0.93m を測る。埋土は極暗褐色(7.5YR2/3)粘土質シルト(第５Ａ層)・暗緑灰色(10GY3/1)極細粒砂～シルト(第１層)の混合土である。第３次調査で一度調査の掘削が行なわれ、のちに埋め戻したものである。Ｈ７は円形を呈すると考えられる。長径1.17m 短径0.58m 以上を測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)細礫混じりシルトである。土坑の中央に礫の集積がある。Ｉ９は不定な楕円形を呈する。長径1.45m 短径1.28m を測る。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細礫混じりシルトである。土坑の北側ラインに沿って面を南側に向ける礫が弧状にめぐる。Ｋ９は楕円形を呈する。長径1.35m 短径1.04m を測る。埋土はＩ９と同じ。Ｈ６の東に接して凝灰岩３個からなる礫集積がある。礫集積の掘形は溝状を呈し、長さ0.96m 幅0.30m を測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混じりシルト(第５層)を主体とし、黒色(2.5Y2/1)細礫混じりシルトが少量混入する層である。

なお後述のように、金堂の基壇上面は後世に大きく削平されたとみられ、凝灰岩が基壇削平の際に溝状の凹みに落ち込んだ可能性もある。基壇南辺のすぐ北に検出した楕円形の土坑は、長径1.38m 短径0.54m 以上を測る。図面等で位置関係を精査したが、礎石掘形とはならず、後世の所産と捉えておきたい。これら礎石掘形間の基壇上面は T.P.25.4m 前後である。今回のＡ地区で金堂基壇の西辺を確認した。基壇の傾斜面は0.9m を測る。基壇裾部では雨落溝の痕跡は確認できなかった。

今回検出した礎石掘形と、基壇北辺の石列をもとに、建物の平面復元を考えた。まず、凝灰岩の集積を扉口の痕跡とみて、Ｈ６－Ｉ６(推定)間を建物の中軸線と捉えた。この中軸線は同時に南辺の長大な階段のそれと合致している。Ｇ６－Ｈ６は第３次調査の成果から3.3m(11尺)とされているので、これを桁行中央間とした。いっぽう、基壇北辺の石列と扉口との間1.5m(５尺)を石列とＧ６－Ｈ６との間隔とした。この1.5m を軒の出として、基壇の南辺・東辺・西辺に割り付けると中央間３間の東西に脇間各２間が復元できた。中央間は等間の３間で柱間3.3m(11尺)である。脇間は東西に各２間で柱間2.4m(８尺)である。梁行は中央間２間、脇間各１間である。中央間は等間で柱間3.75m(12.5尺)、脇間の柱間は2.4m(８尺)を測る。この結果、平面形式は桁行５間、梁行２間の身舎の四面に庇がつくものと復元でき、桁行７間(19.5m)梁行４間(12.3m)の規模となった。

金堂建物の復元作業を通じて、基壇の規模に若干の変更が生じることになった。このため、基壇北辺の石列と南辺とを同一面で検出し、その規模を計測した。その結果、東西22.8m(76尺)、南北15.6m(52尺)の補正値が得られた。南側階段の痕跡となる0.6m(２尺)の石の張り出しは長さ11.25m(37.5尺)を測る。

金堂基壇上面のレベルと塔基壇上面とは、今回の調査でも1.6m の比高をもつことが判明した。このレベル差については、

(1)　Ｇ６の礎石上面には傾斜があり、扉口とした凝灰岩の中心線(復元した建物ライン)がＧ６礎石の北端に接するのみで、Ｇ６礎石は原位置をとどめていないこと。

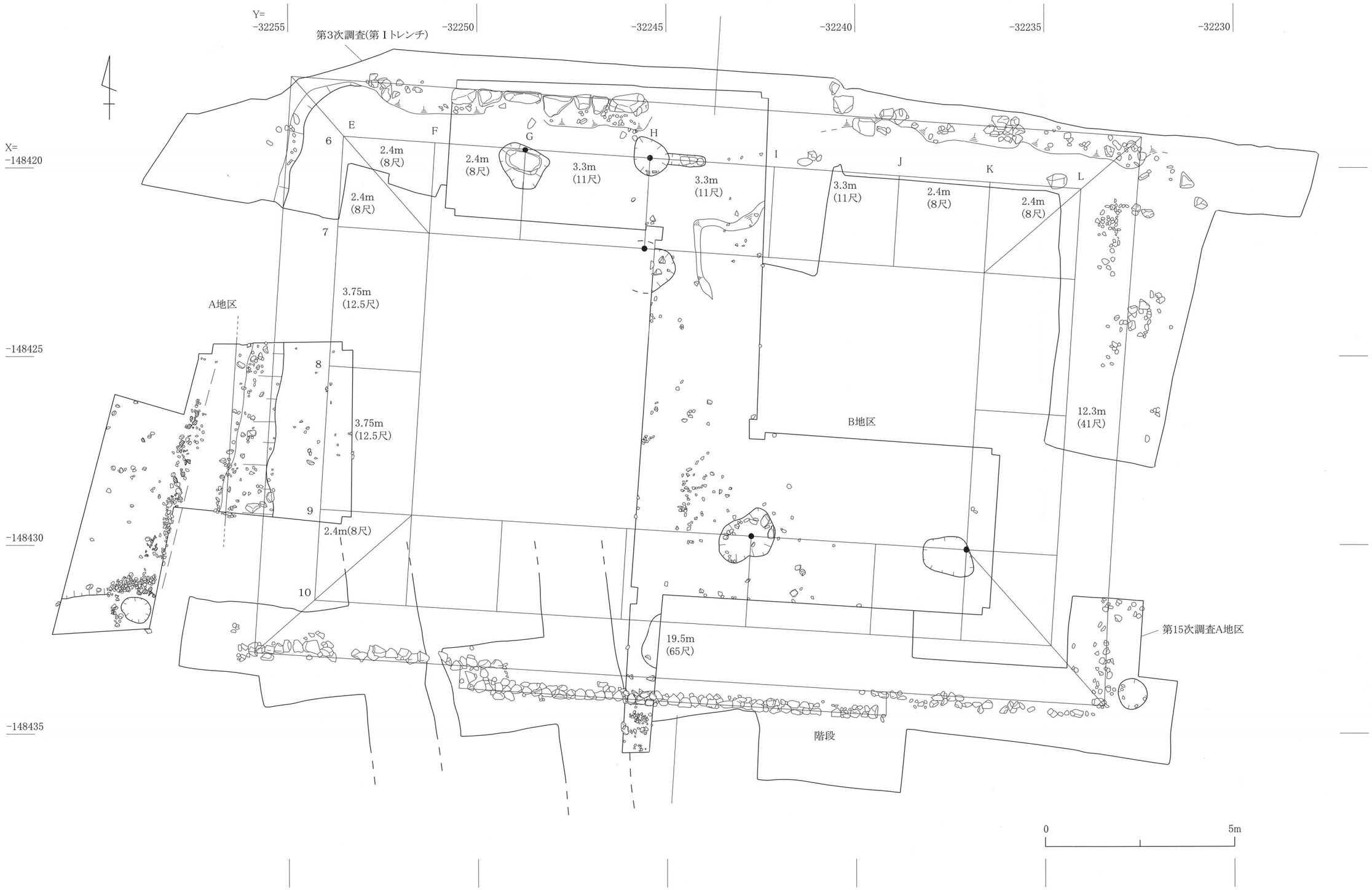
(2)　第５図に示したように現代耕土層から基壇上面までが約0.3m と浅く、基壇上面を覆う第３層から新出の KWH16(唐草文軒平瓦、平安時代後期、第８図12)が出土しているが、第３層からの遺物の出土は微量で、同層の堆積時期は遺物の年代観より大きく下ることが推定されること。

(3)　礎石掘形の遺存状態が悪く、今回の調査においても、礎石掘形の推定位置で確認できないものがあること。

などの理由により、基壇上面が大きく損なわれたことが推定される。金堂基壇上面の復元レベルについては、今後、塔基壇と金堂基壇とを繋ぐ箇所にトレンチを入れ、旧地表面(旧境内面)を確認してその推定を行うことが必要となる。なお、Ｂ地区の調査で KWH16が出土したことにより、金堂廃絶の時期について新たな所見を得ることができた。

金堂と回廊の取り付き(第７図、Ａ地区)

Ａ地区の調査で、約4.6m にわたって、金堂基壇の傾斜面を確認した。回廊の取り付きの痕跡がこの範囲に現れるとみて、トレンチを設定したが、基壇傾斜面の外部約4.4m の範囲では、取り付きの痕跡を見出すことはできなかった。基壇傾斜面外において、南北方向の幅約0.5m の石敷を検出したが、石敷の方向は金堂基壇西辺のラインと平行せず、基壇との関係は不明であり、後世の所産と考えられる。Ａ地区の西南隅近くで東西方向の石敷とそれに連なる落ち、その南側で径0.8m のピットを検出した。石敷と落ちを回廊基壇の北辺とみると、回廊基壇が金堂基壇外の南側へ大きくずれ込むことになることから、これらについても回廊基壇の痕跡と見做すことができない。


Y=
-32255
-32250
-32245
-32240
-32235
-32230
X=
-148420
-148425
-148430
-148435
第3次調査(第Ⅰトレンチ)
A地区
B地区
E
F
G
H
I
J
K
L
6
7
8
9
10
2.4m
(8尺)
3.3m
(11尺)
3.75m
(12.5尺)
12.3m
(41尺)
19.5m
(65尺)
2.4m(8尺)
第15次調査A地区
階段
0
5m

第７図　金堂基壇実測図

5）出土遺物（第８・９図　図版５・６）

今回の調査では、コンテナ約150箱分の遺物が出土した。大部分は瓦であり、瓦以外の遺物は少なかった。軒丸・軒平瓦は、(東大阪市教育委員会2007)の分類に準拠し各類型の数量を提示する。土器は、時期が判明するものを抽出し、各地区の層位の年代を捉えることを目的とする。

軒丸・軒平瓦

出土位置は、Ａ地区第３Ｂ層（９)、Ａ地区第３Ｃ層（３)、Ｂ地区第３層（12)、Ｃ地区第１層（１・２・７)、Ｃ地区第２層（６)、Ｃ地区第２´層（５)、Ｃ地区第３層（４・11)、Ｃ地区第３層上面（８)、Ｃ地区旧石垣裏込土（10）である。

KWM2Ａ（１）

単弁十三葉蓮華文軒丸瓦。１＋６の蓮子がめぐる。外区外縁は素文、内縁は珠文がめぐる。外区外縁に圏線をもつ。

KWM2Ｂ（２）

単弁十三葉蓮華文軒丸瓦。KWM2Ａと文様構成は同じであるが、外区外縁に圏線がなく、外区の珠文がKWM ２Ａよりも数が多い。

KWM6（３）

巴文軒丸瓦。巴頭部はまるく、左廻りの巴文である。

KWM7（４）

巴文軒丸瓦。巴頭部はまるく、右廻りの巴文である。

KWH1（５）

三重弧文軒平瓦。凸面に格子のタタキを施し、凹面に布目圧痕が残る。

KWH2（６）

変形重弧文軒平瓦。顎部から凸面にかけて、×文と○文の文様帯を配する。凹面には布目圧痕が残る。

KWH3（７）

偏行唐草文軒平瓦。外区、脇区に太い鋸歯文が巡り、内区に左偏行の唐草文を施す。

KWH4（８）

山形文軒平瓦。外区、内区ともに素文である。凹面に布目圧痕が残る。

KWH8（９）

均整忍冬唐草文軒平瓦。宝珠形の中心飾りから忍冬唐草文が伸びる。主茎との結節の結び付けは珠点で表す。

KWH12（10）

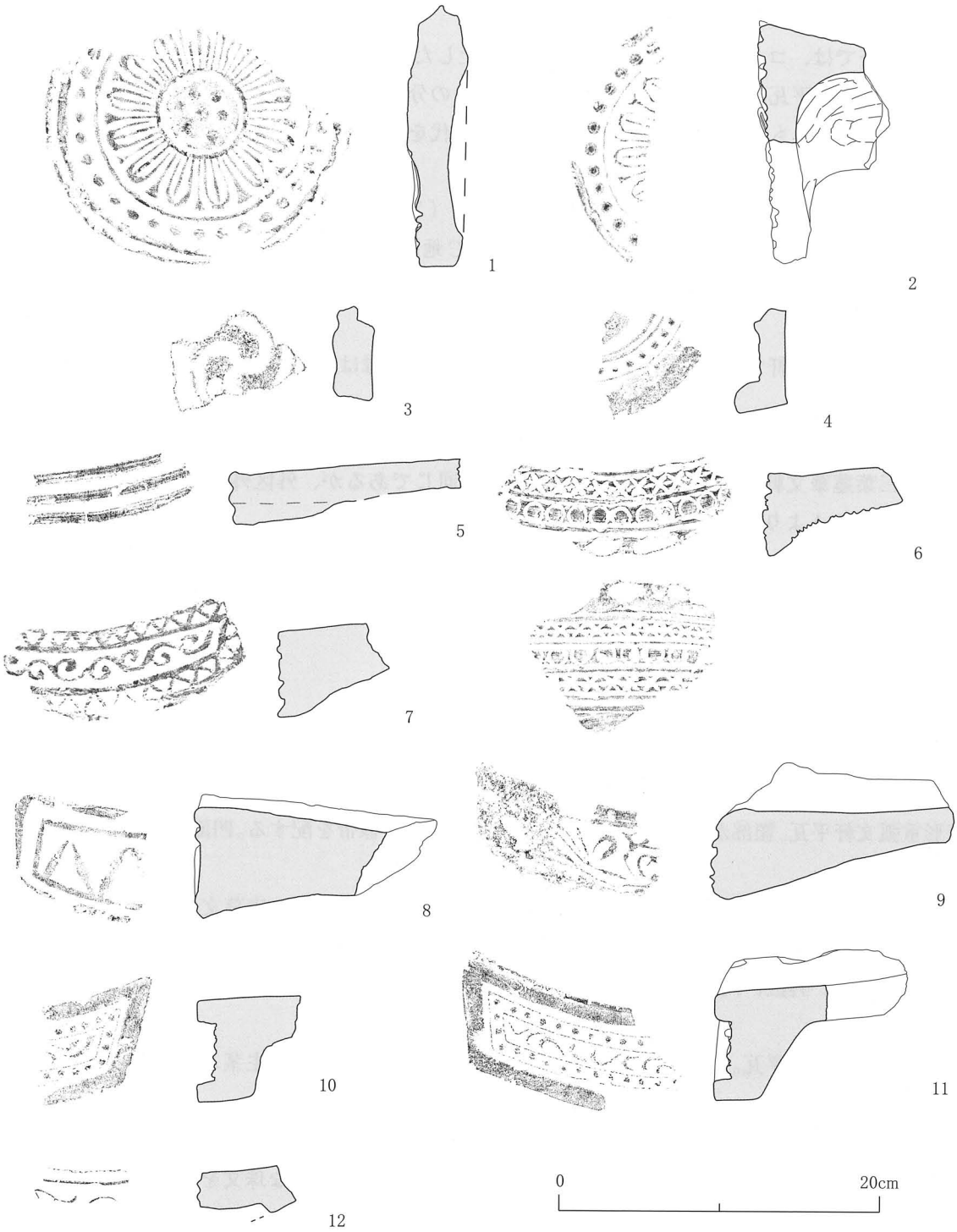
均整唐草文軒平瓦。中心飾りに下向き枝葉を持ち、外区、脇区に密な珠文を施す。唐草文は４回反転である。

KWH13（11）

均整唐草文軒平瓦。外区、脇区の珠文はKWJ12に比べやや疎。唐草文は３回反転である。

KWH16（12）

今回、新たに発見された型式であり KWH16とする。瓦当面下部を欠損しているが、唐草文軒平瓦と考えられる。内区に、断面三角形の唐草文が認められる。外区に文様がなく、内区外縁に断面三角形の圏線が１条めぐる。凹面には布目圧痕が残るが、凸面は残存状況が悪く調整は不明である。平安時代後期。

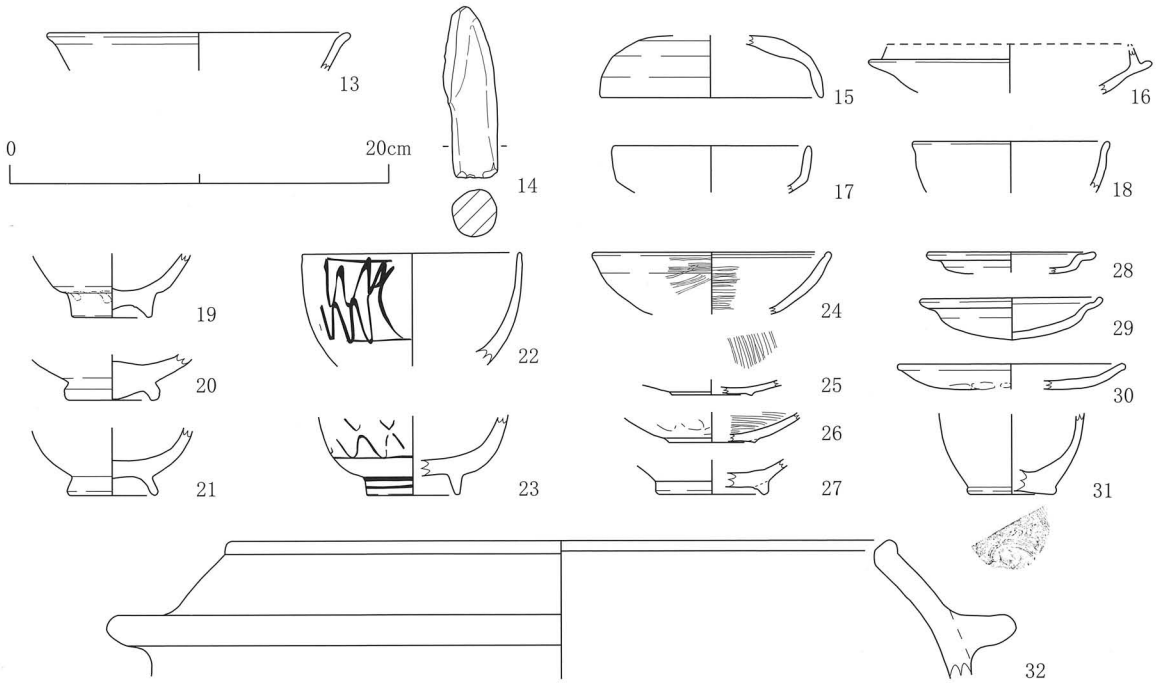


第８図　河内寺廃寺跡第19・20次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦実測図

第１表　各地区の軒丸瓦・軒平瓦出土数

	A 地区	B 地区	C 地区
KWM2A	0	0	5
KWM2B	1	0	3
KWM6	1	0	0
KWM7	1	0	1
KWH1	0	0	2
KWH2	4	0	9

	A 地区	B 地区	C 地区
KWH3	0	0	3
KWH4	0	0	1
KWH8	1	0	1
KWH12	0	0	2
KWH13	3	0	3
KWH16	0	1	0



第９図　河内寺廃寺跡第19・20次調査　出土土器・陶磁器実測図

土器

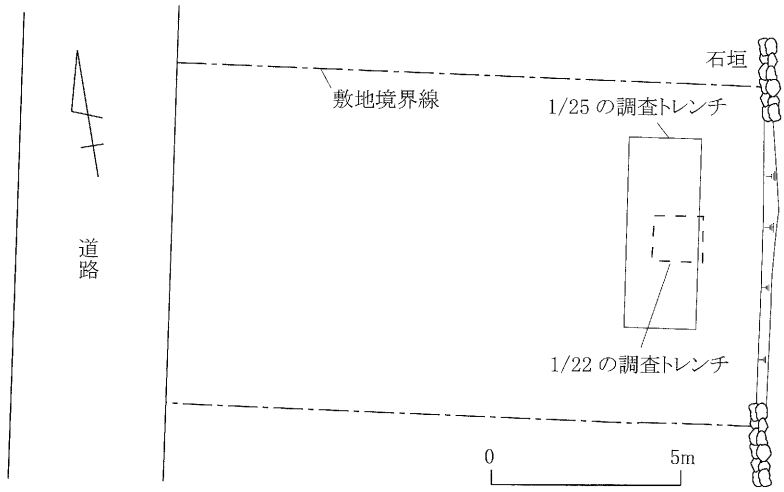
出土位置は、Ａ地区第３Ｃ層（13・14）、Ａ地区第４層（15～17）、Ｂ地区第４層上面（18）、Ｃ地区第１・２層（19～23）、Ｃ地区第３層（24～32）である。

13は、青磁椀である。口縁部を緩やかに外反させる。14は、瓦質土器羽釜の脚部である。13～14世紀であろう。15は、須恵器杯蓋である。天井部から口縁部にかけて丸く仕上げられており、口縁端部も　丸くおさめる。天井部外面に回転ヘラケズリを施すが粗雑である。中村編年のⅡ型式第５段階（中村1978、以下同じ）。16は、杯身である。立ち上がりは内傾気味で、内外面ともに回転ナデ調整である。Ⅱ型式第５段階。17は、無蓋高杯である。Ⅲ型式第２段階であろう。18は、土師器の杯である。口縁端部を緩やかに外反させる。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明である。８世紀の所産であろうか。19・20は、肥前陶器碗である。いずれも削り出し高台で、中央を削り残す。19の高台部分は露胎で、外面に鉄釉、内面に灰釉を掛け分けている。20は、高台部分は露胎で、内面に灰釉薬を施す。17世紀後半。21は、青磁碗である。畳付の部分が露胎である。22・23は、肥前磁器染付碗である。一重網目文を施す。17世紀後半。24は、大和型瓦器椀である。口縁部内面に沈線がめぐり、内外面ともに密なヘラミガキが施される。12世紀半ば。25・26は、見込みには、内面と一連で施されたと考えられるヘラミガキが施される。高台は断面三角形を呈する。27は、いわゆる山茶碗である。見込みには、直接重ね焼きをした痕跡が残る。高台は、幅が広くやや丸みを帯びる。12世紀であろう。28・29は、「て」の字状口縁を持つ土師皿である。内外面ともにナデ調整を施す。10世紀後半～11世紀初め。30は、土師皿である。見込みは浅く、逆「ハ」の字に開く口縁部を持つ。底面には指頭圧痕が残る。13世紀前半。31は、須恵器の壺である。底部には回転糸切り痕が残る。９世紀末～10世紀初頭。32は、土師質土器の羽釜である。口縁部は内湾しており、端部で上方へと摘み上げ肥厚させる。鍔は貼り付けで、端部を丸くおさめる。13世紀である。

6）河内寺跡第18次調査

① 調査の概要

平成21年12月、東大阪市河内町674番地の16の一部において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。申請地は河内寺廃寺跡の伽藍外ではあるが、史跡地ときわめて近接した位置関係にあり、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため事前の確認調査が必要な旨、個人に通知した。確認調査を平成22年１月22日に実施した（第10図の点線箇所）。調査の結果、後述するように、奈良時代の遺物包含層を検出したため、埋蔵文化財に影響が及ぶ箇所を対象に発掘調査を実施することになった（第10図の実線箇所）。発掘調査は平成22年１月25日に実施した。調査面積は併せて約10.4㎡である。調査は確認調査で検出した層位に準拠し、遺物を含む層の掘削は慎重に行い遺物の検出に努めた。確認した層位は次のとおりである。



第10図　河内寺跡第18次調査トレンチ位置図

第１層　表土ないし耕土。

第２層　床土。

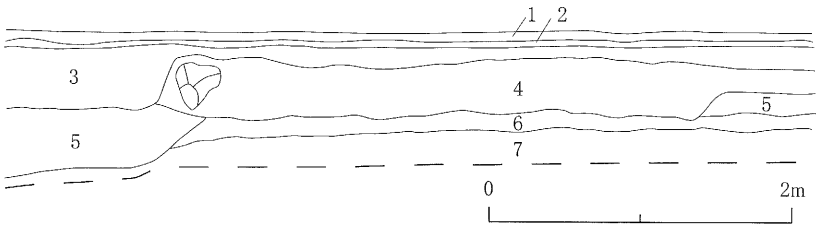
第３層　灰オリーブ色（５Y5/2）シルト質細粒砂。奈良時代の土師器を含むが、併せて現代の製品が少量混じることから堆積時期は近年のものである。

第４層　オリーブ黒色（５Y3/2）細礫混じりの中礫～巨礫。

第５層　灰色（N4/0）粘土混じり細粒砂。奈良時代の土師器や瓦を含む。同期の遺物包含層をなす。

第６層　オリーブ黒色（５Y3/2）粘土混じり細粒砂。

第７層　暗灰色（N3/0）シルト質粘土。土層の色調や土質が第13次調査で検出した南面回廊付近のベース層と酷似している。



1 表土ないし耕土
2 床土
3 灰オリーブ色（5Y5/2）
　シルト質細粒砂
4 オリーブ黒色（5Y3/2）
　細礫混じり中礫～巨礫
5 灰色（N4/0）粘土混じり細粒砂
6 オリーブ黒色（5Y3/2）
　粘土混じり細粒砂
7 暗灰色（N3/0）シルト質粘土

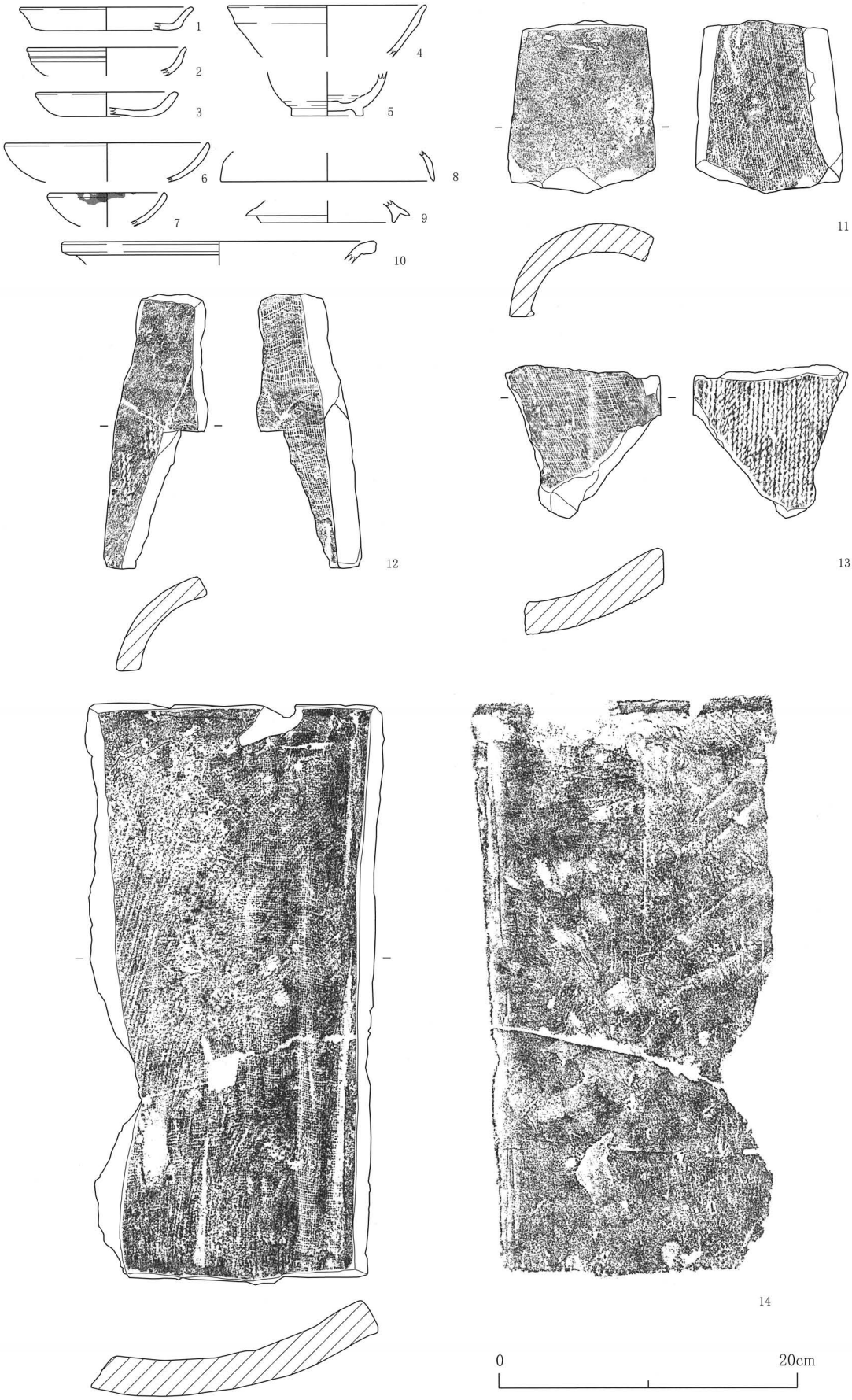
第11図　河内寺跡第18次調査土層断面図

② 出土遺物（第12図　図版８）

まず、発掘調査での各層の遺物出土状態について触れておきたい。第３層では、須恵器杯・甕、土師器小皿、平瓦・丸瓦の各破片が出土した。ただし、前記したように現代の製品と混在しており、堆積時期は現代に下るものである。第５層から第６層の上部にかけて、須恵器杯・甕・壷、土師器小皿・甑・甕、黒色土器椀、平瓦・丸瓦の各破片が見られた。

今回図示した遺物は、１・２・３・４・５・11・12が第５・６層、６・７・８・９・10・13・14が第３層から出土したものである。

１・２・３・６・７は、土師器の皿である。１・２・３は外反気味の口縁部を有する。２は、外面



第12図　河内寺跡第18次調査　出土遺物実測図

に２条の沈線がめぐる。いずれも10～12世紀であろう。４は、黒色土器の椀である。口縁端部を緩やかに外反させる。内黒であるが、摩滅が激しく調整は不明である。９世紀。５は、須恵器の壺である。内外面ともに回転ロクロナデを施す。８～９世紀。６・７は内湾気味の口縁部を持つ。７は、内外面にススが付着する。いずれも10～12世紀であろう。８・９は、須恵器杯蓋である。８の口径は約14cmで、口縁端部はやや鋭くおさめる。中村編年のⅡ型式第５段階（中村1978）か。９のかえりは長く、内湾気味である。Ⅲ型式第１段階。10は、須恵器の甕である。外反する口縁端の端を屈曲させ、外方へと肥厚させる。断面方形を呈する。Ⅱ型式第６段階またはⅢ型式第１段階の所産と考える。11・12は丸瓦、13・14は平瓦である。11の凹面には布目が残り、凸面はナデが施させる。12の凸面は、縄目タタキを施した後、ナデを行う。凹面には布目が残る。13の凸面に縄目タタキが残り、凹面に布目が残る。14の凸面には、斜め方向の線が認められ、ナデによって消されている。凹面には明瞭に斜め方向の線が認められ、布目が残る。いずれも平安時代～鎌倉時代。

７）成果と課題

今回の調査では、金堂の建物規模について、一定の復元案を提示できたなど、河内寺廃寺跡の様相に新たな知見を得ることができた。それと同時に、そこから派生し今後追究すべき課題も自ずと明らかになった。ここでは、塔、金堂の別に成果と課題を箇条書きにて列挙しておきたい。

１　塔跡で15世紀以降とされる中世仏堂の礎石を検出した。塔基壇は創建時の礎石を再利用して中世仏堂を構築している。既往の調査で出土した軒瓦や土器の年代観から、塔は11世紀後半まで存立し、12世紀前半に焼失したと考えられることから、中世仏堂は塔廃絶後の築造にかかり、礎石・礎石掘形はもとより、塔基壇も改変を受けている。塔の創建段階の姿を知るには、乱石積基壇の化粧の状況を再確認する必要が出てきた。今回の調査でも、以前に拡張した基壇と推定した石列は未確認であることから、とくにこれまで未確認である基壇東南隅などの検出が急務となった。また塔基壇の東辺で基壇の傾斜面と犬走りを確認したことから、その延長と広がりを確認する必要がある。

２　金堂基壇の上面で検出した礎石掘形の位置関係を検討した結果、四面庇付建物が復元できた。復元プランとしては、桁行が中央間３間、脇間が各２間の７間、梁行が中央間２間、脇間が各１間の４間となり、桁行19.5m（65尺）梁行12.3m（41尺）の規模が推定される。基壇西辺を確認した際、基壇の傾斜面を検出したため、今後は西辺で基壇傾斜面の広がりを再確認する必要が出てきた。さらに、現状の金堂基壇上面は塔基壇と1.6mの比高差があり、大きく削平を受けたことが予想されるが、塔基壇の化粧確認と同様、旧境内面のレベル確定の調査が史跡の整備にあたり必須の条件となった。また基壇南辺の張り出しを階段と推定しているが、現状の張り出しの東西端は金堂建物の桁行中央間の両端と合致しないことから、その確認も今後必要となった。

３　金堂と回廊の取り付きについては、過去に金堂基壇の東側で痕跡の有無を調査した（第14次調査）。今回はその西側にトレンチを設けたが、明確な痕跡は見出せず残課題となった。金堂基壇の西側では、近現代の耕作に伴う遺構面の撹乱が著しいが、今後も取り付きの確認を継続する必要があろう。

最後に、今回の調査にあたり、整備委員会委員のほか、中島正氏（木津川市）、荒木浩司氏（斑鳩町）のご教授を得た。記して謝意を表したい。

【参考文献】

中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

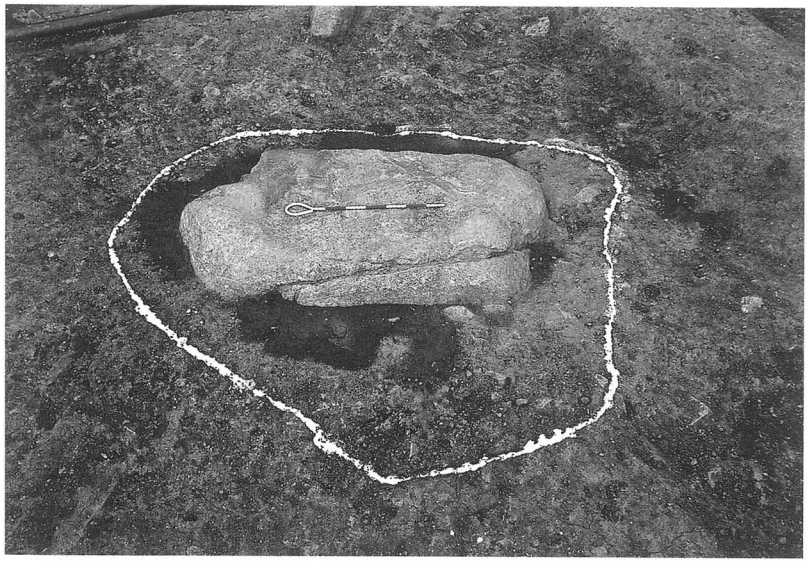
中村　浩1987「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会

東大阪市教育委員会2007『河内寺廃寺跡発掘調査報告書』

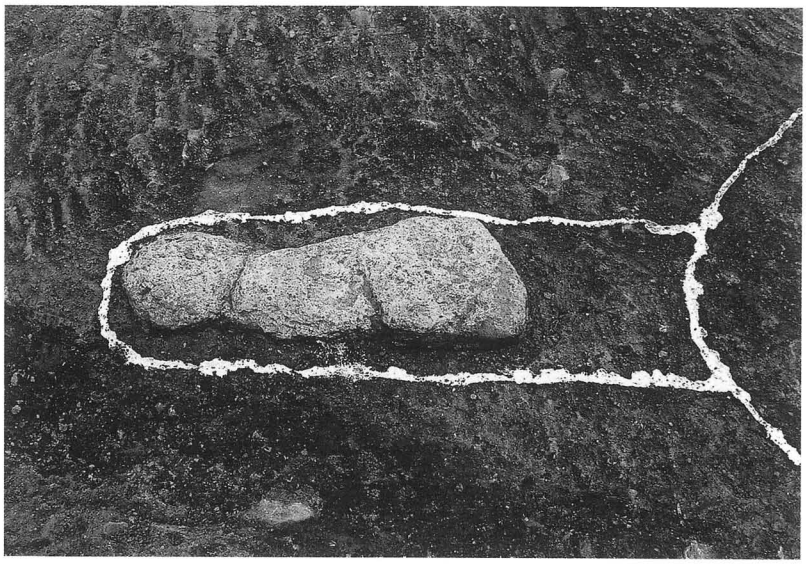
1　A地区
金堂基壇西辺と石敷検出（南西から）

2　B地区
金堂基壇全景（南から）

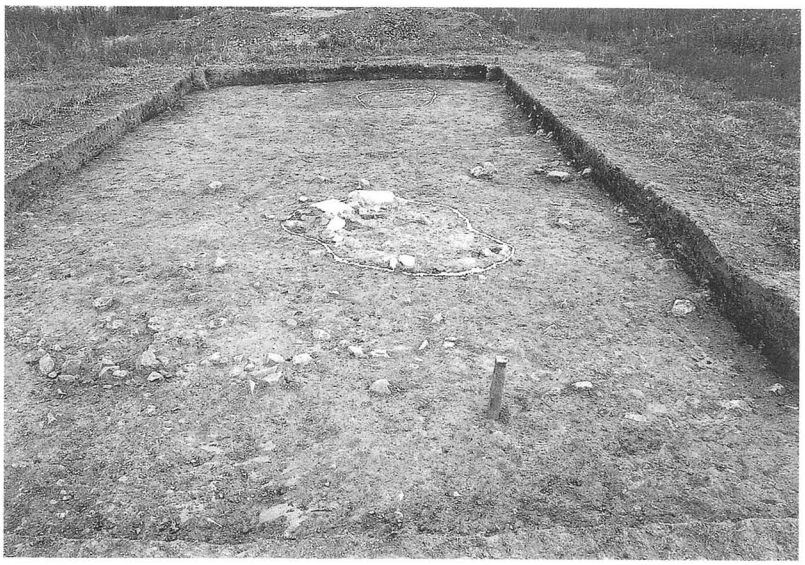
3　B地区
金堂基壇北辺と礎石掘形ほか検出状況
（東から）



1　B地区
G６礎石検出状況（南から）

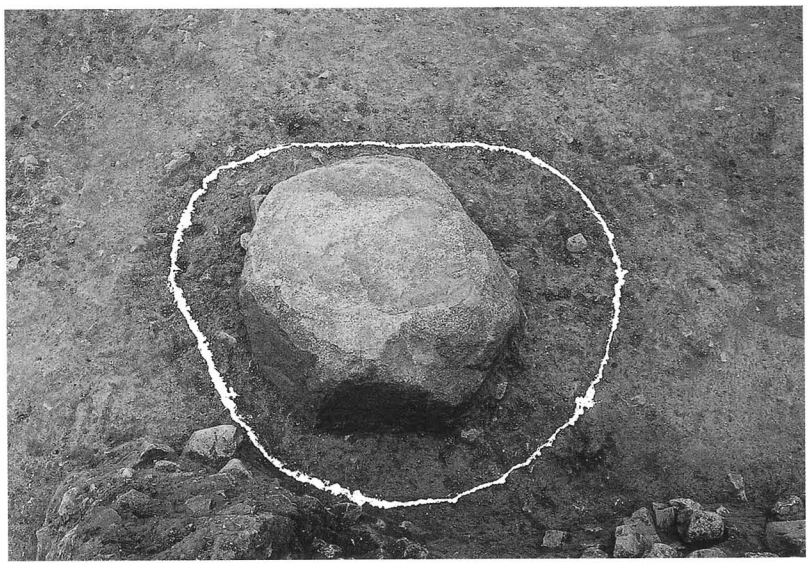


2　B地区
凝灰岩の集積(扉口)検出状況(北から)



3　B地区
礎石掘形Ｉ９・Ｋ９検出状況（西から）

1　C地区
塔基壇全景（北西から）



2　C地区
D２礎石検出状況（南から）

3　C地区
塔基壇東辺の傾斜面・石敷・基壇版築検出状況（北東から）

1　C地区
C５礎石検出状況（北から）

2　C地区
塔基壇南辺の石列１（右）と石列２（左）
（東から）

3　C地区
第３層内ＫＷＭ２出土状況

1

2

5

7

6

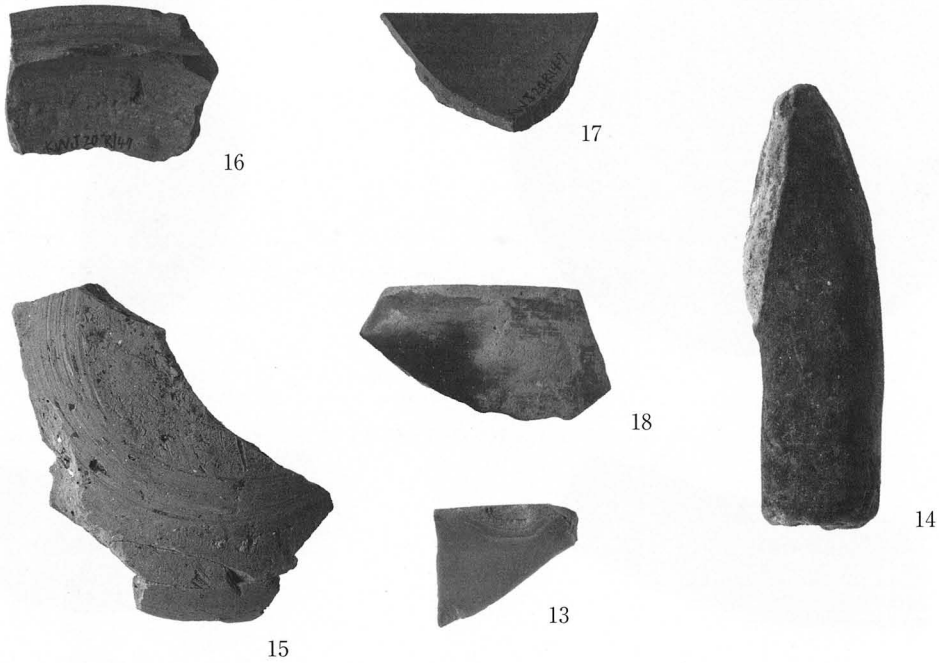
8

9

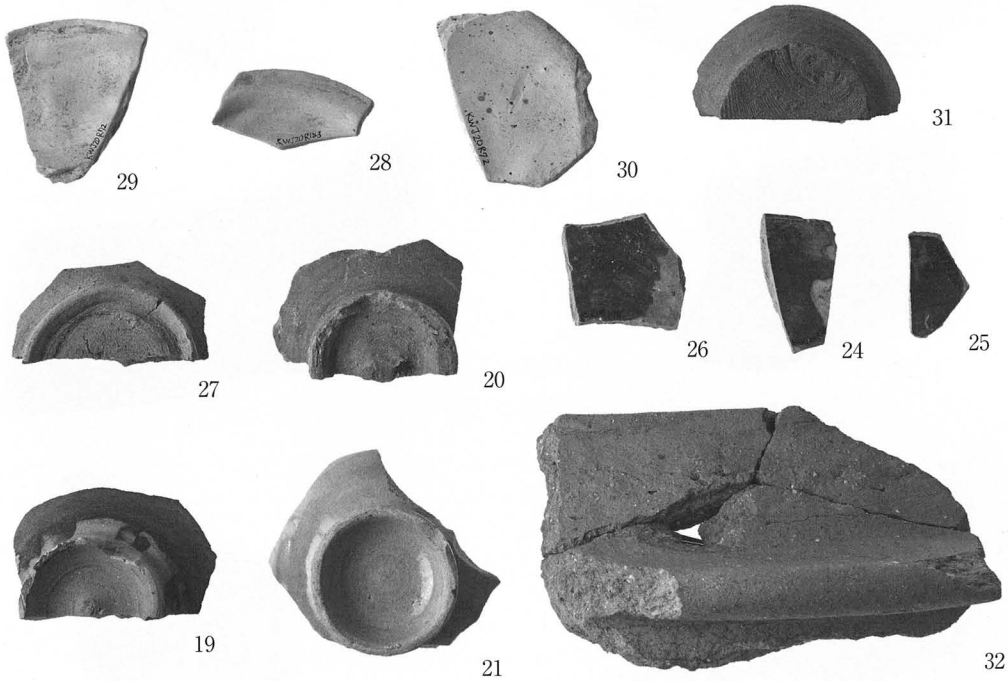
11

10

各地区出土　軒丸・軒平瓦



1．A・B地区出土須恵器　杯蓋・杯身・高杯、土師器　椀、青磁　椀、瓦質土器　足鍋

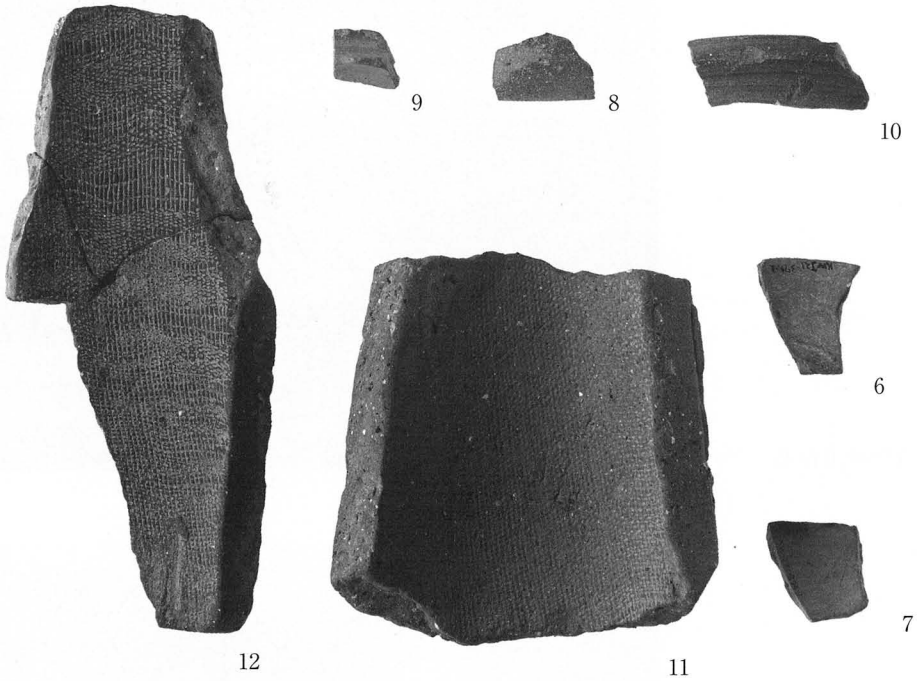


2．C地区出土須恵器　壷、土師器　皿、陶磁器　碗、山茶椀、土師質土器　羽釜、瓦器　椀

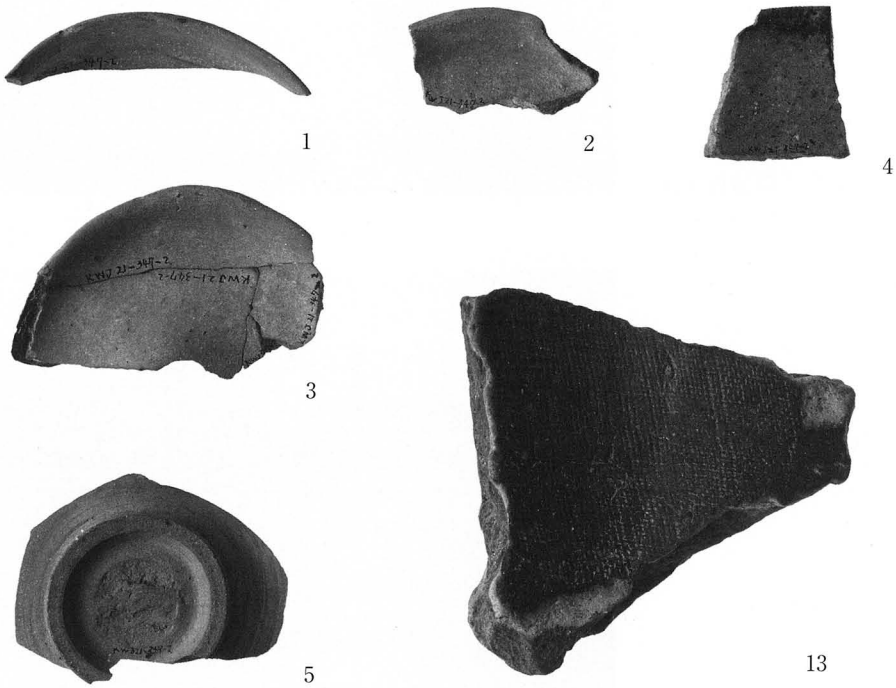
1　遺物検出作業

2　トレンチ掘削後状況

3　土層断面（西から）



1．第3層、第5・6層出土須恵器　杯蓋・杯身・甕、土師器　皿、丸瓦



2．第3層、第5・6層出土須恵器　壷、土師器　皿、黒色土器　椀、平瓦

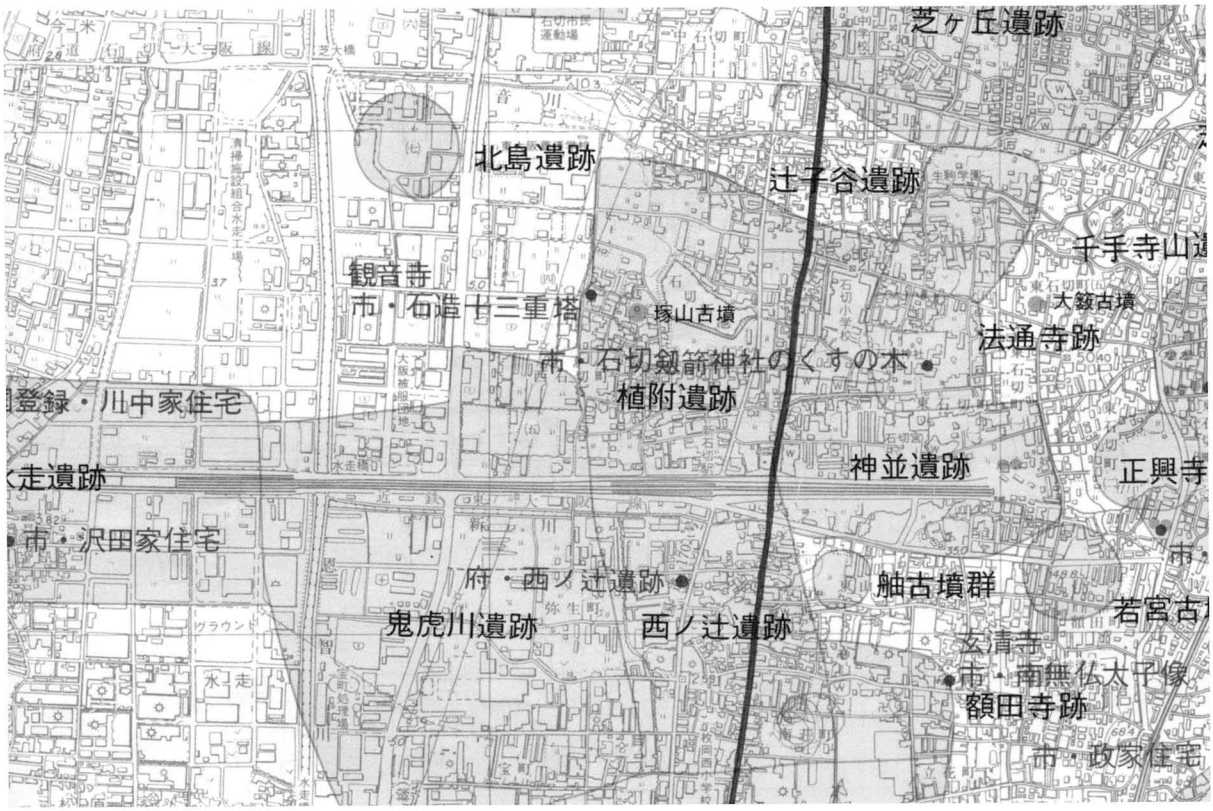
第４章　植附遺跡第20次発掘調査

１）はじめに

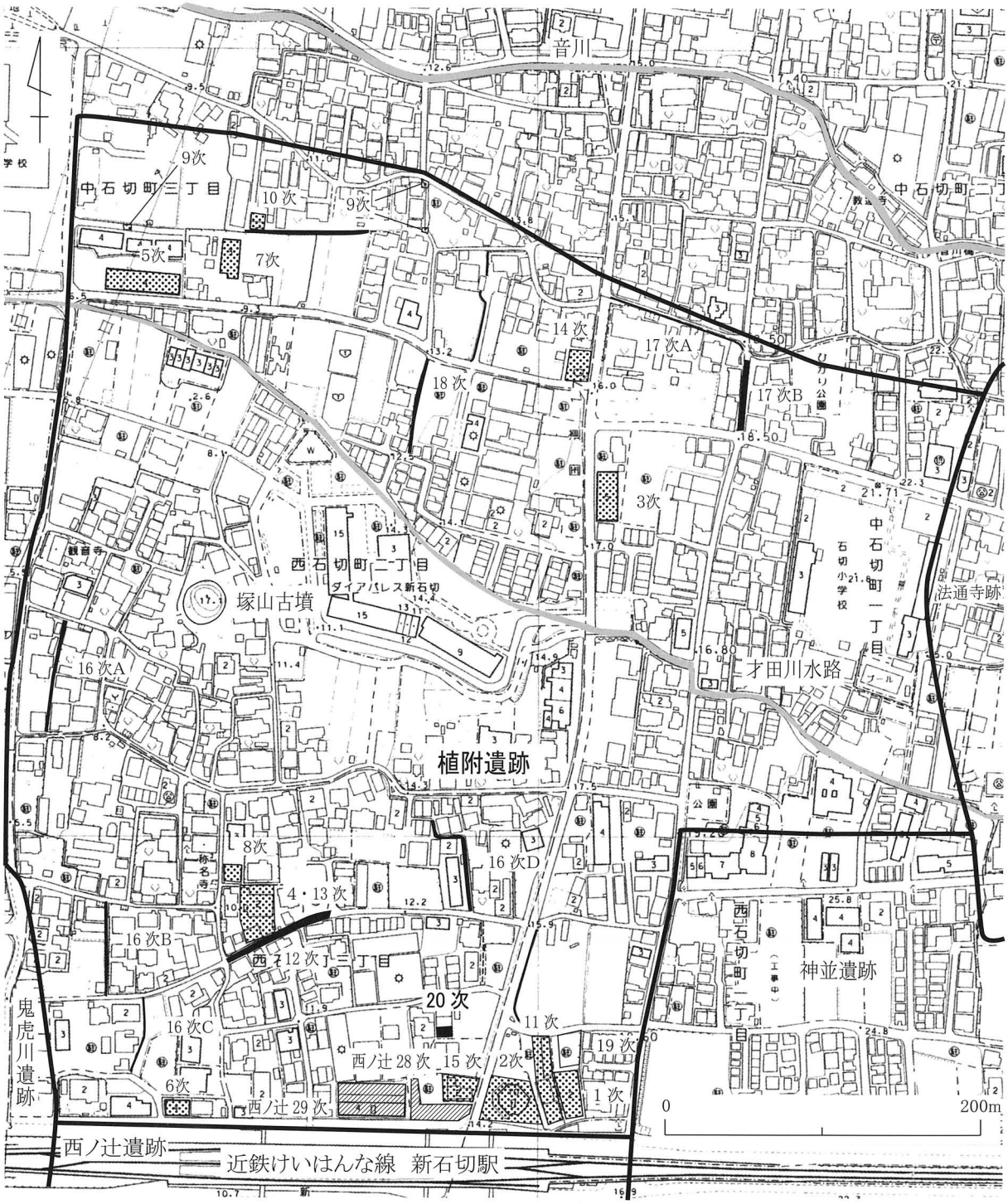
植附遺跡は、東大阪市西石切町１～３丁目から中石切町１・３丁目に広がる弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。

本遺跡は、昭和37年に行なわれた小規模な調査で弥生土器が確認されてその存在が明らかとなり、昭和61年以降、今回までに20次におよぶ発掘調査は行なわれてきた。弥生時代の集落、古墳時代の小古墳群と集落、鎌倉～室町時代の集落･生産遺跡として知られ、縄文土器、弥生土器、石器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器などが出土している。遺構としては古墳時代の住居跡、古墳（小型低丘墳）、鎌倉～室町時代の掘立柱建物、井戸、土坑墓（古人骨伴う）などがあり、遺物としては他に土錘などの土製品、石臼など石製品、曲物などの木製品、ウマなどの動物遺存体がある。また、中央の西よりには塚山古墳が存し、近年、遺跡の南部における下水道工事に伴う調査（第16次Ｂ－12・13地区）や西ノ辻遺跡第28次で埴輪が確認されており、埋没した埴輪を伴った古墳の存在を窺わせている。

平成22年６月８日付けで、西石切町３丁目79番地における建設工事の届出があり、６月15日に確認調査を実施し、須恵器、土師器、瓦器片を含む中世の遺物包含層および溝状遺構が確認された。この結果、代理者を通して協議し、基礎部の土壌改良工事が遺物包含層や検出遺構におよぶことから、発掘調査の必要が生じ、再度の届出によって調査範囲を確定した。届出者がＮＰＯ団体であることから補助対象とし、建設部分について発掘調査を行なうことになった。調査は、平成22年９月17日から10月31日までの間実施した。



第１図　遺跡周辺図（１/15000）



第２図　調査地位置図

第１表　調査歴表

次数 理由	調査期間	調査地	調査面積 ㎡	概・報告書	概要（主な遺構・遺物）
1 倉庫および車庫建設	S61.10.27 ～S61.12.17	西石切町１丁目 52・53	400	『植附遺跡発掘調査報告集－第１・6・12・15次調査』2002	弥生時代の土器だまり、中世の溝・土坑・墓。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器、石製品、土製品、金属製品、古人骨。
2 新石切駅前ビル建設	S62.2.26 ～S62.3.19	西石切町１丁目	800	『㈶東大阪市文化財協会概報集1996年度(1)』1997	弥生時代の土坑、中世の井戸・溝・土坑・墓。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器、古人骨。

次数 理由	調査期間	調査地	調査面積 ㎡	概・報告書	概要（主な遺構・遺物）
3 共同住宅	S63.1.13 ～ S63.3.17	中石切町１丁目 449 － 1・－ 4	313	『植附遺跡第３次発掘調査概報』1997	古墳時代の竪穴住居、古墳・平安時代の溝・ピット。須恵器、土師器、製塩土器。
4 居宅建て替え	S63.5.24 ～ S63.6.9	西石切町１丁目 320	175	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－昭和63年度－』1988	近世以降の石組水路・土坑、古墳時代のピット。弥生土器、石器、須恵器、土師器、瓦器、磁器、土製品。
5 共同住宅	H4.8.5 ～ H4.11.16	中石切町３丁目 2653 － 1	571	『植附遺跡第５次発掘調査報告書』1999	縄文時代海蝕崖、弥生時代の住居、小型低丘墳。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、製塩土器、石製品、土製品、金属製品、木製品、動物遺存体。
6 ビル（共同住宅）	H5.7.1 ～ H5.8.26	西石切町３丁目 158 － 1	170	『植附遺跡発掘調査報告集 － 第１・６・12・15次調査』2002	近世の溝、鎌倉時代の土坑、弥生・鎌倉時代の河道。弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、製塩土器、瓦。土製品、埴輪、動物遺存体。
7 共同住宅	H6.5.16 ～ H6.5.17	中石切町３丁目 2646 － 1	6.6		弥生時代の溝。弥生土器。
8 （緊急）	H7.9.14	西石切町３丁目 318 － 14	103		
9 公共下水道管渠築造工事	H7.9.7 ～ H8.1.24	中石切町３丁目 3 － 10 － 5	175	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1995年度』1997	奈良時代の井戸、古墳時代のピット・溝。縄文土器、須恵器、土師器、製塩土器、埴輪、石製品、瓦、動物遺存体。
10 （緊急）	H7.11.15 ～ H7.11.17	中石切町３丁目 2634 － 2	63		古墳時代の土坑。須恵器。
11 共同住宅	H8.10.9 ～ H8.11.28	西石切町１丁目 69 － 1、－ 2	329	『植附遺跡第11次発掘調査報告』2002	弥生時代のピット・土坑、中世の掘立柱建物・井戸。弥生土器、石鏃、石庖丁、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、磁器、陶器、砥石、漆器椀。鉄器、動物遺存体。
12 道路改良	H8.12.2 ～ H8.12.26	西石切町３丁目 1 － 5 ～ 31	108	『植附遺跡発掘調査報告集 － 第１・６・12・15次調査』2002	平安時代の溝・ピット。須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、瓦質土器。
13 個人	H8.12.16 ～ H8.12.17	西石切町３丁目 320 － 1	144		中世のピット。土師器、瓦器。
14 公共下水道管渠築造工事	H9.2.11 ～ H9.2.20	中石切町３丁目 4	36	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1998年度』1999	古墳時代の溝・土器だまり、飛鳥～奈良時代の耕作跡。
15 ビル建設	H10.4.24 ～ H10.5.19	西石切町３丁目 76 － 3	195	『植附遺跡発掘調査報告集 － 第１・６・12・15次調査』2002	弥生時代の溝、中世の井戸・墓、ピット。弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器、磁器、土製品、人骨、動物・植物遺存体。
16 公共下水道管渠築造工事	H16.8.3	西石切町３丁目 164 ～ 166、208 ～ 209等	199	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成16年度－』2005	中世の土坑。埴輪（円筒・朝顔形・形象）、須恵器。
17 公共下水道管渠築造工事	H16.7.12 ～ H16.10.1	中石切町１丁目 1 ～ 3、4 ～ 10	113	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　報告－平成16年度－』2005	緑釉陶器、須恵器、黒色土器、土師器。
18 公共下水道管渠築造工事	H18.6.14 ～ H18.6.16	西石切町２丁目 27 － 1 ～ 404	34	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成18年度－』2007	奈良時代の土師器・須恵器。
19 倉庫建設	H20.4.28 ～ H20.5.16	西石切町１丁目 449 － 1・2	70	『倉庫建設に伴う植附遺跡第19次発掘調査概報』	弥生時代の土坑、中世の溝・土坑・ピット。弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器。
20 ＮＰＯ団体事務所建設	H22.7.27 ～ H22.8.11	西石切町３丁目 79	80	本書	古墳時代の溝・土坑・ピット、鎌倉時代の鋤溝。須恵器、土師器、瓦器、サヌカイト、動物遺存体。

西ノ辻遺跡調査歴表（抄－参考）

次数 理由	調査期間	調査地	調査面積 ㎡	概・報告書	概要（主な遺構・遺物）
28 ビル建設	H1.11.13 ～H2.1.27	西石切町３丁目 76	390	『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告』1991	弥生時代の溝、古墳時代の土坑・ピット、平安～室町時代の柱穴・溝・土坑・井戸・墓。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器、瓦、製塩土器、埴輪、石製品、土製品、金属製品、木製品、動物遺存体
29 銀行建設	H2.2.8 ～H2.3.30	西石切町３丁目 135－１	1000	『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告』1991	鎌倉時代の土坑墓、中世の土坑・ピット。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器、製塩土器、土製品、古人骨

＊西ノ辻遺跡第28・29次調査地は、現在、植附遺跡内になっている（第２図参照）。

２）層位（第５図　図版４・６）

盛土

第１層　灰色（7.5Y5/1）砂混じりシルト質土、やや粘質で黄褐色（2.5Y5/6）シルト・砂粒含む。

第１´層　暗緑灰色（10G4/1）砂混じり粘質土。

第２層　オリーブ灰色（2.5GY5/1）・灰オリーブ色（５Y5/2）砂混じりシルト質土。土師器、瓦器、黒色土器、須恵器（捏鉢・杯身・甕など）、陶器、磁器の小・細片出土。

第３層　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂混じりシルト質粘土、小・細礫少し含む。土師器、瓦器、須恵器、サヌカイト、動物遺存体など出土。第１遺構面。

第４層　灰黄褐色（10YR4/2）・黒褐色（10YR3/1）砂礫混じりシルト質粘土。無遺物。第２遺構面。

第５層　明黄褐色（10YR6/6）・黄灰色（2.5Y5/1）砂礫混じりシルト質粘土。地山。

溝Ⅰ　暗灰黄色（2.5Y5/1）砂～小礫混じりシルト質粘土。

３）遺構

調査は、上部の一部は搬出するものの、敷地北側が駐車場として使用され続けていることもあって、調査地を東（以下、東部）と西（以下、西部）に分け、反転して調査することになった。

東部および西部とも、確認調査で確認した盛土および第１層の耕土と現代の撹乱坑の大半を機械掘削と人力掘削で除去して、第２層以下を層ごとに人力掘削し、遺物・遺構を検出していった。第４層で検出した遺構は一覧表（第２表）を作成し、個々の遺構の計測値、埋・堆積土、出土遺物を列記した。本文における遺構説明は主なものに限った。

第２層は、瓦器・土師器・須恵器などの細片みられたが、陶磁器片があり、江戸時代の埋土層。

第３層は、土師器、黒色土器、須恵器、弥生土器片を包含した室町時代の整地層で、鋤溝などの耕作跡を検出した。

第４層は、いわゆる地山相当層で遺物はなかった。上面で、溝・土坑などを検出した。

第５層は地山層である。

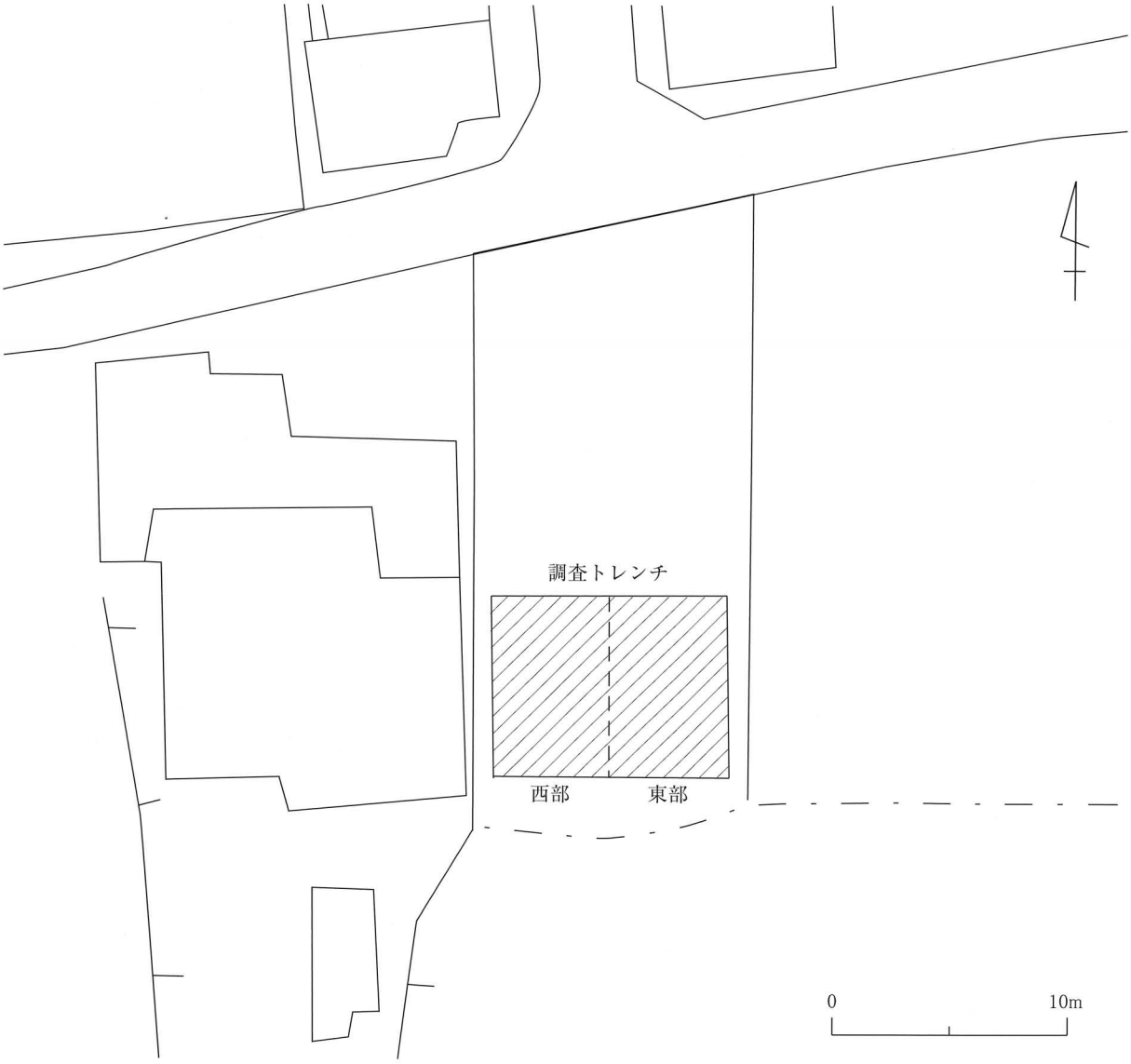
＜遺構表記について＞

遺構番号は検出層によって表記方法を変えた、以下のとおりである。

第３層上面遺構　溝－アラビア数字（溝１、溝２など）　ピット－小ローマ字（Ｐａ・Ｐｂなど）

第４層上面遺構　溝－ローマ数字（溝Ⅰ、溝Ⅱなど）　ピット－アラビア数字（Ｐ１、Ｐ２など）

土坑－アラビア数字（土１、土２など）



第３図　調査トレンチ位置図

第３層上面遺構－第１遺構面－（第４図　図版１・２）

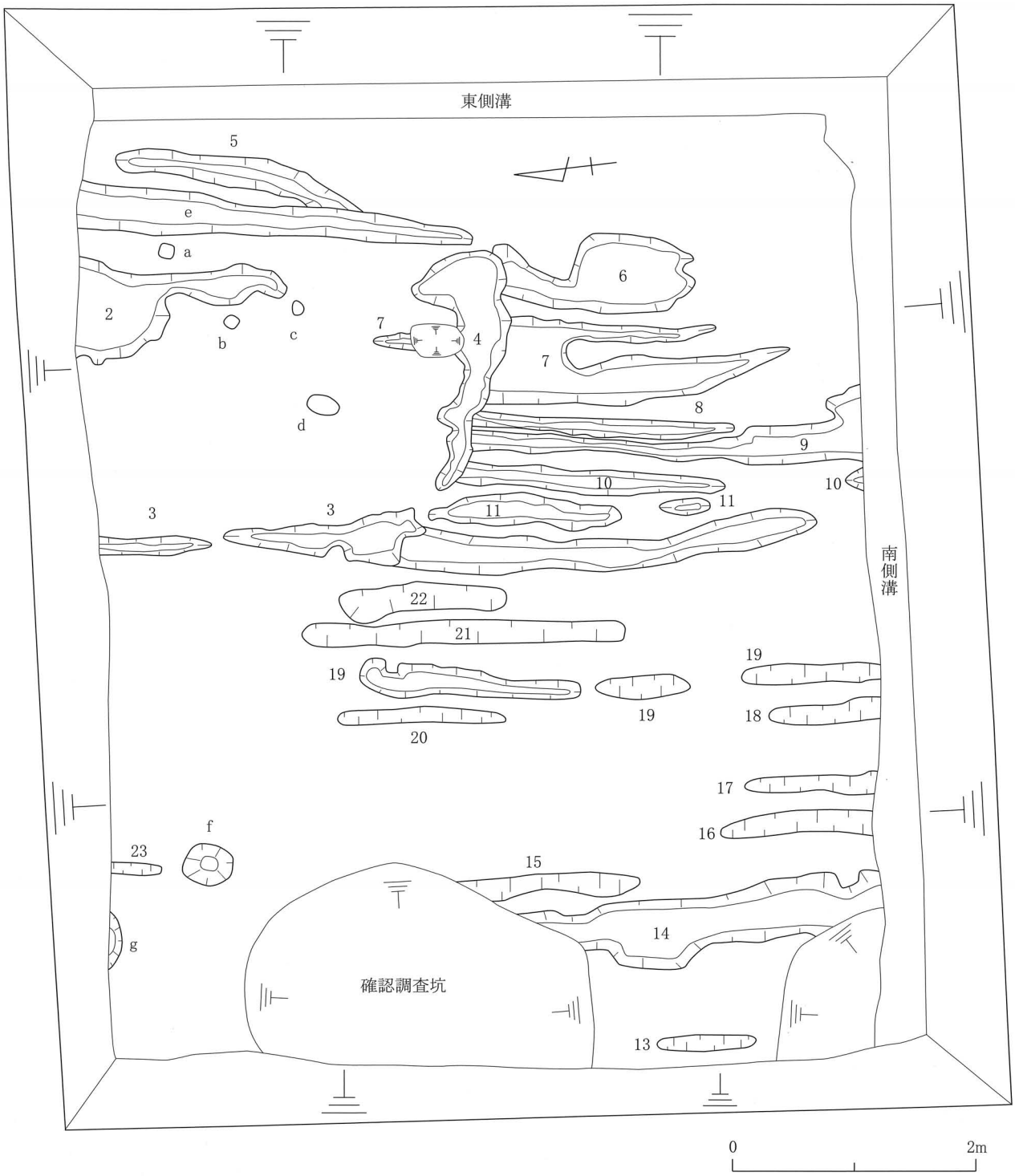
第３層は、小・細礫少し含むにぶい黄褐色砂混じりシルト質粘土で、瓦器の皿（１）・椀（２～７）、土師器の皿（８・９）・羽釜（10）・甕・椀・高杯・かまど、黒色土器、須恵器の杯蓋（11・12）・杯身（13）・壺（14）・甕（15）・器台（16）・高杯、平瓦、サヌカイト、動物遺存体（ウマの下顎第３後臼歯、ウマ or ウシ寛骨－左右不明）などが出土した。この上面で、溝23条（溝１～23）と、ピット７個（ＰＡ～ｇ）を検出した。

溝は、耕作に伴うもので、埋土および切り合い状況から３時期に分けられる。

東部北側域の南北方向の溝１・３および東西方向の溝４は、埋土が緑灰色（10G5/1）砂礫混じりシルト質粘土で長方形に区画する形態をなしていた。各溝内から須恵器・土師器・瓦器・黒色土器の小・細片、溝１からは土錘（28）などが出土した。

溝１によって南端が切られている溝５とその西の溝２の埋土はオリーブ灰色（2.5GY5/1）・青灰色（５Ｂ G5/1）砂礫混じりシルト質粘土で、瓦器・土師器の小・細片が少量出土した。

溝６～23は、ほぼ南北方向に走り、埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じりシルト粒含む灰色（7.5Y5/1）砂礫混じりシルト質土－溝２・６・７・９・11・22・19・17・14－と青灰色（10BG5/1）・灰色（7.5Y5/1）



第４図　第３層上面遺構平面図

砂礫混じりシルト質土－溝８・10・12・21・20・18・16・23・13－の２種で、溝１から土製紡錘車（28）、溝６から土師器高杯（26）・須恵器杯身（27）などと、各溝内からは土師器・須恵器・瓦器の小・細片が少量出土したものがあった。溝６～10は溝４に、溝12は溝３によって北端が切断されていた。

ピットは、東北部の５ピット（Ｐａ～ｅ）はいずれも径が20～10cmと小さく、埋土が青灰色（10BG5/1ないし５BG5/1）砂混じりシルト質粘土で、杭跡と考えられる。西北部の２ピット（Ｐｆ・ｇ）は浅いすり鉢状のやや径の大きなもので、Ｐｆは埋土が青灰色（10BG5/1）砂混じりシルト質粘土で

内からは瓦器・土師器の小・細片が出土した。Ｐｇの埋土は灰色(7.5Y5/1)砂礫混じりシルト質土であった。

溝は耕作に伴う畝間溝などで、溝６～23群（２時期)、溝５と溝２、溝１・３・４の順に形成されたものと思われる。

ピットはＰ１を溝１底面で検出したことから、溝１群以前のものと考えられる。

これらの遺構は、遺構内および第３層から須恵器・瓦器・土師器など、２・３層から須恵器・瓦器・土師器とともに陶磁器片が出土しており、室町～江戸時代前半までのものと考えられる。

第４層上面遺構－第２遺構面－（第５図　第２表　図版３～６）

第４層は、中・粗粒砂、小・細礫の混じる灰黄褐色・黒褐色シルト質粘土で、遺物は包含していなかった。この上面で、溝４条（溝Ⅰ～Ⅳ)、土坑５基（土１～５)、ピット19個（Ｐ１～19）を検出した。各遺構状況については第２表に譲り、以下、主な遺構について記す。

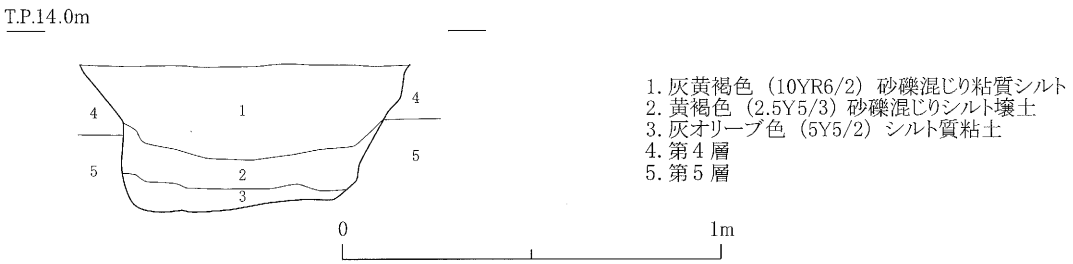
溝は、調査地ほぼ中央に北西－南東方向に貫く、断面台形状の溝Ⅰ、溝Ⅰによって北端が切断れている平面Ｔ字状の溝Ⅲ、溝Ⅰの西北部に拡張されたテラス段によって切断されている溝Ⅱ、南断面に一部検出した溝Ⅳがあった。

溝Ⅰは、幅1.0～1.25m、検出長8.2m、深さ0.6～0.7mを測る。上部は、東部では北に、中央付近で南に拡幅し、西部北側は１段低いテラス状をなしていた。溝内は３層に分れ（第６図　図版６)、最下部の灰オリーブ色シルト質粘土は溝活用時の堆積層、最上層の灰黄褐色砂礫混じり粘土質シルトは遺構埋没時の埋土である。活用時は南東から北西方向に流水していた。溝内からは、須恵器の高杯(17・18・19)、杯身（20・21)、長頸壺（22)、杯蓋、甕、土師器の高杯（23)、甕（24)、竈（25)、皿、黒色土器、瓦器、石器、動物遺存体、炭化物などが出土したが、これらは最上層の埋土内からで、古墳時代の遺物が多く見られるものの、鎌倉時代前半に埋没したものと考えられる。中層、最下層からはほとんど遺物が出土しなかった。そのため明確な活用時期は不明であるが、切断している溝Ⅲ内からも瓦器片は出土しており、埋没時期をそれほど遡ることはないと思われる。

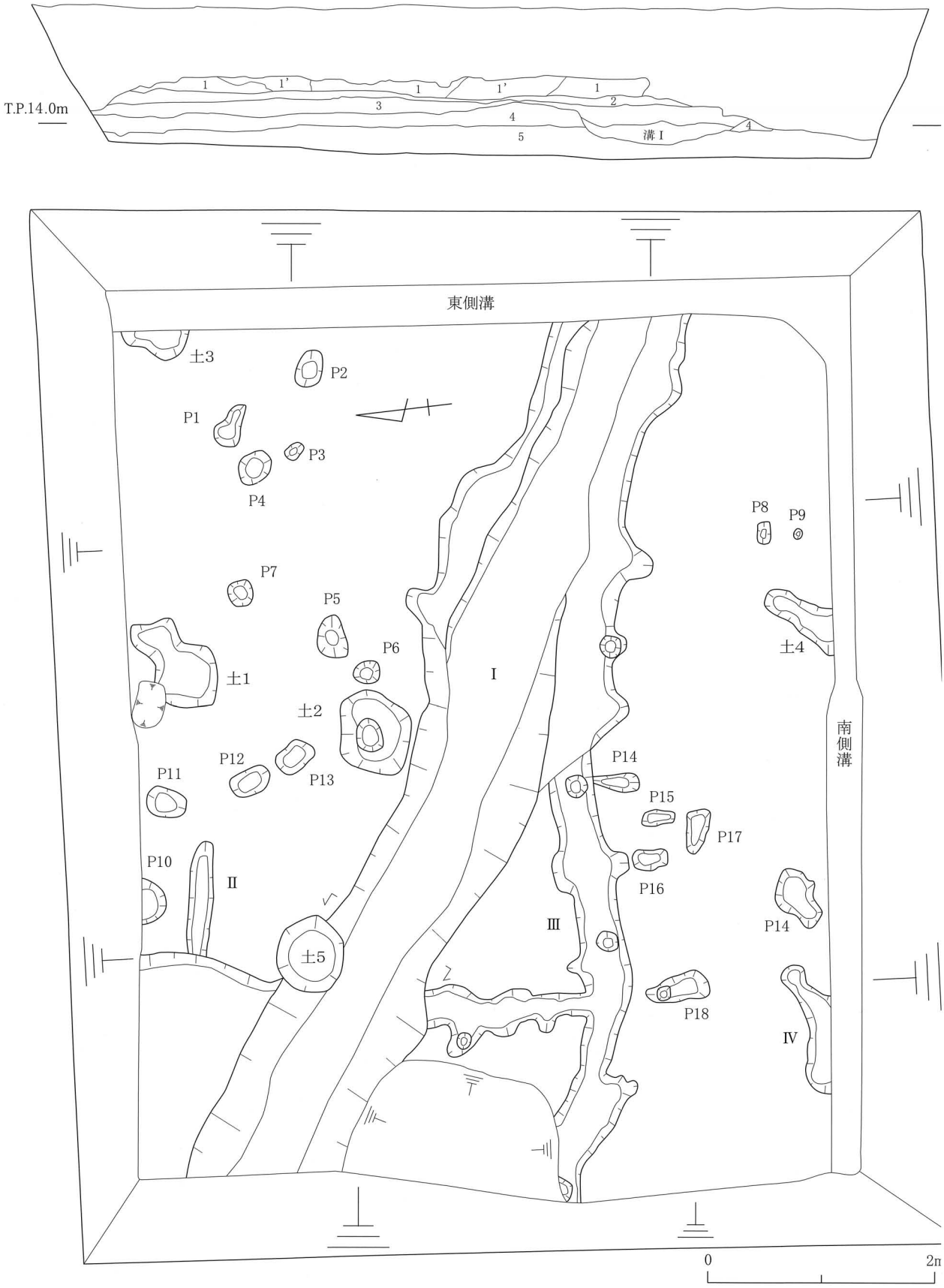
溝Ⅱは、幅約0.2m、深さ深0.085mを測り、南端は丸く終息しているが、北側は溝Ⅰ北に拡幅されたテラス状の遺構によって切断され、１mほどが残存していたのみであった。遺物は出土せず、溝Ⅰに先行するものではあるが、明確な時期、性格は不明である。

溝Ⅲは、溝Ⅰなどによって切断されていたが、平面Ｔ字形を呈する。東西の検出長約４m、そのほぼ中央から北に南北溝が1.4m延びる。幅0.6～0.25m、深0.1mを測り、東西溝内に３、南北溝内に１の小ピットがあった。埋土はにぶい黄褐色砂礫混じり粘土質シルトで、須恵器の杯身、土師器の皿と瓦器片が出土した。

土坑１は、平面やや隅丸の変形瓢箪形を呈し、深さ0.12mを測った。土師器の高杯片が出土した。土坑２は、平面やや変形の隅丸の長方形を呈し、底面北よりに径約0.3m、深さ0.07cm のピットを有し、土師器甕片が出土した。土４は、不整形であったが、須恵器甕・土師器片が出土した。土１・２・４



第６図　溝Ⅰ断面図



第５図　東壁面図および第４層上面遺構平面図

第２表　第２遺構（第４層上面）遺構表

遺構	規模 cm（：は検出）	土色・質	遺物	備考
Ｐ１	25 × 40　深 6.5	にぶい黄褐色 10YR5/4・灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土	土師器片	
Ｐ２	24 × 32　深 7.2	にぶい黄褐色 10YR5/4・灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ３	9 × 18　深 5	にぶい黄褐色 10YR5/4 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ４	25 × 34　深 7.5	にぶい黄褐色 10YR5/4 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ５	20 × 38　深 8	にぶい黄褐色 10YR5/4・灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ６	20 × 22　深 6	黄灰色 2.5Y5/1・明黄褐色 2.5Y7/6 砂混じり粘土質シルト		
Ｐ７	20 × 21　深 6.2	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ８	11 × 18　深 5.2	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
Ｐ９	8 × 9　深 4	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土	土師器片	
P10	：22 × 40 深 12	黄灰色 2.5Y5/1・明黄褐色 2.5Y7/6 砂混じり粘土質シルト	土師器（甕）	
P11	26 × 37　深 10.1	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土	土師器（高杯）	
P12	17 × 35　深 9.7	黄灰色 2.5Y5/1・明黄褐色 2.5Y7/6 砂混じり粘土質シルト		
P13	20 × 34　深 10.2	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
P14	16 ×：40 深 5	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
P15	13 × 28　深 6.2	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
P16	20 × 36　深 7.3	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
P17	40 × 18　深 9	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土		
P18	23 × 53　深 13.5	暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土	弥生土器片？	径 13cm のピット
P19	36 × 52　深 12	灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質土	土師器片	
土１	56 × 80　深 12	にぶい黄褐色 10YR5/4 砂～小礫混じりシルト質粘土	土師器（高杯）	
土２	57 × 70　深 65	にぶい黄褐色 10YR5/4・灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土	土師器（甕）	径 30cm のピット
土３	：25 × 50　深 13	にぶい黄褐色 10YR5/4・黒褐色 10YR3/1 砂礫混じりシルト質粘土		
土４	40 × 70　深 16	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じり砂質土	須恵器(甕)、土師器片	
土５	57 × 65　深 70	黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じり粘土質シルト		
溝Ⅰ	：820 × 100 ～ 125 深 60 ～ 70	１．灰黄褐色 10YR6/2 砂礫混じり粘土質シルト ２．黄褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト壌土 ３．灰オリーブ色 5Y5/2 シルト質粘土	須恵器（杯蓋・甕・高杯）、土師器（甕・皿・高杯）、瓦器（椀）、黒色土器、サヌカイト、馬の歯	
溝Ⅱ	：100 × 20　深 8.5	灰黄褐色 10YR5/2・黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土	土師器片	
溝Ⅲ	：400 ×：25 ～ 60 深 10	にぶい黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり粘土質シルト	須恵器(杯身)、瓦器片、土師器（皿）	径 12 ～ 20cm のピット４
溝Ⅳ	：115 ×：15 ～ 25 深 7	灰黄褐色 10YR5/2・黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土		

は古墳時代後半、性格は不明。

土坑５は、南の大半が溝Ⅰで削られ、溝Ⅰの北斜面から底部にかけて上面を検出し、平面は円形を呈して円筒状をなしていた。遺物はなく性格は不明。

ピット群は形状・深さともまばらで、埋土は３種に大別できたが、規格性を見出せるものは確認できなかった。古墳時代後期の土師器などが出土したものもあったが、明確な時期決定は難しい。

第４層は若干のブロック土が見られ、整地層とも考えられたが、遺物は全く出土せず、第５層上面においても遺構は検出されなかったことから、自然堆積層の可能性が高い。

4）出土遺物（第７図　図版７・８）

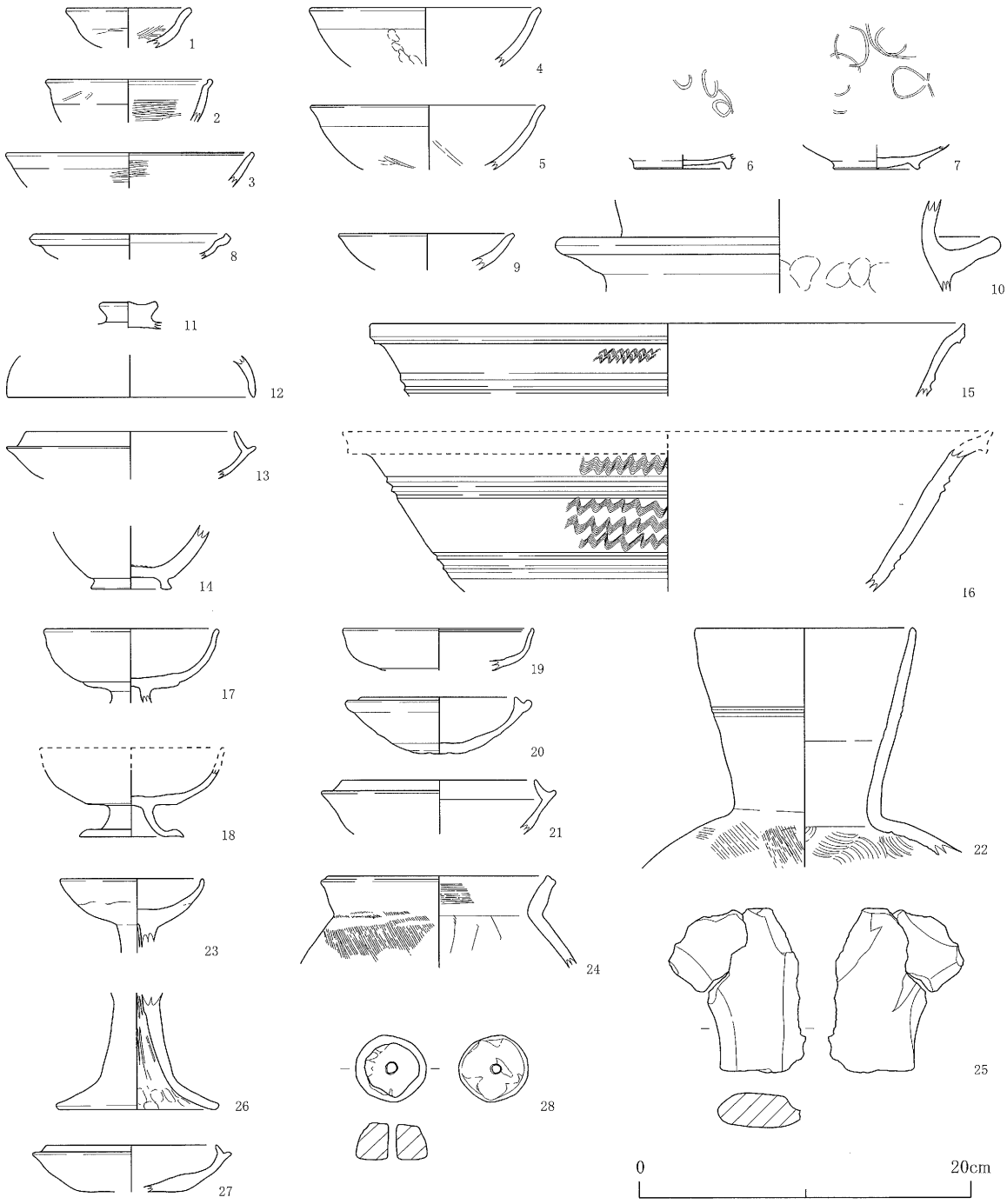
今回の調査では、以下の遺物が出土した。出土位置は、１～16が第３層、17～25が溝Ⅰ、26・27が溝６、28が溝１である。

１は、瓦器の皿である。内湾する体部に、外反する口縁部を持つ。内外面ともにヘラミガキを施す。12世紀か。２は、大和型瓦器椀である。内湾する体部を持ち、口縁部を外反させる。内面端部に段を持つ。内外面ともにヘラミガキが施される。13世紀後半。３は、大和型瓦器椀である。体部は内湾気味で、口縁部はわずかに外反する。内外面ともに密なヘラミガキを施す。12世紀後半。４・５は、和泉型瓦器椀である。体部は内湾しており、口縁部で緩やかに外反する。口縁部外面に横ナデを施す。外面に指オサエが残るもの（４）と、ヘラミガキを施すもの（５）がある。12世紀半ば。６・７は、瓦器椀の底部である。見込みに連結輪状の暗文が施される。高台は、断面が矩形を呈し、比較的高い。12世紀前半。８は、いわゆる「て」の字状口縁を持つ土師皿である。10世紀後半～11世紀初め。９は、土師皿である。口縁端部で緩やかに外反する。10は、土師器の羽釜の鍔部分である。直径は、26.8cmに復元できる。７世紀。11は、杯蓋のつまみ部分である。体部は、器壁が薄く直線的外方へとのびる形状と推測される。Ⅲ型式第３段階～Ⅳ型式第１段階。12は、杯蓋である。体部から口縁部にかけて丸くカーブを描き、端部は丸くおさめる。Ⅱ型式第５段階か。13は、杯身である。立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。Ⅱ型式第５段階。14は、壺の底部である。底は平らで、底端部に断面台形の高台が張り付き、ハの字形に開く。Ⅳ型式第２段階または、第３段階。15は、甕である。緩やかに外反する口縁部で、端部は垂直に立ち上げ、下方へも拡張させる。中段と端部に突帯がめぐり、突帯の間に波状文が施される。Ⅱ型式第６段階。16は、器台の口縁部である。端部で大きく外方へと屈曲させる。２条の突帯が２段めぐり、その間を波状文によって充填する。Ⅰ型式第３段階。17・18・19は、無蓋高杯である。いずれも杯身に脚部を貼り付けた形状である。

17は、緩やかに外反する口縁部を持ち、回転ロクロナデを施す。18の脚部は、脚柱部で緩やかに外反した後、端部で外方へと屈曲させる。Ⅲ型式第１段階。20は、杯身である。立ち上がりは低く、口縁端部は内傾させただけの形状である。底部にはヘラ切りの後、ナデが施される。Ⅱ型式第６段階。21は、杯身である。立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。Ⅱ型式第５段階。22は、長頸壺である。頸部でほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は内湾気味に伸びる。口縁部中段には１条の突帯が巡る。体部は外面にタタキとハケメが認められ、内面には同心円文が残る。口縁部はナデ調整である。Ⅱ型式第６段階か。23は、小型粗製高杯である。内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに摩滅のため調整は不明。24は、土師器の甕である。頸部は「く」の字を呈し、やや外反する短い口縁部を持つ。内外面ともにハケメ調整を行う。生駒西麓産の胎土。25は、竈の炊口部である。生駒西麓産の胎土。

26は、土師器高杯の脚部である。外面は摩滅のため調整が不明であるが、内面は脚柱部にしぼり目が明瞭に残り、裾部に指の圧痕が認められる。27は、杯身である。立ち上がりは低く、口縁端部を内傾させる。底部にはヘラ切りの後、ナデが施される。Ⅱ型式第６段階。

28は、土製紡錘車である。断面台形を呈し、下辺の直径が４cmを測る。底面には、使用痕と考えられるくぼみが認められる。生駒西麓産の胎土。



第７図　第３層・溝Ⅰ・溝６・溝１出土遺物実測図

5）まとめ

今回の調査では、第３層上面で室町時代から江戸時代前半の耕作跡と第４層上面で鎌倉時代前半の溝・古墳時代後期の土坑群とピット群などの遺構、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・黒色土器・陶磁器・サヌカイト・動物遺存体などの遺物を検出した。

第１遺構面の溝群は、大きく３時期に分かれ、ほぼ南北方向に平行してある溝６～23群はさらに、溝２・６と溝14・Ｐｇ間で２時期に分かれる。すなわち、溝７東、８、10、12、21、18・20、16・23と、溝７西、９、11、22、19、17の２群であり、各群が畝間溝であったと考えられる。

第２遺構面は、鎌倉時代前半の溝、古墳時代後半の土坑群と時期の不明確なピット群などを同一面で検出した。整地層および遺構内から若干の弥生土器･サヌカイトは出土したが、この時代の遺構はなかった。

これまでの調査で、本遺跡に南接する西ノ辻遺跡の北端には、弥生時代以前から中世に至る東西方向の大きな自然流路（埋没谷）の存在が知られており、本遺跡の６次調査においても弥生時代と中世の北肩部が確認されている[(1)]。

本調査地に近接する調査としては、15次、西ノ辻28･29次調査があるが、15次調査の遺構面は室町･江戸（ピット・溝）、鎌倉・室町（ピット・溝・井戸・土坑墓）、弥生（溝・ピット）の３面、西ノ辻の28次調査では平安から室町時代と弥生から古墳時代の２面が検出されており、本調査地の遺構面、遺構状況と相違している[(2)]。南東に位置する２次調査地では、近世の耕作跡と中世の溝･土坑･井戸･ピットが見られるが、古墳時代の遺構はなく若干の弥生時代の土坑が検出されており[(3)]、本調査地に近い状況とはいえ、やはり相違する。

いずれにしても、本遺跡の南部地域においては、中世の集落（墓を含む）が広い範囲に形成されていたこと、それほど大きくはないが古墳時代後半（６世紀以降）にも集落が営まれ、西南部には埋没古墳の存在が窺えること[(4)]、弥生時代中期以降の遺構は南端部にあって、生活地域は20次調査地には至っていなかったことなどを上げることができよう。

本遺跡内における調査は範囲が狭く、点在することから、現段階において遺跡の時代的変遷を窺うことは極めて難しい。北西部における縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物、北・中部域を中心とする５世紀後半の小型低丘墳・住居跡・遺物群など[(5)]と塚山古墳の存在をも合わせ、今後の調査研究に期待したい。

注

（１）「植附遺跡第６次発掘調査報告」『植附遺跡発掘調査報告集－第１・６・12・15次調査』 財団法人東大阪市文化財協会　2002年

（２）「植附遺跡第15次発掘調査報告」『植附遺跡発掘調査報告集－第１・６・12・15次調査』 財団法人東大阪市文化財協会　2002年

『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告』 財団法人東大阪市文化財協会　1991年。

（３）「植附遺跡第２次発掘調査報告」『㈶東大阪市文化財協会概報集1996年度（１）』 財団法人東大阪市文化財協会　1997年

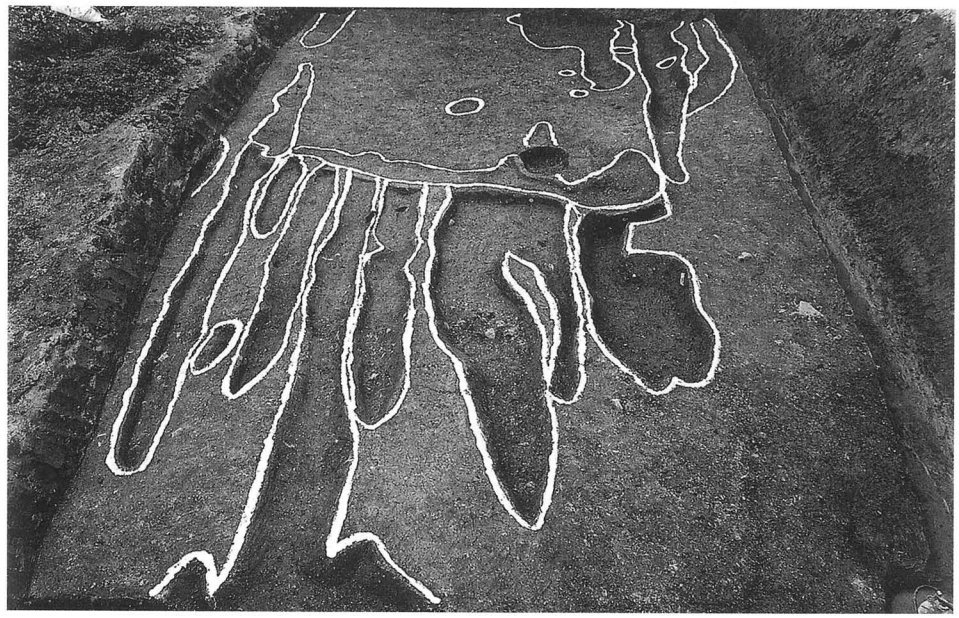
（４）『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成16年度－』 東大阪市教育委員会　2005年

（５）『植附遺跡第５次発掘調査報告書』 財団法人東大阪市文化財協会　1999年

『植附遺跡第３次発掘調査概報』 財団法人東大阪市文化財協会　1997年

「植附遺跡第12次発掘調査報告」『植附遺跡発掘調査報告集－第１・６・12・15次調査』 財団法人東大阪市文化財協会　2002年

1　東部第３層上面遺構
検出状況（南から）

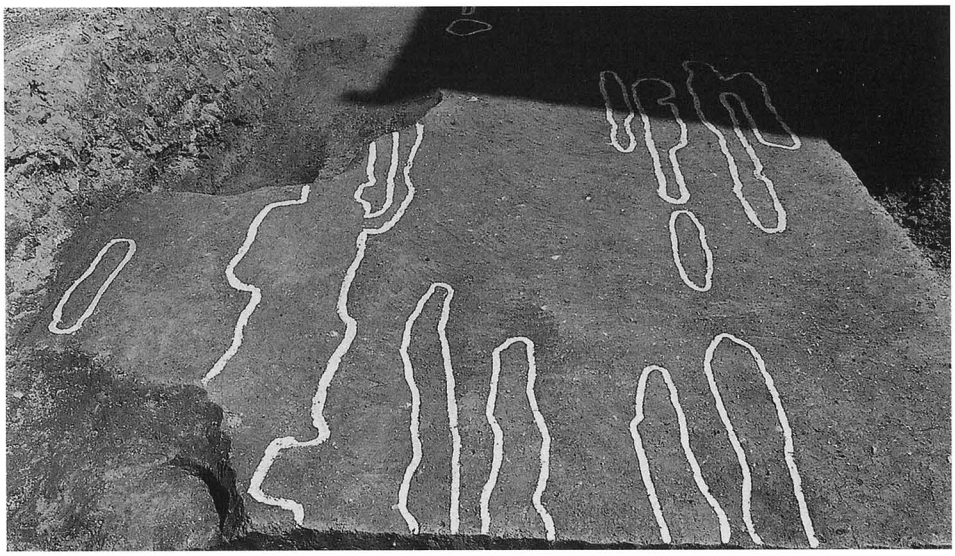


2　東部第３層上面遺構
完掘状況（南から）

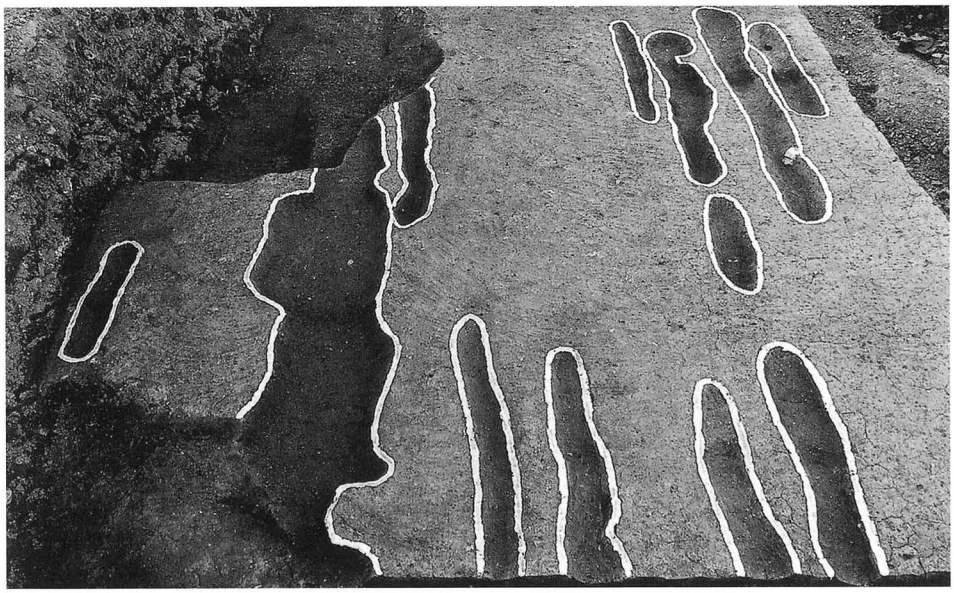
3　第２層内ウマかウシ？
の寛骨出土状況

図版2　植附遺跡第20次調査　遺構

1　西部機械掘削前状況
（東から）



2　西部第３層上面遺構
検出状況（南から）



3　西部第３層上面遺構
検出状況（南から）

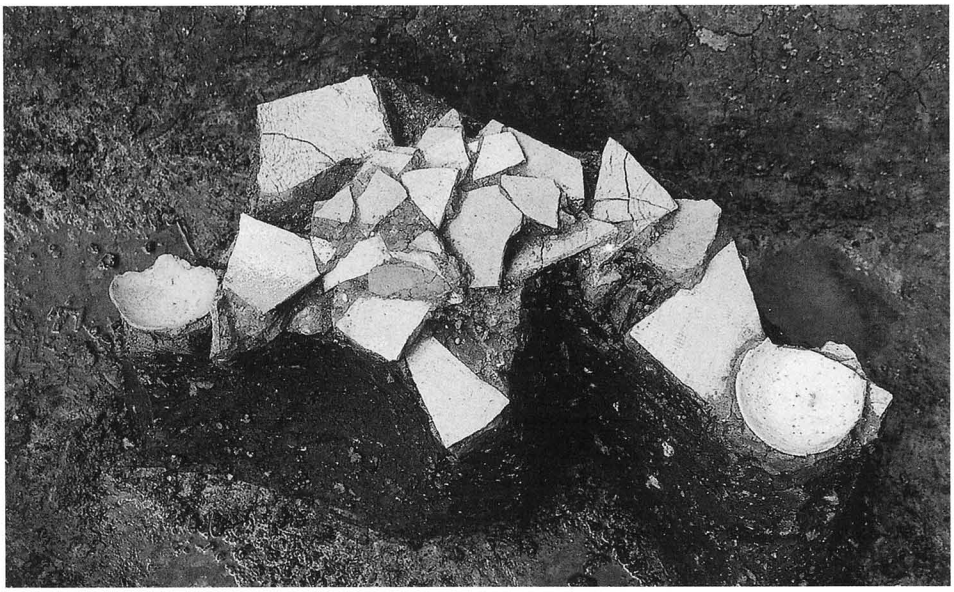
1　東部第４層上面遺構
検出状況（南から）

2　東部第４層上面遺構
完掘状況（南から）

3　東部第４層上面遺構
完掘状況（西から）

図版4　植附遺跡第20次調査　遺構

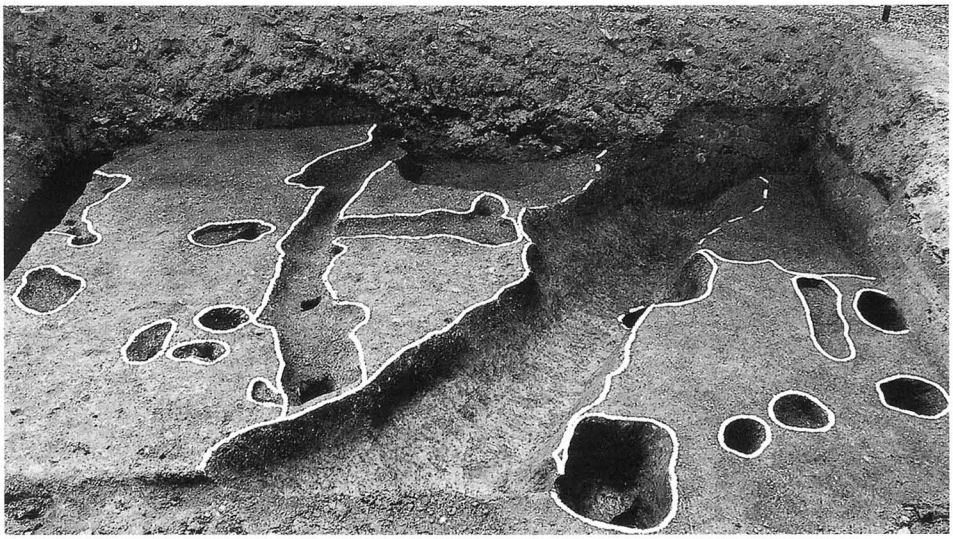
1　東壁－南側－
（西から）



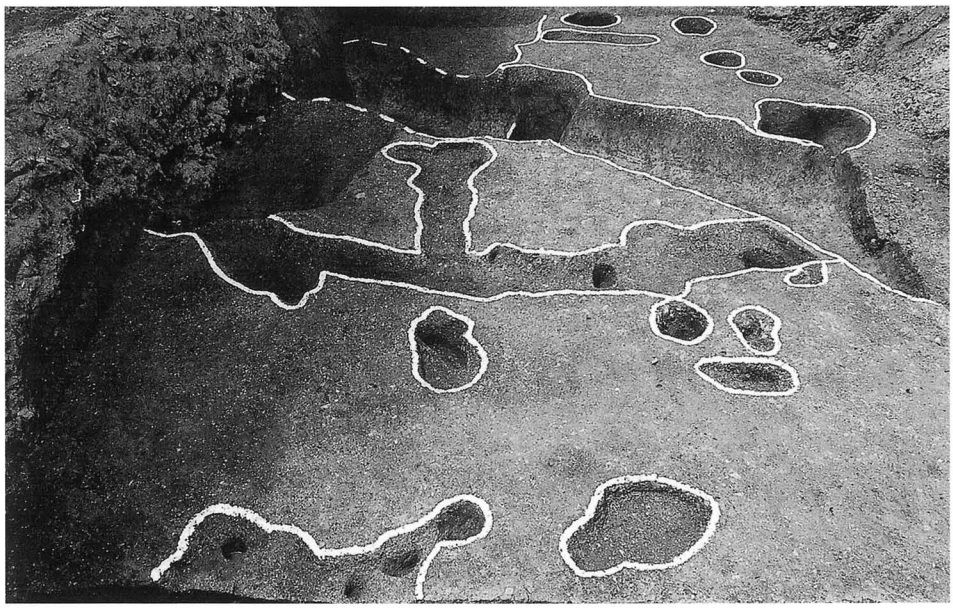
2　溝Ⅰ内上層遺物
出土状況（1）

3　溝Ⅰ内上層遺物
出土状況（2）

1　西部第４層上面遺構
検出状況（東から）



2　西部第４層上面遺構
完掘状況（東から）



3　西部第４層上面遺構
完掘状況（南から）

1　溝Ⅰ内遺物出土状況
－炭化物・土器－
（南から）

2　溝Ⅰ断面（西から）

3　西部南壁（北から）

23

27

26

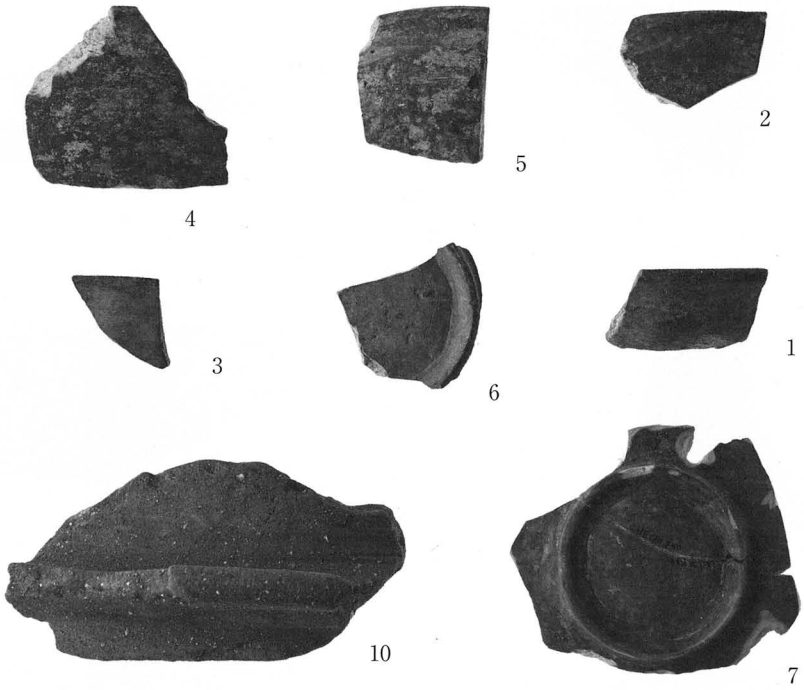
20

18

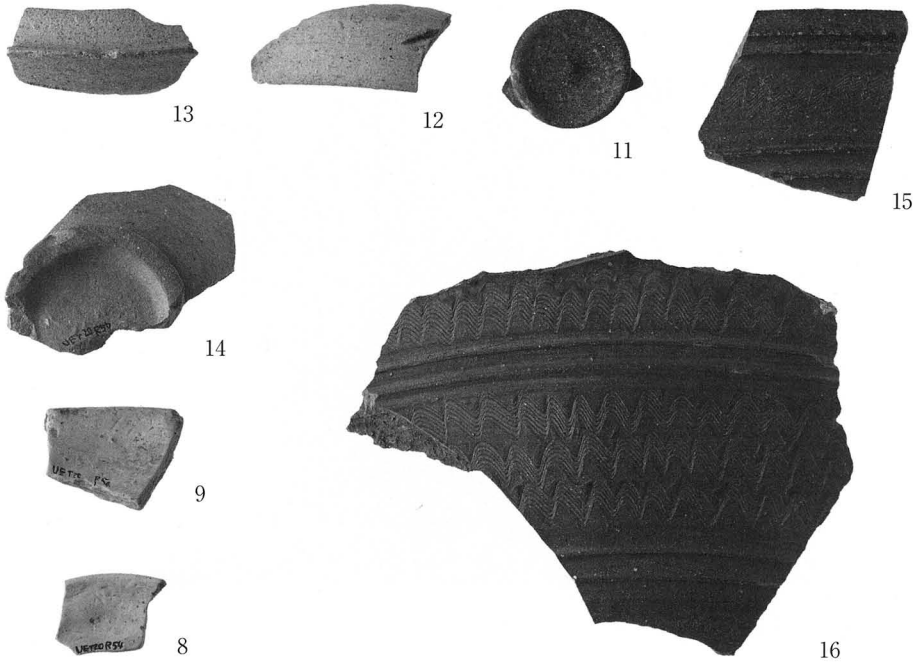
17

22

溝Ⅰ・溝６出土須恵器　杯身・高杯・壷、土師器　高杯



1．第３層出土瓦器　椀・皿、土師質土器　羽釜



2．第３層出土須恵器　杯蓋・杯身・壷・器台、土師器　皿

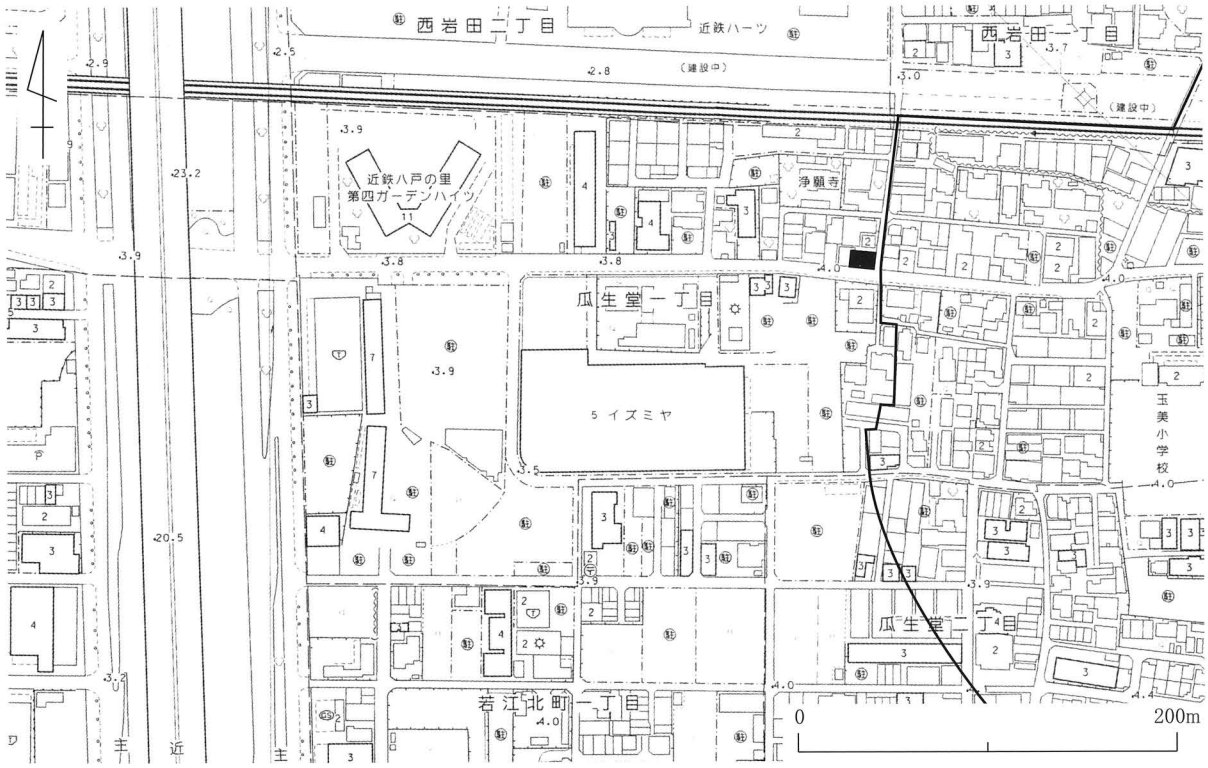
第５章　瓜生堂遺跡第56次発掘調査

１）はじめに

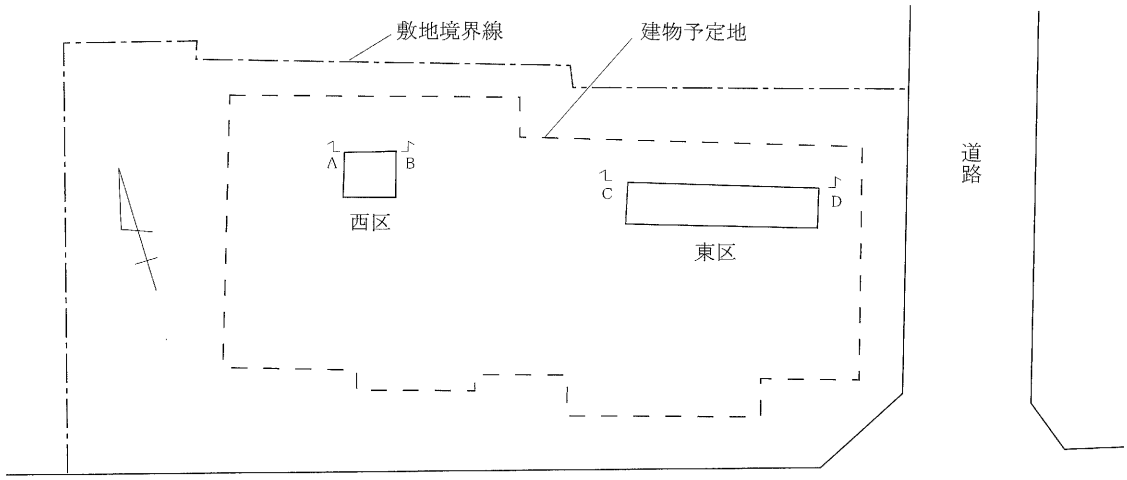
瓜生堂遺跡は、東大阪市下小阪５丁目から瓜生堂２丁目にかけて広がる、弥生時代から室町時代の集落跡である。遺跡の範囲は、東西約1120m 南北約760m の規模と推定されている。本遺跡は標高約３m 前後の沖積低地に位置し、旧大和川に属する諸河川が形成する自然堤防上の微高地に立地する。

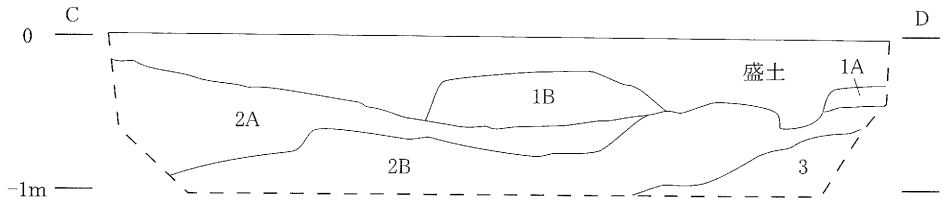
瓜生堂遺跡は河内湖南岸に営まれた弥生時代中期後半の拠点集落として学史上著名で、とくに広大な方形周溝墓は墳丘上の木棺墓、土器棺墓の配置状況から家族墓的な性格が考えられ、弥生時代を代表する方形周溝墓として、中学校・高等学校の教科書にしばしば登場している。これらの弥生時代遺構面の上層には、古墳時代～古代の遺構面が広く覆う箇所がある。遺物包含層だけでなくピット・井戸・土坑・溝など集落の居住域を示す遺構の集中区が、遺跡西部・遺跡中央部・遺跡南東部・遺跡北東部の４箇所で見られることが指摘されている。いっぽう、中世期の遺構は、遺跡の北端で実施された連続立体交差事業に伴う調査以外では検出されていない。今回の調査では、きわめて限定された調査区ではあるが、中世期の遺物が中量認められ、後述のように新たな知見がもたらされ、本遺跡での中世集落の動態に大きな課題を投げかけることとなった。

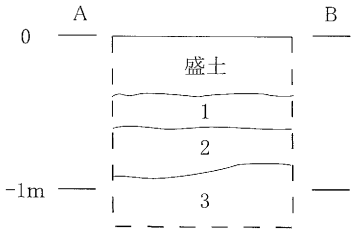
平成22年８月、東大阪市瓜生堂１丁目166- １番地の１ほか２筆において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設の基礎工事には柱状改良工事を含むため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を平成22年９月２日に実施したところ、第２層で古墳時代から中世期の土器が出土した(第２図の西区)。このため引き続き同年９月３日にトレンチを設定して調査した(第２図の東区)。調査面積は合計で6.4㎡となった。調査地は遺跡範囲で北側の東端にあたり、調査地の東側は道路を挟んで遺跡外となる。



第１図　瓜生堂遺跡第56次調査地位置図







1A　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂混じり中粒砂
1B　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂混じり中粒砂に灰色 (5Y4/1) シルトがブロック状に混入
2A　灰色 (5Y4/1) シルトとにぶい黄褐色 (10YR5/4) 細礫混じり中粒砂の混合土
2B　灰色 (5Y4/1) シルトと灰色 (5Y4/1) 中礫～細礫の混合土
3　灰色 (7.5Y4/1) 細礫混じり細粒砂

1　黄褐色 (2.5Y5/3) 細礫混じりシルト
2　オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細礫混じり細粒砂
3　オリーブ黒色 (2.5Y3/2) 粗粒砂

第２図　調査トレンチの位置と各区の断面図

2）調査の概要（第２図）

西区と東区は約６ｍ隔たり、層位がそれぞれ異なっている。まず各区の層位を記しておきたい。

西区

第１層　黄褐色(2.5Y5/3)細礫混じりシルト。

第２層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫混じり細粒砂。古墳時代・中世期の土器を含む。

第３層　オリーブ黒色(2.5Y3/2)粗粒砂。

東区

第１層　同色同質の地層で、ブロック土混入の有無から２層に区分された。

第１Ａ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり中粒砂。

第１Ｂ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり中粒砂に灰色（５Y4/1）シルトがブロック状に混入。

第２層　シルト層と細礫層の混合土である。上下２層に区分された。

第２Ａ層　灰色（５Y4/1）シルトとにぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混じり中粒砂の混合土。

第２Ｂ層　灰色（５Y4/1）シルトと同色中礫～細礫の混合土。東区の東側では、第２Ｂ層中に灰オリーブ色（５Y5/2）中粒砂がラミナ状に堆積している箇所が見られた。

第３層　灰色(7.5Y4/1)細礫混じり細粒砂。下部は灰色(7.5Y4/1)中礫～細礫。弥生時代から中世期の土器を含む。

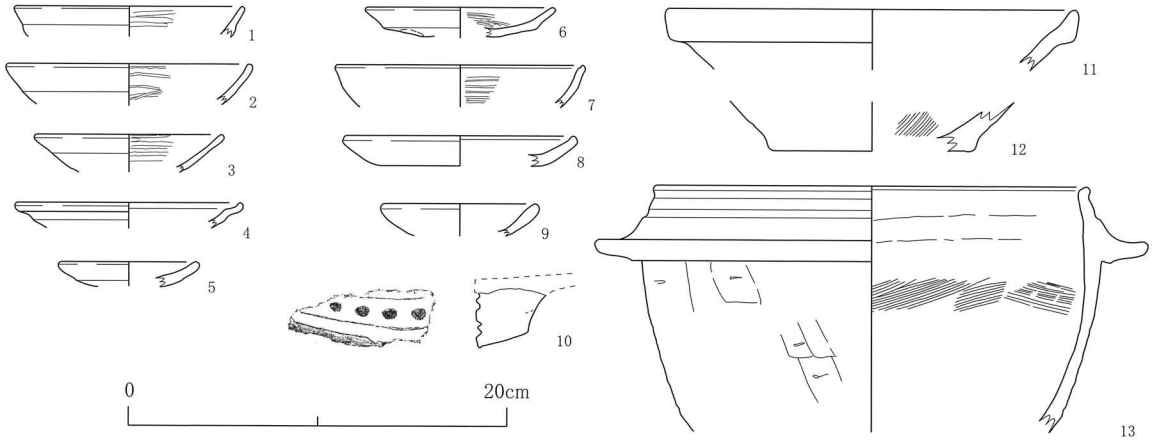
西区と東区で共通するのは第３層の砂礫層で、両区とも中世期遺物包含層の堆積のベースとなった層と考えられる。東区第２Ａ層、第２Ｂ層とも弥生土器、古墳時代土器、中世期の土器が混在して出土した。また東区では第１Ｂ層から第２Ｂ層まで砂礫層のブロックを含むことから、東区全体が、幅広の流路内に収まり、各層は流路の堆積層と考えられる。流路の西肩部は西区と東区の間に求められ、流路は南北方向に流下したものと推定される。

3）出土遺物（第３図　図版２）

まず、各区の遺物出土状態について触れておきたい。西区第２層では、後期の弥生土器、須恵器杯・甕、土師器甕・椀・皿、黒色土器椀、瓦器皿、瓦質土器羽釜、平瓦の各破片が出土した。これらのうち瓦器皿は鎌倉時代(13～14世紀)、瓦質土器は室町時代、土師器皿は平安時代中期(10～11世紀)に属する。東区第２Ａ層から第２Ｂ層にかけては遺物の出土が顕著であった。須恵器杯・甕・捏鉢、土師器甕・皿・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器擂鉢、陶器(丹波焼)擂鉢、軒平瓦、平瓦、丸瓦の各破片が見られた。須恵器のうち杯は古墳時代中期（５世紀代）、甕・捏鉢は中世期に属する。

今回図示した遺物は、１～５が西区第２層、６～13が東区第２Ａ～２Ｂ層から出土したものである。

１は、黒色土器の椀である。口縁部は直線的で、外面に緩やかな段を有する。全面を漆黒色に仕上げ、内面に密なヘラミガキを施す。11世紀。２・３は、和泉型瓦器椀である。外面にやや幅の広い横ナデを施し、内面は口縁部と平行するヘラミガキが施される。12世紀末～13世紀初頭。３の口径は10cmと小さく、器高も低い。口縁部に横ナデを施す。内面はヘラミガキを施す。13世紀中葉。４は、いわゆる「て」の字状をした口縁部を持つ土師皿である。内外面ともにナデ調整である。10世紀後半～11世紀初頭。５は、土師器皿である。見込みは浅く、内湾気味の口縁部を持つ。口縁部外面のナデによって、底部と口縁部の境に緩やかな稜を持つ。６は、瓦器皿である。口縁部外面の強いナデにより、底部との境に明瞭な稜線を形成する。内面はミガキ調整を行い、底部外面は指オサエの痕が残る。７は、土師器椀である。緩やかに外反する口縁部で、口縁端部内面には段が認められる。内面は口縁部と平行になるヘラミガキを施し、外面はナデ調整である。８・９は、土師器皿である。直線的に外



第３図　出土遺物実測図

方へと開く口縁部で、端部を僅かに摘み上げ緩やかな段を持つ。内外面ともにナデ調整である。９は、内湾気味に立ち上がり、口縁部は外方へと広がる。10は、軒平瓦である。瓦当文様は、連珠文で上下に圏線を有する。貼り付け式の顎で、顎裏面にハケメ調整を行う。12世紀末～13世紀初頭。11は、須恵器捏鉢である。体部は直線的に外方へと開き、口縁端部で上方へと摘み上げる。断面形状は三角形を呈する。口縁部外面に自然釉が付着する。12世紀末～13世紀初頭。12は、瓦質土器擂鉢である。底径は10.4cm に復元できるが、小破片のため確実ではない。内面にナデ調整の後、櫛描による擂目が施される。外面はケズリ調整と思われるが、後の丁寧なナデ調整により、前段階の調整は判然としない。15世紀。13は、土師器の羽釜である。口縁端部に面を持つ。口縁部外面には２条の凹線がめぐる。外面調整は、ケズリを施した後、ナデ調整を行う。内面は、ハケメ調整が施され、口縁部付近にススが付着する。12世紀。

４）まとめ

西区第２層、東区第２Ａ層・第２Ｂ層から出土した遺物は、弥生土器から室町時代中期の瓦質土器擂鉢に及ぶとともに、その間に属する土器類が混在しており、時期幅がきわめて大きい。東区の第２Ａ層・第２Ｂ層はともにシルト・砂礫の混合土で、土質の状況は若江遺跡の若江城の堀跡に酷似している。このことから両層は、かつて機能した流路ないし水路の堆積層であり、両層とも東区の東西幅を超えていることから、前提とした流路・水路は南北方向に流下するもので、その幅は広く調査地外へ延びることが推定される。

今回の調査地の北約100m で、平成10年から13年にかけて第46・47次調査が実施された（東大阪市教育委員会2002）。同調査の東端となるＤ地区で、南北方向の大溝２が検出されている。大溝２からは13世紀から15世紀代の遺物が出土している。調査者は、弥生期の周濠と断面形が類似するとして、大溝２に区画溝の性格を考えている。付近の地籍図等での検討が必要であるが、第56次調査地－第46・47次調査地が坪境付近にあたる可能性がある。その場合、今回の流路・水路と先の大溝２とを結ぶ区画溝が存在することが想定されよう。この想定を検証するには、調査地に面した南北道路の西側での調査例が望まれる。今後の進展に期待したい。

【参考文献】

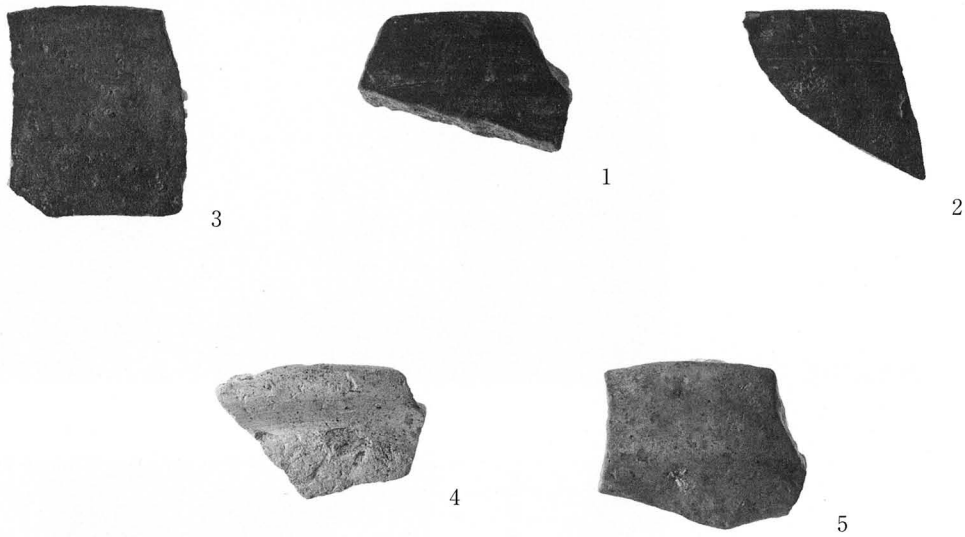
東大阪市教育委員会2002『瓜生堂遺跡第46、47－１・２次発掘調査報告書』

中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

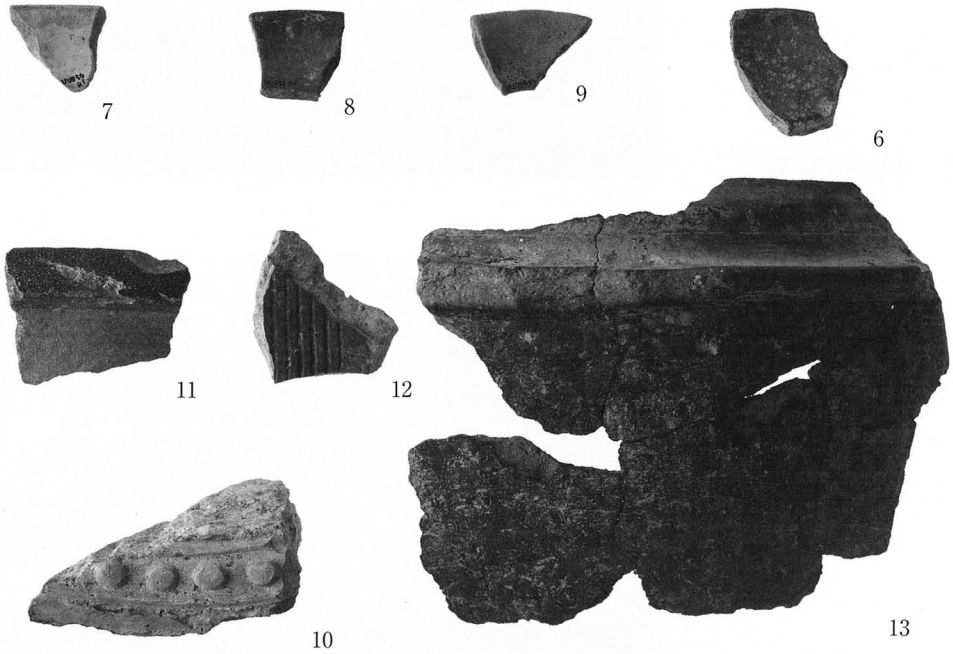
1　調査前状況（西から）

2　遺物検出作業

3　土層断面（南から）



1．西区第２層出土黒色土器　椀、瓦器　椀、土師器　皿



2．東区第２Ａ・２Ｂ層出土須恵器　捏鉢、瓦器　皿、瓦質土器　擂鉢、土師器　椀・皿、土師質土器　羽釜、軒平瓦

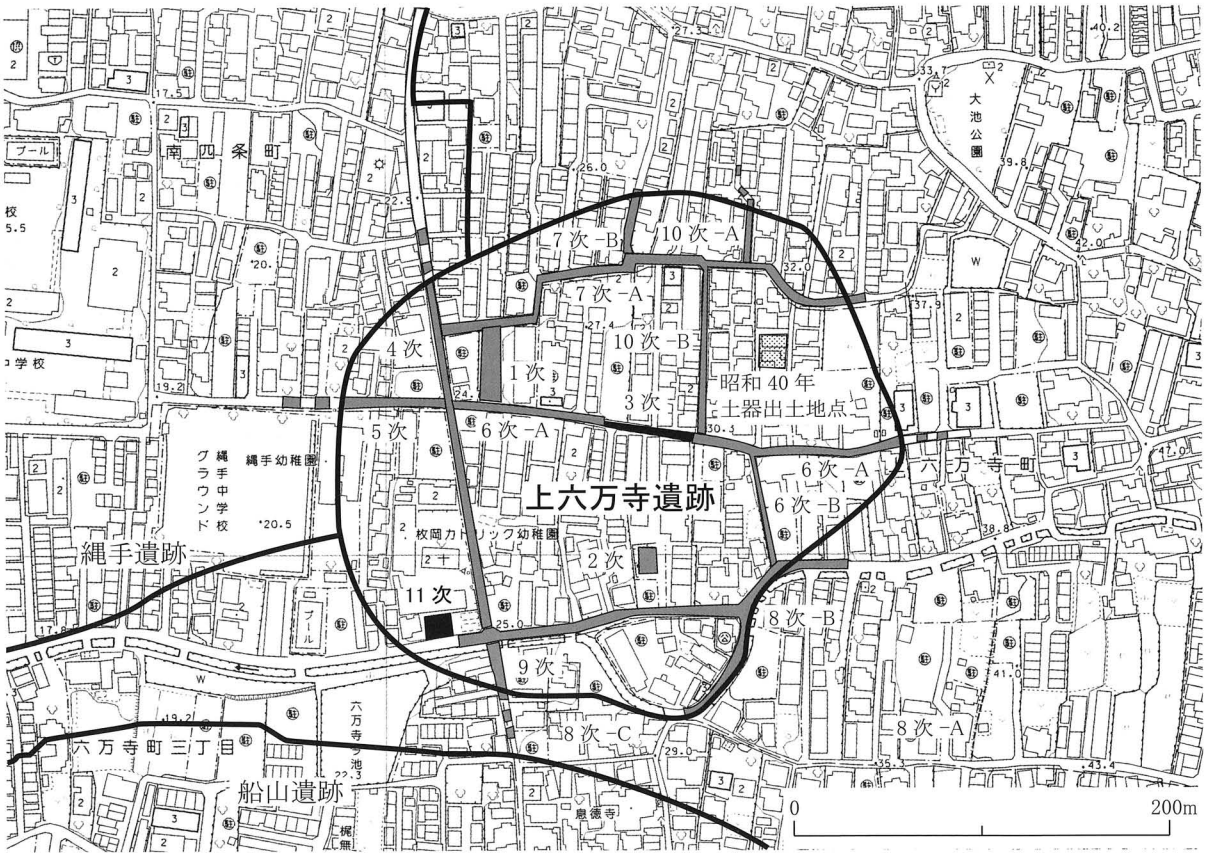
第６章　上六万寺遺跡第11次発掘調査

１）はじめに

上六万寺遺跡は、東大阪市上六万寺町・六万寺町３丁目にわたる弥生時代から中世期の集落跡である。遺跡は東西約300m 南北約280m の範囲に広がると推定されている。鳴川（長門川）ないしその先行河川が形成する扇状地上、標高24 ～ 32m に立地している。

昭和48年、宅地開発に伴う確認調査により、上層から鎌倉時代の石組井戸や溝、下層から弥生時代後期後半の土器が多数出土した。下層より出土した弥生土器は、タタキ技法を駆使して成形した甕に特徴があり、受口状の口縁部をもつ鉢や口縁部が長めの高杯、細頸で扁平な球形の胴部の壷などの組み合わせにより弥生時代後期後半に属する。都出比呂志氏は、これらの土器を北鳥池遺跡下層出土土器の一段階前を代表する型式であると考え、上六万寺式を設定された（都出1974）。上六万寺遺跡はその後、下水管埋設工事や個人住宅建設に伴う小規模な調査が行われたのみで、集落の様相について不明な点が多いが、学史に残る貴重な遺跡といえよう。

平成22年10月、東大阪市六万寺町３丁目1387番地の８において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設の基礎工事には柱状改良工事を含むものであったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を平成22年11月８日に実施したところ、２層にわたる中世期の遺物包含層を検出した（第２図の西区）。このため引き続き同年11月10日にトレンチを設定して調査した（第２図の東区）。調査地は上六万寺遺跡の範囲のうち、西南端近くにあたる。調査面積は西区、東区併せて7.1㎡となった。



第１図　調査地位置図

2）調査の概要

調査で確認した層位は、次のとおりである（第３図）。

第１層　暗オリーブ色(2.5GY4/1)シルト質粘土。旧耕土層である。

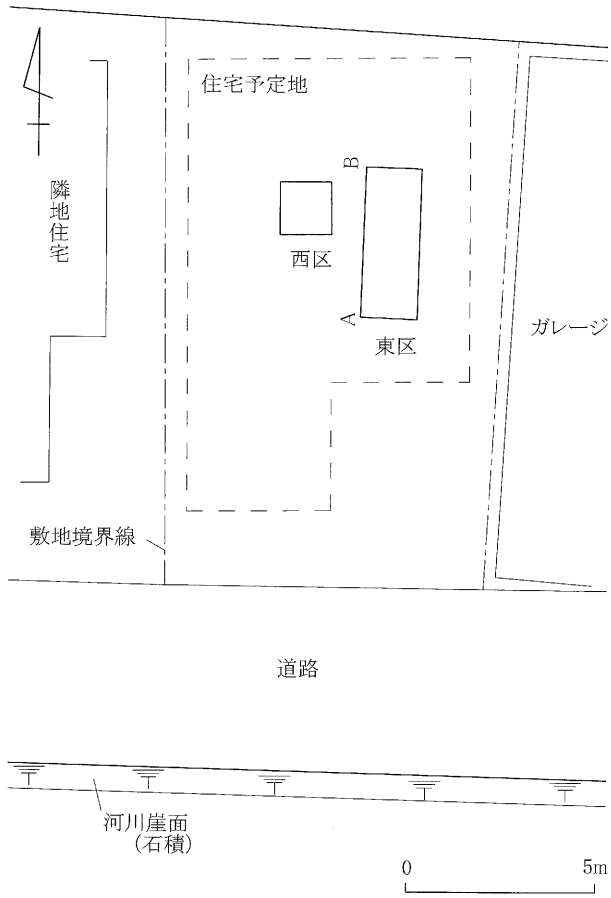
第２層　灰色(５Y4/1)細礫混じりシルト。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)細礫混じり細粒砂～シルト。中世期の遺物包含層である。

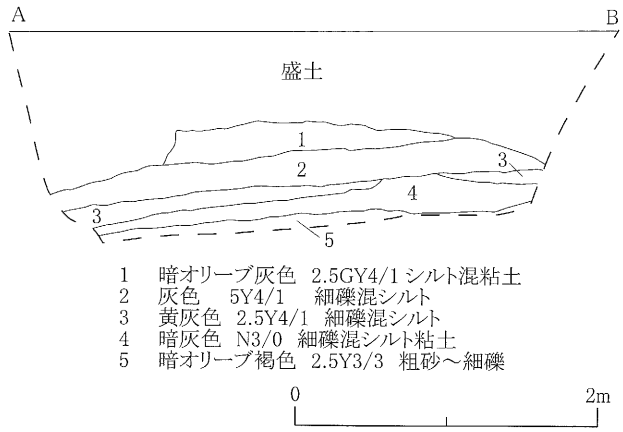
第４層　暗灰色(N3/0)粗粒砂～細礫混じり粘土。東区トレンチの南側では、上部の第３層のブロック土が混入していた。中世期の遺物包含層である。

第５層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)・オリーブ黒色(５Y3/1)粗粒砂～細礫。層上面のレベルは北から南へ緩く傾斜する。遺物包含層である第３層、第４層の堆積にかかるベース層である。

調査地の旧地形は、第５層の上面レベルに見られるように、北側から南側へ傾斜面を持っている。これは調査地のすぐ南辺を流下する長門川ないしその先行河川によるものであり、第３層と第４層は傾斜面を平坦にするための整地層と考えられる。西区、東区とも遺物の出土は第４層より第３層の方が多い。



第２図　調査トレンチ位置図



第３図　東区西壁断面図

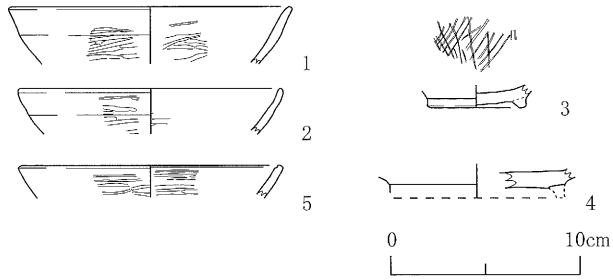
3）出土遺物

まず、東区の遺物出土状態について触れておきたい。

第３層では、須恵器杯・甕、土師器皿、瓦器椀、黒色土器椀、青磁皿、緑釉陶器椀、瓦の各破片が出土した。小片のため時期が判別できるものは少ない。土師器皿には平安時代中期に属する「て」の字状口縁を持つものが見られる一方、瓦は近世以降のもので、地層の堆積時期が近世以降に降ることが知られる。第４層では、須恵器甕、土師器羽釜・椀・皿、瓦器椀の各破片が見られる。第３層と比べてさらに小片で時期不明のものが多い。第４層出土の瓦器椀は第３層のそれとほぼ時期を同じくするものと考えられる。

実測可能な遺物を第４図に掲出した。出土位置は、１～４が東トレンチ第３層、５が西トレンチ第３層である。１・２・３・５は、瓦器椀である。１は、口縁部に緩やかな外反を持ち、内外面に密なヘラミガキを施す。２は、内湾気味の口縁部で、内外面のヘラミガキはやや間隔が開く。３は底部で、

断面台形を呈する高台を持ち、見込みに斜格子の暗文が施された後、体部内面のヘラミガキが施される。いずれの瓦器椀も和泉型であり、12世紀前半の所産と考える。4は、緑釉陶器である。底部の一部しか残存しておらず詳細は不明であるが、貼り付けの輪高台で、平坦な底部を持つ。底面には回転糸切痕が残る。9世紀後半～10世紀初頭と思われる。5は、大和型の瓦器椀である。口縁部内面に沈線がめぐり、内外面にヘラミガキが施される。12世紀前半であろう。



第4図　出土土器実測図

4）まとめ

今回の調査成果を考えるために、既往の調査をまとめてみた(第1表)。前述したように、上六万寺遺跡は弥生時代後期後半の標式遺跡であるが、これまでの調査例中、その大半を下水道の管路工事に伴うものが占め、一部を除いて集落の性格や広がりなどの具体的な様相について不明の点が多い。しかしながら、出土遺物が属する時期は縄文時代後期から室町時代後期まであり、本遺跡の集落が断続的に続いたことを示している。本遺跡の中世遺構としては、第1次調査で検出した石組井戸がある。井戸を検出したトレンチから出土した瓦器椀は、高台が退化したもので14世紀前半の年代が与えられる。一方、今回の調査で出土した瓦器椀は12世紀代で古相を示し、遺跡内で集落が移動したことがうかがわれる。

【参考文献】

都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20巻4号　考古学研究会

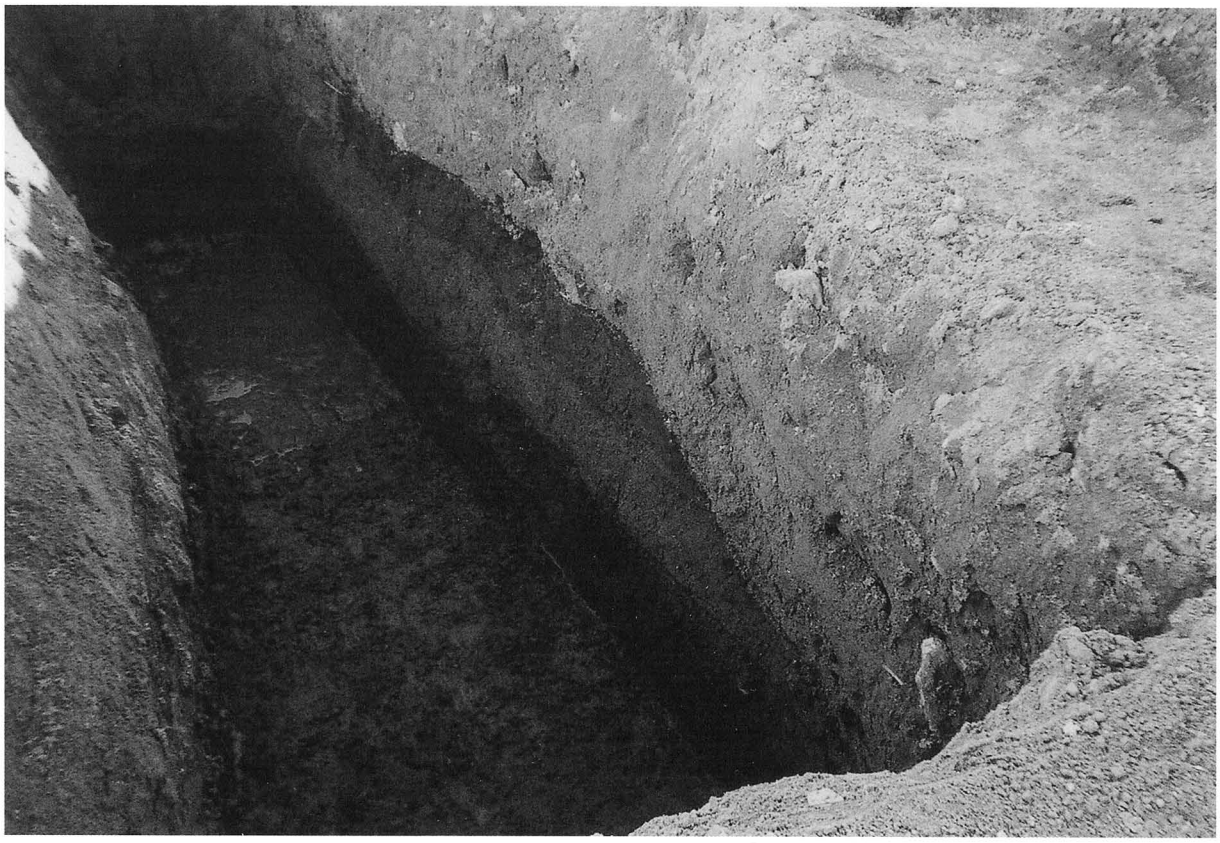
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

第1表　上六万寺遺跡の調査成果

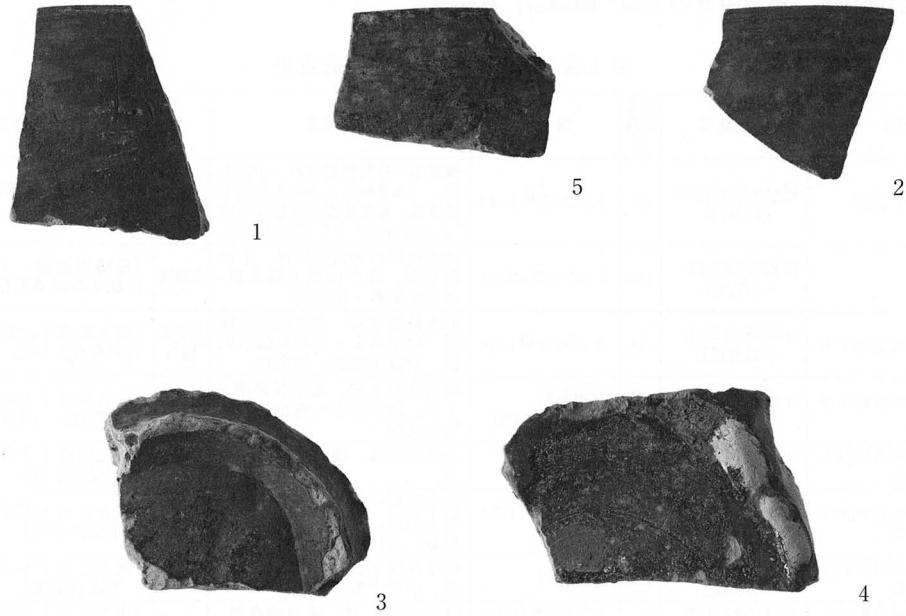
次数	調査原因	実施期間	調査面積㎡	調査地	調査成果	報告書		
1	宅地造成に伴う試掘	昭和48年10月23日～11月2日	24	上六万寺町1-32	鎌倉末～室町後期井戸、中世土器、二次堆積による弥生後期土器多数。弥生土器は後期後半の「上六万寺式」として型式設定。	市教委	『東大阪市文化財調査報告書』第2冊　1975	1975
2	共同住宅建設	昭和55年8月1日～8月24日	150	上六万寺町1412-1	弥生後期の竪穴住居跡、中世期の溝。弥生後期土器多数。奈良土師器・須恵器。	市教委	『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告』　1981	1981
3	平成3年度下水道築造工事	平成3年11月5日～11月15日	50	上六万寺町1394	弥生後期土器。古墳前期土師器、同中期末～後期初頭須恵器。奈良土師器・須恵器。	文化財協会	『東大阪市下水道発掘調査概報1991年度』1992	1992
4	平成10年度下水道管渠築造工事	平成10年6月18日～9月30日	100	南四条町、六万寺町3丁目	縄文後期土器。弥生後期溝・土坑。鎌倉後半～南北朝の遺物包含層。	文化財協会	『東大阪市下水道発掘調査概報1998年度』　1999	1999
5	平成11年度下水道第28工区管渠築造工事	平成12年7月12日～8月1日	264	南四条町	奈良須恵器。鎌倉前期瓦器少量。	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成12年度』　2001	2001
6	平成12年度下水道第29工区管渠築造工事	平成13年8月17日～10月12日	352	上六万寺町1394～1940	弥生中期～後期土器。古墳前期土師器、同後期土師器・須恵器。古代平瓦・丸瓦。	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成13年度』　2002	2002
7	平成13年度下水道第43工区管渠築造工事	平成14年7月5日～8月26日	253	南四条町	弥生後期土器。古墳前期土師器。中世土器。瓦。	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成14年度』	2003
8	平成14年度下水道第16工区管渠築造工事	平成15年5月1日～11月27日	242	上六万寺町1421-2他	弥生後期土器。飛鳥須恵器。平安中期土師器。鎌倉瓦器。	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成15年度』	2004
9	平成15年度下水道第16工区管渠築造工事	平成16年1月14日～8月31日	232	六万寺町1丁目1029他	中世土器	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成16年度』	2005
10	平成17年度下水道第101工区管渠築造工事	平成18年4月12日～9月4日	204	南四条町、上六万寺町	弥生後期土器。古墳中期末～後期初頭土師器・須恵器。円筒埴輪。奈良～平安土師器・黒色土器。	市教委	『東大阪市下水道発掘調査概報平成18年度』	2007
11	個人住宅建設（平成22年度国庫補助事業）	平成22年11月8日・11月10日	7.1	六万寺町3丁目1387-8	平安前期緑釉陶器。鎌倉前期瓦器少量。	市教委	本書	

〔調査成果〕「○○時代」の時代、「検出」「出土」を各省略。
〔報告書〕調査者は「市教委」が東大阪市教育委員会、「文化財協会」が財団法人東大阪市文化財協会。書名も適宜省略している。

図版1　上六万寺遺跡第11次調査　遺構・遺物



1．東区西壁断面（南東から）



2．東区第３層、西区第３層出土瓦器　椀、緑釉陶器　椀

報告書抄録（その１）

ふ り が な	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう －へいせい22ねんど－
書　　名	東大阪市埋蔵文化財調査概報　－平成22年度－
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 集 者 名	菅原章太・若松博恵・奈良拓弥・安部みき子
所　在　地	〒577-8521　東大阪市荒本北一丁目１番１号
発行年月日	2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
ばばがわいせき 馬場川遺跡 （遺物・総括編）	東大阪市横小路町 ４丁目433－３番地	27227	89	平成21年９月17日 ～10月31日	184.7㎡	零細事業主分譲住宅建設
かわちでらはいじあと 河内寺廃寺跡	東大阪市河内町 441、443-1、443-2番地	27227	(63)	〔19次〕 平成22年３月11日 ～３月23日 〔20次〕 平成22年５月10日 ～６月18日	〔19次〕 42.9㎡ 〔20次〕 153.4㎡	史跡内容確認
かわちでらあと 河内寺跡	東大阪市河内町 674-16番地の一部	27227	63	平成22年１月22日 ・１月25日	10.4㎡	個人住宅建設
うえつけいせき 植附遺跡	東大阪市西石切町 ３丁目79番地	27227	39	平成22年７月27日 ～８月11日	80.0㎡	ＮＰＯ法人事務所建設
うりうどういせき 瓜生堂遺跡	東大阪市瓜生堂 1丁目166-1の一部、 170、168甲の一部番地	27227	95	平成22年９月２日 ・９月３日	6.4㎡	個人住宅建設
かみろくまんじいせき 上六万寺遺跡	東大阪市六万寺町 ３丁目1387－８番地	27227	82	平成22年11月８日 ・11月10日	7.1㎡	個人住宅建設

報告書抄録（その２）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬場川遺跡（第20次調査）	集落跡	縄文時代～古墳時代	土壙墓・埋設土器・焼骨埋納土坑・環状遺構・竪穴住居	縄文土器・石器・土偶・土製品・弥生土器	縄文時代の土壙墓群・埋設土器群 弥生時代後期の正五角形竪穴住居
河内寺廃寺跡（第19･20次調査）	国史跡社寺跡	飛鳥時代～鎌倉時代・室町時代	塔跡・金堂跡	軒丸瓦・軒平瓦・須恵器・土師器	金堂の規模を確認 塔跡で中世仏堂を検出
河内寺跡（第18次調査）	社寺跡	飛鳥時代～鎌倉時代・室町時代	（遺物包含層）	土師器・丸瓦・平瓦	
植附遺跡（第20次調査）	集落跡	古墳時代～鎌倉時代	溝・土坑・ピット	須恵器・土師器・瓦器	
瓜生堂遺跡（第56次調査）	集落跡 その他の墓	弥生時代～室町時代	自然流路	弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・軒平瓦	
上六万寺遺跡（第11次調査）	集落跡	弥生時代～室町時代	（遺物包含層）	須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

ー平成22年度ー

発　行　日　　平成23年３月31日

編集・発行　　東大阪市教育委員会

〒577-8521

東大阪市荒本北一丁目１番1号

TEL.06-4309-3283

印　刷　所　　株式会社ミラテック